
無駄死にから始まる転生者生活

和風好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無駄死にから始まる転生者生活

【Nコード】

N3443M

【作者名】

和風好き

【あらすじ】

ある日一人の青年は少年をかばって死んでしまったが、それはただの無駄死にでしかなかった。これを哀れに思った神様がその青年を転生させてあげることにした。……「って、俺が死んだの完全にお前（神様）のせいだろーが!」……そんなこんなで始まった彼の転生者生活、一体どのようなものになるのでしょうか?「無駄死にから始まる転生者生活」始まります。

とりあえずプロローグ（前書き）

初めまして、和風好きといえます。

皆様の作品を読んでいるうちに自分も書きたくなってしまい、衝動書き（？）しました。

初めての作品なので稚拙な部分や、あまりよろしくない表現が多々あると思いますが、どうかよろしく願います m（ ） m

とりあえずブローグ

突然だが、俺はつい先ほど死んでしまった。

今日もいつものように大学に通い、講義を受け、講義が終わり次第家へと帰るといった日常を過ごそうとしていた矢先だった。

大学からの帰り道、駅前の大通りで渡ろうとした瞬間に信号が赤に変わり、「んだよ、めんどくさいな…」と思いながら足を止めたその時だった。

よりもよって道路のど真ん中に1人の少年が突っ立っており、それにもかかわらず信号が青に変わったので車が走り始めていたのだ。何やってんだあのガキ…と眺めていたのだが、少年は一切動こうともしないし、周りの人もなにも反応しない。

とりあえず少年に呼びかけようと声を出そうとしたその瞬間、少年に1台のトラックが迫ってきた。

いつもだったら面倒くさがりな俺は何も動かなかっただろうが、その時は何故か少年の方に走り始めていた。

「危ない！」

そう言っただけで何かトラックに轢かれる前に少年を安全な方へ突き飛ばすことができたものの、次の瞬間、体がものすごい衝撃を受けて痛みを感じる間もなく意識を失った…。

…まあ、あの衝撃の凄さとか、このずっと宙に浮かんでの感覚とか、その他諸々から判断して確実に死んでいるんだろうとは思ってたが、これから一体どうなるんだか…。

…っであれ？

なんで俺意識あんの？人は死んだらそれまでじゃないの？

…これはまさかの死後の世界ってやつか？いたい俺は天国と地獄のどちらに行くんだろうか。まあ、俺は悪人ではなくとも決して善人とは言えないから天国には行けないんじゃないか…？

「あ、気がついた？」

と突然声が後ろから聞こえた。

振り返ってみるとそこには1人の少年がいた。っていうか…。

「お前、俺がかばったガキじゃないか。」

「ガキとはひどいこと言うね。仮にも僕は神様だよ。」

「…は？」

え、神様。このガキ神様だったの？…ってことは俺神様助けたのか？

「というか、実はあの時君が助けなくとも僕は死ぬどころかケガすることも無かったんだけどね。だって神様だし。まあ、認識阻害の力をかけるのに手を抜いてたから君に気付かれちゃったんだけど。そもそもあそこにしたのも世の中の交通事情ってやつを一度見てみたかったからなんだけどね。」

何だと！それじゃあ俺はそんな訳わからない理由で道路のと真ん中に突っ立ってた神様のことを必要ないのに無駄に助けて命を落とし

たのか！？

「俺のあのけなしの善意は一体…orz」

「とはいえこのまま「はい、さようなら」じゃ目覚めが悪いし。僕にも落ち度があったしね。君を蘇らせてあげるよ。」

『僕にも落ち度があった』じゃなくて完全にお前のせいだろ！…つてそんなこと言ってる暇なかった。

「マジ！？生き返らせてくれんの？」

「まあ、元の世界に戻すつてのは無理だよ。君スプラッタだし（笑）これで蘇ったらどのゾンビだよ…つてことになっちゃうからね。蘇るのは君のいた世界とは異なる異世界にだよ。いわゆる転生つてやつだね。」

「そうか…。」

…まあ、家族や友人に会えなくなるのはさみしくなるが…。でも生きられるなら異世界でもいいか。彼女はいなかったんだし。というかそもそも「彼女いない歴〃年齢」だったし…。

といういろいろ思っていたら、神様のやつが何やら『閃いた！』みたいな顔し始めた。

「そうだ！どうせなら君の世界のマンガやアニメ、ゲームの世界に行ってみないか？今流行ってるみたいだし！」

マンガやアニメの世界か…。少し行ってみたい気はする。でも…。

「マンガやアニメの世界に俺っていうイレギュラーな存在が行ってもいいのかよ？そのせいで世界が崩壊とか嫌だぞ。」

「問題ないよ？厳密に言えば『マンガやアニメ、ゲームの世界に限りなく近い平行世界』なんだから原作崩壊とかしても無問題さ。それともそんな世界には行きたくないのか？」

そうか、それなら…。

「いや、大丈夫なら俺は行きたい。で、どこに行かせてくれるんだ？」

「君が決めていいよ？どこか行きたい世界はない？」

行きたい世界ねえ…「f t e」とかがいいかな？…いや、あそこは結構死亡フラグ多いからな…行ったらすぐにここに戻ってくることになりかねない。死亡フラグがなくていい世界ないかな…うん…。

「ねえ、まだ決まらないの？決まらないなら僕がクジで決めちゃうよ？というかもうそれで決めちゃうから。ちなみに返事は聞いてない。」

そう言って神様はどこからか上の面に穴のあいた箱を取り出し、穴の中に手を入れた。

「ちよっ…!!」

俺が制止しようとするも間に合わず、神様は1個のボールを取り出した。

ヤバイ！これで「f t e」どころか「P h n t o m」や「ひらしのく頃に」等の死亡フラグだらけの世界に行った日にはすぐにデットエンドまっしぐらになっちまう！！

そんな俺の心の中を一切気にせず、神様はボールに書かれた文字を見た。

「おっ！これは相当運がいいね！君が行く世界は「魔法少女リリカルなのは」に決定したぞ。」

え、「リリカルなのは」…？

「なあ…。」

「何だい。感無量で言う言葉も無いかい？そりゃそうだろうね。なんせ…。」

「俺、「リリカルなのは」って話知らないんだけど…。」

「はい？」

確かにその名称は聞いたことあるさ。ネットとかでもよくその名前見るし、T S T A AにもそんなD V D並んでたの見たことあるよ…。でも俺はそのアニメ見たこともないから内容はわからないぞ。

「え、本当に分らないの？」

「ああ、全然知らない。」

「…まあいいや。先が分からない中で生きるのもまた面白いだろうし…。」

というか今までの人生、先が分かったことなんて一度もないんですけど…。

まあ、題名からしてめったなことじゃ死亡フラグは立ちそうにないからいいんだけどね…。

「あと、君には特別に5つお願いをかなえてあげるよ。ある意味僕のせいで死なせてしまったんだしね。」

ある意味じゃなくて、間違いなくお前のせいだから。

それにしても願回事5つねえ…。何がいいかな…あ、そうだ。

「なあ、その世界って「魔法少女」ってくらいだから魔法が存在する世界なんだよな？」

「うん、そうだよ。」

「なら、その世界の魔法について書いてある本と色々教えてくれるものが欲しいな。」

「…なんか意外とシヨボーイお願いだね。」

うるせえ！

「そうだね・・・おっ、これならいい感じにチートになるな。こんな感じでいこう！」

…何か嫌な予感がするんだが…。

「それ本当に大丈夫なのか？」

「うん、ちゃんといい感じだよ。それよりもきつと僕に感謝したくなると思うよ！」

…まあ、いいか。気を取り直して残り4つの願いか…。

「次の願いだけど、とりあえず俺の体を「S a u a i D e p r K Y」の「真の 生一族」の体にしてほしい。できれば鬼神化することはないようにしてくれ。」

「まあ、そんな感じのお願いは来ると思ってたよ。鬼神化しないのを含めてOKだけど、力の全てを使うにはそれなりの修練が必要だからね。」

「それぐらいなら別にかまわない。」

「いい返事だね。おまけで顔はイケメンにしておいてあげるよ。」

「余計な御世話だ！！…あと、俺が知っているマンガやアニメ、ゲームの「能力」みたいなやつを全部使えるようにしてくれ。」

「いきなりお願いのチート度が上がったな。流石に全部はいただけないぞ。せめて何個か限定して。」

「マジか…。」

とりあえず欲しい能力を合計10個言ってみた。

「10個か…。これでもチートだけど…そうだ、この作品の「能力」使うんならこの設定を使おう！」

そう言つて神は能力に関するあるデメリットな設定を提案してきた。よりにもよつてあのデメリットかよ！でも、それで10個の能力を手に入れられるならいいか…。

「…それをつけていいなら10個でもいいのか？」

「うん、いいよ。」

「…ならつけていい。」

俺はそのデメリットを了承した。

「後2つお願いが残っているよ。」

「だったら1つは俺の知っている全ての魔法や体術なんかの技の知識があつて、さらに技を使いこなせるつてのはどうだ？」

「はいまたチートなお願い来ましたー！！せめていくつかの作品の中の技つていうふうに制限しなさい。10作品くらいでいいから。」

「これもダメか…。」

「結果ありふれたそこのチート主人公と同じようになるんだから。みんな同じじゃつままないでしょ？やっぱ個性は大事だよ！君だつてパクリだなんて言われたくないでしょ？」

「プロローグでいきなりメタ発言してんじゃないやねえよ！…で、10作品の技だったな…」

そうして使いたい技のある10作品を指定した。

「なんか厳密に言うと10作品じゃない気がするけど…まあ、いいや。微妙にマニアックな作品もあるし。いちおう言っとくけどその作品以外の魔法だの体術だのはいきなりは使えないけど、ちゃんと正しい修行すればそれなりに使えるようにしておくから。」

お、たまにはいいことするじゃん。

「さんきゅー。それで最後の願いだけど…あらゆるものを作れるようになるっていうのはどうだ？ちゃんと材料用意して手間暇かけるでもよし、強く念じるだけでもよしみたいな感じで…」

「またまたありふれた能力だな…まあ、これくらいならいいか。その代わり、材料なしで作る際は自分の魔力をかなり使うことにするから注意しろよ。」

「わかった。」

こうして俺の5つの願いは決まった。

「これで願い事は決まったねー。あ、これ転生する際の注意事項とかが書いてある手紙だから、向こうの世界で目覚めたら必ず読んでね。」

「わかった。」

「それじゃ今から「リリカルなのは」の世界に転生するよ。」

すると神様は何かまじない？みたいなものを唱え始めた。

それと同時に、俺もだんだん意識が薄れてきた。

「じゃあね、今度は無駄死にするなよー。」

…今、猛烈にあの自称神様野郎を殴りたくなった俺は決して悪くないと思う。

そんな思いを抱きつつ、俺の意識はまたなくなっていくた。

とりあえずプロローグ（後書き）

というわけでプロローグです。

とりあえずどなたかの作品とかぶらないかがとても不安です。

ちなみに作者もあまり「リリカルなのは」の知識はありません。
なので、設定にいろいろと矛盾があるかもしれませんが見捨てない
でくれると有り難いです。

第01話 リリカルな転生者生活、はじまる（前書き）

こんにちは、和風好きです。

今回はひよっとしたら前回以上にグダグダかもしれません。
とにかく文才が欲しい今日この頃です。

というわけで、第01話、はじまります！

第01話 リリカルな転生者生活、はじまる

「……………ここは……………？」

目が覚めると、俺は森の中にいた。

周りの明るさからして、今は日中らしい。

辺りには木が生えているだけで他に目につくものは一切なかった。

「ここは…森？よりもよってどうしてそんな変な所に飛ばすかな、あの神様。」

そう言いながら起きようと地面に手をつけると、手が何かに触れた。何があるのかと触れたものを見てみると、そこには1通の手紙と1冊の黒い装丁の本が置いてあった。

というか、やけに視界が低い気がするんだが…。

「…そういえば、転生においての注意事項が書いてある手紙だとか言ってたな。とりあえず読んでみるか…。」

俺は手紙を封筒から取り出し、読んでみた。

『拝啓

本日はお日柄もよく…とかいうあいさつはいらないか。

僕の口からいちいち注意事項とか説明するの面倒なんで、とりあえず手紙という形をとらせていただきました。』

…一度あいつとは肉体言語で「お話」した方がいいんじゃないか？
と思えてきた。

まあ、一応重要な注意事項があるかもしれないので、手紙を破るの

は後にしよう…。

『というわけで注意事項を言ってきます。

まず第一に、君は一度無駄死にしているから元いた世界での名前は使えないから。何かしら決めといてね。

あ、これを機に無駄にかつちよいい名前にするのとかいいんじゃない？どんな名前にしたとしても、僕は笑わないよ（笑）』

…もう笑ってんじゃん…。

『第二に、君は無一文です。

せっかく転生してあげたのにすぐに飢え死にしました、なんて僕が嫌だから何とかしてね。

あ、流石に家無き子になるのは大変だろうから家は用意しときました。同封した地図を見てね。』

そうか、無一文か…。

でも、家があるってのはかなりありがたいな。

『第三に、たぶん近くにおいてあろう本だけど、それは君の最初の願いにあった「この世界の魔法について書いてある本」というのをチート化したものです。

ただ、ここは「リリカルなのは」の世界なので、ただの魔導書じゃないから。まあ、詳しくは魔導書の管理人格に聞いてね。

そうそう、この魔導書を作ったはいいいけど名前決めるの面倒くさかったからそっちで決めといてね。』

取り合えず、起動させたいなら魔導書に触って「我、（ここに本名入れて）の命に従い、の書（こっちは魔導書の名前だよ）よ、起動せよ！」って言えばいいから。』

…よくよく見てみると、この本の表紙に「Index Librorum Prohibitorum」って書いてあるんだけど…「禁書目録」ってどういうこと？

これ、本当に大丈夫なのか？

それに『名前決めるの面倒くさい』って神様いい加減過ぎじゃね？
っていうか「管理人格」って何？本に人格があるの？

…まあ、後で起動してみればわかるか…。

『第四に、君の体は「真の 生一族」の体なわけだけど、「鬼神化しない」という君の希望を叶えるためにもう鬼神化を乗り越えたっていう設定にしていたから。

ただ、転生前にも言ってたけどちゃんと修行しないと真の力は発揮できないからちゃんと修行しなよ。』

…え、マジで？願い事の中で実はこれが一番ヤバいんじゃないのか？
これについては神様に感謝かな？

『ちなみに「リリカルなのは」の物語に最も都合がいいように体の年齢は5歳にしておきました。だから6歳になったらちゃんと小学校にも通いなさいよ。おススメは聖祥大附属小学校だよ。もし小学校に行かなかったら家没収するからね！』

さつきからやけに視界が低いと思ったらこのせいか！というか俺5歳児からやり直しかよ！！

先ほどの感謝云々は撤回だな。

なんでもう成人したのにまた小学校行かなきゃいけないんだよ…面倒だな…。

でも家没収されるのはもつと面倒くさいだろうな…。

『最後に、物語が始まるのは今から3年後の春だから、それまでに

頑張つて準備しといてね。関わらないとかいう選択肢はなしだから。ちゃんと僕を楽しませてね。』

…お前の為に関わるとか一番やりたくないんだけど…。

まあ、関わるかどうかは自分で決めるか。

『それじゃあ、もう1回目の人生を思う存分満喫してください。』

あ、この世界がつまらなくなったら別の世界に行っちゃっていいからね。その代わり、別の世界に行く術は自分で用意しなよ。それじゃあねー。

神様より』

とりあえず手紙は読み終わったが、この後どうするかな…。

家は用意してもらい、地図まであるが、肝心なことにここがどこだか全く分からない。

だって周りは木しかないんだぜ？どうやって判断すればいいんだよ…。

そんな時、いまだに地面に置きっぱなしの本が目に入った。

…やることないし、起動してみるか。

ということ、その本を持つ。

あ、俺と、この魔導書の名前決めなきゃ。

…ん…よし、俺の名前は「紅崎キヨウ」にしよう。

魔導書の名前だけど…表紙の「禁書目録」からとって「禁録の書」にしといた。

「え〜っと、確か……『我、紅崎キヨウの命に従い、禁録の書よ、起動せよ』だっけ……?」

その瞬間、本が光りだした。

そのあまりの光に、俺は目をつぶってしまった。

光がやんだので目を開けてみると……

「起動を確認しました。私は禁録の書の管理人格です。何なりとご命令を。」

「え…………マジっすか?」

目の前には青みがかった銀色の長髪をツインテールっぽくした人形のような端正な容姿の小さな身体をした少女がいた。

……っていうかまんま「11eyes」の 野朶さんじゃないですか

!……あれ?書架のウ スラだっけ?

っていうか魔導書から人が出てくるってどういうこと?

「え、これ、ただの魔導書じゃないの?」

「正確には魔導書型デバイスです。」

そういつて魔導書型デバイスとやらについていろいろと教えてもらった。

ついでに禁録の書の機能も教えてもらった。

……なんでも、数多存在する次元世界にかつて存在していた全ての魔導書の内容が記録してあり、記録していない魔導書や魔法があったら、それを新たに記録できるらしい。さらに、記録の中にある魔法は再現できたり、記録されている魔導書の複製を作ることができるとか。

要するにあれか、「とある 術の 書目録」のイン ックスさんの
覚えた魔導書使えますよバージョンってことか！？…っただけチー
トだよ！！

「さらに、私自身がユニゾンデバイスとなっております。」

「ユニゾンデバイス？何それ？」

「ユニゾンデバイスとは…」

さらに解説タイムが続きそうになっていたが、転生された当初日中
だった空はいつの間にか夕方になっていた。

「悪い、もうすぐ暗くなりそうだから続きは家に帰ってからでいい
か？」

とはいえ、家までどう行けばいいかわからないんだが…。

「わかりました。とりあえず、この森を出しましょう。」

そう言っって書架のウル ラ（仮）さんは歩き出した。どうやらどう
行けば家に着くのか知っているようなので俺は黙って彼女について
行った……っって肝心なこと忘れてた！！

「そっついえば君の名前は何なのさ？」

「私にはまだ名前がありません。主であるキョウ様が自由にお決め
ください。」

… 今日だけで2つも名前を考えたというのにさらに彼女の名前か…。

ただ、彼女を見ているとやっぱり「11eyes」のあの人思い浮かべるわけで…。

でも確か名前は2つあるんだよね…もう個人的に好きな方でいいか。

「じゃあ、シオリってどうかな？」

「シオリですか…はい、いい名前だと思います。」

「あとさ、その敬語で話したり、俺のこと様付で話すのやめてくれない？どちらかというと俺は部下って扱いじゃなくて相棒として接したいからさ。」

「…わかった。これからよろしく、キョウ。」

「ああ。よろしくたのむぜ、シオリ！（ニコッ）」

「…／／／」

なんかシオリの顔が赤くなっただが…風邪でも引いたんだろうか？
っていうかそのユニゾンデバイスとやらって風邪ひくのかな？

そんな感じで話しながら歩いていると、気付けばもう日も暮れてしまった頃に、俺達は俺の家に着いたんだが…

「これが俺の家！？…無駄にすくない！？」

…そこにはもう十分立派な日本家屋…というかもはや武家屋敷とい
っていいような家がありました。しかも表札にはいつの間にか「紅

崎」って書いてあるし。こんな立派な家なら小学校に行かないか
いうつまらない理由で没収されるのは避けたいな。

「…まあ、とりあえず中に入ろうか。」

そう聞くと、シオリはこくんとうなずいたので、今日から俺の家になるこの武家屋敷にお邪魔した。

中に入って家中を回ってみたが、なかなか凄い家だった。縁側や庭があるならまだしも、修練場みたいなものがあつたのを見たときには無駄に感動してしまった。

まあ、それは置いて。

家中を回った後、俺とシオリは居間に行き、そこで帰宅途中（？）で買った弁当を食べながら、先程森の中でしていた解説の続きをシオリにしてもらった。

え、無一文なのにどうやって買ったのかって？

それは俺の「モノづくりの才」を使って魔力から宝石だの金の延べ棒だのを作り、売り払ったからね。ちゃんと本物とほとんど変わらない質のものを作ったからそれなりの値段になったよ。

とりあえず、この世界の魔法に関することのうち、基本的なことは大体わかった。

そして、シオリは禁録の書とリンクしているからこの世界のほとんどの魔法を使えるらしいので俺はシオリに魔法を教えてもらうことにした。

一方、今俺達が住んでいるこの「海鳴市」が一体どんなところなのかはあまり分からなかったので、明日、生活に必要なものを手に入るついでに調べることにした。いや、家に向かっていたときに色

々な店で「海鳴市支店」だのと書いてあったから流石にここが海鳴市だということくらいはわかるよ。

まあ、何をするにしろとりあえずもう夜遅いわけで。

さっさと寝て、明日に備えましょう！ってことでこの日は俺もシオリもさっさと寝ることにした。

第01話 リリカルな転生者生活、はじまる（後書き）

いかがだったでしょうか？

まだ未熟な身なので、不自然だったり矛盾してたりすることもあるとは思いますが、気付いたことがあれば感想の方で言ってくれと有り難いです。

次回は今のところ明らかになっているorばらしちゃっても大丈夫な範囲での設定になるかと思っています。

それではまた次回お会いしましょう！

いろいろ設定（前書き）

というわけで、オリ設定である主人公やデバイスたちの情報を一度まとめてみたいと思います。

とはいえまだ本編で出ていない部分については「????」で伏せさせていただいております。

ですので、もうばらしてもいい範囲だけですが、御覧ください。

いろいろ設定

まずは主人公からです。

紅崎キヨウ

年齢

5歳 9歳 19歳

外見

腰まである黒い長髪。

眼は真紅。

男の娘って程ではないが、成長した姿は美人さんなイケメンです。

でも女装は似合うらしいです。

身長

110cm 135cm 182cm

体重

18kg 32kg 69kg

ステータス

筋力 B (SS)

耐久 A (SS+)

敏捷 A+ (SSS)

魔力 S+ (SSS+)

幸運 A

宝具 EX

ランク S+(SSS+)

()の中はリミッター解除時

スキル

・真の壬生一族の体

某「神の一族」な体になっているので、身体能力や魔力、気が常人よりもはるかに高くなっています。また、ある程度成長するが、20代前半になると不老長寿となります（外見は何歳にでも変化可能）。ちなみにもう鬼神化を克服した状態の設定なので鬼神化して暴走することはありませんが、力の全てを使うにはそれなりの修練が必要です。

・技の知識と素質

他のマンガ・アニメ・ゲーム等に出てくる体術や魔法・魔術・忍術等といった技の知識を持ち、扱うことができます。さすがに全作品というのは反則過ぎるので10作品からとなっています。また、奥義クラスの技については修練が必要です。

(型月系・Samurai Deeper KYO・テイルズ系・
11eyes・^{トライエース}AAA系・東京魔人学園系・???・???・???・?
?)

・異能力

普通の人間が持っていないような魔法等とは違う力。本当は知っている能力全てが良かったけど流石に駄目だったので10個だけになりました。ちなみに力を使い過ぎると「ロスト」という能力と魔法が使えない状況になる上に、女の子になってしまいます。なお、ロストすると24時間は元に戻りません。

（^{レールガン}超電磁砲・^{ハイブポイント}座標移動・^{メンタルアウト}心理掌握・^{グラビトン}重力作成・^{サイコキネシス}念動力・^{サタンリブ}青色の煉獄
^{レイズ}）

業火？・影・？？・？？・？？）

・モノづくりの才

宝具クラスの武器から魔法薬、デバイス、さらにはそこら辺にある日常品まで、前例のあるものからオリジナルのもの（ある程度のイメージが必要）まであらゆるものを作ることができます。作り方もちゃんと材料を用意してそれなりの工程を経て作ることも、魔力を材料にしてそれなりに強く念じることで作る（ただ、魔力消費量が半端じゃないです）こともできます。

性格

転生してからはポジティブシンキングになり、多少明るくなったが、面倒なことは嫌いです。と言いながら意外と困っている人を放っておくことができないお人好しです。また意外とバトルマニアだったりするので強い奴はよく気に入ります。かといって弱い奴が嫌いというわけではありませんが、実力の伴わない階級の人間をものすごく嫌います。あと自分のものや仲間に出す奴は容赦なく叩きます。自分自身のことはオタクではないと思いますが、結構のめりこみやすかったり、ネタに走ったりすることが多いため、少なくともオタク予備軍ではあります。意外と甘党です。

続いてはデバイスたちです。

・シリウス

ベルカ主体ミッド混合ハイブリット

1stモード 太刀

見た目1.5m位の大太刀。魔力をある程度こめることで、斬撃を

飛ばしたり、どんなもの（魔力等も）でも斬れるようになったりします。実は80cm位の日本刀2本にすることもできます。

2ndモード 双銃

ぶつちやけ見た目は「エニー&アボー」。

いろんな属性の弾が撃てます。砲撃も可です。

・禁録の書

魔導書型デバイス

管理人格 シオリ

とりあえずリリカル世界の魔導書全ての情報が記録されており、さらに記録にない魔導書（ただし原典クラス）や魔法を分析することで新たに記録することができず。記録された魔法等は再現することができ、魔導書に至っては複製を作ることとも可能です。ぶつちやけその真価は管理人格であるシオリとのユニゾンにより発揮されます。

・シオリ

ユニゾンデバイス

外見

ぶつちやけ「11eyes」の百野栞です。

ステータス

筋力 C

耐久 B

敏捷 A A

魔力 S S

幸運 A +

宝具？ E S S

ランク S +

スキル

・完全記憶能力

かの有名な便利能力ですね。これがあれば勉強なんて楽勝！！

・魔法分析

禁録の書に記録された魔導書や魔法をもとに、他人が使った魔法等を分析し、その対策を練ることができます。たとえ魔導書に載っていない魔法であっても、記録した魔法の理論をもとにある程度分析してくれます。また、分析結果をもとに魔力の動き等から相手の使う魔法を発動前に予測することができるので某「妖精眼」モドキな指揮も可能。

・？？？

シオリとのユニゾン時に発動可能。極悪です。

性格

口数は少ない方で結構厳しいことを言います。マスターであるキョウには忠実で、かなり懐いています。無表情キャラかと思いきや、よく見てみるとそれなりに表情が変わっています。本を読むのが好きですが、そのスピードはかなり早く、文庫本なら1時間で3〜5冊は軽く読めます。味を覚えてからはキョウ以上の甘党で、一食が全てスイーツになっても文句は言いません。むしろ喜んでいる感じがします。

いろいろ設定（後書き）

というわけで設定回でした。

まだわからない範囲については書かない方がいいかと思い、「??？」にさせていただきました。

本編で登場したら、随時更新していきますので、よろしければ何度か見に来てください。

あと、技や能力のついてですが、いくつかは確定しているものの、まだどうするか決めかねている部分があります。

そこで、「あの作品の技いいんじゃない?」「この作品の能力を使つてほしい」等の要望があれば、参考になる作品とともに感想で書いて送って下さい。

いくつか使わせていただこうかと思っています。

勿論、他についての要望も、どしどし送ってください。

さて、次回はキョウの修行に入ります。

そして、あわよくば原作キャラと絡めればいいなと思います。

それでは皆様、また次回お会いしましょう。

2月26日、更新しました。

第02話 はじめてのしゅぎょう（前書き）

どうも和風好きです。

まだ第02話ですが、いつの間にかPVが2000を超えています。

すごく驚いています。

流石は「リリカルなのは」ですね。

とにかく、見に来てくれた皆様の期待に応えられるよう頑張りたいと思います！

それでは第02話、はじまります。

第02話 はじめてのしゅぎょう

シオリside

…はじめまして、私はシオリです。

元々名前はありませんでした。つい昨日、主であるキヨウからシオリという名をもらいました。

あと、「相棒として接したいから」という理由で、主であるキヨウのことを呼び捨てにすることになりました。

…キヨウは不思議な人です。

人の形をしているとはいえ、あくまでプログラムでしかない私を1人の人間として扱ったり、「1人だけで食べてもつまらないだろ？」という理由で必要でない食事をさせたりします。

一体キヨウは何のためにそのようなことをするのでしょうか？

今後と共に過ごしていくためにも、しっかり観察してみたいと思います。

…あと、キヨウの笑顔を見るとどうしてこんなに胸がドキドキするのでしょうか／＼

…これについても調査が必要ですね。

とりあえずはキヨウの観察のためにカメラを数台手に入れなくては…。

side out

「……んん……もう朝か……。」

今は朝の6時くらい。昨日はやることないんで早く寝たせいか、転生前よりもはるかに健康的な時間に起きることができた。

とりあえず洗面所に行き、顔を洗う。その時鏡を見るが、やはり不自然な感じが抜けない。

なんせ、かつての俺は不細工なわけではないがかつこよくもない容姿でしかなかったのに、今の俺はやけに整った顔に、腰まで伸びた黒髪、そして極めつけは血の色のような真紅の眼なのだ。…まあ、「真の壬生一族の体」であるのだから、眼が紅くなるのは当然なのかもしれないが、実際なってみるとどうしても不自然な気がする。

まあ、とにかく顔を洗った俺は居間に行き、既に起きていたシオリと共に朝食を食べた。

ちなみに俺はそこまで料理が得意でないが、朝食位なら俺でも調理できるから今回はちゃんと調理したぞ。でも、シオリから感想を聞いてみたら

「…いたって普通。」

と言われた。そこまで期待していなかったとはいえ、不味いって言われるより傷ついた：orz（涙）

ただ、そんな俺を見たシオリが焦って俺を励まそうとしていた時の様子は、結構可愛かった。

朝食の後、自分の実力を確認することも兼ねて修行をすることにした。

ちなみに場所はあの無駄に感動した修練場。最初はそんなところで修行したら壊れて更地になってしまうのではないかと心配したが、

シオリが

「認識阻害魔法を組み込んだ封時結界をかけるから大丈夫。」

と言っていた。

…なんでも結界の中で壊れてしまっても、結界を解くと元通りになるらしい。この世界の魔法ってかなり便利なんだな…と思った一幕であつた。

そして、念の為に家全体が収まるようにその結界を展開してもらつた後、まずは得物を作ることにした。
別に修練場にあつた木刀や竹刀でもよかったが、少し試したいことがあつたので一から作ることにした。

俺は目をつむり、ある刀をイメージした。

そのイメージがはつきりするにつれて、右手に魔力が集まり、実体を持ち始めた。

次第に魔力が集まってくる量が減っていき、完全に集まらなくなつたところで俺は目を開けた。

そこには長さが五尺ほど（だいたい1.5m位？）の大太刀があつた。

そう、これこそあの「Samurai Deeper KYO」に出てくる四大妖刀が一つ、「天狼」……

……ではなくて、最初の方でサスケが持っていた「天狼の親戚みた

いなもの」である。

…いや、だって未熟と判断されて乗っ取られるの嫌じゃん！！それで暴走して誰かに討伐されるなんてどんなバットエンドだよ！！それに「初代紅の王」なんて神様同然みたいな人が宿った刀が作れるのか心配だったからね…。

…まあ、当分はこっちの「天狼」（仮）を使うとするよ。

とりあえず今は、わざわざ「天狼」（仮）を作ってまでして試したかったことをしようと思う。

そのためにも準備段階としてこの「天狼」（仮）を分析しなくては。

「解析・開始」
トレース・オン

…正直今の言葉で試したいことが何だかバレてしまったとは思いますが、とりあえず実験開始といこう。

「投影・開始」
トレース・オン

そして、今度は左手に「天狼」（仮）の複製を作ること成功した。…どうやらほぼ能力同然な衛宮 郎の投影も、あくまで投影「魔術」であるがゆえに「技」の対象となっているようだ。あ、ちなみに「技の知識と素質」で選んだ中の1つは「型月世界」の技にしといた。…いやあ、まさかそんな大雑把でもOKもらえるとは思いもしなかったけどね…。まあ、結果オーライってやつさ。

投影が使えるのなら色々投影できるようにしよう、ということ、しばらく

「モノづくりの才」で作成 それを「解析」 ちゃんとできるか試しに「投影」

というのを続けていたが、神様が「魔力をかなり使う」と言っただけあって、50位で魔力がなくなった。

それでも名だたる剣だの槍だのを作りまくったおかげで、ものすごいコレクションが出来上がってしまった。

あ、ちなみに色々作ってわかったことなんだが、「モノづくりの才」に関しては、特に作品上の制限をつけなかったおかげか、どんな作品のものでも作れるらしい。

これによって作りたいものがさらに増加されてしまった…一体いつになったら作り終えるのだろうか…。

それにしても、「天狼」（仮）を作れた時にも感動したが、やはり「エクスカリバー」を作れた時にはもう最高に感動したね！

よく転生したオリ主とかが転生してから真っ先に「エクスカリバー」を投影したり、創造したりしているけど、その気持ちが十分にわかったもん。

しかも作った「エクスカリバー」を解析してみたら、オリジナルとほぼ同じだということが分かりさらにテンションは登りつめていったし！！

…まあ、ぶっちゃけそのハイティションのおかげで魔力無くなるまで作り続けてしまったんだけどね…。

先程の修行（？）により魔力が尽きてしまったので、今度は魔力を使わない技、ということで体術を試してみることにした。とりあえず、一番最初に作った「天狼」（仮）を構えた。

使う得物は「天狼」(仮)、俺の体は「真の壬生一族」の体。といったらやることは一つでしょ!!

「無明神風流 みずち!!」

俺は、最初なので無明神風流の基礎である「みずち」の遠距離攻撃(?) バージョンを使ってみた。

ドガアアアアン!!

「……………なんでさ。」

…思わずかの有名な口癖が出てしまうほど予想外だ(汗)

俺が放った「みずち」は、地面を抉りながら修練場の壁どころか、その向こうにあった塀までも突き破っていた。

どうやらシオリの結界のおかげで止まったようだが、いくらなんでも強すぎるだろ!!

まさかこれが「真の壬生一族」クオリティーなのか!? めちゃくちゃヤバいじゃん!!

これじゃ、敵が毎回ミンチになっちまうじゃねえか!

というか、本当に結界張つといてよかった…。

…ちなみに結界を張っていたシオリさんですが、表情を変えることなく

「…これくらいなんてことない。」

というお言葉をいただきました。

シオリさん、貴方もれっきとしたなチートですね。

その後、いろいろな技をなるべく力を抜いて試してみたが、奥義ク
ラスの技については思うような形にできなかった。

ある程度使える技がはつきりしたところで、時間がちょうど昼ごろ
になった。なので、一旦修練をやめて昼食を外で食べることにした。

昼食を食べ終わった後は生活に必要なものを色々買った。途中、
家電販売店でシオリがやけにカメラやビデオを熱心に見ていたけれ
ど、何かあるのだろうか？

食材から家具、家電までたくさん買ってしまったので、人に見られ
ないよう注意しながら、転送魔法で買ったものを家に送った後、と
くにやることもなかったので、家に帰ることにした。

域と同じ道を通って家へと帰っている途中、公園のある光景が目
にとまった。

といっても、一見、栗色の髪をツインテールにした女の子が1人で
ブランコに座っているだけなんだが…。

だけど、昼ごろにこの公園を通り過ぎたときにも、あの子はブラン
コに座っていたのを見かけていたので流石に少し気になっていた。
だってもう4時間くらい経ってるんだぞ？

それに、気のせいかもしれないが、あの子、泣きそうな顔してるみ
たいなんだよね…。

とりあえず、声をかけてみることにした。

……大丈夫だよな？今の俺は5才なんだし…。

「シオリ、先帰ってて。」

「…何かあるの？」

「ちょっとあの子に声かけてくる。」

「……………キョウがそんな趣味だったなんて……………」

「ちよつ…!!」

何かひどい勘違いをされたので、誤解を解こうとしたが、シオリは魔法陣を自分の足元に展開させ、

「死ねばいいのに。」

と言いながら消えてしまった…。

シオリがいなくなってしまう、なんか空気がどうしようもない感じになってしまったが、今更何かができるわけでもない、ついため息をついてしまった。

このまま帰ってしまったでもいいが、それでは何のために誤解され、何のためにここに残ったのか分からなくなってしまうので、俺は気を取り直して女の子に話しかけることにした。

第02話 はじめてのしゅぎょう（後書き）

いかがだったでしょうか。

まさかのエンカウント寸前で終わらせてしまいました。

前々回に「絡ませたいなあ」とか言っておきながらその寸前で終わらせるってどういうことだよ…って感じですが…

ごめんなさいm(_____)m

実はそろそろ期末試験が近く、時間がなかなかとれなくなってきたのです。

その上、嫌がらせのごとくレポート出せとか言ってくるし…。

もしかしたら投稿のペースが不定期になってしまいかもしれませんが、どうかお許しください。

次回はちゃんとエンカウントさせます。

あと、今度は「異能の力」の方の修行をすると思います。

それでは皆様、また次回にお会いしましょう。

第03話 ロリコンじゃありません、フェミニストです（前書き）

…こんばんは、和風好きです。

…まさかまだ第03話だというのにもう1日1話というペースが崩れてしまうとは思っていませんでした。

最近レポートの量が半端でなく、また、もうすぐ期末試験なため、なかなか時間がとれないでいました。

これからさらに忙しくなりそうですが、どんなに遅くても3日で1話投稿できるよう頑張りますので、皆さん、よろしく願います

m (— —) m

それでは第03話、はじまります。

第03話 ロリコンじゃありません、フェミニストです

??? side

わたしは高町なのといいます。

この間、お父さんがお仕事で大けがをして、今入院しているの。
お母さんとお姉ちゃんは、お店やお父さんのお見舞いで忙しいくて、
お兄ちゃんはいつもこわい顔をしているの。
なのはは、みんなの迷惑にならないように、1人で大人しくいい子
にしているの。

でも、1人でいるのはさびしくて、公園で泣いてしまいました。

「…ひつく、うう…。」

「ねえ、なんでそんなに泣いてるんだ？」

「ふええ？」

突然声をかけられたので顔を上げてみると、そこには1人の男の子
が立っていました。

その子はきれいな顔をしていたけど、わたしは思わずその子の眼に
見とれてしまったの。

その子の眼は、まるで燃えているようなきれいな紅い色をしていま
した。

side out

さて、俺は今、例の女の子の近くにまで来た。

「…ひつく、うつ…。」

…どうやら本当に泣いていたようで近寄ってきた俺に全く気付いていないようだ。

とりあえず、泣いている理由でも聞いてみるか。

「ねえ、なんでそんなに泣いてるんだ？」

「ふええ？」

女の子は顔を上げて、俺の顔を見る。

…なんか、その子にじつと見つめられてる気がする。いきなり声をかけたのはまずかったか？

「あ、悪い。驚かせちゃったか？」

「え／＼／…うつん、だいじょうぶなの。」

「ならよかった。それで、何かあったのか？」

「えつとね…お父さんがお仕事で大けがをして、今入院してるの。」

お母さんとお姉ちゃんはお店とお父さんのお見舞いでいそがしくてお兄ちゃんはいつもこわい顔をしているの。

でも、なのはいい子だから、1人でも大丈夫なの。」

「そっか、大変だね…。」

…なんか予想以上にすごい事情だな…。これくらいの年齢は家族に

甘えたいだろうに…。

この子に何かしてあげたいけど…そうだ！

「もしよかったら、俺と一緒に遊ばないか？」

「…え、いいの？」

「ああ、いいぜ。」

「ありがとう！あのね、わたしのなまえは高町なのはっていうの！
なのははいま５さいで、来年から小学校にいくの！」

「俺は紅崎キヨウ。年は高町と同じ５才だから、俺も来年から小学校に行くぞ。」

「じゃあ、なのはと同じ年なの！」

「そうだな。で、高町は何して…」

「キヨウくん、なのはってよんで。」

「えっ？」

「なのははキヨウくん、ってよぶの。だからキヨウくんもなのは、
ってよんで？」

「…わかった。これでいいか、なのは？」

「うん！」

やっと笑顔になってくれたな…。

「…やっぱりなのは笑顔でいた方が可愛いな。」

「うにゃ／＼／＼い、いきなり何をいうの？」

「だって事実だし…。それに、なのはのお父さんもなのはが笑顔でいてくれた方が早く元気になると思うぞ。」

「そうなの？」

「きっとそうだと思うぞ。なのはだって怪我したときに皆が悲しそうな顔しているよりも、笑顔でいてくれた方がいいだろ？」

「…うん！なのはも笑顔でいるね。」

「それじゃ、遊ぶか。なのはは何がしたい？」

「それじゃ、なのははおにごっこがしたいの！」

その後、辺りが暗くなり始めるまでなのはと一緒に遊んだ。

まあ、なのはは5才だからあまり遅くなったら駄目だろうと思い、明日も午後から遊ぶ約束をした後、なのはを家の近くまで送った。

さて、お遊びも終わり、家に帰ってきたわけだが、先に帰っていたシオリは何故か幼児化して待ち構えてきた。

「何で幼児化したんだ？……というか、どうやって幼児化した？」

「だって、キヨウはこの姿の方が好みみたいだから…。」

いや、確かにかわいいけど…

「別に俺、ロリコンじゃないぞ?。」

「それで…何してきたの?。」

「無視ですか…まあ、普通にあの子と遊んできましたよ。」

「…これでキヨウの毒牙にかかった被害者が1人…。」

「おい!!。」

…この後、シオリの誤解を解くのに1時間近くかかってしまった…。
…というか、誤解は本当に解けたのだろうか?だってあいつ、まだ
幼児化した姿でいるんだけど…。

俺はちゃんと誤解を解いておきたかったが、夕食を食べた後はまた
修行をする予定だったので、残念ながら、この話についてはのちに
もちこされることになった。

ちなみに夕食は既にシオリが作っていた。シオリの料理はとても美
味いわけではなかったが、少なくとも俺の料理よりは美味かった。

夕食を食べた後、俺達はまた修練場に足を運んだ。

今日は既に魔術と体術についてある程度試していたので、今度は「
異能の力」を試してみることにした。

シオリにこの家一体に結界を展開してもらったところで、俺はある
能力を発動させてみた。

すると、俺の指先から電気が発生し始めた。

まあ、どんな能力かは容易く想像できると思っけれど、これは某学園都市のビリビリ中学生の能力、「超電磁砲^{レールガン}」である。

…え、ベタ過ぎてつまらない？すみませんm(_ _)mでもどうしても使ってみたかったんです！

その名の通りであるレールガンとか、砂鉄の剣だとか…。

結構、使い勝手よさそうじゃないですか！

…とにかく、もう選んでしまったものはしょうがないんで今はこの能力を試してみることにする。

とりあえず、最初に電撃を前に放出する感じのものをやってみようと思う。

俺は、電撃を前に飛ばすようなイメージをしながら能力を使ってみた。

そうしたら、大体イメージした通りの電撃が俺の前方に飛んで行った。

…おお、能力の方は結構使い勝手がいいみたいだな…。

その後も、色々と調節しながら能力を使ってみたが、思った通りの威力で使うことができた。

威力の調節は大体いい感じで出来たので、今度は最大出力がどんな感じが確かめることにした。

そこでポケットから出したのは1枚の100円玉。

そう、ついにあのレールガンを放ってみたいと思う。

指で弾かれ、上に飛んでいく100円玉。

落ちてくる間に俺は電気を出来るだけ溜めておく。

そして、100円玉が構えた手の近くに来た時、溜めておいた電気を全て前方に開放させる。

ズドオオオオオン！

…やはり、威力が半端ないです。

先程のレールガンのおかげで修練場の半分が完全に崩壊した。てつきり「みずち」の時と同じで、修練場の壁に穴をあけるものだと思っていたが、ものの見事に100円玉は周囲を巻き込みながら破壊していった。

だけど、飛距離の方は思ったよりも短かったな…。

たしか、弾として使ったコインが摩擦で焼き切れる距離がそのまま飛距離になっていたような覚えがあるんだが、コインを変えたら飛距離は変わるのだろうか？

本来なら実験してみたいところだが、あいにく100円玉以外の持ち合わせは1円玉と5円玉、500円玉しかない。

100円玉より小さい1円玉や5円玉ではさらに飛距離が短くなりそうなので、やっても意味がないだろう。…と言うのか1円玉や5円玉でレールガン出来るのか？

一方、使い捨ての弾として使うのに、500円玉を選ぶのはかなりもったいない気がする。

なので、残念だが、レールガンの飛距離についての実験はまた次回に延期せざるを得ないようだ。

その後、他の能力も使ってみたが、そこそこやったところで修行を切り上げておいた。

だって、あまりに能力を使い過ぎるとアレが起きてしまうからね…。明日またなのはと遊ぶ約束をしているのに、今アレを起こしてしまったら、間違いなく面倒なことになるだろう。

それに、いくら人より身体能力や魔力、気が格段に高いとはいえ、5才の体で、午前中はずっと修行して、午後は買い物となのはとお遊び、そして夜にまた修行なんてことをしていれば、疲れてしま

うのもしようがないと思う。

現に、今の俺は気を抜くとすぐに眠ってしまいそうだ。

というわけなんで、今日はさっさと風呂に入って寝てしまうことにした。

…もう少しで寝てしまうような意識の中、俺の部屋に誰かが入ってきた気がしたが、確かめる気力もなく意識が失われて行き、寝てしまった…。

シオリside

…今日、買い物が終わりに、家に帰っていく途中に、あるうことがキョウがまだ5才ほどでしかない少女に声をかけるために、私に先に帰れと言ってきました。

…これはあれでしょうか？今話題のロリコンだとかペドフェリアというやつなのでしょうか？

私はそんなキョウのことをすぐさま軽蔑しましたが、同時に、どこかさびしいと思っている私がいきました。

…一体何故こんなことを思ってしまったのでしょうか？

とりあえず、家に帰った後、家中にキョウ観察用のカメラを仕掛け、認識障害魔法を5重にかけましたが、このままただ待っているのは何故か悔しかったので、禁録の書をフル活用して自分の外見を5才ほどにまで下げてみました。

…本当はこれにブルマというものを装備してみようと思っていたのですが、流石にそれはやり過ぎかと思い、断念することにしました。

その後かなりの時間が経過したところで、キョウが帰ってきました。聞けばその少女と楽しんできただけでなく、明日もまた会う約束をしてきたようです。

だというのに、好みに合わせた私には一切襲ってくるそぶりを見せませんでした。

私は悔しいを通り越して、キョウに対して怒りが込み上げてきたので、キョウが寝入ってしまったところで反撃として、一緒の布団で寝てやることにしました。

もちろん私は幼児化だけでなく、ブルマも装備してきました。

明日キョウが起きたときに、どんな様子であわてるのが楽しみです。

第03話 ロリコンじゃありません、フェミニストです（後書き）

…いかがだったでしょうか。

第03話でやっと原作キャラと絡めました。

話し方とかが間違っていないかとても不安です。

そういえば、いつの間にかPVが5000をオーバーするということんでもないことになっていました。

見に来てくれる皆さんの期待にこたえられるように頑張りたいです。

次回はおそらくその後の日常を書くことになりそうです。

ほのぼのしたものが書けるよう頑張りたいです。

それでは皆様、また次回お会いしましょう。

8月10日、訂正しました。ご指摘ありがとうございます。

第04話 予想GUYなエンカウント（前書き）

皆様こんにちは、和風好きです。

なんとこの小説のPVが8000近くになりました！

さらに、この小説を評価して下さった方がいらっしやいました！！
評価して下さい、そして読んでくれた皆様、本当にありがとうございます！！
m (_ _) m

この調子で頑張っていけたらなあ、と思います。

それでは第04話、はじまります！

第04話 予想GUYなエンカウト

……んん……朝、か……。

……でも眠い……ものすごく眠い……とにかく眠い……。
だから……二度寝していいよね……。

そう結論づけて、さあ二度寝をしようと寝返りをうつた時、何か柔らかなものに触った。

「あつ……／／」

……何か聞こえたけど……これは一体何だろう……？でも、なんか安心するな……。

「……そんな……抱きついてくるなんて……／／／」

……今の声、聞いたことあるんだけど……シオリの声によく似てるな……ってシオリ！？

その瞬間、俺は完全に覚醒した。

そして、声のした方を向いてみると……。

「……やっぱり、キョウは変態……／／／」

俺に抱きつかれた状態で、なぜか顔を赤くしながらそう言ってくるシオリがいた。

「……え、……うえ？……はああああ！？」

「…うるさい…少し静かにして。」

「…っていつか何でシオリが俺の布団の中にいるんだ？」

「そういう気分だった。」

どんな気分だよ…。っていつか何故にブルマ着てるの？

「…どうしても我慢できないなら、私が受け止める／／／」

「…何をですか…？」

なんか、朝から疲れちゃった…。

精神的に疲れ切った体でなんとか朝食をとり、魔法や体術、そして能力の修行をした。

今日は家で昼食も食べたが、この後のことで少し悩んでいた。

それは、シオリのことである。

俺はこの後、なのはと遊ぶ用事があるからいいが、その間、シオリはずっと家にいるだけではきつとつまらないだろう。

なので、シオリがつまらなくなるために、何かいい案がないか考えていた。

…そう言えば、「11eyes」の栞は本が好きだったな…。

だったら試しに図書館にでも連れていってみるか。

そう思った俺は、シオリを図書館に連れて行ってみた。

…結論から言うと、図書館へ連れて行ったのは大正解だった。

図書館にある膨大な本を見た途端、シオリは目をわずかに輝かせて吸い寄せられるかのように本へと近づいて行った。

そうか、こちらのシオリも読書が好きなのか…。

家に帰ったらシオリの部屋に本がたくさん入る本棚を置いてあげよう。

そう思っていたら、いつの間にかシオリを見失ってしまった。

とりあえずこれからなのはのところに行かなくてはならないんだが

…シオリなら声かけなくても大丈夫か…ガキじゃないんだし。

そして、俺はなのはとの約束のため、急ぎ公園へと向かった。

シオリside

本日、私はキョウに図書館という場所に連れて行ってもらいました。なんでも、あのなのはというらしい少女と遊んでいる間、私が退屈しないようにという目的らしいです。

最初はそんな必要はないと思ってましたが、その認識は甘かったようです…。

私はすぐに、本の虜になり、今や私の前にはそれなりの厚さの20冊くらいの本がテーブルの上に積んであります。

…「そんな数の本読めるのか？」ですって？…舐めないでください。4時間もあれば10冊は読めるでしょう。残りの10冊は借りて帰る用のものです。

それでは私は本を読みますので。図書館では静かにお願いします。

…予想以上に読みやすかったおかげで目標の10冊は3時間で読めてしまいました。このペースならあと3冊は行けそうです。

10冊目が読み終わると私は次なる本を探すべく、本棚へと向かいました。

…今度は神話や英雄譚でも読んでみましょうか…。

そう思い、そういった本が集まった棚を見ると、車いすに乗った1人の少女がいました。

「…と、届かない…もうちょっとなんやけど…。」

…どうやら車いすに座ったままでは届かない場所にある本を取ろうとしているようです。

ちょうど私も彼女の近くにある本棚に用があるので、そこに行くついでに取ろうとしている本を取ってあげました。

「…どうぞ。」

「あ、ありがとうございます。」

そういつて少女は私から本を受け取りました。

「…他に取りたい本はありますか？」

「それじゃあ、その本とあの本を取ってくれませんか？」

私は言われた本を棚から取り、渡してあげました。

「ほんまにありがとうございます。」

「…いえ、私の読みたい本を取るついでにしたことですから…」

「　　そうや、私は八神はやてって言います。お姉さんは何て言うんですか？」

「　私は紅崎シオリです。」

「シオリさんやね。あの、お礼がしたいのでよかったですら家に来てくれませんか？」

そこまでしてもらえるようなことをした覚えはないんですが…。

「…先程言った通り、私は自分が読みたい本を取るついでにした行為ですから、あなたがそんなに恩を感じる必要はありません。…それに私のような他人を連れていったら八神さんの家族に迷惑がかかってしまうのではありませんか？」

私がそう言つと、八神さんは少し表情を曇らせました。

「…家族は私が小さい頃に死んでもうて、今は1人で暮らしとるから迷惑なんかじゃありませんよ…。」

「…どうやらあまり触れるのがよろしくない話題に触れてしまったようですね…。」

ここで断ってしまったら八神さんがあまりにも酷い扱いになってしまいます…。

今回ばかりは仕方ないですかね…。

「…わかりました。では、お邪魔させていただきます。」

「はい！…そういえばシオリさんは私よりも年上なんやから敬語なんか使わなくていいですよ。あと、なるべくなら『八神さん』やなくて『はやて』って呼んでください。」

「…わかった。…そのかわり、はやても敬語は使わなくていいから。」

「わかったで。」

…やっと表情に明るさが戻ってきましたね。
まあ、はやては読書が好きみたいですから、読書好き同士として仲良くやっていけそうです…

…こうして私達は本を借りた後、はやての家に向かいました。
やはりはやてとは主に本の話題で話し合うことが出来ました。
なかなか有意義な時間を過ごすことが出来ました。

それにしても、はやての家もなかなか立派でしたが、何よりもその蔵書が素晴らしかったです。

…いつかはやての許可を得たら、全て読破してみたいですね。
ただ………その中に1冊だけ、別の意味で気になる本があるので………。

…む、いつの間にか夕食まで頂くことになってしまいました…。
それならば、キョウに夕食は外で食べてくることを言っておかなければ…。

そう言って電話しようとしたら、はやてが

「そうや、折角だからその従弟さんも家で夕食食べていかへんか聞いてみてや。」

と言ってきました。

…まあ、キヨウのことですから呼んでも大丈夫でしょう。とりあえず、私はキヨウに電話をかけることにしました。

side out

俺が急いで公園に着いたら、既になのはが待っていた。…やっべ、約束の時間を少しオーバーしてしまった…。

「あ、キヨウくん！来るのがおそいの！」

「悪い、ちょっと用事があって遅れちゃった。」

「なのは、キヨウくとあそぶの楽しみにしてたんだよ！」

「本当にゴメン。何か埋め合わせするからさ。」

そう言くと、なのはは少し考えた後、

「…じゃあキヨウくん、頭なでてくれる？」

と、上目遣いをしながら言ってきた。

／＼…やばい、結構可愛いと思ってしまった…。

俺、別にロリコンじゃないのに…。

「わ、わかった。」

とりあえず、なのはの要望通りに頭をなでてみた。
しかし、頭なでるだけでいいのだろうか…？

「ん~~~~ん~~~~／／／」

…何か、なのはさんがものすごく顔真っ赤にしてるんですけど…。
まあ、この様子なら頭なでるだけでよさそうだな…。
そう思いながらなでるのをやめて手を頭から離そうとするが、

「あつ……………」

ものすごく悲しそうな顔するんですけど…。

これはあれか？まだなでろということなのか？

…これじゃあ、いつまでたってもやめられないじゃねえか！

それに、このままなで続けていたら遊ぶ時間がなくなってしまうんだが…。

「なのは、そろそろ遊ばないと時間無くなっちゃうぞ。」

「／／／…ふえ！？キ、キョウくん、もう大丈夫だよ。」

やっとナデナデをやめる許可を頂きました。

そして、時間を無駄にしないよう、すぐに遊び始めることにした。

その後、何時間ものとは一緒に遊んでいたが、3時間くらい経ったころ、携帯にシオリから電話がかかってきた。

「もしもし、どうしたシオリ姉さん。」

…ちなみに他人の前では俺とシオリは従兄同士で、両親が死んでしまった俺はすでに1人暮らしをしているシオリのもとで居候をさせてもらっているという設定でいることにしている。

なので、その設定に信憑性を持たせるためにも、外では「シオリ姉さん」と呼ぶことにしているのだ。

『…キョウは今、どこにいる?』

「俺は今、公園で遊んでるけど…どうかしたの?」

『…それなら、遊び終わったらこっちに電話して。』

「??…よくわからないけど、わかった。」

一体どうしたんだろう?何かしらの問題が発生したとかでなければいいんだけど…。

「どうしたの、キョウくん?」

「ああ、一緒に住んでる従姉から電話があって…遊び終わったら電話してほしいって。…それより今は遊びの続き、しよっぜ。」

「うん!」

それから1時間ほど遊んだ後、なのはが帰る時間になったので、遊びをやめて家の近くまでなのはを送った。

そして、先程電話で言われていたので、シオリに電話をかけた。

…一体何があったんだろう？

第04話 予想GUYなエンカウト（後書き）

というわけで第04話でした。

まさかのシオリが先にエンカウトしてしまいました。
どうでしょうか？無理矢理な流れでなければいいんですが…。

それと、感想と評価、いつでもお待ちしています。

何かしら要望があれば遠慮なく送ってくれるとうれしいです。

次回はキヨウの方がエンカウトしにやってくるところから始まります。

それでは皆様、またお会いしましょう！

第05話 2人目の友達と『気になるもの』（前書き）

こんばんは、和風好きです。

…またこんな出だしになって申し訳ないんですが、PVが10000
0を通り越しました！
ユニークも2000を突破し、とても感謝感激です！
だというのに…

また10日に間に合わなかったorz

…本当にごめんなさい。

…もういつそ3日に2話投稿するペースという風にしてしまおうか…

…と、とりあえず第05話、はじまります。

第05話 2人目の友達と『気になるもの』

プルルル……………カチャ

『…もしもし、キョウですか？』

「ああ、今遊び終わったんだけど……………なんかあったの？」

俺がそう言つと、シオリは俺と別れてから起きたことを話してきた。

……………シオリが初対面の子と仲良くなつて家に行くなんて……………意外だ

……………。

なんとなくうれしくなった俺はその子がどんな子なのかという興味と、そしてシオリのためにも夕食への招待を受けようと思ったが、一応聞いてみる。

「…でも、俺が行ってもいいのか？迷惑じゃないか？」

『…本人が来ても大丈夫って言ってるから。（それに、気になるものを見つけた）』

「うおっ！」

いきなり念話が来たんでびっくりしてしまった。

…ついでに言つとくと、念話については今朝の修行で何とか修得し
ていた。

『…どうしたの？（…変な反応しないで）』

「い、いや…何でもない。（しょうがないだろ、今朝使えるようになったばかりなんだから…で、気になるものって？）」「

『で、どうする？（とりあえず、こちらで話したいから来て）』

「そうだな…じゃあ、お言葉に甘えて行くことにするよ。（…了解）」

そうして、シオリからその女の子の家の場所を聞いた後、俺は目的地に向かって歩き出した。

シオリside

…念話で色々と話しておいたこともあり、キョウモはやての家に来ることになりました。

「シオリさん、どうやった？」

「…ここに来るって。」

「そっか…楽しみやなあ…シオリさんの従弟ってどんな人なんやろ？」

「…キョウモはやてと同じ年くらいだから…きっと仲良くなれると思う。」

先程からはやては楽しそうですね……無理ありませんか。
なんせ、この年で両親と死に別れ、その後は1人だけで生活しているのだから…。

「こうしちゃいられへん！シオリさんや従弟君にもおいしいうて言わせるためにも腕によりをかけて料理せん！シオリさんはここで待つといてな。」

「…わかった。」

それではやてが戻ってくるまで借りてきた本でも読んでいるとしましょう。

しばらくした後、はやての家のインターフォンがなりました。
やっと来たようですね。

はやては料理中だから私が出るとしましょう。

side out

しばらく歩いて先程教えられた目的地に着いたが…。
なんか凄い家だな。

ここで独り暮らしするのはなかなか大変そうだな…。
とりあえず、インターフォンを押してみたところ、家の中からシオリが出てきた。

そして、そのままシオリの案内について行ったところ、1人の車いすの少女が作ったばかりであろう料理をテーブルに並べていた。
俺とシオリもそれを手伝い、皆が席に着いたところで自己紹介をす

ることになった。

「はじめまして、私は八神はやてっぺいいいます。はやてっぺ呼んでや。」

「こちらこそはじめまして。俺はシオリ姉さんの従弟で紅崎キヨウです。今日はシオリ姉さんと一緒に夕食に招待してくれてありがとうございます。」

「ええよそんなの…元々シオリさんが私のこと助けてくれたお礼でもあるんやから…」

「そつか…それにしても料理美味そうだな…これ全部はやてが作ったのか？」

「そうやで。今日はなかなか自信作なんや。キヨウ君もシオリさんも冷めへんうちに召し上がってな。」

そうして俺達は食事を開始した。

料理は…とにかく美味い！この世界に来てから食べた料理の中で一番美味いぞ！！

「はやて、この料理本当に美味しいな。そこのレストランとは比べ物にならないぞ。」

「美味しい…。」

シオリも呆然とするほど美味しかったらしい。

「そう言ってくれるとうれしいわあ…私も作った甲斐があったって
もんや。」

結果、いつもよりたくさん食べてしまった…。少し苦しいかも…。
後片付けは作ってもらった身である俺とシオリがやった。

で、その後は居間で色々と話していたんだが…話に集中し過ぎてい
つの間にか時間が経って夜遅くになってしまったので、はやての家
に泊まることになった。

…それはいいんだが、なんではやてと同じベットで寝ることにな
ってんだ？

しかも、本来ならシオリも誘われてたんだが、

「…遠慮します。」

とバツサリ切り捨ててしまった。

その後もはやてが目を潤ませたりして粘ったが、シオリは表情すら
変えることなく断っていた。

で、今度は俺に矛先が向かったわけで、当初は俺も断っていた。だ
が、

「…そんなに私と寝るのが…いやなん？」

と、上目遣い＋涙目で言ってきた。

…くっ、シオリはこれをあつさりと切り捨てたというのか！？
結局、そのダブルコンボにはかなわず、一緒に寝ることを承諾して
しまった。orz

…勿論それを聞いたはやてはかげで「ニヤリ」と笑っていた。…ち

くしょう！

ちなみに、シオリにダブルコンボをバツサリ切れた理由を聞いてみたところ、

「…本気で言ってるかどうかは簡単にわかる。」

だそうだ。

…俺だってアレが芝居だとは分かっていたぞ！だけど断れなかったんだよ、しょうがねえだろ！！

言っとくけど風呂にも誘われたが、流石にそれは断ったぞ！代わりにシオリがはやてと一緒に入っていったからな！

…何言ってるんだろっ、俺：orz

…まあ、はやてがうれしそうにしているからいいんだけどね…。

…と、言い訳はここまでにして…。

その時シオリから、はやてが寝た後に例の『気になるもの』について話すと念話で言われた。何でも、あまりはやてには聞かれない方がいいらしい。

なので、はやてが寝るまで色々と話して過ごすことにした。

はやてside

私は両親がいなくなってから、いつも1人やった。

話し相手になってくれる人も私が通っている病院の石田先生だけで…正直さみしかった。

でも、今日は友達が2人もできたんや！

1人目は図書館で本を取るのを助けてくれた紅崎シオリさん。

人形みたいなきれいなお人で、私よりも年上やけど…まさか成人し
とるとは思わなかったわ…。なんせ、見た目は15歳位なんやで？

そして、2人目はシオリさんの従弟であるキヨウ君や。

キヨウ君は私と同じ年で、シオリさんの従弟だけあってかなりの
イケメンやったわ。

でも、キヨウ君の紅い眼は顔よりもきれいで…なんかつい見つめて
しもうた。

久しぶりに誰かと一緒に夕食やったけど…やっぱ誰かと一緒に食べ
る、ってええなっと思ってた。

そしたら何か…この気持ちを失いとうなくて一時たりとも1人でい
るのが嫌になったんや。

だから、家に泊ることになった2人に、つい一緒にお風呂に入ろう
なんて言うてしもうた。

…まあ、キヨウ君には顔真っ赤にしながら断られたんやけど、そし
たらシオリさんが一緒に入ってくれたんやで。

それに、その代わりなのか、キヨウ君は私と一緒に寝てくれること
になったんや。

…実を言えば、その時に使った涙目＋上目遣いのダブルコンボや、
一度シオリさんに断られたりしたのは、風呂場でシオリさんと一緒
に考えた作戦なんやけどな（笑）

…でも、そんな少し強引な形で一緒に寝ることになったのに、キヨ
ウ君は嫌な顔せずに私の言うことを聞いてくれたから、少しうれし
くなっけしもうた。

「キヨウ君。今日は本当にありがとな…。」

「別にお礼を言うほどのことはしてねえよ。第一、友達ならそれくらい当たり前だろ?」

「友達?」

「そうだろ?一緒に飯食べて、一緒に話して、一緒に…その…寝てるんだからさ…//」

…あかん。なんか涙が出そうや。私はそれを誤魔化すためについ

「あはは、キヨウ君顔真つ赤や!」

「なあっ!…うるせえ!しょうがねえだろ!女の子と寝るの初めてなんだから!」

「…じゃあ、私が初めての女なんやね?」

「…なんて言い方するんだよ…。」

「…なあ、キヨウ君。」

「…どうした、はやて?」

「手、繋いで寝てもええ?」

「…別にいいぞ。//」

…ふふつ、またキヨウ君の顔真つ赤や。でも、ありがとつな…。

今日はさみしい思いをすることなく寝れそうや…。

side out

…どうやらはやては寝たようだ。

目の前で手を振ってみたが、何も反応しなかった。

これで条件はそろったので、シオリに念話で話しかけることにした。

「（はやては寝たぞ。で、何なんだよその『気になるもの』って。）

」

「（…鎖の巻きついた分厚い本を見た？）」

「（…あれかな？はやてが寝る前にそんな本を見てたけど…。で、あの本がどうしたんだ？）」

確かに魔力を纏ってた気がするけど…。いちいち俺を呼んで何かをする程でもないと思うんだが…。

「（…アレは闇の書という魔導書。そして第一級搜索指定遺失物口ストロギアでもある。）」

何だその第一級何とかって？…あ、でも確か…。

「（ロストロギアって確か滅んでしまった世界の技術で出来たもの…だっけ？でも、そんなにヤバいものなのか？）」

「（…確かにそんなに危険性がないものもある。でも、アレは…。）」

そう言つて、シオリは闇の書について解説してくれた。

何でも元は夜天の書というただ魔法を集める魔導書でしかなかったのだが、それを兵器として利用したかつての所有者によつて改悪されてしまったらしい。その結果、世界を滅ぼしかねない危険性を持った闇の書になってしまったとか…。

しかもシオリによれば、はやての足が動かない原因は闇の書にあり、このまま放置すればはやての命を奪いかねないそうだ。

「（…で、どうやったらはやてを助けられるんだ？）」

「（…闇の書が起動していない今では手の出しようがない。起動したなら、主となったはやてと闇の書の管理人格に協力してもらつて、闇の書を元の夜天の書に戻せばいい。）」

「（そうか…今はただその起動するのを待つしかないのか…。）」

「（…はやてに申し訳ないと思うならそれまでキョウが支えてあげればいい。）」

「（…そうだな。とりあえず今はこの事ははやてには言わなくていいんだよな。）」

「（それで大丈夫。……話はこれだけ。私は読書の続きをするから。）」

「（わかった。それじゃ、おやすみ。）」

「（……おやすみ。）」

……とにかく、今は気にしていてもしょうがない。

その時になったら全力ではやてを救うだけだ。

そう決意したところで、眠気が襲ってきたので、俺はそのまま寝ることにした。

第05話 2人目の友達と『気になるもの』（後書き）

ということで第05話でした。

「闇の書発見 起動するまで放置」なルートに入ってしまったが…。

ちょっとはやてにはもう少し（というかかなり）待ってもらうことになりました。

賛否両論はいろいろあると思いますが、温かな目で見てもらえれば…と思います。

次回はおそらく時間が飛びます。

かといって、原作までは飛びません。

勿論感想や評価はいつでもお待ちしております！

それでは次回、またお会いしましょう。

第06話 2度目の学校生活（前書き）

こんにちは、和風好きです。

第06話です。

時間が飛びます。

結構雑な仕上がりになってしまいました。

時間を飛ばすのって難しいです。

それを不自然なく書ける他の作者様を改めて尊敬しました。

まあ、とりあえず…

それでは第06話、はじまります。

第06話 2度目の学校生活

はやてと初めて出会ってから1年くらい経った。

「その間に何か起きなかったのか？」だって？

…色々ありましたよ。

毎日修行しながらなのははやてと遊んだり、なのはがお父さんのお見舞いに行く際に俺が同行したり、その時に不審に思われない程度に回復させようと思ってファーストエイドを使ったらそれだけで意識が回復しちゃったり、後日改めて高町家に招待されたり、お土産に持ち帰ったスイーツを食べてシオリがスイーツにはまってしまったら、はやてを家に招待して朝起きたら俺の布団の中に侵入していたり…。

転生前の世界じゃあり得ないほどドタバタしていたな。

そういえば、高町家の人々はシオリについて、「従姉である」ということに加え、「職業は投資家」という情報を加えて紹介しておいた。

…まあ、嘘ではないんだけどね…。

家の資金源をいつまでも、「モノづくりの才」で作った宝石を売ることにするわけにはいかなかったから数十万位を元手に株に手を出してみたわけなのだが…。

それをシオリに任せてみたところ、今までに読んだ経済学の本の知識と、ユニゾンデバイス故の高い演算能力をフル活用したらしく、数十万だった資金がいつの間にか数億に化けていた…。（汗）
おかげでしばらくは遊んで暮らしていても大丈夫な状況になったわ

けだ…。

まあ、その辺りは置いといて…。

そういえば俺も6才（外見上）になったので、小学校に通うことにした。

理由？…やっぱり家無き子になるのは嫌だしね…。

ちなみに今通っているのはあの時、神様がおススメしていた聖祥大附属小学校にしておいた。学校選ぶの面倒だったし…。

ただ、私立なら私立と言つてほしかった。いきなりぶっつけ本番のお受験するなんて予想外にも程があるって…。

それに何だよあの試験。英語もあるわ、レベルがどう見ても小学校低学年のやる問題じゃないし…。

お受験って言ったら「この絵を見て、君はどう思った？」とかいう問題が出るんじゃないのか？それとも俺が非常識なのか？…って本気で悩んじゃった。

まあ、精神的には既に成人してるから余裕だったけどな。

…あ、満点は取ってないぞ。目立つのが嫌だったから85点くらいに抑えておいた。

あと、なのはも聖祥に入学していて、同じクラスになったぞ。なので学校でもよく一緒にいるし、昼食と一緒に食べていることも多い。授業は受けてるのかって？…受けてるよ、ただし睡眠学習だけど。いくら私立とはいえ小学校の授業なんざもう聞いてられないって。勿論テストは毎回高得点さ。変に目立たないように80点代くらい

に抑えてるけど…。

それに、その間は分割思考使ってイメトレや、シオリによる魔法の授業受けているからただ寝ているわけじゃないんだぜ。

まあ、休み時間や学校終わった後になのはと遊ぶのもなかなか楽しいからそこまで不満ではないんだけどね…。

ただ、たまになのはのお兄さんである恭也さんから殺気向けられたりしてやけに怖い時があるんだけど…これってあれか？シスコンってやつか？…面倒だなあ…。

あ、はやてとも遊んでるよ。でも俺は学校行く身だから、足のせいで学校に行けないはやてと遊ぶ時間がなかなか取れないんだよなあ…。

その代わりというわけではないが、シオリがよくはやてと一緒に図書館行ったり、はやての家にお邪魔したりしてくれているのだから助かっている。まあ、本好き同士で気が合うらしく、話には困らないみたいだ。

と、そんな2度目の小学生生活を送っていたのだが、これはそんなある日のことである。

その日もいつもの如く、朝に登校した後、教室であつたのはと昼休みに一緒に弁当を食べる約束をしていた。その後これまたいつもの如く、授業が睡眠の時間と化しているうちに、いつの間にか昼休みになっていた。

ただ、いつもならなのはがやってきて一緒に弁当を食べるはずなのだが、珍しくその日は来なかった。その上、教室にもいなかったの
で少し気になったが、何か用事が出来たのだろうと思い、1人で食
べようと準備していた。

その時、教室の一角が騒がしいのに気が付き、その会話に耳を澄ま
せてみたところ、なんだかなのはが何かをやらかしているらしい。
放っておいてもよかったが、万が一があつては困るので、様子を見
に行くことにした。

…現場に着いたんだが…。

「謝って!!」

「何なのよあんた!!」

…こういうの、キャットファイトって言うんだっけ…?

なのは同じクラスの金髪の女の子…確か…ア…アサリ?…違
うなあ…あ、そうだバーニングさんだ!…で、そのバーニングさ
んとケンカしていた。

それも何度もビンタするような凄まじいケンカだった。

…それにしても、女同士のケンカってみにk…激しいんだな…。

…ん?あの近くで泣きながら凄まじき戦いを見るのは…月村さん、
だったかな?

2人のケンカに何か関係があるのだろうか?

泣いているのを放っておくのも嫌なので、とりあえずあの子から聞
いてみるか。

「月村さん、だったよな?」

「えっ……うん……。」

「月村さんが泣いてるのって、あの2人がケンカしてるのとか関係あったりする？」

「……アリスちゃんが私のカチューシャ、とって、返してくれなかったの……そしたら、それを見ていたなのはちゃんが怒ってくれて……。」

「へえ……ってことはなのははクラスメートのためにケンカしてるわけか。少し見直したぜ。」

でも、今はとりあえず月村さんの方だな。

「で、月村さんはどうするんだ？」

「……どうするって……？」

「このまま2人のケンカを放っておいていいのか？それに、あの……えっと……バーニングさん……だっけ？……に、言いたいこと言わなくていいのか？」

「……いや……私……2人にケンカしてほしくない……。」

「なら、やることは1つだろ？」

それを聞いた月村さんは少し考えた後、涙をふいて、あの戦場に向かっていった。そして……

「2人ともやめて！」

その声に、ケンカしていた2人が止まる。

「なのはちゃんもアリサちゃんもケンカしないで！」

月村さんはちゃんと大きな声で2人のことを止めていた。

その表情も多少不安そうだが、しつかり2人のことを見ていた。

これなら余計なこととはしない方がいいと判断した俺は、誰にも気づかれないように静かに教室に戻った。

あの後、教室で弁当を食べていたら3人が一緒に戻ってきた。

…あの様子からするとちゃんと仲直り出来たみたいだな。

そう思いながら見ていたら、なのはがこっちに気がついた。

「あつ、キョウくん、一緒に食べようって言ったのに！」

「だって、起きたらなのはが教室にいなかったからさ…。」

「それはそうだけど…。」

なのはさんは一切納得していない様子。しょうがないな…。

「ほれ、俺もまだ弁当残ってるから今からでも遅くないだろ？…第一もうすぐ昼休みが終わっちゃうぞ。早く食べようぜ。」

「にやつ！！大変なの〜。」

そうやってなのははカバンから弁当を取り出し始めた。

「月村さんたちはもう食べたのか？まだなら一緒に食べないか？」

「あ、うん…あの、さっきはありがとう。」

「…俺は月村さんから事情を聞いて、やりたいことを聞いてみただけだ。そんなお礼をいわれるほどのことなんかしてないよ。」

「でも、赤崎君のおかげで止められたから…。」

「…じゃあ、どういたしまして。そのかわり、次からはちゃんと言いたいことをちゃんと見えよ？」

「うん、わかった。」

月村さんは笑顔でうなずいた。ちゃんといい笑顔になってくれてよかったよ。

…それにしてもよく俺の名前知ってたなあ…え、これが普通？

「…あんた、紅崎よね？なのはとすずかの知り合いなの？」

今度はバーニングさんが話しかけてきた。

「月村さんとともに話したのはついさっきだよ。なのはとは1年くらいの付き合いだけだ。」

「じゃあ、何でさっきなのはのこと助けなかったのよ？」

「だって、ケンカとはいえ1対1でやってんのにそこに参加して2対1にするなんて卑怯だろ。それに、もしかしたらなのはが一方的に悪かったかもしれないだろ？」

なんか「にやつ！？キョウくんひどいの…。」とかいう声が聞こえたが、気にしない。

バーニングさんは俺を見て、

「…変な奴。」

って言うてきた。

「どうも、バーニングさん。」

「私はバーニングスよ！！」

え、マジで！？

「ゴメン、わざとじゃないんだ、ハミングスさん。」

「だからバーニングスだって言うてんでしょ！！」

「アリサちゃん、落ち着いて…。」

月村さんがバリ…バーニングスさんをなだめている。それにしても…

「…紛らわしいなあ…。」

「あんだねえ………もついいわ、そんなに紛らわしいならアリサって呼んでいいわよ。その代わりあんだのことキョウって呼ぶから。」

「いいのか？」

「毎回あんたに間違われてストレス溜めるよりはましよ。」

「うつ…。」

…なんか俺がひどい奴みたいじゃないか…。

「あ、あはは…じゃあ、私のこともすずかでいいよ。その代わりに赤崎君のこと、キヨウ君って呼んでいいかな？」

「ああ…じゃあ改めてこれからよろしく、アリサ、すずか！」

「うん、よろしくね、キヨウ君。」

「言つとくけど、あんたのために仕方なく呼ぶんだから勘違いしないでよね、キヨウ！」

ま、まさか本当に典型的ツンデレなことを言うやつがいるなんて…。と、視線を感じたのでその方向を見てみるとなのはがふくれてかなり不機嫌そうだ。

「むう…なのは1人だけおいてけぼりなの！」

「だってお前とはもう名前で呼び合ってるだろ？」

「むう…でもお…。」

…しょうがねえなあ。

「ほれ、今日はこれで我慢しな。」

そう言ってなのはの頭をなでた。するとなのはは

「ふにゃあ…… / / /」

とか言いながら顔を真っ赤にした。

ただ、その様子を見る2人の、特にすずかの目が怖いです…俺が何かしました？（涙）

…こうして、一緒に弁当を食べて何とか昼休み中に食べ終わった。

それに、名前で呼ぶようになったせいかな、それとも一緒に昼飯を食べたおかげか2人と少し仲良くなれた気がした。

第06話 2度目の学校生活（後書き）

第06話、いかがでしょうか。

前書きでも書いたとおり、今回は結構雑になってしまいました。
何かアドバイスとか感想で送って下さると有り難いです。

それと、期末試験が近くなり、更新できなくなるかもしれませんが、
読むのを楽しみにしている皆様、（いるかどうかわかりませんが）
本当にごめんなさいm（――）m
試験が終わったらまた、以前のように更新し続けますので、今はお
許してください。

それではいつになるかわかりませんが次回、お会いしましょう。

第07話 執事服と八つ当たりと…涙（前書き）

こんばんは、和風好きです。

もう開き直って3日に2話のペースで投稿することになりそうです。

とはいえ、レポートもまだ終わらず、勿論試験勉強もほとんどしていない状況でよく投稿することができたな……

さて、気を取り直して…

それでは第07話、はじまります。

第07話 執事服と八つ当たりと…涙

あの日以来、俺となのは、すずか、アリサの4人は学校ではよく一緒にいて、学校外でも一緒に遊んでいることが多くなった。

ただ、3人ともかなりの美少女であるせいか、学校で男子生徒からと思われる嫉妬と殺気の視線がすごいことになっていた。まあ、全男子生徒から襲われたとしても軽く潰せるから別に心配はなかったんだが…何より視線が集まるのがウザい。

これならいつそ襲われた方がいいんだがな…と思っていたら、ある日いかにも「いじめっ子です」というオーラを出した上級生が体育館の裏に招待してくれた。

マジでこんな展開があるんだ…と無駄に感動しながらその招待に応じ、言ってくることを片っ端から無視していたら殴られたんで、徹底的に潰しておいた。

あ、骨折とかはさせてないよ。折角の正当防衛が台無しになっちゃ困るからね。

…まあ、俺が呼び出されたところは結構な数の人が見ていたし、例のいじめっ子君は元々評判が悪かったらしいので、俺はお咎めなしで済んだ。

むしろ、その後3人娘に心配され、怒られた方が精神的にきつかった…。

ちなみにいじめっ子君はそれ以後、俺を見かける度に顔色を変えて逃げ出すようになったらしい。

とまあ、そんな生活を送っていたある日、なのはのお母さんである桃子さんに呼び出された。

何でもなのはの両親が経営している翠屋がその日は客が多く、人手が足りなくなってしまうって困っているらしい。その日は特に予定もなかったし、過去に何度か翠屋の手伝いはしていたので俺は翠屋に向かうことになった。

で、現在ウェイターをやっているのはいいんだが…

「…何で服が執事服なんですか？それに服のサイズがぴったりだし…。」

「あら、思ってた通りよく似合ってるわ。キョウ君はイケメンさんだから執事服が似合いそうって前から思っていたのよね。」

…質問の答えになってないし…。

「ちなみにシオリさんの許可はとってあるわよ。」

店内をよく見てみると、たくさんのケーキを食べながらシオリがカメラで俺を撮影していた。

…シオリー！裏切ったなー！

「あ、でもキョウ君の顔ならあの服も似合うかも…。」

…第二弾があるらしいです…。

「あはは…でもよく似合ってるよ、キョウ君。」

そこに土郎さんからフォロー（なのだろうか？）が入る。

「まあ、執事服くらいならいいんですけどね…。」

うん、執事服着るのはいいんだよ…でも、この服着てると女性客の皆様がやたらと見てくるんだよね…。しかも一部に至っては血走った目で凝視している人や、鼻息を荒くしている人がいるし…。ちょっとじゃなくてかなり怖いです。

とにかく、服装が変わったとはいえ手伝いに来ている以上、任された仕事はやらなければとウェイターの仕事をこなしていった。

そして、手伝いをしてからそれなりの時間が経過し、店内もある程度落ち着いてきたところで桃子さんから休憩をとるよう言われたので、俺は休憩をするスペースに移った。

すると、そこには一緒に接客していたなのはが既に休憩していたので、少し話すことにした。

「なのは、お疲れ。」

「あ、キョウくん、おつかれなの。」

「今日はたくさん客が来たな。」

「そうだね、なのははもう疲れちゃったの。」

「まあ、疲れるのはいいんだが…目を血走らせたり、鼻息荒くしながら俺のこと見てくる客をどうにかして欲しい…。」

「にやはは…でも、キョウくん。その服、本当に似合ってるの／＼」

そう言っただけなの顔が赤くなった。…風邪か？

「…なのは、顔赤くなってるけど大丈夫か？」

そう言っただけなの顔に手を当ててみた。…熱はそんなにないみたいだけど…。

「にやっ！だ、大丈夫なの／＼／」

「そうか…それならいいk」キョウ、貴様ああ！なのはに何をしている！」…。」

…出たよ恭也さん。^{シスコン}

で、今日は一体何をするんですか？

で、恭也さんに連れて行かれたのは道場。

「今日こそは貴様を徹底的に叩き直してやる！！」

…いくらなんでも大人気なさすぎるのではありません？
とにかく、まずは恭也さんの誤解を解かなければ…。

「あの、俺の話を聞いてせめてもの情けだ！キョウ、早く武器をとれええ！」…てくれないし…。」

駄目だこりゃ…こうなったら適当なところで一撃喰らって負けてあげるしかないかな…。

とりあえず俺は普通の木刀を選び、構えた。

「…むつ、ただの素人ではないようだが…それでも貴様に負けるわけにはいかない！いくぞ！！」

そういつて恭也さんは木刀を振りかぶってきた。

恭也 side

今日、ついに恐れていたことが起きてしまった。

1年前からなのはと仲が良いという紅崎キヨウに手を出したのだ！
彼がなのは

彼は決して悪い人間ではないとは分かっていたが、それでもなのはに手を出すのは許すわけにはいかない！

彼を叩き直すために我が家の道場に連れてきて木刀を2本手にした後、武器をとるように言ったところ、キヨウは迷うことなく木刀を1本選んだ。普通、相手が両手に武器を持っているのを見ればそれに対抗するために2本の武器を手にすることが多いのだが…。それに木刀を構えた時の姿が明らかに素人のものではなかった。

「…むつ、ただの素人ではないようだが…それでも貴様に負けるわけにはいかない！いくぞ！！」

俺はそう言つて右手に持った木刀で斬りかかった。それをキヨウは木刀で止めたので、そのまま左手の木刀で斬りかかったところ、キヨウは大きく後ろに跳んで避けた。

そのまま後ろに逃げることを許さない為にも小学生では受けきれない程の力を込めて追撃した。

すると、キヨウはそれを受け止めるのではなく、受け流すようにして防いだのだ。

…これで確信に至ったが、キヨウは明らかに素人ではない。手を抜いていると、もしかしたらこちらが負けてしまうかもしれない。俺は目の前の少年を本気で倒すべく、両手の木刀を構えた。

「なかなかやるようだが、これで終わりだ！」

そう言っただけ俺は神速を使った。その瞬間全てがスローモーションになる。

流石のキヨウも神速には驚きを隠せないようだ。だが、この隙を見逃すわけにはいかない。

俺は間合いの中に入る程の距離に近づいた。その時、キヨウの両目に白い鳥のような模様が見えた気がしたが、それを無視して木刀を振るった。そして、確かにキヨウの体に木刀があたったのが見えた

筈だった。

次の瞬間、キヨウの姿が消えたかと思うと、後ろから衝撃を受けて、そのまま俺は意識を失った。

side out

…やっべ、いきなり恭也さんがすごいスピードで来るから思わず鵲

鵠眼使ってしまった。で、そのまま恭也さんの後ろまで移動して首の後ろを軽く叩いて意識を刈り取ってしまった。どうしよう、こんなところ見つかったら…。

「何をしているんだ、恭也！」

そう叫びながら士郎さんが道場の扉を開けて入ってきた。
…ナイスタイミングですね、士郎さん。

士郎さんは俺達を見つけたが、恭也さんが意識を失っている一方で俺が立っているというこの光景を見て、驚いているようだ。

「えっと…キョウ君。恭也はどうしたんだい？」

「あの、突然恭也さんに勝負を挑まれたんですけど、とにかく必死に木刀を振っていたら思わず恭也さんに当たってしまいました。ごめんなさい。」

「いや、どう見ても恭也の方が悪いからね…気にしないでいいよ。」

そういつて士郎さんは俺の頭をなでた。…よし、何とか誤魔化せた！

「ところでまぐれとはいえ恭也を倒すなんて…。キョウ君は剣術でも習っていたのかい？」

「はい、5才の頃から習っていました。」

「そっか…とりあえず、お店の方に戻っていなさい。なのはも心配していたからね。」

「わかりました。」

そのまま俺は翠屋へ戻った。

ちなみに恭也さんは土郎さんによって強制的に目覚めさせられた後、肉體言語でおしかりを受けたらしい。

「キョウくん、大丈夫だったの？」

「あら、キョウ君大丈夫だった？」

翠屋に戻るとなのはと桃子さん、あとなのはのお姉さんの美由希さんがこつちに来た。

「はい、何とか…。」

一応、こちらでも土郎さんにしたいきさつ（嘘）を話しておく。

「それならよかったわ。ごめんなさいね、恭也には後でしっかり言い聞かせておくから。」

…恭也さん、明日以降生きていけるのだろうか…。

「それにしてもすごいね〜キョウ君。その年で恭ちゃんと勝負してまぐれでも勝っちゃうなんて。」

…まずい、やはり普通はそう思うよな…。
話題転換しなくては…。

「でも、恭也さんのことを気絶させてしまいました。本当にごめんなさい。」

「あら、良いのよ別に。悪いのは恭也なんだし…。それに今はお店も落ち着いているから大丈夫よ。」

「でも…。」

「じゃあ、今度キョウ君に着てみてほしい服があるからそれ着てお店を手伝ってくれる？それで今回のことは許してあげます。」

『着てみてほしい服』って…嫌な予感しかしないんだが、今の俺に断ることはできないよな…。

「わかりました。今度またお手伝いします。」

「じゃあお願いね。」

そうして、翠屋での一日は幕を閉じた。

で後日、その約束を守るために翠屋に来たんだが…。

「…なんでメイド服（汗）」

あろうことか例の『着てみてほしい服』とはメイド服だったのだ。勿論断ろうとしたが、何故か桃子さんの笑顔に逆らうことが出来なかった。…あれに逆らったらもっとひどい目に会っ気がする…！

「あら、これもよく似合ってるわ。」

「キョウくん、似合い過ぎなの／＼」

この時の周りの視線は執事服以上にヤバかった。例の興奮している女性客の数が増え、何よりも男の客で興奮している奴が居やがった。シオリもカメラの数が2台に増え、写真と映像の両方を撮っているようだった。

「…もう、勘弁してください（涙）」

この日家に帰った後、俺はこの世界に来てから初めて枕を涙で濡らして寝た。

第07話 執事服と八つ当たりと…涙（後書き）

はい、第07話でした。

まさかこんな所で初戦闘描写をすることになるとは…
いかがでしたでしょうか？

他にも最後の方はあまりうまく書けなかったと思うんですが…
何か、アドバイスがあれば感想で送って下さい。
その他の内容でも感想送ってくれるとうれしいです。

次回はおそらく原作前最後の話になると思われます。

それでは皆様、また次回お会いしましょう。

第08話 事件は教室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！！（前書き

どうも、和風好きです。

ついに試験期間に突入してしまい、予想以上に時間が取れなかった
ので投稿が遅くなってしまいました。

しかも、遅れた割にはそんなにいい出来とは言えないものになりました。

本当に申し訳ございませんm（――）m

とりあえず、なんとか完成したので御覧ください。

それでは第08話、始まります。

第08話 事件は教室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！！

あの涙のお手伝いから3カ月くらいが経った。

あの後も何度か翠屋の手伝いをやらざるを得ない状況になり、メイド服を着せられそうになったことも決して少なくなかったorz
でも、回数を重ねていく度にメイド服を着ることに抵抗感がなくな
っていった自分がいた。……アハハ、何でだろ（涙）

その上、あの時現場にいたのははともかく、アリサやすずかにま
でメイド服を着たことがバレしてしまった。おかげで2人の家に遊び
に行く度に、そこには着せ替え人形にされて遊ばれる俺がいた。
俺、これからどうなるんだろ（涙）

大体何で俺に女装させるんだ？俺はいわゆる「男の娘」な容姿でも
ないというのに……。3人に聞いても

「キョウくん、お似合いなの〜／／／」

「まあ、当然よね／／／」

「キョウ君って美人さんなんだね／／／」

みたいなことを言うばかり……。

1つ目の発言は50歩くらい譲って認めてもいい……2つ目の発言も
……認めたくないけど……1万歩くらい譲って認めたとしても……3つ目
の発言は一体どういうこと？俺男なんだけど……。

こうなったら俺の安息の地ははやての家にしかない……と思って行っ

てみれば居間でシオリとはやてが「俺のバイト中 in メイド服」なDVDを鑑賞していた。

シオリー！お前最近余計なことばかりするよなー！！

そして、こんな面白いネタをはやてが見逃すはずもなく…はやての家でもたまに女装する羽目になってしまった…。安息の地はいずれ？（涙）

…まあ、その話は置いて…。
こんな生活を送っているせいか、最近は授業中に不貞寝をすることが多くなった…。

で、今日もまた気がついたら放課後でした。昼休みに弁当を食べた記憶はあるんだけど…その後席に着いてからの記憶がない。つまりそこからぶっ通しで寝てたってこと！？

…誰か起こしてくれてもよかったのに…。

授業が終わってからそんなに時間が経っていないので、いつもならなのはとアリサ、すずかの3人がいるはずなんだが、今日は既に下校したようだ。

もう教室には誰もいないし、さっさと帰ろう…。

現在1人で寂しく下校中です。

最近はいつも例の3人娘の誰かしらと下校していたからな…久しぶりに1人だけになったな…。たまには1人もいいもんだな…。

そう思いながら歩いていたらその先の道路の真ん中に黒のリムジンが不自然に止まっていた。何かどっかで見たことあるリムジンだったから近づいてみたら、運転席付近の地面にこれまたどっかで見たことある男性が倒れていた。

…っていうかよく見ればこの車と人、アリサン家の車と運転手じゃね？何でこんなところで放置 and 倒れているの？

とりあえず運転手から話を聞くために声をかけてみた。

「大丈夫ですか？」

「あ、あなたはお嬢様の…。」

気が付いたみたいだ。

運転手さんから事の経緯を聞いたところ、いつもの如くリムジンで下校途中だったが、突然ワゴン車がぶつかってきたかと思うとワゴン車から人が出てきて運転手さんは引きずり出されて頭を叩かれ気絶、乗っていたアリサはワゴン車に乗せられて誘拐されてしまった、ということらしい。

…金持ちの家のお嬢様の誘拐って本当にあるんだな…。

…っと変な感動している場合じゃないよなこれ。

運転手さんは経緯をしゃべったところで限界が来たらしく、

「お願いです…お嬢様を助けてください。」

と言って気絶してしまった。

…いや、普通そんなこと小学生に頼むのは間違いでしょ…。
まあ、俺相手ならあながち間違いではないけど…。

俺は携帯電話で119番に電話して救急車を呼んだ後、アリサを救うべく行動を開始した。

アリサ side

「…う……ここは…？」

私が目覚めると、見たこともない倉庫みたいなところに、縛られて椅子に座っていた。

なんでこんなところにいるのか、今までのことを思い出していたら、ふと理解してしまった。

…そっか、私、誘拐されちゃったのね。

今日の授業も終わって、なのはとすずか、あとキョウと一緒に帰ろうとしたら、なのはは翠屋のお手伝いが、すずかは習い事があるということで先に帰ってしまった。…で、キョウはいつものように放課後になった今も爆睡していた。
起こそうとも思ったけど、気持ち良さそうに寝ているコイツの顔を見ていたら起こすのが悪い気がしてきたので起こさずに帰ることにしたわ。

その後、迎えのリムジンに乗って下校していたら突然ワゴン車がぶつかってきて、中から出てきた男たちに布を口にあてられたと思ったら意識がなくなってしまった。

「どうやら目覚めたようだな、お嬢さん。」

ふとそんな声がしたから顔を上げてみると、5人の男がこっちを見ていた。

「アンタ達、こんなことしていいと思ってるの！早く家に帰しなさいよ！」

「こんな状況でそんなこと言えるとは随分と元気なお嬢さんだな。だが、お嬢さんのご両親からお金をもらっ前に帰してあげるわけないだろ？」

5人のリーダーの様な奴がそう答えてきた。

「でもお嬢さんは可愛いからその後も使い道が色々ありそうだな…。」

「

そう言うと、周りのやつがニヤニヤしながら気持ち悪い視線を向けてくる。

「この下種！」

口ではそう言い返していたけど、本当は不安でつぶれてしまいそうだった。

私、これからどうなっちゃうんだろ…。

そんなことを考えている時にふと思ひ浮かべていたのは、何故かアイツの顔だった。

「で、外の様子はどうなってるんだ？」

リーダー格の男が側にいた男にそう聞いた。

「へい、今確認して…あれ、応答がない。」

「当たり前だろ、俺が気絶させたんだから。」

その声がした方を見ると、そこには私がさっき思い浮かべていたアイツが立っていた。

s i d e o u t

まず、アリサがどこに連れて行かれた場所を知るために懷から紙を取り出した。そして、俺が呪を唱えて紙を撒くと、その紙が白いイタチに変化した。

10匹以上のイタチの式神はすぐに町中に散り、その式神からの反応を待った。

5分位したところで、1匹の式神から反応があった。アリサは海の近くの古い倉庫にいた。俺はすぐにその倉庫に向かって、全速で走った。

倉庫にたどり着いた俺は、まず見張りを探すために周りを回った。見張りは全員で5人いた。

人数を把握したところで俺は見張りを全員、当て身や頸部に衝撃を与えて音を出さずに気絶させた。

それで倉庫の高い所にある窓が開いていたのでそこから侵入すると中には5人の男達と縛られて椅子に座っているアリサがいた。

特にあわてた様子もないところを見ると、外の状況を知らないようだ。

これは好都合と地面に降りて前から徐々に近づいていったが、それでも男達はまだ気付かない。

正直誘拐なんて企む奴らに期待していたんだが…これじゃ期待外れだな。

「で、外の様子はどうなってるんだ。」

しかも今更外を気にしているのかよ。

「へい、今確認して…あれ、応答がない。」

状況をきちんと理解できていない誘拐犯たちに俺はもうやる気を失い、堂々と前から行くことにした。

「当たり前だろ、俺が気絶させたんだから。」

男達とアリサは俺の方を向き、そこにいた俺のことに驚いているようだ。

「なんでアンタがここにいるのよ!」

「友達が誘拐されたなんて聞いたら助けに行くに決まってるだろ?」

アリサの質問に答えていたら、下っ端っぽい奴が声を荒げて聞いてきた。

「てめえ、どこから入った！」

「あそこの窓から。開いてたから普通に入れたぜ。」

「少年、何のつもりか知らないが、こんなことをしてどうなるか覚悟が出来てるんだよなあ？」

男達はいくまで俺を子供扱いしているようだ。中にはニヤニヤしながら俺を見ている奴がいる。全く、さっきの話を聞いてなかったのか？

「そう言うあんた等こそ覚悟できてるんだよな？俺の友達に手を出したんだから……。」

そう言うのと1人の男が怒りながら近づいてきた。

「ナマ言ってるじゃねえ！このクソガキが！」

そう言いながら俺に殴りかかってきた。

とはいえ彼らは所詮ただのチンピラの様だ。これじゃ、恭也さんの木刀での様子見の一閃の方が数倍も早いな。

俺はその攻撃をかわしながらカウンターとして鳩尾を殴ってやった。ついでに近くで隙だらけだった男の顎を蹴り上げて2人を気絶させた。

そこでようやく俺がただのガキじゃないことに気が付いて、残りの3人が構え始める。

「調子乗ってるじゃねえぞ！」

そう言つて鉄パイプを持った男と素手の男の2人が襲いかかった。

といつても、近づいてくる速さが遅かったのでこっちから近づいてあげ、振り上げた鉄パイプを蹴り碎き、少し跳んだ後に2人の顔を蹴り飛ばした。

すると最後の男は懷から銃を取り出し、

「動くな。少しでも動いたらコイツを殺す。」

と言つて、アリサに銃口を向けた。

全く、人質とは面倒なことをしてくれるね。でも、

「お前がアリサを殺す前に俺がお前を気絶させればいいだけの話だろ。」

そう言いながら瞬動で近づき、近づいたことに気が付く前に銃を持つ手を蹴り上げ、無防備となった胴に気を込めた拳で殴りつけた。

アリサ side

私がさらわれたこの倉庫に突然現れたキョウはあつという間に男達を倒してしまった。

おかげで今まで私の中にあつた大きな不安はあつという間に吹き飛んでしまった。

男達を倒し終わったキョウがこっちに近づいてきた。

「大丈夫か、アリサ？」

そう言われると、何だか安心した隙に何かやってしまいそうだったので、つい何時もの口調で言ってしまった。

「ア、アンタどうしてあんなに強いのよ！一体何者？」

「ったく、こんな状況でもそんなこと言うなんて…いつも道理かよ。でも、そんな泣きながら言われても何時もの迫力は感じられないぞ。」

「え？」

…どうやらもう手遅れだったようだ。

そんな私の状況に気が付いたのか、キョウはため息を1回ついた後、
「ほれ、無理すんなよ。これならお前の顔も見えないし、遠慮せずに泣いてしまえ。」

そう言って私を抱きしめてくれた。

もう涙は止まらなかったが、流石に声を上げるのはずかしかったから

「言っとくけど、別に怖かったから泣いてるんじゃないんだからね。ちよっと目にゴミが入っただけなんだから。」

と言った後、静かに泣いた。

…正直に言えば、今の状況も十分はずかしかったが、それ以上にこうしているとすごく安心できた。

そのまま10分くらい経った後、私はキョウから離れた。

…うつ、人前で泣いてしまった…はずかしい…

誘拐犯たちを全員倉庫にあった縄で縛った後、私達は倉庫を出て家に帰ることにしたけれど…

「うつ、うまく歩けない…。」

どうやら今までずっと縛られていたせいで身体がマヒしてしまったみたい…。

それを見たキヨウはふと、私の方にしゃがんで背を向けた。

「ほれ、背負ってやるよ。」

「なっ！？そんなことできるわけないでしょ！！」

流石に二度も恥ずかしいことをするわけにはいかなかったので断ったが、

「ならどうやって移動するんだよ？」

「そ、それは…。」

残念ながら彼の方が正論だった。

「ほれ、恥ずかしがってないでさっさと乗りな。」

「うつ…こんな事するの今日だけなんだからね／＼／」

「はいはい、わかりました。」

そう言ってキヨウにおんぶしてもらった。

倉庫から出たら外はもう暗くなっていた。

キヨウに背負われて帰っている途中、私は彼に言わなくちゃいけないことをまだ言っていないことに気が付いた。

少しはかしいけどこれはちゃんと言わないと…。

「ねえ、キヨウ…。」

「ん、どうした？」

「その…今日はアンタのおかげで助かったわ。…ありがと／＼／」

そう言うと、キヨウは少し驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になって、

「どういたしまして。」

と答えてくれた。

…さっきの笑顔がすごくきれいで、思わず見とれてしまったことは私の心の中にしまっておこう／＼／

第08話 事件は教室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ！！（後書き

というわけで第08話でした。

誘拐事件を解決するという超テンプレ展開で、もう飽きてしまった方もいらっしやると思います、いかがだったでしょうか？

ちなみに作品中に出ていた「白いイタチの式神」は、「11eyes」の草 美 の陰陽術で、人や物を探索するときに使うものです。

それはそうと、いつの間にかPVが25000を突破しております！

皆様本当にありがとうございます！

そろそろ記念企画とか考えた方がいいのでしょうか？

というか、どのタイミングでやるのがいいのでしょうか？

皆様、何か意見がありましたら、どしどし感想で送って下さい。

今回はついに原作に突入することになると思います！

これからでもできるだけ良い作品になるよう努力したいと思っていますので、よろしくお願いしますm（――）m

それでは皆様、また次回お会いしましょう。

第09話 ついに原作突入！！（前書き）

こんにちは、和風好きです。

最近PVがどんどん上がっていくのを見て、とても喜んでいます。
こんなダメ小説でも見てくれる人がいるということに忘れずに頑張
っていききたいと思います。

それでは第09話、はじまります。

第09話 ついに原作突入！！

俺がこの世界に来てから3年の月日が経って今は春。そう、あの神様いわく物語が始まる時期になったのだ。

とはいえ、その「リリカルなのは」とやらの話は一切知らないの、いつ誰がどのように物語を始めるのかは分からないわけ……。ん？「リリカル」なのは？」？

……まさか主人公は現在もクラスメートなあのなのはなのか？でもなのはは今のところ「魔法少女」ではないんだが……もしかして力を得たことで物語が始まるとか？

……情報が少なすぎる……これ以上考えてもたいして発展しないだろう。今俺が出来るのは物語開始に向けて、ある程度の準備を整えておくだけさ。

今日はあまりに眠かったので、授業が睡眠時間と化し、気付けば昼休みとなっていた。

……え？いつも通りだった？……まあ、否定しないけど……。

でも昨日は大変だったんだよ。突然海鳴市に変な魔力反応があったから何か起きるのかと待機していても何も起きず、拍子抜けして寝ていたら、知らない奴に念話で起こされ……。

魔力反応の原因はともかく、念話してきた奴は俺の眠りを邪魔した罪でいずれぶち殺す！！

現在、俺はなのはとアリサ、すずかの3人に屋上に連れていかれ、そこで弁当を食べている。

ちなみに3人とは1年生の頃からずっと同じクラスだった………な
んですか？

で、何か「将来の夢」についての話になってるんだけど…。

少なくともアリサとすずかの精神年齢は絶対小学3年生じゃないよね？

小学3年生で、「将来の夢」って言ったら男の子なら6割近くが「サッカー選手」で、女の子ならほとんどが「お花屋さん」か「ケーキ屋さん」って答えるよね普通？

「で、キヨウは将来何がしたいのよ？」

「俺？俺は…誰にも邪魔されずに思うがままに昼寝をして、昼寝王国の王様として君臨したい。」

「アンタ真面目に考えてんの？」

「でも、キヨウ君らしいよね。」

「にゃ、にゃはは……。」

良いじゃん昼寝王国。皆平和でいい国だぜ。

「（ですが、マスターの夢も小学3年生らしくないと思いますが…。
）」

と、突然俺がひもを通して首から下げている紅い宝石のついた指輪が、念話で話しかけてきた。

この指輪は1年くらい前に俺が作ったインテリジェント・デバイスで、名はシリウスという。

この世界の魔法は基本デバイスというものを通して発動するものらしく、魔法を使うならデバイスがあった方がいいということで「モノづくりの才」を使って作った。ちなみに禁録の書の中にデバイスの設計図や完成イメージ図などがあったおかげでなんとかイメージ出来た。……まあ、シオリいわく十分チートなものに出来上がったらしいが…。

本当はちゃんと指につけたかったが、大きめに作ってしまい今の俺の指に合わなかったことと、見た目小学3年生が指輪なんてしてたらおかし過ぎるということでもひもを通して首からかけることにした。

「（うるせー！俺の精神年齢はその2倍以上はあるんだよ！）」

俺はこれ以上突っ込まれるのが面倒だったので話題転換することにした。

「それならなのはどうなんだ？何か将来やりたいことでもあるのか？」

「え、わたし？…うん…。」

そう言って悩んでしまった。何かアリサとすずかが色々と言っているが、俺はなのはの反応の方が正しいと思う。小学3年生としてはな。

で、学校が終わり、3人娘は塾があるということで俺は1人で帰っ

た。

家についた後、制服から普段着に着替え、いつもの修練をしていると、なのは達からメールが来た。そのメールいわく、3人は帰り道の途中で傷ついたフェレットを拾ったらしい。で、今は動物病院に預けているとのこと。

…フェレットってあれだよな？イタチみたいなやつだよな？
それでいて日本で野良フェレットなんていないよな？

なんでそんなところに傷ついたフェレットがいるんだ？

…あれかな？飼い主がいじめたか何かして傷ついたから捨てたとか？
まあ、動物病院でちゃんと治るって言われたらしいし…それなら大丈夫だろ。

そう結論付けた俺はそのフェレット君のことを気にすることもなく
今までしていた修行を再開することにした。

なのはside

私は昨日の夢と下校中に聞こえた声に呼ばれてフェレットさんを預けた動物病院に行きました。

そこにいたのは逃げ回るフェレットさんとそれを追いかける大きな怪物でした。

「ふえゝ！？いったい何が起きてるのゝ！？」

するとフェレットさんはこっちに来て

「来てくれたんですね!」

と話しかけてきました。

「フェ、フェレットさんがしゃべった〜!？」

その後フェレットさんから首につけていた赤い宝石を受けとって、フェレットさんの言うとおりにしていたら突然桃色の光が出てきたり、着ている服が変わったりしました。

でも、突然私の周りで起きた信じられない出来事に、私は混乱してしまいました。

「い、一体どうなってるの〜!？」

「なのはさん、危ない!!」

フェレットさんの声を聞いて前を向いてみると、そこには私の方に近づいてくる大きな怪物：確か、思念体：だっけ?…がいました。

「キャッ」

私は思わず目を瞑ってしまいました。

でも、いつまでたっても私は襲われず、かわりに思念体の悲鳴が聞こえました。

「……………!!」

目を開けてみると、思念体の体には2本の剣が刺さっていました。そのおかげで思念体は動けなくなり、私は助かったみたいです。

「ふえ？何が起きたの？」

「この剣は一体誰が…？」

どうやらフェレットさんもわからないみたいです。
でも、この後一体どうすれば…。

「なのはさん、今のうちに封印を。」

「封印って…どうすればいいの？」

「心を澄ましてください。そうすれば貴方だけの呪文が思い浮かぶ
はずです。」

私はしばらく目を瞑った後、思い浮かんだ呪文を唱え、なんとかジュエルシードを封印することが出来ました。

封印したジュエルシードをレイジングハートの中に取り込んだところで、私の服が元に戻って一安心…かと思ったら、パトカーのサイレンが聞こえたのでとりあえず公園まで逃げることにしました。

それにしても、あの剣はなんであそこにあつたのかな？

ジュエルシードを封印した後、あの剣はまるではじめからなかったかのように消えてしまいました。

フェレットさん…ユーノクンの話だどこから飛んできたみたい
なんだけど…私のこと、誰かが助けてくれたのかな…。

そうだとしたら、一体誰が助けてくれたんだろ…？

side out

……なんといえいいか……。
ある意味予想通りに、なのはが魔法少女になりました。
それにしても原因が例のフェレットだったとは…。

夕飯を食べた後、やることなかったからまた修行をしていたんだが、
その最中…。

「…っ！！」

「…っ、マスター！！」

俺とシリウスは昨日と同じ魔力反応を察知した。しかも昨日の反応
よりも大きい。
その上、昨日はたいしてあわてていなかったシオリが修練場に入っ
てきた。

「キョウ…今の反応、感じた？」

「ああ、昨日より大きくなってたな。」

「……多分、これはロストロギアの魔力だと思う。」

ロストロギアって…この世界には無いんじゃないの？

「なんでロストロギアがこの世界にあるんだよ？」

「おそらく、昨日の魔力反応はそのロストロギアがこの世界に飛ば

された時のもの。で、今そのロストログアが起動した…と思われる。」

マジかよ……なんて厄介な状況なんだ……。でも、このまま放置するともっと面倒なことになりそうだしな…。

「仕方ないから今からその現場に行くぞ。」

シオリは黙ってうなずいた。

「イエス、マスター」

というわけで魔力反応があったところに来たんだが…。

そこにはよくわからない黒い怪物っぽいものと、フェレットと一緒に逃げているのがいた。

ちなみに俺達は近くにある家の屋根に上って見学中です。

あ、なのはがフェレットに何か言ってる…フェレットは喋れないからそれじゃ独り言だぞ…と思っていたらフェレットがそれに答えていた。

…えっ？

「フェレットが喋ったあゝ!？」

「(…キョウ、うるさい。)」

…大声で叫んでしまいました。が、シオリが認識阻害＋ステルス状態になる魔法をかけてくれているおかげでバレませんでした。

と、言っているうちに…。

「レイジングハート！セットアップ！」

その言葉と同時に桃色の魔力光があがった。

…へえ…なのはって魔力の潜在量がすごいんだな…。

…それにしても、何故になのははバリアジャケットを聖祥の制服同然のものにしてるんだ？

何か思い入れでもあるのだろうか？

とはいえ魔法を知ったのはついさっき。なのははまだ自分の身に起きていることに頭がついていけないようだ。あれは相当パニックしてるな。

…おいおい、ついに怪物っぽいものが空気を読まずになのはに突っ込んできたぞ。

なのはは…まだパニックってやがる。

仕方ない、少し手を出すか…。

「トレス・オン
投影・開始」

俺は黒鍵を2本投影した。

「…キヨウ、何を…。」

「ちょっと助けてくる。」

そう言って黒鍵を怪物に向けて投擲し、2本とも怪物に刺さり、怪物を地面に縫いつけた。

なのはとフェレットは突然飛んできた黒鍵に驚いているようだが、フェレットの指示で怪物が動けない今のうちに対処することにしたらしい。

そうしてなのはは呪文を唱え、怪物の核になっていたジュ…ジュエルミート？を封印した。

「（マスター、ジュエルシードです。）」

…心の中を読むなよ…この高性能デバイスめ。

それにしても、あの呪文は一体何？

『リリカルマジカル』ってマジで言ってるの？

…まさかこの世界の封印魔法の呪文には必ず『リリカルマジカル』って言わなきゃいけないとか？

「…それはない。あれはあの子だけの呪文。」

ありがとう、シオリ。おかげで安心して封印魔法が使えるよ。

でも、勝手に人の心の中を読まないようにね…。

とにかく、これでなのはが魔法の世界に足を踏み入れ、彼女の物語が始まってしまったわけだが…。

さて、俺はどのように動こうかな…。

とりあえず今はパトカーのサイレンが響くこの場所からさっさと去るとするか…。

第09話 ついに原作突入！！（後書き）

「ということで第09話でしたー！ついに無印に突入ですよ！」

「…なあ。」

「何ですか、紅崎キヨウ君？」

「…なんで後書きが突然会話形式…しかも俺が出てる訳？」

「いやぁ…………この小説もついに原作突入、ということで気分を一新してこういうのやってみようかな…と思ひまして。」

「で、その心は？」

「…他の作者様がみんなやってるからそれにあやかろうかと…。」

「…とりあえず、1度死んどくか？」

「や、やめ…」「無明神風流　みずち！…」「…ぶげら…！」

「…ふう、全く…あれ、こうなると俺が次回予告しなきゃいけないのか？…面倒な…」

「…ふつ、作者に逆らったこと、後悔するがいい…！…！」

「…」

(ゲシッ 作者が踏まれた音)

「プギヤッ!.....」

「…死んだか?…さてと…感想やアドバイス、評価はいつでも受け付けております…それでは、次回お会いしましょう。」

「…そろそろ感想が欲しいです…」

「…まだ意識あったのかよ…っていつかお前なんてこと言ってる!..!」

「ギヤアアアアア!..!」

第10話 突然の襲撃者、来る！（前編）（前書き）

更新がとても遅れてしまいました……

や、やっと試験が終わりました——！！！！

今回は本当にヤバかった…。

前情報で「簡単にいい成績取れる」という科目のテストが異常に難しく、

これまた前情報で「結構ヤバイ」という科目も勿論難しく、やさしいテストなんて本当に1/2個しかありませんでした…。

まあ、とにかくこれで更新のペースは戻るかと思えますので、皆様これからよろしく願います。m（――）m

それでは第10話、はじまります。

第10話 突然の襲撃者、来る！（前編）

あの夜の出来事の翌日。

なのはとあのフェレット…ヒューノだっけ？「ユーノです、マスタ―。」…の隠匿する気が全くない堂々とした念話を聞いてしまった俺はジュエルミ…シードの情報をいくつか手に入れた。

…っていうか、この間俺の睡眠を邪魔したのお前だったのか、ユーノ！！…本来なら即死刑執行といきたいところだが、ユーノの事情もあるし、そもそもユーノはフェレットだから勘弁してやるか…俺は動物には優しいんだよ…。

でもこのまま何もしないのは何だか悔しいので、ユーノはくすぐりの刑に処することにした。

「キュ、キューー！！」

「そんなにユーノ君をくすぐっちゃだめだよキョウ君！」

いつまで耐えられるかな？ユーノ君よあ…！

で、ジュエルシードはどうしたかというと…。

まあ、俺はジュエルシードなんていらなから正直自分から動かなくてもいいんだけど…。

だって願いを叶えるっていったって…別にそんなものにすぎる程の願いなんてないし…それにその願いを叶えるっていうのが胡散臭いんだよ…。こういうのって、願いを叶えるとしても、絶対望まない形で叶うとかのデメリットがあるっていうのがお決まりのパターン

だし…。

ただ、仮にもロストログアであるジュエルシードを放置したせいで取り返しのつかないことになるのはマズいので、被害が出る前に封印することにした。

この間の休日に発動した時は被害がすごかったらしいね。

…なんで「らしい」なのか、って…？

その日ははやてと一緒に遊んでいる最中に、発動したのは感じたんだが、はやてとはなかなか遊んでやれないし、俺が行かなくてもものはが行ってくれるだろうと思い、はやての方を優先したから直接は見てないんだ。

まあ、その日の被害を知った後、ジュエルシードの魔力反応があったら必ず現場に行くことにし、反応がなくてもヒマな時は散歩を兼ねた探索を行うことにしていた。

そのおかげでこの間、発動前のジュエルシードを1つ発見し、シリウスの中に取り込んでおいた。

ちなみになのはと協力するかどうかについてはまだ様子見することにした。

バレたらバレたで面倒そうだしね…。

とりあえずその数日後の夜、魔力反応があったということで反応のあった場所に行ってみたんだが…そこには異常に大きいスズメっぽい怪物、と言うよりもはや怪鳥がいた。

「…あの怪鳥、元はスズメなのか…？」

「はい、ジュエルシードがスズメを取り込んだ事であの様な怪鳥に

なったようです。」

ちなみにいつもの解説役であるシオリは現在、家で待機している。
「いや、別にサボっているわけではない。」

俺達はジュエルシードという問題だけでなく、闇の書という問題も抱えている。

もし闇の書の起動時期を知ることが出来ればそれに合わせればいいが、残念ながらそういった情報は一切ないのだ。

だから、俺達がジュエルシードに対応している真つ最中に闇の書が起動し、手を出せないうちに取り返しつかないことになるということだって十分あり得る。

故に、ジュエルシードについては俺とシリウスが対応し、禁録の書とリンクしているシオリには万が一のために待機してもらうことにしたというわけだ。

「思念体とやらなら技の実験とか遠慮なくやれるけど、人や動物を取り込まれると手加減しなきゃいけないから面倒だよな……。」

「そうですね。ただ、思念体だからと言ってあまり好き勝手にやり過ぎるとジュエルシードによくない刺激を与えてしまうことになりますからどちらにしろ、力加減は必要かと。」

まあ、魔力を込め過ぎずに普通にやっていれば大丈夫だろう。

「とりあえずやるか…シリウス、セツトアップ！」

その言葉の後、俺は黒い着物を身につけ、その上から羽織を肩にかけている感じのバリアジャケットを展開させ、右手には天狼（仮）

に似た太刀に変わったシリウスを持った状態になった。
さて…シリウスをセットアップしたのはいいが、これからどうしようか…。

「……………」

そう悩んでいたら、例の怪鳥が鳴きながら羽ばたき始めた。

「おいおい、空に飛ばれるのは困るんだが……………仕方ない、大人しく地面に這いつくばってもらおう…。」

そう言っただけで俺は左手を握った状態で前に突き出し、親指を地面に向けてたてた。

「重力作成」
グラビテーション

そうして某不要者な世界の金の亡者なギルドメンバーの能力を^{フラグメント}発動させ、怪鳥の周囲の重力を増加させ、動くことが出来ない状態にした。

…なんか地面が少し陥没している気がするが…これぐらいなら大丈夫だろ…。

「さて、これなら安全かつ容易に封印できそうだ。」

俺はシリウスを抜いて構えた。

「シリウス、封印よろしく。」

「Yes, master.」

俺の指示を了解したシリウスは指示通りにジュエルシードを封印し、その後には気絶したスズメと封印されたジュエルシードが残った。確認したところ、スズメは特にケガしていないようだったが、一応回復魔法をかけておいた。

スズメを安全そうな場所においた後、俺は封印したジュエルシードを手に取り、それを眺めながらその場で少し休憩することにした。

「…とりあえず、こんなもんでいいだろ。近くになのはの魔力は感じられないからまだ来ないだろうし…」

「そうですね、これなら休憩しても大じ…っ、マスター！なのはさんとは別の魔力がこちらに近づいています！」

何い！いくら休憩中とはいえ魔力が近づいていることを見逃すとは…油断しすぎたか…。俺は近づいているであろうものに備え、気配を探っていたら、後ろの方から

「そのジュエルシードを渡してください。」

という声が聞こえた。

後ろに振り返ってみると、そこにはマントを纏い、身体のラインをやけに強調している黒いバリアジャケットを身に付けた金髪ツインテールの俺と同年くらいの無表情の少女が空中にいた。…新手の魔導師か…。

…それにしても…あの年でなんつーカッコしてるんだよ！どんな趣味嗜好してるんだ！！もしかして変質者か？変質者なのか！？

「（むしろ痴女かと…。）」

…まあ、彼女の趣味嗜好は放っておいて…。

「渡さない…って言ったら？」

残念だが、いくら可愛いとはいえ正体不明の人物に渡してあげる程、俺はいい人ではないんでね…。

すると、少女は手に持っていた斧の様なもの　おそらく彼女のデ
バイスだろう　を構えながら

「戦って奪うまでです。」

と言った。

へえ…俺にそういうこと言うとは…それに殺気までとはいかないが、
それなりの気迫が感じられるし…面白いじゃないか。

「じゃあ、俺に勝ったらこのジュエルシードを君にあげるよ。」

そう言つて俺はとりあえずジュエルシードを懐にしまい、シリウス
を構えた。

??? side

私は母さんに言われて、ジュエルシードを集めるためにこの街に来
た。

ジュエルシードを集めれば、きっとあの頃のように母さんは笑って

くれる。

そのためにも私は何としてもジュエルシードを集めなくちゃいけない。

そして今、私は魔力反応があつた場所に向かった。そこにたどり着いてみると、黒いバリアジャケットを身に付け、ジュエルシードを持ってこちらに背を向けた黒髪の男の子がいた。

「そのジュエルシードを渡してください。」

そう話しかけると、男の子はこちらを向いて、その紅い眼で私を見つめてきた。

「渡さないって言つたら？」

男の子は私の言葉に少しも動じる様子もなく返答してきた。

私は何としてもジュエルシードを集めなくちゃいけない。だから、無理矢理にでも彼の持つジュエルシードを手に入れる。そう覚悟しながら

「戦つて奪うまでです。」

と言つた。

すると男の子は一瞬驚いた表情を見せ、しばらく私を見つめていたが、ふと楽しそうな表情を浮かべながら、

「じゃあ、俺に勝つたらこのジュエルシードを君にあげるよ。」

と言って持っていた剣を構えた。

今までの行動から考えると、多分この男の子は強い。甘く見ればきっと私が負けてしまうだろう。

「ライトニングバインド」

だから、まずはあの子の動けないようにした。
突然動きを封じられ、少し驚いているようだ。

その様子を見て、心の中で彼に謝りながら魔法陣を展開し、全力で攻撃した。

「貫け轟雷！！」

「Thunder Smasher」

魔法陣から砲撃魔法が放たれる。そして、その砲撃は男の子に命中し、辺りは砂埃が舞い上がった。

私の攻撃が彼に命中したのは間違いない。最悪でも無傷ではないだろうから、あとは弱ったところを倒して、ジュエルシールドを奪うだけ。そう思っていた。

「な！？」

でも、砂埃が晴れて辺りがよく見えるようになった時、私が見たのは、黒い壁の様なものに囲まれて攻撃を防いだ無傷の男の子だった。

side out

第10話 突然の襲撃者、来る！（前編）（後書き）

「前書きでも言ったけど……やっと試験が終わったよ……!!」

「へえ……それはよかったな。」

「おやおや、前回とは違いやさしい反応ですね、キョウ君。」

「俺も元大学生として試験は受けたことあるし……大変なのはしつて
るからな。」

「さあ、これで思いっきりやりたいことができるぜ！」

「ちゃんと更新しろよ。」

「わかってますよ、ちゃんと3日に2話ペースで更新するから……」

「……待て、なんで1日1話ペースじゃないんだ？」

「皆様に楽しんで読んでもらえる小説を書くのにおそらくそのペー
スがいいのだろうと悟りましたので……」

「……で、本当の理由は？」

「……試験終わって早速、「Fa e / EX RA」を買ったんでそ
ちに夢中になるかもしれないから……」

「……潰れる！重力作成」
グラビトン

「ぎゃああああああ！潰れるうううううう！！内臓出るううううううう！！！」

「……………あ、折角だから分からない人用に解説しておく…」

・重力作成
グラビトン

「NE DLES」に出てくる能力の1つ。
フラグメント

まあ、名前で想像つくとは思いますが、重力を増加させたり遮断させたりすることができる。

ちなみに、「NE DLES」ではそんな設定は無いのだが、この小説のキヨウは重力系の能力と言ったら…という事で試行錯誤を重ね、修業しまくった結果、ブラックホールのものを出すことに成功しました。

なので、今後キヨウがこの能力でブラックホールのものを出すかもしれませんが、どうかご了承ください。

「…おい、能力の解説でなんでご都合主義な展開を出すんだよ。」

「いやあ〜こうしておけば後で楽かな〜、と思ひまして…」

「ならお前をブラックホールの最初の被害者にしてやるよ！」

「ちょ！おま！！それはシャレにならないから…いやああああ！！！！」

「……………いい加減な奴が消えたか……………。それでは、作者が戻り次第、執筆に取り掛からせますので……………それでは次回、またお会いしましょう。」

第11話 突然の襲撃者、来る！（後編）（前書き）

どうも、和風好きです。

とりあえず今日も更新することができました。

この調子でまた頑張っていきたいと思います。

短いですが、前書きはこの辺にして…。

それでは第11話、始まります。

第11話 突然の襲撃者、来る！（後編）

…あの子、いきなりバインドかけてきた時はびっくりしたな…。それに砲撃魔法に込められたあの魔力…並大抵の量じゃなかった。

まあ、俺は「異能の力」の1つ、「影」の異能の力を使って遮影を出すことでその後の砲撃魔法は簡単に防げたけど…。

とはいえ、あんなに簡単にバインドにかかるなんて油断しすぎたかな…。

…おお、俺が無事なのを見てびっくりしてるぜ…。こっちも驚かされたからな、これでおあいこだ。

…さて、油断しすぎたせいとはいえ、やられるだけなのは好きじゃないんでね…今度はこちらからやらせてもらうか…。

「それじゃ、今度はこっちの番だな。」

そう言っただけ俺は空中に飛び上がった。そのまま少女の方に近づくと、彼女は俺に魔力弾をいくつも放って来た。その魔力弾のスピードは対応できる程度だったし、まっすぐ飛んでくるだけだったので、止まることなく避けた。

そして、刀の間合いの距離にまで近づいたので、下段から斜めに一閃した。少女は持っていたデバイスで攻撃を弾き、その後素早く俺の背後に移動して攻撃してきた。

俺は振り向きざまに一閃することで彼女の攻撃を弾き、その後シリウスを居合の様に構え、体勢を整えていた少女に向けて一気に横に薙いだ。

決して速い攻撃ではなかったので俺の一閃は受け止められたが、込めた力はそれなりに強くしたので、彼女はデバイスごと吹き飛ばされた。

「くっ!？」

少女は空中で衝撃を受け止めると、デバイスに声をかけた。

「バルディッシュュ!」

「Yes, sir.」

すると、デバイスは斧の様な姿から鎌へと姿を変えた。

そして、少女はデバイスを構えて俺の方へ飛んできた。

俺も飛んでくる少女に近づき、お互いの間合いまで近づくと武器を振るい、交差する形でぶつかった。

その後、少し離れたかと思うと、目にもとまらない速さで動き、攻撃しては防ぐということを繰り返していた。

その攻防の最中、俺は目の前の少女に感心していた。

一番最初の砲撃魔法もそうだが、その後の近距離戦闘での動きは俺と同じ年とは思えないようなものだった。特に優れているスピードは勿論、鎌という武器を使いこなし、敵に放つ技も十分通用するものと言えるだろう。

…まあ、それをいとも簡単に防ぐ自分も年相応な存在とは言えないが…。

とにかく、この勝負、気を抜いていれば俺が敗北してしまうかもしれない。そう判断した俺はそれなりに本気でいくことにした。

俺は少女の振り下ろしてきた鎌の一撃を防いだ後、左下から右上へ

と刀を振るった。

少女はそれを鎌の柄にあたる部分で防ごうと構えたが、俺はその防御ごと上空へと彼女を飛ばした。

そしてすぐに俺は彼女の後を追うように飛んだ。少女は距離を離れた隙に魔力弾で攻撃しようと構えていたが

遅い！

「忌剣

あけがらす
「暁鴉」

俺は一気に距離を詰め、魔力を込めながらシリウスを振り下ろした。

「Protection」

少女のデバイスは障壁を張って防ごうとしたが、陰陽四家の一つ、草壁家に伝わる剣術の奥義「忌剣」の一つである「暁鴉」がその程度で防げるはずもなく、俺はその障壁ごと彼女を押し斬った。

少女は俺の一撃に耐え切れず、地面に撃墜してしまっていた。

…ちゃんと非殺傷設定にしておいたから大丈夫だとは思っけど…。

俺は少女の無事を確認するためにも地面へと降り立った。

???side

私の本気の砲撃魔法を防がれた時から察していたが、目の前の男の子は強い。

その後近距離での戦闘になったけれど、私は本気のスピードで動いていたというのに、あの子は私の動きについてきた上で私の攻撃を的確に防ぎ、隙を見て攻撃してきた。

しかも彼の表情には余裕が浮かんでいる程だった。

…間違いない。彼は最低でも私と同じくらい、いや、私よりも強い。

それでも私は負けるわけにはいかない。

私は渾身の力を込めてバルディツシュを振り下ろしたが、その攻撃は剣で防がれ、逆に攻撃されてしまった。

それを防ぐことはできたけど、その力は強くて私は上空に飛ばされてしまった。

けれど、これで彼との距離が出来たことは事実。近距離戦闘なら分が悪いけれど、遠距離からの魔法なら勝てるかもしれないと思った私は魔法を放つために構えた。

しかし、男の子はその距離を一瞬で詰め、そして

「忌剣

あけがらす
「曉鴉」

彼はその剣を振り下ろした。

私は構えていた最中だったので動けなかったが、バルディツシュが障壁を張ってくれた。

でも、彼の一撃はその障壁をいとも簡単に斬り裂き、私も斬られてしまった。

私は飛行魔法を維持することが出来ず、そのまま地面に叩きつけられた。

「ぐっ!!」

叩きつけられた衝撃が私を襲う。その衝撃で動くのも苦しくなってしまうけど、私は負けるわけにはいかない。私は震えてしまう腕で立ち上がろうとした。

すると突然、私の首に剣が添えられた。

見ると、あの男の子が私のことを見降ろしながら、首に剣を突き付けていた。

「俺の　勝ちだ。」

…ここで死んじゃうのかな…？出来ればまた母さんの笑顔が見たかったな…。

そう思いながら男の子のことを見ていたら、彼は微笑んで

「大丈夫、殺しはしないよ。」

と言って剣を私の首から離れた。

「どうして……？」

だって私の攻撃は途中から、いや、最初の砲撃魔法から当たれば死んでしまいかもしれないものだったのに…。

「別に君を殺したくて戦ったわけじゃないからね。」

そう言っただけで目の前の男の子は私に右手を差し出した。

「ほら、掴まって。」

私ははじめはどうすればいいかわからず、ただ差し出された手を眺めていただけだったけれど、そのうち掴まないと悪い気がしたので私の左手で彼の右手を掴んだ。

s i d e o u t

地面に降りてから確認してみたが、多少ケガしている程度で安心した。

ただ、それでも立とうと無茶していたから、この戦いを終わらせるためにも、そして俺の勝利のためにも彼女の首にシリウスを突き付けた。

「俺の　勝ちだ。」

そう言ったら少女は無表情だけど、悲しんでいるのが分かるような表情になった。

…あれ？もしかしくなくてもやりすぎた？

…やっべえ…恭也さんとの戦いとは違って結構楽しかったからついやり過ぎてしまったようだ…。流石に、泣かないよね…？

俺は少女を怖がらせないために、微笑んでからシリウスを離れた。

「大丈夫、殺しはしないよ。」

そう言ったら彼女の顔から悲しみは消えたが、かわりに驚きが浮かんでいた。

「どうして……？」

どうしてって言われても…。

「別に君を殺したくて戦ったわけじゃないからね。」

とにかくいつまでも寝転がらせて放置するわけにはいけないから、俺は右手を彼女の前に差し出した。

「ほら、掴まって。」

そう言うのと、最初は俺の手を見ているだけだったが、やがておずおずと左手で掴んでくれたので、俺は彼女を引っ張り上げて立たせた。

…こうして見ると、あの一撃で結構傷ついちゃったみたいだな…。そう思った俺は彼女に中級回復魔法をかけた。

「ヒール」

俺の回復魔法によって少女の傷はほぼ治ったようだ。ふと彼女の顔を見てみると俺を見ながら驚いているようだ。

「回復魔法まで使いこなすなんて…」

そりゃあ仮にも神様に能力をもらった転生者ですから…。

さて、これからどうしようかね…。とりあえずは…自己紹介でもするか。いつまでも「少女」だの「彼女」だのと言い続けるわけにはいかないしな…。

「俺の名前は紅崎キョウって言うんだ。君の名前は？」

「…フェイト…フェイト・テストロッサです。」

「フェイトか…いい名前だね。」

「……………／／／」

微笑みながらそう言うと、フェイトは顔を赤くしてうつむいてしまった…俺何かした？

「さて…戦いは俺の勝ちで終わったわけだけど…これ、どうしよう…？」

そう言って俺は懷にしまったジュエルシードを取り出した。

「……………」

フェイトを見てみると、ジュエルシードから目を離さないものの、何も言ってこない。戦いに負けてしまった以上、渡せとは言いだせないみたいだ。

どうしよう…彼女の事情がわかっていれば今ここですべきことか思いつくんだろうけれど、あいにく俺はそう言う情報を一切知らないからな…。

「…なあ、フェイトはなんでジュエルシードを集めてるんだ？」

「母さんに集めるように言われたから…。」

「それじゃあ、フェイトの母さんはジュエルシードを使って何をするんだ？」

「そこまではわからない。私はただジュエルシードを集めるよう言われただけだから。」

とりあえず、フェイトはジュエルシードを変に使うつもりはないみ

「ただが…問題はその母親が何するつもりなのかだな…？」

「あのさ、今度でいいからフェイトのお母さんに会わせてくれない？」

「…？何で？」

「…まあ、突然こんなこと言われれば疑問に思うのは当然だよな。」

「正直、俺はジュエルシードが近所で暴走して被害を出すのを防ぐ為に封印してただけだから別にフェイトに渡してもいいんだけど、かといって渡したジュエルシード使って変なことに使われるのも嫌だからさ…フェイトのお母さんに会って何に使うつもりなのか聞いてみて、それで大丈夫だと思ったら、今後集めたジュエルシードはフェイトに渡そうかな…って思ってるんだけど…いいかな？」

「…それなら、今度母さんに聞いてみる。」

「よろしく……それじゃ、これはその前払い分ってことで。」

そう言っただけ俺は手に持っていたジュエルシードをフェイトに差し出した。

「…いいの？私は負けたのに…それにまだ母さんがどう使うのかわからないのに…。」

「今もいったけど、これは前払い分だからね。それに、そっちらから襲ってきたとはいえ、フェイトのこと怖がらせちゃったからな。」

それを聞いたフェイトはまだ少し疑問に思っていたようだが、とり

あえずそのジュエルシードを受け取った。

「よし、それじゃ帰るとするか…っていつの間にかこんな時間にな
ってるし…夜遅くに女の子1人で行くのは危ないから送っていくよ。」

「え…だ、大丈夫だから。」

そう言っただけで行こうとしたが、突然動いたせいで頭がふらついたようだ。

「俺の魔法で傷はなおしたけど、疲労とかはまだ残ってるはずだし…無理するのは良くないよ。…それに今後もジュエルシード集めるのなら今無理するのは駄目だと思うぞ。」

そう言うとフェイトは少し考えた後、俺の方を向いて

「それじゃ…お願いしていいかな？」

と言った。

「勿論。それじゃ、行こうぜ。」

そして俺はフェイトを家に送るためにフェイトと一緒に空へと飛び出した。

第11話 突然の襲撃者、来る！（後編）（後書き）

「というわけで第11話でした〜キョウ君大人げないですね〜。」

「…やっぱやりすぎたかな？」

「そりやそうでしょ。この段階でいきなり「忌剣」使うだなんて…
せめてテイルズの初級レベルの技のコンボとかにしてあげればよかったのに。」

「…でも空中にいる敵を見るとどうしても^{あけがらす}暁鴉使いたくなるんだよ」

「その上、折角の本気の攻撃を絶対防御の遮影で防ぐだなんて…も
っとみんなが強くなってから使いなさいよ。」

「…少し反省しているかも。」

「とりあえず、今回はこの2つについて解説します。」

・「影」の異能

「C D E : B R A K R」に出てくる異能の力の一つ。

影を操って、もはや絶対防御と言ってもいい「遮影」や、そのものの影を斬ることで本体も影の通りに斬り裂く「斬影」を使う事が出来る。

・忌剣 ^{あけがらす} 暁鴉

「11eyes」に出てくる剣術の一つ。

陰陽四家の一つである草壁家の剣術のうち、奥義でありながら習得が困難かつ危険である故に禁術同然になった「忌剣」の一つ。

原作では詳しく解説されなかったが、言ってしまうえば対空墜落用の技。

「というわけで、次回はおそらく明後日に更新することになると思います。」

「3日に2話更新ペースはもはや決定事項か…感想やアドバイスがあれば是非お願いします。」

「それではまた次回お会いしましょう!!」

「…今日は平和だったね。」

「お前が余計なことしなかったからだろ。」

「…でも後悔はしていないよ!」

「…おいおい。」

「あ、今日は事情があって出来ないけど、活動報告も随時更新しているの、よければ見てください。そしてコメントをくださいー
ー!」

「おい、お別れ言う前に言えよ!そして余計なこと言ってんじゃねえ!」

「みぎやあああああ
!!!!」

第12話 デカ猫危機一髪（前書き）

…どうも和風好きです。

前回29日に更新すると宣言しておきながら、こんなに遅くなってしまい、申し訳ございませんm(_____)m

遅れた理由は…後でキヨウ君が聞き出してくれると思います。

…まさかあんな伏兵が潜んでいたとは…。

何とかある程度書きあげられたので、更新させていただきます。

…それでは第12話、始まります。

第12話 デカ猫危機一髪

フェイトとの邂逅から数日経った。

…え、あの後何もなかったのか、だって？…俺別にロリコンじゃないからな…そんな期待するようなことはしてないし…。

あえて言うなら、フェイトが住んでいるマンションの屋上に着いたら突然オレンジ色の大型犬…じゃなかった、オオカミに襲われた。

まあ、フェイトがすぐに止めてくれたからお互い特に怪我したりはしていないから、別に逆襲とかはしていない。この前も言ったと思うけど、俺は動物には優しいからな。

その後そのオオカミ　　アルフがフェイトの使い魔だと教えてもらった。

…それにしてもこの世界の使い魔ってすごいな。なんていったって動物が喋るんだぜ！その上、魔法も使えるとなると相当便利だよな。…俺も機会があったら手に入れてみようかな…。

そう思っただけでフェイトに聞いてみたんだが…え、動物の死骸を使うの？それなら無理に作らなくていいかな…。

で、最初は警戒心バリバリで、俺がフェイトと戦ったと聞いた時には攻撃体勢にまではいつていたアルフだったが、その後俺がジュエルシードをあげただけでなく、集めるのを手伝うかもしれないことを聞くと一気に態度が変わった…それこそ

「悪いね、そうとは知らずにいきなり襲いかかって…。これからも

よろしく頼むよ、キヨウ。」

と言ってくるくらい……まだ協力するとは限らないというのに……。とりあえずその日はそこでフェイトとアルフと別れ、俺は家に帰った。

で、現在。

俺はすずかの家に招かれている。今は外でお茶会をしている。……っていうか、お金持ちって本当にお茶会とかやるんだな……外にそのための場所があるところといい、何というかすごいって言うか……ちなみにメンバーはすずかとなのは、アリサ、そして俺の4人だが、それとは別になのはの付き添いという名目で恭也さんも来ている。なんでも、すずかのお姉さんの忍さんとは恋人同士で会いに来たとか……それなら妹の付き添いとしてじゃなくて普通に会いに行けよ。……とか思ってしまったことは心の中にしまっておこう。恭也さんに知られたらまた面倒なことになりそうだからな。

それにしても……すずかの家はもはや猫屋敷と言っていい位、ネコがたくさんで……いい家だな。俺はどちらかと言うとイヌ派だが、ネコも十分好きだ。

「にゃ」

ふと側にネコが寄って来た。とりあえず頭をなでやると、気持ち良さそうに目を細めてさらに擦り寄ってきた。

……ああ、ネコっていいな。いや、イヌとかの他の動物も同じ位いい

けど…やっぱりネコはいい。

俺は擦り寄っているネコを抱き上げて膝の上に乗せ、頭や首の下をなでたりして可愛がった。

「ふにゃ〜」

ネコは先程以上に目を細めてリラックスしていた…ふふふ、愛い奴じゃの〜。

「キョウ君ってネコに好かれてるんだね。」

「というか、アンタどれだけ扱い慣れてるのよ!」

「あのネコさんがうらやましいの…。」

その様子を見て3人が色々言ってきた。…っていうかなのは、お前何言ってるんだ?

「まあ、ネコは好きだからね。」

「でもアンタ、この前どちらかと言うとイヌ派だって言ってたじゃない。」

「ああ、そうだよ。でもネコや他の動物も好きだし。」

「そうなんだ…キョウ君って意外に動物好きなんだね。」

…俺が動物好きなのって意外か?それでもかの高名な「アニルプラット」とかよく見てるんだけど…。

「キュッ!!」

と、そんなことを思っていたら別のネコがユーノを追いかけて始めたな。

「ユーノ君!」

「アイン! 駄目だよ!」

その時随分といいタイミングでメイドの…確かファリンさん…だったか? が紅茶と菓子を持って来た。

「はーい、お待たせしました。紅茶とお菓子で…。」

ユーノとネコのアインはファリンさんの足元でトとジェーな追いかけて続中。踏まれたりしなければいいが……ん? ファリンさんの説明が途中で終わったが…何かあったか?

「あうっ…。」

っておい! それで目を回すとかどんなテンプレだよ!! ……ああ、トレーから紅茶と菓子が落ちそうだ…仕方ない。

膝の上にいた猫を椅子の上に置き、瞬動でファリンさんの側に移動して右手で彼女の腰を支え、左手で紅茶と菓子をこぼすことなくトレーを持った。

「大丈夫ですか、ファリンさん。」

「は、はい、ありがとうございます／＼」

…何だか顔が赤くなっている気がするが、ファリンさんとトレーに乗っているものは無事だし、足元にいたユーノとアインを踏むことも無かったので、これで万事解決……かと思った。

…！？

と、突然ものすごい寒気がしたから顔をあげて見ると、そこには黒いオーラのようなものを出し、笑顔なんだがそれが何よりも怖い三人のお嬢様方が目の前にいた。

「『キヨウ（君）、ちょっとおはなししようか。』」

お、俺が何かしましたかー！？

…とりあえず、今はあの『おはなし』を受けながら生き残ることが出来たことを喜びたい。

椅子に座って真っ白に燃え尽きながらそう思っていると、さっきまで膝の上にいたネコとユーノを追いかけていたアインが俺の側によって体を擦りつけてきた。

…ふふふ、俺にとつての真の味方は君達ネコだけだ。

「（マスター、お気を確かに。）」

「それにしてもさっきのキヨウ君の動き、すごかったね。キヨウ君って何かスポーツとかしてるのかな？」

「…あ、そう言えば、前にお兄ちゃんを倒しちゃった時に5才の頃から剣術習ってるって言ってたの。」

「へえー5才の時から習ってるのね、アイツ……って、恭也さんのこと倒しちゃったの！？…あ、でもそれぐらい強いからあの時にあんなこと出来たのね…。」

「すごいね、あの恭也さんに勝っちゃったんだ。」

「うん、キヨウ君は夢中で木刀を振り回したら偶然あたっちゃったって言うてたけど…。」

「でも恭也さんって相当強いんでしょ？そんな相手に偶然で勝つなんてことあるのかしら…そこるところどうなのよ、キヨウ！」

「ふふふ、君達だけだよ、俺のことを心配してくれるのは…。」

「お、君も慰めてくれるのか？いつの間にか随分な数のネコが集まってくれたものだ。」

「…ありがとう。君達ネコのおかげで俺は今後も生きていける気がするよ。」

「…まだ戻ってきてないみたいね…。」

「すごい数のネコさんが集まっているの…。」

「これは…屋敷のネコのほとんどが集まっているかも…。」

ネコ達に癒されて、俺が復活するまでに随分な時間が経ったらしい。今では集まっているネコの数は減ったものの、俺の膝の上はネコ達のお気に入りとなった様で2、3匹乗っている。

で、そんな状況のまま3人と話していたんだが、突然魔力反応を感じた。

「（マスター！）」

「（俺も感知した。ジュエルシードか？）」

「（ほぼ間違いないかと。）」

ごく短時間でシリウスと確認した後、例の隠匿する気ゼロな念話が聞こえてきた。

どうやら「ユーノが突然どこかへ走り出す　それをなのはが追いかける」という作戦でこの場から離れるらしい。ま、作戦としてはいいんじゃない？

「私、ユーノ君を探してくる！」

「気をつけなさいよ！」

「無理しないでね。」

「転んで気絶するなよ。」

「にゃ、キョウ君ひどいの！」

なのはとユーノの作戦は成功し、1人と1匹はジュエルシードを探しに行った。

さて、俺はどうしようか…。

…ん？別の魔力反応が接近してきたんだけど…これはフェイトのか？
なら俺は行かない方がいいのか？…でもなのはやフェイトが怪我し

たりするのは駄目だしな…。

…ここで考えてばかりでは仕方がない。とりあえず俺も向かうとするか…。

「やっぱり心配だな。俺も行ってくるよ。」

「なのは1人でも大丈夫でしょ？」

「本当にそう思うか？」

「「……………」」

「じゃ、そういうことで行ってくる。」

俺は膝の上にいたネコ達を降ろしてその場から離れ、ジュエルシールドの方へ向かった。

ジュエルシールドの反応がする方に向かった先には巨大化したネコがいた。

…むっ、あのネコは8番目に俺のことを慰めに来てくれたネコじゃないか。いつの間になくなったと思えばこんなところでこんなに成長しているだなんて…。

「…マスター、今回はあのネコの「大きくなりたい」という願望を叶える形で発動したようです。」

そうか…、なら先程の恩もあることだし、いつも以上に慎重かつ正

確か安全に封印しないと…攻撃とかはなるべくしないようにしないで…。

そう決意し、シリウスをセットアップしようとした瞬間、どこからか飛んできた魔力弾がネコにあたった。

周りにはネコの悲鳴が響く。

それに構うことなく、さらに多くの魔力弾がネコに飛んでいった。

…確かにそうするのが一番効率がいいが、個人的には恩のあるネコに遠慮なく攻撃されるのは気に入らないな…。

そうしているうちに、白いバリアジャケットを身に付けた魔導師と黒いバリアジャケットを身に付けた魔導師の2人がネコのすぐ側で争い始めた。それこそ魔力弾を飛ばしまくつての戦闘だ。

…ネコのこともあるが、仮にも危険物であるジュエルシードの側でよくあそこまで遠慮なく戦えるよな…少しは安全面を考えろよ…。

「まあ、仮にもまだ10歳に至っていない少女達ですから、そう考えれば無理はないと思いますよ……と、そう言っているうちに決着がついたようですね。」

戦いはどうやらフェイトが勝ったようだ。フェイトの放った魔法がなのはにあたり、なのはは気絶してしまった。

…確かにシリウスの言うこともわかるが、かといってそのために甚大な被害が出てしまうのはマズいだろ…。

俺はとりあえずフェイトと話をするために接近した。…別に『おはなし』じゃないぞ？

フエイトside

ジュエルシードがあつた場所にいた白い魔導師は、キヨウとは違ってまだ魔法を身につけたばかりみたいなので、隙について簡単に倒すことが出来た。あの子には申し訳ないけど、あとはジュエルシードを封印するだけ…。

そう思い、バルディッシュを構えたところで、誰かが話しかけてきた。

「よう、フエイト。」

聞いたことのある声の方を向いてみると、いつの間にかキヨウが近づいていた。

「あ、キヨウ…。」

今日は何しに来たのかな？デバイスをセットアップしていないところを見ると、この前みたいに戦うつもりはないみたいだけど…。でも、一応聞いてみた方がいいかな？

「キヨウもジュエルシードを狙ってきたの？」

「いや、今回は魔力反応があつたから見に来ただけさ。そのジュエルシードはなのはと戦って勝ったフエイトのものだよ。」

そっか、今回はキヨウと戦わずにすみそうだ…。少し安心した。

「今から封印するからキヨウは離れてて。」

「ああ、ちょっとお願いがあるんだけど…あの大きなネコはさ、友達のネコなんだよね。しかも俺ともちょっと仲がいいからさ、あまり傷つけないでくれるか？」

「でも、暴れられたりするとうまく封印できないから、まずは大人しくさせないと…。」

「…なら少し待ってて。」

そう言つとキヨウはネコに近づいた。

「ごめんね…痛いかもしれないけど少しの間、大人しくしてくれるか？」

「にゃーお」

キヨウが話しかけると、ネコはまるで言葉を理解できたかのように鳴いて、大人しく座つた。…すごい、キヨウって動物と話せるんだ…。

「別に話しているわけじゃないよ。ただ、動物って目を見ながら話しかければこっちが言いたいことをちゃんとわかってくれるみたいだからさ…。」

…そうだとしても、やっぱりキヨウはすごいな…そういうことが分かるなんて…。

キヨウのおかげでネコは大人しくなってくれたから、私はネコを傷つけることなく封印することが出来た。

「ありがとう、キヨウ。」

「別に…むしろそれは俺が言うことじゃないかな？」

「でも、なるべくなら動物とかも傷つけたくないから…。」

「そっか…やっぱりフェイトは優しいんだな…。」

そう言いながらキヨウは微笑んで、私は頭をなでられた。

…突然なでられたからびっくりしたけど…キヨウになでられると何だか安心する／＼

でも、時間が少し経ったところでキヨウはなでるのをやめてしまった…ちょっと残念だと思ったのはなんでだろ…？

そして、私が気絶させた白い魔導師の方に近づいていく。

「さてと…なのはのことを連れて帰らないとな…。」

そう言うとキヨウはその女の子を背中に背負った。

「…その子と知り合いなの？」

「まあね、幼馴染ってやつかな？」

そっか…キヨウの知り合いなんだ…。

「キヨウ、いいの？」

「何が？」

「私がその子と戦っても…。」

「…確かに戦ってほしくはないけど、フェイトにはお母さんのためにも譲れないんだろ？」

「…うん。」

「多分なのはの方も譲れないものがあるんだと思う。…なら、戦いになるのしょうがないだろ？」

「…そうだね。」

「俺は1対1の勝負に、どちらかの味方として邪魔するような無粋な真似はしないからその点は大丈夫だぞ。…あえて言うと、なのははまだ魔法初心者みたいだから、なるべくケガしないように力加減をしてくれると助かるな。」

「…うん、わかった。頑張ってみるね。」

私の答えを聞くと、キョウは来た方を向いた。

「それじゃあな、フェイト。」

「じゃあね、キョウ。」

そう言って私はキョウと別れた。

side out

フェイトと別れてからしばらく歩いたところで、なのはのことを起こすことにした。

「おい、こちら辺で起きておかないと後で大変だぞ。」

「…ふにゃ…ここドコお、キヨウ君？」

なのははなんとか覚醒したが、まだ眠そうに目蓋を擦っている。

「……ふえ！？なんでキヨウ君に背負われてるの？」

ようやく現状を把握したらしい。

「なんでって…お前を探しに行ったらあっちの方で気絶してたからだけ。それよりなんであんなところで気絶してたんだ？」

そう聞くと、なのはは少しあわてながら

「えっと、そのう…ユーノ君を見つけたのはいいんだけど…その後帰ろうとしたら転んで頭をぶつけちゃったの…。」

と言って誤魔化そうとした。…ものすごくわかりやすいな…。

「…見事に俺の言った通りになったな。」

「あっ…そうなの。」

「…全く、俺が探しに行つたのは大正解だな。」

「キヨウ君…ごめんなさい。」

そう言つてなのは少し落ち込んでしまつた様だ。

「別に謝るようなことじゃないだろ。…第一、こんなこと昔から何度もあつたし…」

「あう…。」

「それに…幼馴染なんだからこれ位、いつでもやってやるよ。」

「…キヨウ君。」

「何だ？」

「ありがとう。」

「…どういたしまして。」

とりあえず、背負われたまま皆の元に戻るのは嫌だろうと思い、降ろそうとしたら

「近くに戻るまではこのままがいいの。」

と言つて断られてしまった。…まあ、それ位で根をあげる程やわな鍛え方はしてないんで構わなかつたけどね。

ということ、なのは背負いながら俺はすずかとアリサの元に戻つた。

第12話 デカ猫危機一髪（後書き）

「で、なぜこんなに遅くなったのか、言い訳を聞かせてもらおうか。」

「い、いきなり首をつかんで持ち上げられると…苦しくてしゃべれないんですが…。」

「何？もつと絞めてほしいの？」

「…ごめんなさい！」

「…で、理由は？」

「試験が終わったという事で他の作者様の作品を読んでいたり、『Fa e / E T A』をプレイしたり…と色々やってたら、バイト先の店長から『試験終わったから29日から3日連続でバイト入れても大丈夫だよ？ちなみに返事は聞いてない。』的なメールが来たおかげで3日間バイトばかりしていて執筆の時間がとれませんでした…。」

「…遊んでたわけじゃないのか？」

「それは本当。ゲームも電車での移動時間位しか出来なかったし…。」

「そうか…ならしょうがないか…。」

「…わかってくれたかい？」

「そんな状況なら遅れてもしょうがないが…でも、一度宣言したのなら何としてでも守り通せやー!」

「結局こうなるのかあああああ!」

「…で、次回はどうなるんだ。」

「…次回は多分明後日くらいに更新すると思います…今回みたいなことがなければ。」

「…そういうこと言わずに普通に言えよ…全く…。」

第13話 温泉旅行という名の戦場（前書き）

どうも、和風好きです。

…夏休みって何が起こるかわかりませんね…。

まさかまだ働いているわけでもないのに職場のパワハラってものを体験するとは…。

とにかく、また予告より遅れてしまい、申し訳ございませんm（
ー）m

なんとか今日中に仕上げる事が出来ました。

駄文かもしれませんが、読んで楽しんでいただければ幸いです。

それでは第13話、始まります。

第13話 温泉旅行という名の戦場

……俺は今、高町家の人々に誘われて、温泉に来ている……のだが……。

「（…もう疲れたよ、パトラッシュ…）」

「（しつかりしてください、マスター！あと、イヌ系で繋がってうまい気がします、私はシリウスです）」

「（…軟弱）」

……なんでいきなり疲れているのかつて？

……温泉に着くまでにいろいろあってね……ようは3人娘が「俺の隣の席争奪戦！」をしていたんだ……しかも真剣^{ガチ}にして本気で……おかげでいつまで経っても決着がつかないんだよ……。

……結局、保護者からの介入で、俺の隣はシオリが座ることになったんだが……その後も出発した車内で、後ろに座った3人が負のオーラを漂わせながらじっと見てくるんだよ……これで疲れない猛者がいたら名乗ってほしい。讃えてあげるから。

…あと、最初の念話で何となくわかったと思うけど、シオリもついてきてる。「家族旅行」ってことなら、シオリも連れていかないとな。

はやてのことは大丈夫。俺特製のネックレス渡してあるから。おかげで、はやての周りで起きた魔力反応はこちらに伝わるし、いざとなったらネックレスを座標にして転送できることが出来るようになっている。

さて、温泉に行く前に色々と疲れてしまったけれど、温泉に入れば少しは疲れはとれるかもしれない、ということできつさと入ることにした。

「そつえばペットつて一緒に入つてOKなの？」

「うん、さつき旅館の人に聞いてみたら大丈夫だつて言つてたよ。」

へえ……ここはペット同伴での入浴がOKなのか……。いつかペットを飼うときにはいいかもしれないな。

……あれ、突然ユーノが暴れたんだけど、どうかしたのか？
まあ、いいや。さつさと温泉に入つて疲れをとろう。

「それじゃ、俺はこっちだから。」

「キョウ君、どこに行くの？」

どつてそれは……。

「男湯だけど……？」

「何言つてんのよ、アンタも一緒に入りなさいよ。」

……は？一緒つてどこに……？

アリスが指差した方向を見るとそこは……女湯？……はあ！？

「お前こそ何言つてんだ！俺は男だぞ！女湯に入れるわけないだろ

「！」

「でも、あそこに大丈夫って書いてあるわよ。」

再びアリサが指差した方を見てみると……そこには「10歳までのお子様は両方の風呂を使用できます。」という内容が書いてある紙が貼ってあった。

しかし、ここで女湯なんかに入ったら最後、疲れがとれるどころかさらに溜まってしまうに決まってる！

「ルールでは大丈夫かもしれないけど、男である俺と一緒に入るだなんていったらなのはもすずかもいやだろ？」

「私は別にいいよ。」

「むしろキョウ君と一緒に入りたいの。」

な、何ですと！？

お前らもう少し羞恥心というものを持ちなさい！というか持つてく
ださい、頼むから！！

ふと3人の後ろを見ると、いつの間にか美由希さんと忍さんとシオリの3人が来ていた。美由希さんと忍さんの2人はニヤニヤしながら、シオリはじとーとした目でこちらを見ている。助けては……
…くれないな、絶対。

「とにかく、俺は男だから男湯に入りたいんだ！」

そう言うと同時に俺は男湯の方に走り出した。

後ろの方で3人が何か言っているが、気にしない。

俺はこの温泉に疲れ切った体を癒しに来たんだ！

「（このヘタレ…）」

シオリ……念話してまで言うことじゃなくね？

なんとか3人娘の魔の手から逃れて温泉（男湯）に入ることが出来た。

…ふう…やっぱり温泉っていいな…。疲れた体が癒されたわ。

温泉からあがり、1人で風呂上がりの方の牛乳を堪能していたら、オレンジ色の髪の女性が近づいてきて話してきた。

「おや、誰かと思ったらキョウじゃないか。」

えっと……俺の知り合いにオレンジ色の髪の女性っていたっけ？

「あの…すみません。どなたですか？」

「人のこと忘れるなんて失礼なやつだね！…アルフだよ！」

アルフ？アルフなら知ってるけど…。

「俺の知ってるアルフは太が…じゃなくてオオカミなんですけど…。」

「…ああ、そうか。アンタにはオオカミの時しか会ってなかったっけ。…あたしは人の姿にもなれるんだよ。」

そう言うと、自称アルフな女性の頭からオレンジ色の犬耳（でいいのだろうか…？）が生えてきた。

「へえ、アルフって人の姿にもなれるんだ…。すごいな…。ところで、ここにいるってことはフェイトと一緒に温泉に入りに来たのか？」

「そっちが目的じゃなくて、こちらで微弱だけどジュエルシードの反応を感知してね…フェイトは今、位置を特定しているところさ。」

「…主が探している時に使い魔は温泉って…いい御身分だね…。」

「いいじゃないか！フェイトが入っていいって言ったんだから！」

「まあ、休むことはいいいことだけど…ジュエルシードが確保できたらフェイトもちゃんと休んでくれればいいけど…。」

「そうだねえ…使い魔としてもそれは心配だよ…ただでさえアタシのご主人様は無理をすることが多いから…。」

「…まあ、フェイトが対応するなら俺が出る必要はないかな…。」

「そうかい…まあ、キョウが敵にならないなら問題は無いね…あの白い魔導師はどうってことないしね。」

「アルフもなのはのこと知ってるのか？」

「まあね、さつき温泉に入りに行ったときに会ったから軽く脅かしといたよ…って名前で呼ぶなんて随分親しそうじゃないか。」

「幼馴染だからね…この間フェイトにも言っただけ、だからってなのはに肩入れするつもりはないよ。フェイトとなのは、1対1での戦いに邪魔はしないさ。」

「ふーん…なら別にいいけどね。」

「ま、そういうことなんで、今回は何も手出ししないけど頑張れってフェイトに言っといってくれ。」

「わかった、確かに伝えとくよ。」

それを聞いた後、俺とアルフは別れた。

夕食を食べ終わり、あとは寝るだけ…のはずだったんだけど…。

俺にあてがわれた部屋では「第二回！俺の隣争奪戦！」が目の前で絶賛開催中である。

部屋にいる人は…もう言わずともわかると思うだろうが、小学生組であるのはアリサ、すずか、そして俺の4人だ。

そして、俺以外の3人は黒いオーラを出しながら互いを牽制し合っている。

「行きの車では決着つかなかったけど…！」

「キョウの隣をかけて…！」

「勝負なの…！」

何故俺の隣はそんなに倍率が高いんだ…？

むしろこういう時って少数である男子は端っこの方に追いやられるものじゃない？

俺の隣で寝るのがそんなにいいのか？

「（…前からわかっていましたが、マスターって見ていて心配になる程、鈍いですよね…）」

「（俺の何が鈍いんだよ？）」

「（そういう時点で鈍いんですって…普通こんなシチュエーションに遭遇したら男の子は狂喜乱舞するところですよ…）」

「（…あいつらのあの姿見てもう1度同じことが言えるのか？）」

「（…失礼しました。狂喜乱舞の件は訂正させてください）」

…まあ、いいか…。

とりあえず今は目の前で繰り広げられる予定の悲惨な争いを避ける…いや、それは無理そうだからせめて被害を最小に留めなければ…。

「…ちよつといいか？」

そういう俺の方に振り返る3人。…何か今、オーラがさらに大きく、かつおぞましくなった気がするんだけど…！

俺の隣に避難してきていたユーノなんか、フェレットがそんなに震えて大丈夫なの？って言いたくなる位、ガクガク震えている。

「何よアンタ、温泉の時みたいに今回も逃げるワケ？」

「流石に2度目は無しなの。」

「キョウ君…またおはなししてほしいのかな？」

…どうやら我らに悲惨な争いを避けることが出来る手段は残されていないようだ…。

せめて…隣で震えるユーノや旅館に泊っている他の客に被害が及ばないようにしなくては…。

「そ、そうじゃないですけど…その、旅館には他の人も泊っているわけですから…ここはあまり騒ぐことのないジャンケンで決着つけるのがいいんじゃないかな…って思った…んですけど…ダメですかね…？」

「…確かに何で決着つけるかは決めてなかったけど…。」

「…ジャンケンなら3人とも平等になるかな…。」

「…まあ、いいわ。アンタの意見を取りいれて、ここはジャンケンで決着つけるわよ！」

「…わかった（なの）…！」

そうして3人は構え始める。…あれ？ただのジャンケンのはずなのに、何故こんなに空気が張りつめてるの？…俺、まさかここにきてミスした？

「…ジャンケン、ポイ…！」

そうして繰り出される3人の手。結果は

…さて、現在真夜中と言ってもおかしくない時間になり、あんなに激しく火花が散っていた3人も今はもう大人しくなった。

…さっきの戦いの結果はどうなったかって？

結果的に言うと、俺の隣にはアリサとすずかの2人が寝ることになった。

…だけど、なのはもただ負けて素直に譲って終わり、というわけではなく、俺の頭の方にいる。

つまり、俺は3人に3方向を囲まれているわけだ。

まあ、正直俺としては静かに寝れるならどうでもいいんだけどね…。

3人とももう寝たか…と思ったが、なのははユーノと念話で何か話しているようだが、俺にとってはその内容より睡眠時間の方が大切なのは明白、ということさっさと寝ることにしたのだが…。

その時、まるでタイミングを呼んでいたかのようにジュエルシードの魔力反応を感知、いつものようにシリウスが念話してきた。

「（マスター、ジュエルシードです！）」

「（……………みたいだな……………）」

「（……………行かないのですか？）」

「（もうフェイトがある程度、位置を特定していたらしいし、その上なのはも行くんだろっし、今日ぐらいは俺抜きでも大丈夫だろ？）」

「（…と言って本音はさっさと寝たいからそう言っているのではないのですか？）」

「（…………）」

「（…………え、本当に寝てしまったのですか！？し、しっかりして下さい、マスターー！）」

シリウスが何か言っているようだが、今日は色々あり過ぎてもう眠いんだよ……。
シリウスの小言を無視していくうちに、俺の意識は次第に薄れていった。

シリウス side

…………まさか本当に寝てしまわれるとは…………。
全く、これではさんやフェイトさんに何かあったらどうするのでしょうか……。

とはいえ、確かに本日はマスターにとってとてもハードであったのは事実。

フェイトさんはかなりの使い手ですし、そろそろなのはさんも魔法に慣れた頃でしょうから、マスター抜きでも御二人に任せておけば

大丈夫でしょう。

元々、本日は家族旅行という休息のつもりでしたことも考慮して、今回だけはマスターの事を多めに見てもいいですかね…。

そう結論した私はジュエルシードの反応があつた辺りを警戒しつつ、マスターのことを寝かせてあげるとしましょう。

s i d e o u t

なのはs i d e

今日はアリサちゃんやすずかちゃん、そしてキョウ君の家族と一緒に温泉旅行に来ていました。

だから、皆と一緒に色々楽しんでいい日になるかな…って思ってたんだけど…。

温泉からあがつた後には変なお姉さんに色々言われた後念話で話しかけられちゃうし、そのことについてユーノ君と話してたらジュエルシードの反応を感知しちゃうし、その場所に行ってみるとさっきのお姉さんとこの間すずかちゃんの家にはいた女の子と戦うことになったっちゃうし、結局その子に負けてジュエルシードを1個とられちゃったし…。

それに、今日こそキョウ君の隣で一緒に寝ようと思ったのにジャンケンで負けてアリサちゃんとすずかちゃんに場所をとられちゃったの！

今日はいいこともあつたけど大変だったな…。

今度あの子に会ったら絶対におはなしするの！

もう夜だったからすごく眠かったけど、なんとかお部屋に戻ることが出来ました。

暗くてよく部屋の中は見えなかったけど、私はすぐに寝ようと思って既に敷いてある布団の中に入りました。

「（なのは！そこ、なのはの布団じゃないよ！）」

…ユーノ君が念話で何か言ってたけど、もう眠くて聞こえないの…。私はすぐに寝ようと思ったけど、布団の中に何かがあるのに気がつきました。

…これ何だろう？

確かめようと思ったけど、別に嫌な感じはしないし、むしろそれに抱きつくとか安心する感じがしました。

それにすぐにでも眠ってしまいそうだったので、私はそれに抱きついたまま寝ることにしました。

s i d e o u t

…どうしてこうなった？

俺は普通に睡眠を貪っていたはずだったのに…突然誰かに蹴られて起きた。

そこまでされれば流石の俺も起き、襲撃の原因を探ろうと目を開けてみた。

すると、そこには昨日以上の黒いオーラを携え、見ているととてもない恐怖に襲われそうな笑顔をしたアリサとすずかがいた。

「おはよう、キョウ君。いい御身分だね。」

…あれ？ずかっくてこんなこと言う子だったっけ？

「起きたようね。…それじゃ、なんでなのはと抱き合いながら寝ているのか話してもらいましょうか！」

…は？今何て言った？

そう思いながら状況確認しようとした時、俺は何か抱きついていることに気がついた。

ふと隣を見てみると、そこには俺に抱きつきながら幸せそうな顔で寝ているのがいた。

…え？

「…なあ、なんでなのはが俺に抱きつきながら寝ているんだ？」

「それを令、アンタから聞いているんでしょうが！！」

アリサは大声で俺の質問に答えてくれた…質問の答えになってはいないけど…。

ずかの方を見ると…あれ？何かさつき以上に怖い笑顔をしている気がする…。

「…ふにゃ…」

今のアリサの声でなのはが起きたようだ。

目を擦りながら顔をこっちに向けると俺と目が合った。

「…あ、キヨウ君おはよ…。」

「あ、ああ…。」

なのはが挨拶してきたので何とか返答したが、その様子からしてまだなのはは寝ぼけているようだ。

だが、早く2人の恐怖から逃れるためにも早くなのはから離れなくては…！

「おはよう、なのは。起きたばかりで悪いんだが、俺のこと放してくれると助かる。」

そういう言われたなのはは最初、何を言われたのか理解していないようだったが、次第に自分のしていることが理解できたようだ。そして、俺のことを見ながらなのはの顔が赤くなった。

「ふ、ふえ〜！！！！なんで私がキヨウ君に抱きつきながら寝てるの〜！！！！」

…どうやらなのはが意図的に抱きついたわけではなさそうだ…。そう判断した俺は真実を知っているであろうシリウスに念話しようとしたが、突然両肩を掴まれた。

……振り返りたくなかったが、一応振り返ってみると。

「「キヨウ（君）、おはなしでしょうか。」」

…『おはなし』の後、なんとか生き残れた俺は帰りの車では2人の

隣に座ることを約束させられ、実際に車内では両腕に抱きつかれて座ることになった。

その後ろに座ったなのはとシオリから負の感情のこもった視線を浴びせられたが、なのははいきなり顔を赤くしたと思ったら、

「にやはは…／＼／」

とか言いながらニヤニヤすることが何度かあったので、行きの車ほど疲れなかった。

というか、何故にあなたもそんな視線を向けてくるんですか、シオリさん…。

こうして4家族による温泉旅行は終わったのである。

……あれ？俺って日々の疲れを癒しに行ったはずなのに……何故疲れが余計に溜まるだけでなく、体を痛めることになってるんだろ……？

第13話 温泉旅行という名の戦場（後書き）

「あれ、今日はいつもの先制攻撃は無いんだね。」

「何というか…もう慣れちゃった…。」

「自分の小説の主人公に見限られそうな作者って一体…orz」

「で、今のうちに皆様に言っておくことがあるんじゃないのか？」

「あ、そうだ！皆様お気に入り登録＆評価ありがとうございます！おかげで総合評価が200を超えました！いつの間にかPVも50,000を超えだし、ユニークはもうすぐ10,000に到達しそうです！これからも頑張っていくんでよろしくお願いします！！」

「よくある到達記念とかはやらないのか？」

「今のところ、やるとしたらPVが100,000を超えた時にしようかと思っているんだけど…そんなにやりたいのかい、キョウ君」
「？」

「…そろそろいいか…。」

「…へ？」

「それじゃ、いつものお仕置きタイムだな…今のうちに念仏でも唱えときな…。」

「…ど、どうしたんだよキョウ君。そ、そんなに電気を貯めなくて

もいいじゃな…。」

「いい加減、締切期限を守りやがれ!!!」

「ぎゃあああああ!!!」

「…いつもこんな終わり方で申し訳ありませんが、次回はちゃんと2日以内に更新させますのでご容赦ください。…それでは皆様、また会いましょう。」

第14話 とある家庭の裏事情（前書き）

どうも、和風好きです。

今回は予想外の出来事は起きなかったので、何とか2日以内に更新することができました。

とはいえ、今回の話は文の構成とか、主人公の考え方とか、少し自信がないのですが……。

とにかく、今回も読んでいただければ幸いです。

それでは第14話、始まります。

第14話 とある家庭の裏事情

あの魔の温泉旅行から帰宅した後のある日、俺はフェイトが暮らしている家の前にいる。

何故こんなところにいるのかというと、その数十分前位にフェイトから念話で家まで来てほしいと言われたからである。

何でも、今から例の母親の元に、報告のついでに今まで回収したジユエルシードを届けに行くらしいのだが、その時に俺に会わせてくれるとのことだ。

…まだ許可はもらっていないとはいえ、前に俺が言った事をちゃんと覚えてくれていたとは…。

実は言った本人が実は忘れていた、というのは秘密にしておこう…。まあ、俺も特にやることがあったわけではないので、そのお誘いを受け、現在フェイトの家の前にいるのである。

さて、説明っぽいものはこれ位にして…中に入るとするか…。俺はインターフォンを鳴らして、来た事を伝えた。すると中から足音がして、すぐに扉が開いた。

「キョウ、いらっしやい。」

「ああ、それじゃ、お邪魔します。」

そう言っただ俺はフェイトの家に入る。

リビングに行ってみると、アルフが人間の姿で何かを食っていた。

側にその食べ物のケースらしきものが転がっているが…これって…ドックフード？

「おや、キョウじゃないか。」

「お邪魔してるよ…ところでアルフ、それってもしかしてドックフード？」

「そうだよ。」

…人間の姿でも食べるのはドックフードなんだ…。

そうしているうちに、アルフはドックフードを食べ終わり、フェイトも準備が出来たらしい。

「キョウ、そろそろ母さんの所に行くけど大丈夫？」

「ああ、大丈夫だよ。」

俺は元々ついについて行くだけだからね…特に準備とか必要じゃないし。

ふと、フェイトの方を見てみると見たことのある白い箱を持っていた。

「フェイト、それって…。」

「あ、これ？…美味しそうなケーキが売ってたから、母さんへのお土産にしようと思って…変かな？」

「いや、すごくいいと思うよ。喜んでくれたらいいな。」

「…うん！」

フェイトはきれいな笑顔でそう答えた。

…フェイトって、本当にそのお母さんの事が好きなんだな…。

アルフも微笑みながらフェイトの事を見ている。

こんなに娘に好かれてるフェイトのお母さんがどんな人か…少し楽しみかな…。

「それじゃあ、行こう。」

その言葉と共に、フェイトは転移魔法を発動させ、俺達は光に包まれた。

光が収まったところで目を開けてみたが…。

「（…こういう事言ったらいけないんだろうけど…すごい家だな）」

「（…どういう意味で言っているのかあえて聞きませんが、確かにすごい家ですね）」

「（正直、母親の家というよりラスボスのダンジョンと言われた方が納得するかも…）」

「（…やはりそういう意味でしたか…ですが、そう言う事を言うの

も無理はありませんね…。」

俺が見た目の素直な感想をシリウスと念話で言いあっていると、フエイトが俺にこれからの事について話してきた。

「キヨウはここでちょっと待ってて…母さんに許可をもらったら私が呼ぶから…。」

「わかった。それまでここで待ってるよ。」

そう俺が答えると、フエイトとアルフは城の方に歩いて行った。

ただ今、フエイトの許可待ちなのですが…。

「ただの報告と俺との面会の許可をもらうにとしては少し遅すぎないか？」

「かといって勝手に入るわけにもいきませんし…。」

遅いな、そろそろ言ってもいい頃だと思っただけだな…。

そのように暇を持て余していたら、突然アルフが慌てた様子で念話を飛ばしてきた。

「（キヨウ！早くこっちに来ておくれ！）」

その尋常じゃない様子に俺達は気を引き締めた。

「（アルフ、何かあったのか？）」

「（とりあえずこっちに来ておくれよ！このままじゃフェイトが…！）」

「（わかった、すぐ行く！）」

そう答えると、俺はすぐにシリウスに指示を出した。

「シリウス、今すぐアルフの場所に転送できるか？」

「はい、アルフさんの位置は既に把握していますので、すぐ行けます！」

「頼む。」

シリウスはすぐに俺の指示に従い、アルフの元に転送した。

アルフの元に転送し、すぐ周りの状況を確認していたところ、へたりこんでいるアルフを見つけ、近づいた。

「どうしたアルフ！」

「キョウ！…フェイトを助けてやっておくれよ！…このままじゃフェイトが殺されちゃうよ！」

くそ、一体何が起きていやがる！とりあえず、フェイトの元に行く

のが先か！

「マスター、この奥にフェイトさんの反応があります！急いで行きましょう！」

…確かに奥の方から何かの音が聞こえる。その中にフェイトの悲鳴らしいものが混ざっているのに気がついた俺はシリウスに言われた方に向かって走り出した。

たどり着いた先には知らない女性 おそらくフェイトの母親のプレシア・テストロツサさんだろう と両手を縛られたフェイトがいた。

「もう二度と…母さんを失望させないように。」

そう言うとプレシアさんが持っていた杖が鞭に形を変え、それをフェイトに向けて振りかぶった。

くそ！間に合うか！

瞬動でフェイトの元に近づいていたが、フェイトに迫る鞭の動きから間に合わない判断した俺は、鵲鴝眼を使ってフェイトに命中しそだった鞭を掴むことに成功した。

「貴方は…。」

プレシアさんは突然現れた俺を見てきた。

「大丈夫か、フェイト？」

フェイトは目をつぶっていたから俺に気付いていないようで、突然話しかけられたことに驚いているようだ。

「え…キヨウ？」

…これなら後で俺が回復魔法をかけてやれば大丈夫だろう…そう判断した俺は、後ろにいたアルフに声をかけた。

「アルフ、フェイトと一緒に先に帰ってな。」

「分かったよ！」

そう答えたアルフはすぐにフェイトの元に近寄り、転移の準備に入った。

「…キヨウは？」

…全く…自分が大変だっというのに人の心配か…。

「言っただろ？お前のお母さんと少し話すだけだって。」

そう答えながらフェイトを安心させるために笑いかける。

その後すぐに、フェイトはアルフの転移魔法でこの場から離れた。

「…随分勝手なことをしてくれたわね…。」

もうフェイトに危害は及ばないだろうし、こちらは戦うつもりはない事を示すためにも、掴んでいた鞭を離れた。

「全く…フェイトに事情を聞いた時から何かあるとは思っていたが…まさか家庭内暴力まであるとはな…。これじゃ、あんたにジューエルシードを渡したくなくなっちまうな…。」

「…何が目的かしら？」

「現在の目的はさっきあんたの娘さんに言った通り、あんたがジューエルシードを使って何をするつもりなのか聞くだけさ…。」

「フェイトが娘？笑わせないで頂戴。あの子はただの人形、私の娘なわけじゃないじゃない…それに…」

そう言うプレシアさんは鞭を杖に戻した。そして、

「貴方とこれ以上話す必要はないわ！」

そう言うと同時に紫色の雷を出して攻撃してきた。

まだバリアジャケットを展開していなかったので受けるわけにもいかず、俺はその攻撃を何とか避けた。

「危なっ…！……こちらデバイスを起動さえしていないというのに……それにさっき聞き逃せない事を言ってたな…フェイトが人形ってどういうことだ？」

「そのままの意味よ。貴方はそれ以上知る必要はない…それに、もうすぐ知ることでもなくなるわ！」

そう言う、プレシアさんは再び雷で攻撃してきた。

俺はすぐにシリウスをセットアップし、ある攻撃は避け、ある攻撃

はシリウスで斬り裂いて防いでいた。

これじゃあ、話を聞くことすら出来ないな……ここは大人しく退散したほうがいいかな？

とはいえ、こんな攻撃されている中では転移魔法を発動することはできないし、別の部屋にでも逃げ込むか……。

「（シリウス、逃げ込むのに最適な部屋とか近くはない？）」

「（少し待って下さい。……検索しました。その正面の壁の向こう側の部屋はそれなりに重要な研究室みたいなので、追いつかれてもすぐに攻撃してくる事はないかと……）」

研究室ね……確かに重要なサンプルだのがあるのならそう簡単に攻撃してこないだろうけど……もしかしたら、そこに行けばジュエルシードを集める目的が分かるかもしれないな……。

そう判断した俺はすぐに移動するために「異能力」の1つ、「座^ム標移動^{アップポイント}」を発動し、その研究室とやらへ移動した。

例の研究室にたどり着いたのはいいんだが、あわよくば目的を知ることが出来るかとも思い、そこにあるものを調べようと思ったのがマズかったかな……。

俺は目の前のあるものを見て、そう思わざるを得なかった。

「……なあ、これって……。」

「フェイトさんよりは幼いですが、身体的な特徴はほぼ全て酷似していますね。」

そこには生体実験などをしている研究所によくありそうな生体ポット……っていうんだっけ？……の中にフェイトより幼い、けれどよく似ている少女が入っていた。

……どうということだ？何故フェイトに似た少女が入った生体ポットがここにある？

「……先程のプレシアの発言で、フェイトさんの事を『人形』と呼んだ事から考えると……」

その先を聞いてみたかったが、後方から殺気を感じたので振り向いてみると、

「私のアリシアに近寄らないで……！」

そう言いながらプレシアさんが攻撃してきた。

……おいおい！近寄るなどか言うくらい大切なものがある方向に向かって攻撃してくるなよ！

まだ状況は理解しきれてはいないが、何となく後ろの生体ポットを傷つけるのはマズいと判断した俺は「影」の異能で遮影を前方に出してそれを防いだ。

とはいえ、この後ろのアリシアとかいう少女に対する態度と、フェイトに対する発言から推測すると……。

「……あんたのその態度と発言から察するに、フェイトはこのアリシアとかいう少女の……」

「そうよ…フェイトは私の娘アリシアのクローン…魔導実験の事故で死んでしまったアリシアの代わりにつくったの。」

…予想は的中か…あたって欲しくはなかったがな…

「でも、駄目だった…アリシアの記憶まであげたのにあの子はアリシアになれない出来損ないだった…だから私はアリシアを蘇らせることにしたの…。」

「そのためにジュエルシードを集める…か。」

…あまりこういう事は言っではいけないんだろうが、ベタ過ぎだな…。死んだ奴の代わりにクローン作っただけど結局代わりにはならなくて苦惱、若しくは虐待…よくあるパターンだな…。

代わりになってくれないからという理由でフェイトを虐待する事も氣に入らなかったが、正直そこまでではなかった。むしろ、俺が氣に入らないのは別のところだった。

「ここまで知ってしまったらもう貴方を生かして帰すわけにはいかなくなっただわ。すぐに殺してあげ　　！！ゴホッ、ゴホッ」

突然プレシアさんが咳き込み始めた。

風邪か？と最初は気の抜けた事を考えていたが、口を押さえる手から血が垂れてきたところで俺はプレシアさんに駆け寄った。

「おい、大丈夫か？」

プレシアさんはしばらく咳き込んでいたが、しばらくするとその咳

も収まった。

その間、俺はプレシアさんを支えていたが、実はこの時ある能力を発動させ、最低な事をしていると自覚しつつも、ある情報を手に入れていた。

「…もう私には時間が残されていない…早くアリシアを取り戻してあの頃の幸せを取り戻すの！…それを邪魔するなら貴方には今ここで消えてもらうわ。」

そう言つて杖を構えているが、無理をしているのがはっきりとわかった。

彼女個人に気に入らない点はいくつかあったが、病気で衰弱している敵と戦うような趣味は持ち合わせていないし、何よりここで戦う必要はなかった。

あくまでも気休めでしかなかったが、俺は回復魔法をプレシアさんにかけた。

「ヒール」

元はケガを治すための術だからそこまで効果はないかと思つたが、実際にかけてみるとプレシアさんの顔色が少し良くなった。

「…どういふつもりかしら？」

「…別にあんたと戦う必要はないからな…フェイトから聞いたかどうかは知らないけど、俺はジュエルシード自体は欲しくないが、放置すれば予想外の被害を出すかもしれないから封印して集めているだけだ。だから、それをフェイトに渡すかはともかく封印してくれるフェイトの邪魔をすることはねーよ。」

そう言つて一息入れたところで、俺は言いたい事を言うことにした。

「それに俺はあんたがやるうとしていることにそこまで反対する気はないさ。…フェイトがアリシアの代わりにならない？ 当たり前だ。フェイトはフェイトだ、それ以上でも以下でもない。その事に勝手に失望したあんたがアリシアを蘇らせるっていうならどうぞ好きにやればいい。…でもな、フェイトは決して出来損ないなんかじゃねえよ。母親のために文句も言わずに危険なものを回収するあいつが、あんたに喜んで欲しいという思いでケーキをお土産に持つていくあいつが出来損ないなわけないだろうが！」

…プレシアさんの一連の言動で俺が一番許せなかったのは、フェイトの事を出来損ないと言つた事だった。あの発言は、ここに来る前にフェイトを見せてくれたあの笑顔を否定された気がしてどうしても許せなかった。

…勿論、フェイトにアリシアを重ねて見たり、フェイトの事を人形とか言つたり、虐待したりするのも気に入らないけど…。

ただ、あの時手に入れた情報から判断すれば、こう言えばきつと気がついてくれるだろうから、ここまでしか言わなくても大丈夫だろうがね…。

「…あんたには色々気に入らない事はあるが、俺はフェイトのジューエルシード集めを邪魔する気はない。むしろ、危なくなったら助けてやるつもりだ。…だけど、これだけは覚えておけ。俺はあんたの味方じゃない。フェイトの味方だ！」

そう言つて俺は転移魔法を発動させ、フェイトの家へと転移した。

第14話 とある家庭の裏事情（後書き）

「というわけで第14話でした。」

「今回は期限を守れたな。」

「何とかね…バイト先からの予想外な展開もなかったし…あ、そうでした。前は超えそうなだけでしたが、ユニークが10,000を超えました！PVも70,000を突破しましたし…本当にありがとうございます！！m(_____)m」

「新たにお気に入り登録してくれたり、評価して下さったからにもお礼を申し上げます。ありがとうございます。」

「…今の口上といい、プレシアにずっと『さん』付けだったことといい、キョウ君って意外と礼儀正しいんだね。」

「初めて会った人、しかもそれが年上なら最低でも『さん』付けにするのは当たり前だろ？」

「…まあ、そうだね…っと、今回も色々新しい能力や技とかがあったんで、解説コーナーに入ります！」

「…コーナーなのかよ…。」

・鵲鵲眼

「SAMURAI DEEPER KYO」にでてくる技の一つ。発動すると、両目若しくは片目に白い鳥（技名からして多分鵲鵲か

と思われる)が浮かび上がり、ものすごい殺気を放つとともに、
「時すらも制す」位の速さで動くことができる。本来は両目で発動させるのが正しいが、その分体への負担がすごいみたいで、その辺を考慮して片目だけ継承させることもあるとか。

ム↑ブポイント
・座標移動

「とある 術の 書目録」に出てくるテレポート系の能力。自分自身や触れているものだけでなく、離れた場所にあるものも転送することができる。ちなみに、原作ではこの能力の持ち主は、過去の事故のトラウマで自分自身を転送すると体調を狂わすほど激しく精神を消耗してしまうが、本作の主人公にそんなトラウマは存在しないので自分を転送しても問題ないです。

「…座標移動はともかく鵲鴒眼は前に出てただろ？何故に今解説しているんだよ？」

「あの時はこの解説コーナー無かったからね…メジャーな技とかならないけど、鵲鴒眼は知らない人がいるかもしれないだろ？」

「…まあ、いいか…で、次回はどうするんだ？」

「次回も何とか2日以内に更新したいと思います！…2日続けて遊びとか飲み会とか予定が入ってるけど…」

「…次回も期限を守りそうにないんで、そこは期待しないで下さい。」

「ちょー！ひどっ！ー！」

「…それでは次回、また会いましょう。」

「……自分の扱いひどくない?」

「…今更だろ?」

第15話 料理の最高のスパイスは…（前書き）

どうも和風好きです！

飲み過ぎで気持ち悪い＆頭痛いですが、何とか更新できました！

……出来たはいいのですが……

……あれ？自分が書くこうとした話とは随分違うような……

ま、まあ、とにかく楽しんでいただけたらと思います……

それでは第15話、始まります。

第15話 料理の最高のスパイスは…

プレシアさんの家 「時の庭園」とか言うらしい…名前からしてまたラスボスのダンジョンっぽいよな… からフェイトの部屋に帰ると、もう夜中になっていた。先に帰った2人を探していると、アルフが泣きながらフェイトの事を手当てしているのを見つけた。フェイトは…寝ているのか？

「ゴメンよ、フェイト…守ってあげられなくて…」

「アルフ、フェイトの傷の具合はどうだ？」

そう話しかけるとアルフは跳ね上がるようにこっちを向いた。

「キョウ！いつ帰ったんだい？…というか、アンタあの鬼ババに何もされなかったのかい！？」

…俺が帰ってきた事を気付いていなかったようだ…。それにしても鬼ババって…すごい言い方だな…。

「さっきな…見ての通り、俺は大丈夫さ…俺の事より今はフェイトの方が先だ。回復魔法をかけるからちよつと離れてて。」

アルフがフェイトから離れるのを見てから、俺は結構上級な回復魔法をかけた。

「リザレクション」

フェイトを囲むように魔法陣が展開したかと思うと、フェイトの傷

があつという間に治っていった…。

「うつ…。」

その後すぐに、フェイトは目を覚ました…さすが上級回復魔法。リザレクシヨ

「…ここは？」

「フェイト！大丈夫かい？」

「傷の方は治しておいたけど、どこか変な感じがするところかない？」

「アルフ…キョウ…うん、もう大丈夫。」

そう言うフェイトは立ち上がり、何か準備をし始める…何する気だ？

「…？フェイト、何してるんだい？」

「ジュエルシードを探しに行って早く母さんを安心させてあげなきゃ。傷もキョウが治してくれたから…。」

…プレシアさんよ…あんたの為にこんなに頑張ってくれる娘のどこが『出来損ない』なんだよ…アリシアって子がどんな子か知らないけれど、フェイトだって同じ位いい娘じゃないか…。

でも、今回はその行動は正しいとは言えないね…。

俺はフェイトの前に立つと、その額にデコピンを放つ。

「いたっ！」

「何言つてんだよ、フェイト。俺はのために傷を治したわけじゃないんだぜ。こんなところで無理したって余計なケガするだけだ。それにもう遅い時間なんだから今日はもう休め。…なんだったら俺が代わりに探しといてやるからさ…。」

「でも…。」

「でももへちまもないね。フェイトは可愛い女の子なんだからもつと自分を大事にしるよな。…それとも俺の事、信用してないのか？ 仮にも俺はお前に勝った男なんだぜ。フェイトより上手く、とまではいなくてもちゃんと封印すること位やってみせるさ。」

何だかフェイトが「可愛いって…／＼／＼」とかつぶやいていた気がするが、そんなことを気にしている場合ではない。そこに、アルフもフェイトに無理させたくないようで、俺の言葉に賛成してくる。

「そうだよ、フェイト。今夜はキョウに任せて休もうよ。それで明日から再開すればいいじゃないか…。」

フェイトは少し悩んだようだが、なんとか納得してくれたようで、

「…じゃあ、今回はキョウにお願いしようかな…。」

「ああ、任せとけ！」

とりあえず、今夜は休ませることに成功した。さて、時間も時間だし…。

「それじゃ、まずは晩御飯にしよう。今から作ると時間がかかるけど…。」

かといって今から外に出かけて外食するのもなあ…。

「大丈夫だよ、キョウ。出来るまで3分位しかからないから…。」

俺が悩んでいると、フェイトがそう言うてきた。へえ、3分で出来る料理があるんだ…ってちょっと待て！？それって…。

「なあ、フェイト…3分で出来る料理って…。」

そう聞くと、フェイトはさも当たり前のように、

「え？…もちろんこれだよ。」

冷凍食品やカップラーメンを取り出した。

「…いつもどんなものを食べてるんだ？」

「どんなものって…普通に肉とか野菜とかバランスよく食べてるけど…。」

…言ってる事を聞くだけだと素晴らしい食生活だけど、冷凍食品のハンバーグやホウレン草を取り出しながら言われると…何とも言えないんだけど…。

…プレシアさんよ…あんだ、フェイトに何つー食生活させてるんだ…。

隣にいるアルフは嬉しそうにドックフードのケースを持ってるし…。

「…子供の頃からそんなものばかり食べちゃダメだろ……わかった、あまり美味くはないけど、今日は俺が料理するよ…。」

そう言つて冷蔵庫の中を見せてもらつ。少しくらいは冷凍食品以外のものがあるだろ…と思いながら。

…ごめんなさい。正直なめてました。

まさか冷蔵庫の中には飲み物と冷凍食品しかないなんて……。

「…ちよつと家に帰つて食材取りに戻るけど…何かリクエストはあるか？」

「私は別に…。」

「あたしは肉がいい!!」

…アルフ、欲望に忠実だな。でも、フェイトの様子を見ると肉料理みたいな重いものより軽めのものの方がよさそうなんだよな…別々のものを作っている暇はないし…。

「…まあ、いいや。少し待っててくれ。」

そう言つて俺は転送魔法を発動させ、俺の家の台所へと移動した。

というわけで、我が家の台所に来たわけですが…。

忘れてたよ…昨日で食材のほとんどを使いきっていた事を…。

冷蔵庫の中は卵とかキャベツとかそういう基本的なものしか入っていないよ…。

…どうしよう？

今から食材を買いに行くにはもう遅い時間だし、何よりその後作り始めたら一体いつ食事にありつけることになるのかわからないし…。

…とにかく今あるもので作るしかない！

とりあえず、キャベツとかキュウリとかの野菜はサラダに使えるから持つてくとして…後は卵とか調味料とかで何とか誤魔化すしかないよな…。

…俺、あまり料理上手くないけど大丈夫だろうか…。

そう不安に思いながら、俺はいくつかの食材と調味料を手にはフェイトの家に戻った。

「…いただきます。」

…料理ってなんとかなるものなんですな…。

あの後、フェイトの家の冷蔵庫からトンカツ（勿論冷凍食品ですが）を発見した俺はそれと卵と調味料を使い、炊いたご飯を再び我が家に戻って入手することで、カツ丼を作ることになった。

それにサラダをつけて（見た目は）結構いい感じになった時は…とにかく感動した！！

カツ丼なら肉料理だし、食べれば元気になりそうだからちょうどよかったしね。

後は味さえ問題なければいいんだけど…。

さて、現在実食中ですが…。

自分が食べてみたところ、かつてのシオリの評価（『…いたって普

通。』第二話参照です！）がぴったりな味だった…ま、まあトンカツは冷凍食品のものを使っているからこれ位でもしょうがないんじゃないかな…自分で言うとうむなしいですねorz
さて、料理を作ったものとしては他人の評価が気になるところです…。

アルフはカツ丼をがつついている。それはもうがつつくと云うのがぴったりな位。肉が好きみたいだからカツを多めに入れたいのは正解だったかな？

「…キョウ、これおいしいじゃないか！肉がたくさんあって…！」

…それはカツ丼の味がおいしいと言っているのだろうか…それとも肉、つまりカツが多めに入っていると言っているのだろうか…。
アルフの言葉を聞いて、そう思っているとその横で食べていたフェイトがこちらを向いた。

「…うん。おいしいよ、キョウ。…何だかいつもの食事よりあったかい感じがする…。」

…いや、むしろ君達のいつもの食事（冷凍食品やカップラーメン）よりもあったかくないとか言われた日には二度と料理が出来ない位、自信が喪失してしまうと同時に、俺に「ザ 料理ヘタクソ…！」の称号が贈られると思うんですがね…。

「こんなにおいしいのは…やっぱりキョウが作ってくれたからかな？」

…流石に、顔をわずかに赤くしながらそういうこと言われると正直恥ずかしいんですが／＼／

…まあ、誰かが作ってくれたというだけで料理って美味しくなるものだからね…。

かつての辛口審査以降、料理はシオリがする事が多くなってしまったけれど、たまには俺が作ってみるのもいいかな…。

「ありがとう、キョウ。カツ丼おいしかった。」

そんな訳で晩御飯はなんとか2人にご満足頂く事が出来た。

料理は後片付けまでが料理という事で、食器を洗っていた俺にフェイトがお礼を言ってきた。

「あんまり料理は上手じゃないけど、美味しく出来たみたいで良かったよ。」

食器を洗い終わり、手を拭きながらフェイトのお礼に答える。

すると、フェイトがうつむきながら恥ずかしそうにもじもじし始めた…顔も赤いようだ、どうしたんだろうか？

「それでね…もし…機会があつたらでいいから…また…キョウの料理を食べてみたいんだけど…いいかな？」

俺の事を上目遣いで見上げながらそうお願いしてきた。

…何だそんなことか…。その位ならいくらでもしてあげるのに…っというか、それって顔を赤くしてもじもじしながら言うことか？

「（…マスター、いつか後ろから背中を刺されても知りませんよ…）」

…え？どういうこと？…俺何かマズいことした？

「（…もついいです。私はそんなマスターの最期を見届けるだけですから…）」

…縁起でもない事を言っている奴がいるが、とりあえず今はフェイトのお願いに答えてあげなければ。

「ああ、また今度作ってやるよ。」

「うん、ありがとう！」

そういうフェイトの顔はとても嬉しそうだ。

…時の庭園に行く前の笑顔といい、フェイトみたいな女の子が笑ったりするととてもきれいな笑顔になるよな…。

「なら今度も肉料理がいい！！」

…あんたは欲望に忠実すぎだ、アルフ…。

「…肉もいいけど野菜も食べるよ…。」

「え…。」

さて、このまままったりしているのもいいけど、フェイトとの約束を守って今夜はジュエルシードの探索といきますか…。

「それじゃ、そろそろ俺は帰るね。」

「もう帰っちまうのかい？」

「もう時間も遅いしな…それにフェイトの代わりにジュエルシードを探すって約束したし…」

「そうだったね…ならしょうがないかねえ…」

「…キョウ…」

突然フェイトが呼んだので、俺はフェイトの方を向くと、フェイトは心配そうな表情をしていた。

「…無理、しないでね…」

「それはこっちのセリフさ…。フェイトが今、俺を心配しているように、俺やアルフだってお前を心配してるんだから…もう少し自分を大切にしなよ…」

「…うん…わかった。」

こう言って、少しは無理しなくなればいいんだけどな…。

「…さて、フェイトに心配されない程度で頑張ってくるよ…それじゃフェイト、アルフ、おやすみ。」

「じゃあね、キョウ。今日は助かったよ。」

「…おやすみなさい。」

そして俺はフェイトの家を後にした。

今日は色々あったおかげで恐らくこの物語の黒幕や、重要な情報を知ってしまったわけだが…。

この先、どういう行動をとることになると、フェイトのあの笑顔を失わせはしない。その為に全力で頑張るとするか…。

その為には、色々と準備だの修行だのをすることになりそうだが…さて、何からするべきかな…。

そんな事を考えながら、俺は夜の街へと駆けていった。

翌日、はりきって朝御飯を作り、シオリに食べてもらったところ、

「…前から特に進歩していない。」

との評価を頂きましたorz

ただ、その後すぐに、

「…でも、たまにはキョウの料理を食べたいから…また作って…
／／」

とも言ってくれました。

…今度はもっとと上手になって料理しよう…と料理に対する熱が入った一幕でした。

…で終われば平和だったんだがな…。

その後、シオリがデザートを一口食べた瞬間、シオリの目が見開かれた。

そして、俺の肩を掴んだかと思うと、ものすごく熱が入った様子で話しかけてきた。

「キョウ…他はいい…他はどうでもいいから…デザートは毎日作って…!!」

俺は顔かざるを得なかった…だって、断ったら家ごと潰すって目が語ってたから…。

「まさかキョウのデザートがこんなに美味しいとは…翠屋にはまだ劣るものの、その後の上達次第ではいずれは…。」

…実は母親（勿論転生前のな）が菓子作りが好きでよく意味もなく作ってる事が多く、俺はそれを小さい頃からよく手伝わされてたんだが、その手伝った回数が尋常じゃない位多かったおかげか、スイーツ系だけは他の料理に比べて美味しく作れるという謎の特技（？）が俺にはあったんだが…。

まさかそれがシオリのスイーツ好きと組み合わせたってこんなことになるなんて…。

…まあ、『…いたって普通。』と言われるよりは美味しそうに食べてくれた方がうれしいからいいんだけどね…。

とりあえず、今日から毎日、俺はスイーツを作ることになりそうです…。

第15話 料理の最高のスパイスは…（後書き）

「期限内に更新できたのはいいけど……なんでこんな内容になるんだ？」

「……書いた自分が知りたいかも……予定では本編進めるつもりだったのに……いつの間にか料理の話になってしまった……」

「しかもオチが微妙過ぎるし……」

「……ま、まあ、いいじゃないか！キョウ君だってデザート褒められたんだし！」

「それは……まあ、いいけど……それにしても何故にカツ丼にした？」

「現在自分がトンカツ屋にバイトしており、一昨日カツ丼の具だけをもらってきたからです！」

「カツ丼の具だけって……どうせならご飯ももらってこいよ……」

「……さて、次回ですが本編に戻って進めたいと思います！」

「……2日以内に更新できるんだろうな……？」

「出来るさ！……多分。」

「……もういいや……それではみなさん、また会いましょう。」

「……もしかして完全に見限られた!？」

第16話 暴走、のちに……バレた！（前書き）

どうも和風好きです！

ついにお気に入り件数が100を超えました！

皆様、本当にありがとうございます！！

これからも精一杯頑張っていきたいと思しますので、どうかよろしく
お願いします！！m（――）m

それでは第16話、始まります！

第16話 暴走、のちに……バレた！

フェイトの代わりに探索を行った日、結局ジュエルシードを見つけ
ることは出来なかったが、そのままフェイトに言っとまた無理して
探しに行ってしまう可能性があったので、かつて回収していたジュ
エルシードを渡しておいた。

その後アルフに念話でフェイトが無理していないか聞いてみたところ、俺がちゃんとジュエルシードを渡した事で、少しは安心した様
で、まだ無理をする様子はないとのことだった。

なのでフェイトの方はしばらくは心配ないと考えていた…。

むしろ今心配なのは、実はなのはの方だったりする。

何故なら、最近のなのははよく物思いにふけつていたり、話しかけ
ても上の空になっている事が多いのだ。

…しかもその時の顔はどう見ても「私、悩んでいます。」と言わんば
かりの表情をしていたりするから、周りの人 特にアリサやすず
か には悩んでいる事がバレバレだったりするのだから非常に始
末が悪い。

すずかの方はなのはが自主的に話してくれるのを待つことにしたよ
うだったから大丈夫だったものの、アリサの方はなのはに話して欲
しいのに話してくれない事にイライラしていたので、いつかそれが
爆発してしまわないか心配だったのだが…。

「いい加減にしなさいよ!!」

…ついにアリサがいつまで経っても上の空なのはにキレてしまった。そして、怒ったアリサはそのまま教室を出て、さすがそれを追いかけて行った。

なのははアリサに怒られた事でさらに落ち込んでしまっし…。

…これどう見ても俺がフォローする役目だよな…？
全く…俺はそういう事は得意じゃないんだがな…。

「なのは、アリサは素直じゃないからああいう風に言っけれど、本当はお前の事を心配しているはずだと思うぞ。」

「うん、わかってる…悪いのは何も言わない私だから…。」

…おい、予想以上なのはのダメージが大きいんですけど…。

「なのは…お前が何を悩んでいるか、今は言えないのなら言わなくてもいいさ。きっと何か理由があるんだろうからな。…その代わり、その悩みを言えるようになった時でいいから、いつかちゃんと俺達に話してくれよ。…それまでずっと待っているからさ…。」

「キョウ君…うん、いつかちゃんと話すから今は待っててほしいの…。」

…少しは元気が出たようだ…あまりいい感じのフォローとは言えないものだったけど、元気が出たのなら結果オーライかな？

「それじゃ、アリサとすずかが帰ってきたらその事をちゃんと2人にも言つて、仲直りしなくちゃな。」

あちらのツンデレお嬢様の方はすずかに任せておけば大丈夫だろう。それに、俺が余計な事をしなくてもなのはとアリサならちゃんと仲直りできるだろうしな……。

そう言う事で、俺となのははアリサとすずかが教室に帰ってくるのを待つことにした。

あの後2人が教室に帰ってくると、なのはは2人にちゃんと話せる時になるまで待つてほしい事を伝え、アリサもそれをしぶしぶながらも承諾した事でなんとか仲直りをする事が出来た。

そして帰りは何時もの様に4人で帰り、仲違いしたままにすることなく今日の学校生活を終わる事が出来た。

そして日が暮れた頃になると、俺はジュエルシードの探索に出かけた。

なのはの悩みを早く解決させるためにも、悩みの原因であろうジュエルシードの早く封印して回収してしまうとするか……。

そう思い、いつもより少しやる気を出して探してみるが、なかなか見つからない。

そろそろ遅い時間になりそうだったことから、今日の探索を断念しようかとしたその時、広範囲での魔法の発動を感知した。この魔力の感じは…アルフか？

「マスター、今のアルフさんの魔法によりジュエルシードが強制発

動した様です！」

「全く…主のフェイトが無理をしなくなったと思ったら今度は使い魔のアルフかよ…結界を発動した方がいいか…？」

そう行つた直後、誰かの広域結界が発動した。魔力を感知してみると、フェイトやアルフ、なのはが発動させたわけではないようだが…。

「…おそらく、あのユーノと言うフェレットが発動させたと思われるます。」

「意外と高性能なんだな…ユーノって…やっぱり誰かの使い魔なのかな？」

「近くで調べてみないと何とも言えませんが…それより今は発動したジュエルシードの元へ行きましょう！」

「…そうだな。それじゃ…シリウス、セットアップ！」

シリウスをセットアップし、バリアジャケットを身に纏つた俺はフェイトとなのはがいるであろうジュエルシードの元へと移動した。

予想通り、強制発動されたジュエルシードのある場所では、なのはとユーノのペアと、フェイトとアルフのペアが争っていた。
…よく見てみると、なのはがフェイトに何かを話しかけているようだ。

「フェイトちゃん！話し合っただけじゃ、言葉だけじゃ何も変わらないって言うていたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらない事もきつとあるよ！ぶつかり合ったり、競い合う事になるのは仕方がない事かもしれないけど…だけど！何もわからないままぶつかり合うのは…私、嫌だ！」

…その気持ち、わからなくもないが戦いにおいてはあまりよろしくない考え方じゃないか？…まあ、少し前まで普通の小学生だった女の子に戦いにふさわしい考え方をしろと言う方がおかしいんだろうけどね…。

「私がジュエルシードを集めるのは、それがユーノ君の探し物だから…ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユーノ君はそれ元通りに集め直さないといけないから。お手伝いをするようになったのは偶然だったけど、今は自分の意思でジュエルシードを集めるの！自分の暮らしている町や、自分の周りの人たちに危険が降りかかったら嫌だから！…これが、私の理由！」

なのはの懸命な問い掛けに、ついにフェイトが口を開く様だ。

「…私は」

「フェイト！答えなくていい！」

なのはの質問に答えようとしたフェイトを制止したのはアルフだった。

「優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく暮らしている様な奴になんか何も教えなくていい！あたし達の最優先事項は、ジュエル

シードの捕獲だよ！」

…確かにアルフの言う事はフェイトにとって正しいさ。でも、折角フェイトが答えてくれそうだったのに…これじゃ、ある意味KYと言われちゃうぞ。

…それになのはの事をろくに知らずによくぬくぬく暮らしているのだと言えるな…初めて会った頃の孤独なのはを知る俺としては結構聞き逃せない発言だったりするが…。

…まあ、今のなのははぬくぬくと言われても仕方ないかもしれないけど…。

アルフの言葉を聞いて、気を取り直したフェイトはなのはを無視してジュエルシードの方へと飛ぶ。それを見たなのはも急いでジュエルシードに近づくが…。

…あれ？このままいくと2人でジュエルシードをはさむことになるよな？…そんなことしたら大変なことになるんじゃないの？

「（…はつきりとしたことはわかりませんが…最悪暴走して次元震が起きるかもしれませんね…）」

やっぱ、そうだよな…ってこれヤバくないか！？あいつらロストロギアという危険物を取り扱っているという自覚があるのかよ！？そしてシリウスも冷静にそんなこと言っている暇ないだろ！！

そう思い悩んでいるうちに2人のデバイスがジュエルシードをはさんでぶつかった。

その瞬間、ジュエルシードが脈打ったかと思うと白く輝き始める。ジュエルシードの魔力は暴発し、魔力の衝撃波が2人を吹き飛ばした。

…あのバカ野郎どもが！！

「それを言うなら女郎かと…」

「今はそんなこと言ってる場合じゃねえ！とりあえず封印すればいいのか？」

「それよりも同じくらいの量の魔力でジュエルシードの暴走を止めてから封印するのが最も確実かと思います！」

ならすぐにでもやるしかねえ！

「シリウス、2ndモード」

シリウスは俺の指示に従い、黒と白の2丁の拳銃へと姿を変え、同時に俺が肩にかけていた羽織が赤いコートに変わる。

俺はそのまま両手にある2丁の拳銃の銃口をジュエルシードに向けた。

「リミッターは外した方がいいか？」

「…このレベルなら外さずとも大丈夫かと」

「…その程度で相殺できるのか？」

「…マスターの魔力量がおかしいだけです…」

ちなみにリミッターとは何の事かと言うと、デバイスは持ち主の能

力や魔力にリミッターをかけられると知った俺が、ほとんどの能力が人とは比べ物にならない「真の壬生一族の体」をある程度普通の人に合わせるため、そして変に目立つ事がないようにほとんどの能力にリミッターをかけて下げてもらっているのだ。

まあ、リミッターを外さなくてもいいと言うならそのまま放つのみ！

「2人ともどいている！！」

フェイトとなのはの2人に声をかけて注意を促した後、魔法を発動する。

「バースト・エミッション」

銃口の前に魔法陣が展開したかと思うと、その前方に大きな魔力の球体が発生し、そこから極太のレーザーの様な砲撃が放たれる。

そして、その砲撃はまっすぐにジュエルシードへと命中した。

ジュエルシードから溢れていた膨大な魔力が俺の砲撃によって相殺され、ほとんどが感じられなくなった。

……どうやら今の砲撃で暴走が止まり、封印出来たみたいだ。

だが、このまま放置していたらまたあの2人によって暴走してしまうかもしれないので、今回は俺が回収するとするか…。

俺はまだ目の前で起きた事に呆然としている4人（…いや3人と1匹か？）をよそに、素早くジュエルシードに近づいてシリウスの中に取り込んだ。

なのはside

最近、私はある事をずっと悩んでいました。

それは私と同じ魔導師で、同じくらいの年の女の子のフェイトちゃん。

私達はジュエルシードをめぐって争っていて、たぶんこれからもぶつかり合うことになっちゃうと思うけれど…。

でもフェイトちゃんはいつも悲しい目をしながら戦っていて…どうしてそんな目をしながら戦っているのかがいつも気になっていました。

でも、その事ばかり考えていたせいでアリサちゃん達といる時も上の空になっちゃって、ついにアリサちゃんに怒られてしまいました。私が本当の事を言えないばかりにアリサちゃんやすずかちゃん、そしてキヨウ君に迷惑かけているのだから悪いのは私、そう思うと3人にさらに申し訳なく思っていました。

でも、キヨウ君はそんな私の事を励ましてくれて、いつか必ず話す代わりに今は待ってくれると言ってくれました。そして、アリサちゃんやすずかちゃんも最後には待ってくれると言って仲直り出来ました。

だから、早くみんなに話せるようになるためにもジュエルシードの封印を頑張らなきゃ…そう思っていたんだけど…

どうしよう…。

私とフェイトちゃんのデバイスがジュエルシードにぶつかった瞬間、レイジングハートにひびが入りました。そしてジュエルシードが白く光り、ものすごい量の魔力が出てきて私達は吹き飛ばされてしまいました。

「ジュエルシードが暴走してる！」

ユーノ君があわてた様子で叫んでいます。

このままだと、町に被害が出てしまいかもしれないのに…レイジン
グハートも壊れてしまい、私はどうすればいいかわからなくて何も
できない…。

そう思っていたら、聞いた事のある声が聞こえてきました。

「2人ともどいてろ!!」

そして、ジュエルシードとは違うものすごい魔力を感じたかと思う
と、そこからジュエルシードへまっすぐレーザーみたいな砲撃が飛
んできました。

その砲撃がジュエルシードにあたると、あんなに暴走していた魔力
は収まり、ジュエルシードも封印されてしまいました。

「そ、そんな…一撃で…」

ユーノ君もフェイトちゃんも、そして私も目の前で起きた出来事に
驚いて、呆然としていました。

「全く…封印していないジュエルシードの近くで戦うなんて…お前
ら少しは危険性とか考えろよな…」

さっきの声がしたので、その方を向いてみると、黒い着物の上に赤
いコートを袖を通さずに肩にかけている長い黒髪の男の子がこっち
に背を向けてジュエルシードをデバイスに取り込んでいました。

「とりあえず…ケガはないか、2人とも？」

そう言いながら私達の方に振り返った男の子は

「…キヨウ君…なの？」

今日アリサちゃんに怒られた私を励ましてくれた、幼馴染の
キヨウ君でした。

s i d e o u t

第16話 暴走、のちに……バレた！（後書き）

「ついに来た！来ましたよおおおー！」

「うおっ……いきなり大声出すなよ……で、どうした？ついに頭いかれたか？」

「フッフ……聞いて驚け！ついに感想が来たんだよおおおー！」

「それは、まあ……確かにうれしい話だな……バルディッシュ様、ありがとうございます。色々考えて100円玉は100円玉に訂正しました……で、100円玉ならレールガン、出来るんだよね？」

「……多分、いけるんじゃない？」

「……結局そういう思考回路かよ……で、初めて感想が来たというのにお前はまた更新するのが遅くなってるのか？いい御身分じゃねえか……。」

「何を言つかね、キョウ君？期限はちゃんと間に合ってるじゃないか。」

「……もうほとんど次の日になってるだろ！そこはちゃんと余裕を持って更新するべきだろうが……シリウス、2ndモード！」

「ちょー……！……お前まさか「バースト・エミッション」する気か？……アレ、G u t sが無くなるまで放ち続けるイジメ技だというのに

」

「バースト・エミッション！！」

「いやああああああ！！！」

今日の新技解説

・「バースト・エミッション」

「SO3」でマリア・トレイターが使う技の一つ。どんな技かは本文で描写してある通りで、あえて言うなら、原作の技は銃1丁だけで放つ技。ちなみに「SO3」には、バトル中に行動するために必要なGutsという数値があるが、この技はその数値が無くなるまで放ち続けることができるので、装備品とかステータスとか色々頑張ると、とてつもなく長い間放ち続けることが可能なイジメ技でもある。しかも確か1秒間に4ヒット位するのでかなり強い技である。

「…今回は明後日、勿論今回みたいなギリギリな時間にはさせませんので、皆様どうかよろしく願います。それでは皆様、また次回お会いしましょう。」

!

反省しやカオネネネネネ!!!」

[illegible]

第17話 ここに来てKYだと…！？（前書き）

どうも和風好きです。

…最近、各話の題名が変な方向にいつてしまっているような気がして心配です。

元々、自分は題名をつけるのが苦手でしたが、あまり変な題名にはなつてほしくないものです…。

さて、気を取り直して…。

今回はついにあいつがやって来ます…！

それでは第17話、始まります。

第17話 ここに来てKYだと…！？

さて、ジュエルシールドはとりあえず安全なところに移しといたから、あとは……フェイトやなのは達が無事かどうか確かめないとな……。とりあえず2人が無事か確認しようと振り返ったら、なのはが俺の顔を見てびっくりしていた。……あ！

「……キョウ君…なの？」

……特に変装とかしていなかったのであっさりバレてしまった。仮面とかフードとかでいいから変装しとけばよかった……。

心の中で少し後悔していると、アルフが俺に話しかけてきた。

「キョウ！…アンタどういうつもりだい？ジュエルシールドはいらないんじゃないのかい？」

「別に欲しいから取ったわけじゃない…今回は引き分けたと判断したから第三者である俺が預からせてもらっただけさ。本来なら今から勝負し直してもらおうという手段もあったけど、お互いのデバイスがその様子じゃそれも無理だろ？…だから次にフェイトとなのはが戦って、勝った方に渡してやるよ。」

アルフは不満そうだったが、それをフェイトが止めた。

「アルフ…今回は諦めよう…。バルディッシュがこれじゃ戦えないし…それに次勝てばいいだけなんだから…。」

主人であるフェイトに忠実なアルフはその言葉を聞いて、2人で帰るための転移魔法の準備をし始めた。

「悪いな、フェイト。次になのはに勝ったらちゃんと渡すからさ…。」

「

「…うん、キヨウはちゃんと約束を守ってくれるから…信じてる…。」

「

そう答えると同時にアルフの転移魔法は発動し、2人はこの場から離れた。

「…さて、次はなのはの方が…。」

ということではなのはとユーノの方を向くと、2人ともこちらを睨んでいた。

「…まあ、目の前で争っていた相手と話していたら、そりゃあ警戒するよな…。」

「…なのは、気をつけて！前にフェイトと親しそうに話していたところを見た事あるし、彼は敵かもしれない！」

おいおい、見られてたのかよ…って、え？いつ見られたんだ？

フェイトと話して、なおかつユーノがそれを目撃できそうな時は…

あ！すずかの家の時か！！

…だったらその時になるべくなのはにケガさせないように頼んだ事も評価してくれればいいんだけどな…。

そんな中、俺を睨んでいたのはが突然笑顔になって話しかけてきた…。

「色々聞きたい事はあるけど…キョウ君、なんでそんなにフェイトちゃんと仲良さそうなのかな？」

…ヤバイ。笑顔といっても、黒いオーラを纏わせながら目が全く笑っていない笑顔で…正直さっきのジュエルシードの暴走なんかよりもヤバイ…!!

俺への警戒心バリバリだったはずのユーノもそれを見ていつぞやの温泉の時と同じ位ガクガク震えてるし…。

「いや、あのですね…」

なのはさんに『おはなし』されない為にも、俺がジュエルシードを探している経緯を話すことにした…つい敬語になってしまったが…。

「へえ…じゃあ、初めはキョウ君とフェイトちゃんは敵同士だったんだ…。」

「敵同士っていうか…ジュエルシードを封印してたらやって来て、渡せって言ってきたから嫌だって答えみたら襲われたんで、戦うことになったって感じだな。…それで勝ったのはよかったけれど、本気でやり過ぎて怖がらせちゃったからお詫びに結局ジュエルシードをあげちゃったんだけどね…。」

とりあえず、こちらの事情とフェイトとの邂逅を大まかに話したところ、なのははそれで納得した様だ…よかった…俺、生き残れたんだ…!!

そう感動していたら、ジュエルシードをフェイトに渡したと聞いて

今度はユーノが食いついてきた。

「な、何て事してくれたんだ！ジュエルシードは危険なものなんだぞー！！それを渡すだなんて…」

「仕方ないだろ。その時はただジュエルシードは危険なものとか認識していなかったんだから…それを処理できると言う人が現れたら渡すのは自然だろ？…それに、そんな危険なものを封印することなくその側で戦いを始めて、拳句の果てに暴走させるなんて…本当に危険性を考えて行動しているのかよ…」

「そ、それは…。」

本当はいつぞやの念話を意図せず聞いたおかげでもっと知っていたが、それは黙っておいた。むしろ少し嘘が混じっているとはいえ、ほとんどが正論で出来ているのでユーノは反論できないようだ。

…それにしても、ユーノはやたらと俺にかみついてくるな。特に嫌がらせとかした覚えはないんだが…。

「…とにかく、君はなのはの敵じゃないと思っていいんだよね？」

「勿論。俺と大体同じ目的でジュエルシードを封印して回収するのはの敵になる必要はないからね。…ただ、フェイトとの戦いにおいては味方でもないからな。俺が1対1の戦いを邪魔するのを嫌っているのをなのは知ってるだろ？」

「…うん、そうだね。キョウ君ってどんな時も正々堂々としてるからね。」

…いや、正々堂々とまではしてないと思うんだけど…まあ、いいや

…。

「というわけで、今日はこれ位で帰るぞ。本当ならなのはみたいな女の子が出歩く時間じゃないしな。」

「じゃあキョウ君、一緒に帰ろ！」

「別にいいぞ。…どうせなら送っていくよ。」

とりあえず、ユーノはまだ多少納得していないようだったが、なのはには納得してもらえたようなので今日はもう帰ることにした。

次の日、学校が終わってなのはと一緒に下校していたらその道中にユーノが現れた。

どうやら昨夜壊れてしまったなのはのデバイス レイジングハートを修理していたらしい。で、その修理が完了したからなのはに届けに来たとか…。

「レイジングハート、大丈夫？」

「Condition green.」

「よかった…また一緒に頑張ってくれる？」

「All right, my master.」

「ありがとう。」

レイジングハートって全部英語なのか…その年で英語で話す相手と普通に会話が成立しているのはがすごいと思うんだけど…そう思うのは俺だけ？

「そう言えばキョウ君のデバイスってどんなデバイスなの？」

ふと、なのはにそう問いかけられた。

「（…別に話しても大丈夫だよな？）」

「（相手はなのはさんですし、最悪私が奪われるなり破壊されるなりしたとしてもマスターなら十分に戦えますし…大丈夫かと思いません。）」

「ああ、これが俺のデバイスのシリウスだよ。」

そう言って首からさげていた指輪をなのはに見せた。

「初めまして、なのはさん。私がマスターのデバイスであるシリウスです。」

「その指輪、なんでいつも首に下げてるのかと思ったら…デバイスだったんだね。」

「まあな、そう言うわけでこの指輪の正体はアリサとすずかには内緒だぞ？」

「うん。」

そう話し合っていたら、突然ジュエルシードの魔力反応を感知した。

「なのは!」

「うん!…キョウ君はどうするの?」

「今回は初めから参加するよ。またジュエルシードを暴走されちゃ困るからな。…それじゃ、行くとするか。」

「わかった。」

というわけでジュエルシードの魔力反応があった地点、海鳴臨海公園に来了。

すると、そこにはやけにでかくなった木が動いていた。

「今回は木がジュエルシードを取り込んだようですね」

「動物や人間が取り込んだなら注意して封印しなきゃならないが、木が相手なら気が楽だな…。」

「封時結界、展開!」

ユーノが結界を展開した。これでいつでも暴れられるわけだな…。

「とりあえず、封印するまでは俺も一緒に戦うからな。」

「うん、ありがとう!」

既にレイジングハートをセットアップしたなのは俺も戦いに参加する旨を伝えたら、突然後ろから金色の魔力弾が木の怪物に向かって飛んでいった。…この魔力はフェイトか？
木の怪物はそれを障壁で防ぐと、根をこちらに伸ばしてきた。

「シリウス、セットアップ！」

その指示の後、俺のバリアジャケットが展開され、シリウスは1・5 m程の大太刀になる。

そこに3本の根が襲いかかってきた。

3本か…それならあの技を試してみよう。ちょうどシリウスの長さもちょうどいいし…。

俺は右足を後ろ側に引いて半身になり、シリウスを構えた。3本の根は同時に俺に近づいてくる。

「秘剣 燕返し」

俺は円を描く3つの太刀筋を同時に放ち、3本の根を残らず斬り裂いた。

ふとなのはとフェイトの様子を見ると、彼女達は本体に向けて攻撃を放っていた。

ならば俺がやるべきなのはその邪魔になりそうな根の排除だな…。

そう決断した俺はいくつもの根を同時に排除するためにシリウスを腰帯に差して両手を空けた。

「トレス・オン
投影・開始」

俺は複数の黒鍵を投影し、両手で持った。

そして、地面を蹴って高く飛び上がり、鉄甲作用つきで投擲した。
黒鍵は全て根へと命中し、鉄甲作用によって貫くどころか決る。
…よ、予想外の威力だけど、これで根は全て片付けたな。

2人を見ると、互いに砲撃を放つ事で障壁を砕き、木の怪物を
消滅させ、ジュエルシードだけが残った。

本来なら2人のうちのどちらかに封印してもらえばいい話だが、昨
夜みたいにジュエルシードを取りあった挙句、暴走させてしまうの
は勘弁してもらいたかったので俺が封印することにした。

「シリウス、封印よろしく。」

「Yes , master .」

俺の指示を受けてシリウスは素早くジュエルシードを封印し、俺は
ジュエルシードの側に近づき確保した。

「…勝負の景品は俺が確保しておくから、2人は思う存分戦いなさ
い。」

その言葉を聞いて、俺の方を向いていた2人はこれから戦う相手に
向き合った。

「ジュエルシードには、衝撃を与えたらいけないみたいだ…。」

そつだよ、昨夜の失敗からちゃんと学んでくれたようで俺は嬉しい
よ…。

「うん…昨夜みたいなことになったら、私のレイジングハートもフ
イトちゃんのバルディッシュもかわいそつだもんね。」

…いや、そう言う理由じゃなくてさ…暴走したら周りに尋常じゃない被害が出るからとかそういう理由じゃないの…？

「でも、譲れないから…。」

そう言うてフェイトはバルディッシュを構える。

「私は、フェイトちゃんと話をしたいだけなんだけど…」

なのはもレイジングハートを構えた。…おお、いい感じに戦いの雰囲気になったな…。

「私が勝つたら…ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら　お話、聞いてくれる？」

そう言うて2人が相手に接近する。

これは見ごたえのある戦いになるんじゃないか？

そう期待しながら今から始まる戦いを見届けようとした。

が、2人がぶつかるかと思われた瞬間、2人の間に水色の魔法陣が展開し、光を発した。

そして、そこから出てきた黒い服の少年がレイジングハートを素手で、バルディッシュを杖　おそらく彼のデバイスだろう　で受け止めた。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

…これはあれかな？いわゆる「空気読めぬ残念な奴」ってやつです

か？

…それよりも「今からすごい戦いが始まる！！」…って少し…いや、かなり期待した俺に残ったこの虚しさはどうすればいいんだろう…。

「時空管理局執務官クロノ・ハラウンだ。話を詳しく聞かせてもらおうか。」

時空管理局って…何だっけ？

…ああ、そう言えばこの世界の魔法の事情をシオリに教えてもらった時に聞いたかも。

それにしても胡散臭い名称だよな…時空を管理するって…どこの神様気分だよ。

「まずは2人とも武器を引くんだ。このまま戦闘行為を続けるなら

」

続きを言おうとしたが、クロオとやら「クロノだったと思いますけど…」…に向けてオレンジ色の魔力弾が降ってきた。

「フェイト！撤退するよ、離れて！」

アルフは魔力弾をクロノとなのはに放つが2人はそれを難なく避ける。

その隙にフェイトが俺に近づいてくる　　いや、正確には俺が持っているジュエルシードに向かっているのか…。

でも勝負で勝ったらあげると言った手前、ここであげるのは審判役としては良くないよなあ…。

まあ、どこぞの時空管理局の執務官とやらのおかげでそんな場合でもないのもまた事実なんだけどね…。

俺がフェイトにジュエルシードを渡すべきか否かを悩んでいたら、例のクロノがフェイトに青い針のような魔力弾を放ってきた。

フェイトは咄嗟の事で反応しきれていないようだ。

それを見た俺は一瞬でフェイトに近づき、迫ってきた魔力弾を全てシリウスで斬り落とした。

「大丈夫か、フェイト？」

そう言っただけでフェイトを見てみると…特に外傷は無いようだ。

「キョウ！…ありがとう。」

「何のつもりだ！」

「何って…知り合いが聞いたことも無いような組織の人間に攻撃されそうだったから助けただけなんだが？」

「君が今やった事は公務執行妨害にあたる行為だ。逮捕されたくないければ大人しくしてもらおう。」

「はあ…こんな様子じゃ、なのははともかく、フェイトがここにいるのはマズいよな…」

「仕方ない。大人しく帰ってもらうためにも1つは渡すとするか…」

「ほら、フェイト。今回はこれ1つで退いてくれないか。」

そう言っただけで持っていたジュエルシードを渡す。

「でも、昨日の分は…」

「…経緯はともかく、結果的に戦うことなく渡してしまったんだ。なら、もう1つはなのはに渡さないとフェアじゃないだろ？…それにここで管理局とやらにつかまるのはマズいんだろ？…今回は大人しく退いた方がいい。」

「…わかった。今回はこれで撤退するね。」

「すまないねえ、キョウ。恩に着るよ。」

そう答えたフェイトとアルフは転移魔法を展開し、その場を離れた。

「ロストログアを渡した上に逃亡させるだなんて…何て事をしてくれたんだ！…もう言い逃れはできないぞ！！大人しくこちらの指示に従ってもらおうか！！」

…さて、緊急事態とはいえ、約束を破ってしまったわけだからなのはに謝らないと…。

「悪いな、なのは。ちゃんとフェイトと勝負して勝った方に渡すって言ったのに…。せめてもの償いというわけじゃないが、昨日のジュエルシードで許してくれないか？」

「おい！無視するんじゃない！！」

そう言ってシリウスから昨日手に入れたジュエルシードを取り出し、なのはに渡した。

「う、うん…別にいいよ。今回はしょうがないし…でも、キョウ君。あの人が何か言ってるよ？」

…何だよ、まだ何か喚いているのか？

「…いちいちうるさい執務官様だな。大体、なんで聞いたことも無い組織の人間の言う事に従わなきゃならないんだよ？」

「聞いたことないのは当たり前だ！ここは第97管轄外世界『地球』だ！その現地住民である君達が管理局の事を知らなくても何も不思議ではない！！」

…おい、コイツ今、自分で墓穴掘ったぞ…。

「だったらなんで管理外世界であるこの地球で偉そうに公務執行妨害だの大人しく従えだの言えるんだよ？管理外ってことはお前達管理局の権限が及ばないってことじゃないのか？」

「そ、それは…管理局には全ての次元世界の平和のためにロストロギアを回収し、しかるべき措置を行って管理しなければならない義務があるんだ！その為には、ロストロギアを適切に扱う事の出来ない管理外世界に赴き、干渉する必要がある！」

「…最初の方で言葉に詰まっていた事は気になるが…そういう考え方なら、干渉の必要性ってやつは…まあ1万歩ぐらい譲って認めてやる。…だが、だからといってお前等に公務執行妨害だので逮捕する権限があるわけがないだろ。第一、全ての次元世界の平和のために行動する奴が管理外世界の事を『ロストロギアを適切に扱う事の出来ない』と決めつけるのはいただけないんじゃないか？」

「う、うるさい！…とにかく、お前は今回の事件の参考人であるに加え、公務執行妨害をしたからアースラに連行させてもらおう！抵抗

するなら武力の行使も辞さない！！」

そう言つて、クロノはデバイスを構えた。

「…やれやれ、口喧嘩で負けたら今度は暴力に訴えてきたか…そう言う奴は大抵その勝負に勝てないというセオリーを知らないのかよ…。」

だが、なめられっぱなしは性に合わないんで…ここら辺で喧嘩売った相手がどんな奴なのか、一応教えてやるとするか…。

「それに…そんなにわめくと底が知れるぞ、三流。」

その言葉と共に、殺気とまではいかないが威圧感を発しておいた。

「お、見事なまでに冷や汗をかいてやがる。いい気味だ、ケケケ…。」

「お前…！その言葉、後悔させてやる！！」

「おいおい、俺がわざわざ実力差を教えてやったというのに怒りで我を忘れて勝負を挑むとは…これは三流からド三流に降格だな。」

まあ、彼には楽しみだったなのはとフェイトの勝負を邪魔しやがった分の鬱憤も溜まっていたことだし、ストレス解消の為のサンドバツクになつてもらつたしよう。

「かかつてこいよ、ド三流。格の違いを見せてやる。」

第17話 ここに来てKYだと…！？（後書き）

「…なあ、俺、前回で十分に反省してもらえたと思ってたんだけど…2日も遅れるってどういう事？」

「あの…ですね、11日に突然例のバイトの店長から「ヘルプのお願い」という名の「出勤命令」が来てしまいまして、11日から13日までの3日間、バイトを強制的に入れられてしまったんです…小説を書くにもそんな時間を確保することが難しく、今日やっと書き終えることができたんです…。」

「あつそ…まあ、いいや…面倒だし…とりあえず、言わなきゃならないこと先に言っとけ。」

「（面倒って…）それじゃ…まずは感謝の言葉を！錬鉄者様、感想ありがとうございます！そしてこの小説を読んでくれる皆様、おかげでPVは100,000を突破、総合評価は300に達しました！今回みたいに更新が遅れてしまう事のあるこの小説ですが、どうかこれからもよろしくお願いします！！m（――）m」

「さて…後は新技解説だな…。」

新技解説コーナー

・秘剣 燕返し

「Fate/stay night」に出てくる言わずと知れた技。アサシンのサーヴァントである佐々木小次郎が燕を斬ろうとして修

練を重ねた結果編み出した宝具の域にまで高められた剣技。

直線を描く一ノ太刀の斬撃と、それをかわした先に放たれる弧を描く二ノ太刀、そして2つの斬撃のつなぎとなる三ノ太刀・払いの以上3つの太刀筋によって相手を剣跡の牢獄に閉じ込めるというもの。実はこの技は3つの剣撃を「目にも止まらぬ速さで次々と繰り出して」いるのではなく、「多重次元屈折現象^{キシユア・ゼルレッチ}」という魔法同然な現象を起こして本当に3撃同時に繰り出しているのである。

なので、この技はたとえ事前に知っていても意外と対処のしようがない技だったりする。

「…なあ、いくらジュエルシールド相手だからってこれ使うのは勿体なくない？」

「ちょうど3本の根がそれぞれ3つの太刀筋に伸びてたからさ、つい実戦で使うとどんな感じなのか試してみたくなったんだよ。」

「さて、今回はオリキャラ系恒例とも言えるKYフルボッコ回となります。キョウ君はどんな感じでフルボッコにするつもりですか？」

「…お前とは違って、前回の反省を生かして戦うつもりだ。」

「…ん？前回？…前回っていつのこと？」

「次回予告はこの辺で…それでは皆様、また次回お会いしましょう。」

「最近、最後のお決まりのセリフをキョウ君にとられちゃってるんだよね…。」

「…それはお前が気絶してたり、半分死んでたりするからだろ。」

「元はと言えばキョウ君が攻撃してくるからだろ！」

「…何？反省してないの？」

「い、いえっ！そんなことはありません！ちゃんと反省してます…！あれ？何故見たことある構えをするのですか？」

「秘剣」

「ぐ、ご勘弁を…」

「燕返し」

「ふぎやあああああああ！…！」

第18話 KYとは違うのだよ、KYとは！！（前書き）

どうも和風好きです。

対魔導師戦としては2回目の戦闘です。

…皆様に満足してもらえるかとても心配なのですが…他の作者様とかぶらないように注意して書いたつもりですが、かぶってしまったていたらすみません。

それでは第18話、始まります。

第18話 KYとは違っのだよ、KYとは!!

なのはside

今回のジュエルシードの封印にはキヨウ君も協力してくれることになりました。

ふとキヨウ君の方を見してみると3本の根っこが伸びてきていました。キヨウ君に知らせようと思ったけど、そのキヨウ君は特にあわてた様子も無く剣を構えて、次の瞬間、いとも簡単に3本とも斬ってしまいました。

…やっぱり、キヨウ君って強い…。

そう思っていたら、ユーノ君もあのキヨウ君の攻撃を見ていたみたいで、とても驚いていました。

「1撃で3本とも斬り裂くななんて…。」

…え?…確かにとても速くて1回で斬ったように見えるけど、あれは3回で斬ったと思うんだけど…気のせいかな…?

そう思っていたら今度はキヨウ君が剣を腰に差して何かをつぶやきました。

すると、両手の指の間にたくさんの剣がどこからか出てきました。

…あの剣、どこかで見えた事ある気がするんだけど…。

あ、そうだ!初めてジュエルシードを封印したあの日に思念体から私を守ってくれた剣にそっくりなんだ!

…ということは、あの時助けてくれたのってキヨウ君なの?

「なのは!今のうちに…」

私が考え事をしているうちにキヨウ君は木の化物の根っこに剣を投げて斬ってくれたみたいで、今なら根っこに邪魔されずに本体に攻撃できるようになっていました。

私はその隙に砲撃を放ったら、フェイトちゃんも同じく砲撃を放ってくれたので木の化物の障壁を貫いて倒す事が出来ました。

そして、後に残ったジュエルシードはキヨウ君が安全に確保してくれたので、フェイトちゃんとお話するためにも戦って勝とうと思っただけ…。

「ストップだ！ここでの戦闘は危険すぎる！」

フェイトちゃんとの戦いが始まるうとしたそんな時に突然現れた男の子が私達の邪魔をしてきました…折角いい雰囲気だったのに台無しなの…。

そこに、フェイトちゃんの使い魔のアルフさんがそのクロノ君っていう男の子に攻撃した後、フェイトちゃんはキヨウ君の方に行こうとしたけど、突然クロノ君がフェイトちゃんに向けて魔力弾を放ってきました。

…危ないと思って心配していたら、フェイトちゃんの前に一瞬で来たキヨウ君が魔力弾を全部防いでくれました。

「大丈夫か、フェイト？」

そう言っただけでキヨウ君は少し話した後、手に持っていたジュエルシードを渡して早く逃げるように勧めていました。

フェイトちゃんはそんなキヨウ君を見た後、キヨウ君の言う事に従って帰ってしまいました。

…むう…前から思ってたけど、キヨウ君やけにフェイトちゃんと親しそつなの…。

さっきの剣の事も含めて後で『おはなし』なの！

そしたら今度はキヨウ君が私達の方に来ました。

クロノ君が何か言っていました。が、キヨウ君はそれを無視して勝手にフェイトちゃんにジュエルシードを1個渡してしまった事を謝ってくれたあと、昨日のジュエルシードを私にくれました。

…気持ちわかるけど、話しかけられているのに無視するのは流石にかわいそうだと思うの…。

「う、うん…別にいいよ。今回はしょうがないし…でも、キヨウ君あの人何か言ってるよ？」

あの子に話しかけられた事を教えてあげたら、キヨウ君は嫌そうな顔をしてクロノ君に話しかけました。

そして、しばらくキヨウ君とクロノ君の言い合いが続きましたが…どう見てもキヨウ君の方が勝ってるみたいでした。

「う、うるさい！…とにかく、お前は今回の事件の参考人であるに加え、公務執行妨害をしたからアースラに連行させてもらう！抵抗するなら武力の行使も辞さない！！」

そうしたらクロノ君はそう言って持っていた杖をキヨウ君に向けてきました。

…言い合いで負けたからってそんな事するのは乱暴すぎると思うの…。

「彼、管理局の執務官にあんなこと言って大丈夫なのかな？」

ユーノ君がキヨウ君の事を心配してそう話しかけてきました。

「大丈夫だよ、キヨウ君なら。」

「でも執務官ってことはかなりの実力があるって事なんだよ？あのキヨウでも勝てないかもしれないのに…。」

「確かにあのクロノ君っていう子も強いかもしれないけど、キヨウ君だってお兄ちゃんやフェイトちゃんに勝つほど強いんだよ？それにキヨウ君は全く怖がってないの。」

そういつた瞬間、キヨウ君の雰囲気が変わりました。
これなら　きっとキヨウ君は負けないの！

「かかってこいよ、ド三流。格の違いを見せてやる。」

キヨウ君とクロノ君の戦いが始まって少し経ちましたが…。

「…なのは。」

「…何、ユーノ君？」

「…キヨウが敵にならなくてよかったね…。」

「…そうだね。」

…流石にそれはかわいそ過ぎると思つゝの、キョウ君…。

side out

??? side

「…調子はどうかしら？」

「3人の魔導師のうち、ロストロギアを1つ手に入れた黒い魔導師1人に逃げられた後、クロノ君はもう1人の魔導師と交戦中です。」

「2人は仲間なのかしら…？」

「でも、黒い魔導師と敵対している白い魔導師とも親しそうでしたし…話を聞いてみないとわからないですね。」

「それで、戦いの様子はどうかしら？」

「はい、これなんですけど…。」

「これは…完全に遊ばれているわね。」

side out

「ほらほら、動かないと当たっちゃうぞー！」

「くっ、お前！！」

「喋っている暇があったら動く！ほれ、魔神剣、蒼破刃、空破斬、そして再び魔神剣！」

俺は斬撃を飛ばしてクロノを攻撃する。クロノはいくつかの攻撃は避けたり、障壁でどうにか防いだりしていたが、避けきれなかったり、障壁を碎かれて通ったりした攻撃によって確実にダメージを受けていた。

…ん？「確実にダメージを与えているのになんでまだ倒せてないんだ？」って？

俺が今回の戦いで使っているのは魔神剣、蒼破刃、空破斬だが、この技はいわゆるゲームで一番最初に覚えている技ってやつだ。しかも全て斬撃を飛ばして衝撃波が1つ出てくるタイプの技だし…。

その上、俺が手加減してあげているのだからこれを何度か受けた位じゃいくらド三流のクロノでも倒れないって。…まあ、勿論わざとだが…。

それこそフェイトの時みたいに「忌剣」レベルの技を使えば1撃で倒せるが、あの空気読めぬ残念な奴にはこれまでの鬱憤を解消するサンドバックになってもらわなきゃ割に合わないんでな…ちまちまと初級技でボコさせてもらうぜ、クロノよお…！

「クソッ…いい加減本気で戦え！」

「その本気じゃない俺に追い詰められているのはどこの誰だ？…まだまだいくぜ！魔神剣、魔神剣、魔神剣、蒼破刃、魔神剣、空破斬

「!!」

俺は連続で6回の斬撃を飛ばし、最初の3撃は避けられ、次の1撃は避けきれなかったものの障壁で防がれたが、もう1撃防いだところで障壁は砕け、最後の1撃は見事に命中した。

「ぐっ!!…まだまだ!!」

「そうだその意気だ、執務官殿。かといって遠慮は一切しないがな…今度は7連撃いこうか…」

こうして俺は魔神剣と蒼破刃、空破斬だけを駆使してクロノをいじめ…もとい戦っていた。

だが…そろそろ飽きてきたな…3つしか技を使っていないというのに未だに十分通用しているし…。少しは慣れて対策とかしろよ…。

「あ…それじゃ魔神剣、魔神剣、蒼破刃、空破斬、蒼破刃、魔神剣、空破斬で…」

…あらら、今度は2撃しか避けきれず3撃目と4撃目は障壁でなんとか防げたが、5撃目で無残に砕かれて6撃目と7撃目はまともに食らっちゃったぞ、アイツ…。

「おい、もうやられちゃったのか、執務官殿？」

それを聞いたクロノはこちらを睨み

「なめるなあああ!!」

周囲に無数の魔力弾を作る。

「ステインガースナイプ・マルチプルシフト！」

そして無数の魔力弾が俺に向かって飛んできた。

…おお、流石は執務官。そもそも執務官がどんな役職かは知らないが、あそこまでダメージを受けた後でこんな反撃をしてくるとは…戦闘力はそれなりだな。

…だが、この状況でこの程度の攻撃が通じると思ったら大間違いだ。俺は天 斬月状態のストロベリーさん並みの速さでシリウスを振るい、迫ってくる魔力弾を全て斬り裂いた。

「な、何！」

「何を驚いているんだよ。奇襲でも、動けない中での攻撃でもないんだから防がれたっておかしくはないだろ？…まあ、ド三流の君がまさかここまで追い詰められながらもあんな反撃が出来たのは褒めてあげるよ。」

そう言っただけ俺はある特異の錬気法と呼吸で気を高め始める。

「だからご褒美に…もう少し強めな技を放って終わらせてやるよ。…もう面倒だし。」

「お前！最後に行ったのが本音だろ！！」

クロノが何か言っているが気にせずに俺は高めた気をシリウスに込めて、構えた。

「剣掌 発剄」

俺はシリウスを振るい、剣に込められた気がクロノへと飛んでいった。

クロノはそれを避けずに障壁で防ごうとしたが、拮抗したのは少しだけで結局障壁が砕けたので、ともに攻撃を受けた。

そしてそのまま地面へと落ちていったところを見ると、気絶してしまっただよう。

…俺が意図的に長引かせたとはいえ、やっと終わったよこの戦い…いや、あれじゃただのいじめだな。

さて、どこぞの執務官殿は片付けたんだが…いじめの途中から気付いてはいたが、なのはとユーノ以外の視線を感じるんだよな…クロノの仲間か？

俺は盗撮されて喜ぶ趣味もないし、このままここにいたら面倒だし、さっさと帰るとするか…。

「それじゃ、なのはとユーノ、帰ろうぜ。」

『待つてもらえないかしら。』

俺がなのはとユーノと一緒に帰ろうとしたら、突然空中にモニターが出てきた。

そのモニターには緑色の髪の女性が映っていた。

「…貴女は誰なんですか？」

『あら、ごめんなさい。私はリンディ・ハラウン。貴方がさっきまで戦っていたクロノ・ハラウンの上司であり、母親です。』

…そついうリンディさんとやらはクロノの母親には見えない程若く

見えるんだが…。桃子さんしかり、この世界の人間は年をとらないのか？

「…で、そのクロノのお母さんが何の用ですか？…息子の敵討ちとか？」

「いいえ、先程の戦いはクロノが強引だったせいで起きたようなものだからそんな事するつもりはありません。むしろ、貴方にはそのせいで迷惑をかけてしまったのだから息子のした非礼をお詫びします。」

「へえ、これは…息子とはかく母親は話が通じると見ていいのかな？」

「私達はあなた達に事情を聞かせてほしいだけなの。拘束したり、敵対するつもりは一切ないから貴方達の事情を聞かせてもらえないかしら？」

「まあ、シオリの魔法解説にも出てくる程だから魔法を使える以上、今後も管理局とは接点があるんだろう。なら、ここで変に敵対しても面倒にしかないよな…。」

「わかりました。そちらが余計な事をしないと約束してくれるならいいですよ。」

「ええ、約束するわ。」

「…もし、その約束を破ったらいくら止めようと帰らせてもらいますんで…で、なのはとユーノはどうする？」

「え、えつと…私もキヨウ君についていきます。」

突然俺が話をふったからなのか、なのはがどもっていたが、結局事情を話しに行くようだ…でも顔赤らめながら『俺について行く』って…今どんな状況なのかわかってるのか？

そしてユーノ、何故お前がそんな目で俺を睨むんだ？…俺何かしたか？

「…僕もいきます。元はといえば僕が発端ですから…。」

『皆さんありがとう。それじゃ、アースラまで転移するわ。』

その言葉の後、管理局の人が転移してきて、俺となのは、ユーノ、そして気絶したクロノをアースラとやらに転移した。

…っていうか、アースラって何さ？

というわけで、アースラにいるわけだが…アースラって、てっきり隠れ家的な基地の事だと思ってたのに…えつと…次元空間航行艦船だって？…なんかどんどん「魔法少女」から離れてる気がするんだけど…。

ちなみにクロノは気絶したとはいえ、俺がかなり力を抜いていたおかげでアースラに回収された後すぐに目覚め、気絶している間に起きた事を聞いて俺達についてきた。

…正直俺の事睨んできてばかりでとても邪魔なんだが…。

「君達はいつまでもその恰好は窮屈だろう。バリアジャケットとデ

バイスは解除しても平気だよ。……お前は必ず解除しろ！」

それにこんな感じで突っかかってくるんだよ……面倒くせえ……。

「……負けた分際でよくそんなに偉そうなことが言えるよな……。」

「う、うるさい！これから母さ……艦長に会った。武装したままで会わせるわけないだろ……！」

あゝうるせえ……とはいえ、それが真実なら武装したままは流石にマズいか……。見た感じアースラにいる局員はほとんどクロノより弱いみたいだし、そんな奴らが束になって襲ってきてもデバイスなしで十分いけるからな……。

そう判断した俺は隣の騒音を止めるためにもさっさと解除して元の制服に戻った。

俺がバリジャケットとデバイスを解除したのを確認したクロノは、今度はユーノに話しかけてきた。

「君も元の姿に戻ってもいいんじゃないか？」

……え？元の姿？

「ああ、そうですね。ずっとこの姿でいたから忘れていました。」

そう言うとユーノが突然光り出して、俺やなのはと同年くらいの少年になった。

……え？これが『元の姿』？フェレットじゃないの？

「ふう……なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな？」

「え、え、ええええええええええ！？」

「な、なのは？」

なのはとユーノが何か騒いでいるが、そんな事はどうでもいい。
ユーノがフェレットではなく人間だったというなら…「あの事」はどうするんだ？

「あゝ！そうだ、そうだ、ごめん、ごめん。この姿は見せてなかったね。」

「だよね。そうだよね。びっくりした。」

2人の問題は解決した様だが、俺の問題は解決していない…。
俺はユーノに近づき、両肩に手を置いた。

「ん？どうしたの、キョウ？」

「ユーノ…お前が実は人間の男ってことは、男のくせに温泉でなのは達と一緒に女湯に入ったのかよ、とか色々突っ込みどころがあるが、今はそんな事はどうでもいい…。」

とりあえず、前置きからいってみたんだが…既になのはとクロノがユーノから少し離れ始め、ユーノが涙目になってるのは何故だ？これからが本題なのに…。

「…俺はな、このジュエルシードの一件が始まった時にある決意をしたんだ。それはな…無差別の念話をして俺の睡眠を邪魔した奴を即死刑にしてやろうという事だ。でも、その念話をした奴はフェレ

ツトだったという事を知って特別に不問にしてたんだが…実はそのフェレットの正体は人間でした、という事なら…今からおはなししても構わないよな？」

俺は笑顔でそう宣告した。

ユーノはそれを聞いて一気に顔が青くなり、なのはに助けを求めたが。

「あきらめて、ユーノ君。キョウ君は睡眠を邪魔されるのがとても嫌いな…。それに…私も色々ユーノ君とおはなししたいし…。」

なのはは助けるどころか、『おはなし』に加わるらしい。

クロノは冷や汗をかきながら俺達3人から随分離れたし…邪魔する奴はいないな。

「ユーノ（君）、おはなししようか。」

第18話 KYとは違っのだよ、KYとは！！（後書き）

「というわけでフルボッコ回でした」

「…この魔神剣系の技だけでフルボッコってどうやって思いついたんだよ…？」

「いやね、よくテイルズ系の対隠しボス戦の時に仲間が全員死んでプレイヤーキャラひとりだけって時に「魔神剣だけ連発 オーバーリミッツゲージ溜まる オーバーリミッツして秘奥義発動 また魔神剣連発」っていう感じで戦っただけど、これ、実際やられてる隠しボスからしたらストレス溜まるだろうなって思ったことからヒントを得たんだよね。実際、魔神剣系技だけしか使われない、しかもいちいち当ててくるってことになったら精神的にもくるだろうし…。」

「…はあ…どうせなら大技の実験台になってもらいたかったが、フェイトの時にあまり序盤に大技使い過ぎるとパワーバランス崩れるかもしれないから少しは自重するって決めたばかりだったからなあ…。」

「それじゃ、まずはらいぞう様、竜様、感想ありがとうございます！あと新たにお気に入り登録して下さったり、評価して下さったりした皆様もありがとうございますm（　　）m」

「クロノ批判やフルボッコ認容な感想が多くてフルボッコしやすいかったです。」

「あとは、新技も出てきたし…まあ、魔神剣とかはわかると思うけ

ど、一応解説します！」

新技解説コーナー

・魔神剣

テイルズシリーズのほとんどの剣士系キャラが一番最初に覚えている技。剣を振って地面を走る衝撃波を1発出すだけの分かりやすい技。威力はたいしてない。

因みにキヨウは少し改良して空中でも使えるようにしている。

・蒼破刃

テイルズシリーズの中で主人公が魔神剣を覚えな作品で代わりに覚えている技。こちらも剣を振って衝撃波を1発出すだけの技だが、魔神剣とは違い、剣を横方向に振る事で青い衝撃波を出す技になっている。まあ、威力は魔神剣と同じでたいしてないですが…。

・空破斬

こちらはスターオーシャンシリーズに出てくる技。これもまた剣を振って地面を走る衝撃波が1発だけ出てくる技だが、出てくる衝撃波は魔神剣より細く、正に太刀筋の延長線上のような衝撃波となるが、そのスピードは魔神剣より早い。勿論こちらもキヨウの改造により空中での使用が可能。

因みにS O 3には「無限空破斬」という技があり、G u t s が無くなるまで空破斬を放ち続けるというものだが、空破斬よりも1発の威力がかなり上がっているので、頑張って100発くらい放つとれっきとしたイジメ技となる。いずれクロノに使うつもりです（笑）

・剣掌 発剄

東京魔人学園シリーズで出てくる技。特異の練気法と呼吸で高めた

到力を剣先から遠間へと放つ気功術という、まあ、魔神剣よりは強い感じの技。第18話ではとどめとして使い、少し強そうな感じで描かれていましたが、所詮レベル1ケタで覚える程度の技だったりする。

「…いずれ無限空破斬をクロノに使ってどういうことだよ？また戦うのか？」

「まあ、多分色々とするさいクロノを黙らせるのに使うことになると思うよ。」

「…あのうるさいのがしばらく続くのか…少しは自重しろよ…。」

「さて、次回はアースラでの知能戦(?)となるでしょう。」

「…何？その天気予報みたいな言い方…」

「もしかしたら訂正するかもしれないだろ？」

「…計画的に書けよな…お前。」

「うるへー！！…それでは今回はここで失礼します。」

「それでは皆様…」

「また次回お会いしましょうー！！」

第19話 僕の勝ちだ…L!!（前書き）

どうも和風好きです。

最近暑い日が続いててヤバいです。

他人より暑さに弱い自分としてはもうエアコン効いた室内から出たくありません。

誰か地球温暖化止める発明とかしてくれないかなあ…。

とりあえず、暑さにやられてしまう前に更新しないと…。

それでは第19話、始まります。

第19話 僕の勝ちだ…L!!

「艦長、来てもらいました。」

クロノがそう言った後に部屋に入ると、そこには茶道の道具だのしおどしだのが置いてある和風な庭が広がっていた。

異世界の人間が作ったと考えればよくここまで和風に出来たものだと言えるが、現在れっきとした和風の家に住んでいる俺としてはこの「なんちゃって和風部屋」は結構見ていらついたりする。

「お疲れ様。…まあ、御三方とも、どうぞどうぞ楽にして。」

部屋にいたリンディさんはそう言った後に、ユーノの方を向いた。ユーノは先程の『おはなし』で、まるで魂が抜けてしまったかのような表情をしていたけど…まあ、いつも通りだよな？

「…彼は大丈夫なのですか？」

「え？何がですか？」

「何がって…いえ、何でもありません…。」

…何だかなのはに良くわからない事を聞いていたが、なのはの出すオーラを見て質問するのをやめたらしい。

そうしているうちにクロノが日本茶と茶菓子を持って来た。…さっきから思っていたんだが、他の次元世界にも日本文化っぽいものがあるのか？それともリンディさんの個人的な趣味か？

そしてクロノがリンディさんの隣に座ると話し合いが始まった。
まずはユーノがジュエルシードについてのこれまでのいきさつを説明している。

「なるほど、そうですね。あのロストログア ジュエルシード
を発掘したのは貴方だったんですね。」

「それで、僕が回収しようと…。」

「立派だわ。」

「だけど、同時に無謀でもある。」

…俺にボロ負けしたばかりだというのに相変わらずクロノは偉そうな事しか言わねえ…。少しは礼儀つてものを学んで来い。

「あの…ロストログアって何ですか？」

なのはがそんな事を質問していた。

…自分が集めている物がどんな物かちゃんと教えなかったのかよ…
ユーノ…。

既にシオリから解説してもらっていた俺は別の事について考えていた。

それはこれからのことだ。

不本意ながら管理局に俺という存在が認識されてしまった以上、今後一切関わりを持たないというのは無理な話だろう。

ならば、今ここで変に管理局との関係が悪化してしまうと、将来必ず面倒なことになるのは目に見えている。

だが、だからといって関係を持ち過ぎるのはマズいのだ。
俺とシオリには現在、闇の書というトップシークレットを抱えている。

第一級搜索指定遺失物ロストログアというからには、見つければ即没収という形で動くに決まっている。

俺達の計画にとってそれは何としても避けなくてはならない。

…まあ、今日のクロノとの戦いや他の局員の様子からしてそんな強制的な手段を用いられても十分抵抗できると思うけどね…。

それに俺自身が抱えている「真の壬生一族の体」という秘密もある意味問題なんだよなあ…。

常人より全体的な能力が高く、その上不老長寿だなんて知られたらもれなく人体実験の研究対象になる事は間違いない。

…マジでどうしたものかな…。

…仕方ない、シオリに相談するか…。

「（シオリ、少し面倒なことになった。）」

「（…どうしたの？）」

そして俺は他人には気付かれない秘匿された念話でシオリに今日あったことを説明した。

「（…この貧乏神。）」

「（何ですと！？）」

「（ベストだったのは闇の書の件が片付くまで接触しない事だったのに…）」

「（…悪い。）」

「（…でもだからといってなのはとそのフェイトって子を見捨てるわけにもいかない。だから、今回は状況が状況だからしょうがない。）」

「（…それで、どうすればいいかな？）」

「（今回は管理局に協力するのが妥当。…でも絶対に借りを作る形になることは避けて。そうなれば今後も協力させられる事になるから。）」

「（了解。ついでになのはの方も同じ待遇にさせればいいよな？）」

「（勿論。あの子が魔導師マジックの世界に完全に入り込むにはまだ早すぎるから…。）」

「（…そうだな。それじゃ、交渉頑張ってみるよ。）」

「（そう…。秘匿用の念話とはいえ盗聴されてしまう可能性もあるから今後はそちらから念話しないで。今、禁録の書の管理人格としての私の存在が知られる訳にはいかないから。）」

そう言ってシオリとの相談は終わった。

さて、あとは俺達の待遇についてだな…。

「これよりロストログア、ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます。」

そう考えているうちになのは達の話は終わったみたいだ。

…え、何？協力しなくていいの？

「「え？」」

「君達は今回の事は忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい。」

「でも、そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ。民間人が出る話じゃない。」

「でも…！」

「…まあ、急に言われても気持ちの整理もつかないでしょう。今夜一晩、ゆっくり考えて、3人で話し合って、それから改めてお話をしましょう。」

…へえ…流石提督だけあってなかなか巧妙な策略をするじゃないか…。

危ない、危ない。シオリの忠告がなければ面倒という理由で見逃してたかもな…。

だが…気付かれないと思ったら大間違いだ。

「なのは、ユーノ、さっさと帰るぞ。…あと、改めてお話するとか必要ないんで。これで失礼します。」

「お前！その言い方は何だ…！」

「やめなさい、クロノ。…キョウ君、何故必要ないのか聞かせても

「ええませんか？」

「…リンディさんならわかってもらえると思ったのですが…俺がこの話し合いに応じる時にどんな条件を出したか覚えてますか？」

「…確か『余計な事はしない』だったかと…」

「以上です。お疲れさまでした。」

「それがどうした！僕達は余計な事などしてないだろ！！」

クロノは相変わらず俺にかみついてくるが…どうやらリンディさんの意図を理解していないようだな。

なのはとユーノの顔を見てても、わかっていないみたいだ。

だが、リンディさんだけは俺の発言を受け、顔を僅かに強張らせていた。

「それじゃ易しく解説してやるが、ジュエルシードについては民間人が介入するには危険で、介入されるのはむしろ邪魔だと、そう考えていいんだよな？」

「だからそうだといっている！」

「…だったらなんで改めてお話しする必要があるんだよ？お前の話が本当なら、この場で本人の意向など却下して今後関わらせないようにするのが正しい対応じゃないのか？」

「そ、それは…。」

「まあ、大体予想はつくけど…。先程この部屋に来るまでアースラ

に乗っている局員の様子を見てたけど、どうやらなのは以上…いや、なのはと同じ位のレベルの魔導師はクロノとリンディさん位しかないみたいだな。ならば、そんな状況下で部外者である俺やなのには対する対応として最もベストなのは、邪魔者として排除する事でも、ただ単に協力してもらう事でもなく、協力させてあげることだ。

「

そこで完全にリンディさんの顔色が変化した。

「そうだとすれば後は簡単。この件に最後まで関わりたがっているのはの協力を一度断る事で、後日なのはから協力させて欲しいと言わせればいいだけさ。そうすれば今回の件では自分達の指揮下で動かす事が出来るし、うまくいけばなのはが協力する事で俺がおまけでついてきたり、解決した後も何かあれば働かせることもできたりするわけだ。…いやあ、これだけなら100点満点な回答だったんですけど…俺という存在と俺の出した条件を受け入れたのが失敗でしたね、リンディさん？」

リンディさんは完全に撃沈…ふっ、勝った！

「それじゃ、俺達はここで失礼させてもらいます。管理局の方々が無事にジュエルシードを封印してくれる事をお祈りします。」

…関係を悪くしたくないのになんでこんな事言うのか、って？

さっきも言ったけど、現在、アースラはなのは以上の魔導師はクロノとリンディさん位しかない様な人数不足な状況だ。

という事は、俺やなのはのことはのどから手が出る程欲しいはずだから…。

「待つて！」

…まあ、こうなるわけですよ。

「何でしょうか？一応約束を破ったくらい止めようと帰ると言うておいたはずですが？」

「貴方達の善意を利用して貴方達から協力させようとした事を認めるわ。ごめんなさい。」

「母さ…艦長！」

善意って…なのははともかく、俺はそんな大層なものではないんだがな…少しやり過ぎたか？

「ですが、私達には貴方達の力が必要なのです。どうか力を貸してはもらえませんか？」

…まあ、こういう形なら協力しようとはあらかじめ決めてはいたが、ここであっさり承諾したら不自然だよな…。
なら、先になのはに言わせてみるか…。

「お前はどうするんだ、なのは？」

「ふえっ!？」

「一応向こうはお前をいい様に利用しようとしていた連中だが…それでも管理局に手を貸すか？」

なのははしばらく悩んだ後、リンディ達に向かった。

「私は…それでも手伝いたいです！自分の暮らしている町や周りの人を守るためにも。それに、まだフェイトちゃんとお話できてないから。だから…手伝わせてください！」

「僕は最後までなのはについていきます。それがジュエルシードを発掘した僕の使命だと思うから。」

全く、このお人好しめ…。まあ、だからこそそれを利用しようとしたリンディさんを許せなかったというのも少しあったんだけどな…。

「…と、いうことらしいですよ。俺は家の周りに落ちてきた危険な代物进行处理するために動いてるんで、管理局に協力した方が楽そうですし、借りも作れて一石二鳥みたいですから協力しますよ。それに、そこのお人好し2人も放っておけませんしね。」

「にゃ！…キョウ君、ひどいの…。」

「ま、慰謝料代わりってわけではないんですが、1つだけいいですか？」

「何でしょう？」

「別に難しいことじゃないですよ。今後俺が使うであろう魔法だとかは他言しないで欲しいだけです。勿論、事件の報告にも載せないでください。無理だったら全部なのはが解決してくれたってことにしてくれてもいいですし。」

「…どういうことですか？」

「いえ、変に目立ちたくないだけです。だから手柄だってなのはに

あげるし…何だったらクロノにあげましょうか？」

「お前にもらってまで欲しくはない！」

「…わかりました。その条件を認めます。」

こうして俺達3人は管理局に協力することが決まった。

アースラ side

「すごいや、どっちもAAAクラスの魔導師だよ！」

「ああ…」

2人が見ているモニターにはなのはとフェイトが戦っているシーンが映っていた。

「こっちの白い服の子はクロノ君の好みっばいかわいい子だし。」

「エイミィ！そんなことはどうでもいいんだよ…。」

「魔力の平均値を見ても、この子で127万、黒い服の子で143万！最大発揮時はさらにその3倍以上！！魔力だけならクロノ君より上回っちゃってるね！」

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない。状況に合わせた応用力と、的確に使用できる判断力だろ。」

「それは勿論。信頼してるよ。アースラの切り札だもん、クロノ君は！」

そう言っているうちに、リンディがやって来た。

「…あ、艦長！」

「ん。ああ…2人のデータね。」

「はい。」

「確かにすごい子達ね。」

「これだけの魔力がロストログアに注ぎ込まれれば、次元震が起きるのもうなずける。」

「でも…その次元震を一撃で止めちゃったあの男の子もすごいよね…。」

「彼の キョウ君のデータもあがったかしら？」

「はい、あがったことはあがったんですが…魔力値はS+ランク以上でした。」

「そんなに…。」

「それに、彼が出した条件で『これから使う魔法だとか』と言った理由もわかりました。」

そう言っと、モニターに映っているものがキヨウとクロノの戦闘にかわる。

「クロノ君との戦いで最後にクロノ君を倒した技を分析してみたんですが…デバイスから出ていたのは魔法や魔力とは全く違うものだとわかりました。」

「…Sランク以上の魔力を持ち、魔法とは異なる力を使うだなんて…あいつはいったい何者なんだ…？」

「話を聞くと、なのはさんの幼馴染みただけ…一方で黒い魔導師の子にもつながりがあるみたいだし…。」

「…でも、ジュエルシードを集めてた理由は確か住んでる町に降ってきたロストログアの被害を防ぐためですよ？なら、そこまで危険視しなくても大丈夫なんじゃないんですか？」

「とはいえ、油断はできない。そもそもその理由も本当の事なのか信用できないし…」

「…クロノ君、ボロ負けしたからってそんな言い方するのは良くないと思うなー。」

「エイミィ！」

「そうよ、クロノ。元はといえば貴方が強引だったのがいけないんだし…。」

「母さ…艦長まで！」

「…とはいえ、キヨウ君の事を完全に信用するわけにもいかないのもまた事実。キヨウ君の事を注意することも忘れずにいきましょう。」

「了解！」

side out

さて、とりあえず一度家に帰ることになり、海鳴臨海公園に移動してもらい、後は帰宅するだけのはずだったんだが…。

「キヨウ君、お話したい事があるんだけど…いいかな？」

…え、何？…俺、何かした…？

2日続けて『おはなし』とか耐えられる気がしないんだけど…。

「だ、大丈夫ですよ…。」

…まあ、だからといって断れるわけでもないんだがな…。

「私が初めて魔法を使ってジュエルシードを封印した時に助けてくれたのって…キヨウ君なの？」

…あれ？いつもと違って普通の、常識的なお話なんだけど…。
むしろ問題はその内容の方か…どうやってバレた？それともただの勘か？

「…なんでそうだと思ったの？」

「今日、ジュエルシードを封印する時にキヨウ君が使っていた剣が、あの時私を助けてくれた剣と同じだったから…。」

…投擲、しかも鉄甲作用をする時に使う剣を常に黒鍵にしていた事がこんなところで仇になるとは…。まあ、バレてはならない事ではないしな…。

「…そうだよ。あの時、思念体に襲われているのを助けるためにあの剣　黒鍵を投げたのは俺だ。」

「そっか…でも、なんでその後言ってくれなかったの？」

「別にいちいちそんな事言わなくてもいいだろ？…しかもその時はなのはがなんであんな事をしていたのか、そもそも思念体がどんなものか知らなかったんだから。」

「それならしょうがないか…。」

なのははどうか納得してくれたようだ。

…ここで納得してくれないと、いつ『おはなし』に移行するかわからないからなあ…。

「ねえ、キヨウ君…」

「…何だ？」

「ありがとう。あの時助けてくれて…。それにさっきの時も…。」

…？あの時はわかるが、何故にさっきの事でお礼言われるんだ？

「キヨウ君、私達が協力するって言って放っておけないから協力するって言うてくれたんでしょ？」

「…それは違うな。俺は元々管理局から協力を要請されていればそのまま協力するつもりだったけど、それをこっちから協力させようとしていたのが気に入らなかったから言うてやっただけさ。別になのはがいたから、とかそういう理由じゃないから気にする必要はないよ。」

「それならもう気にしないけど…でも、ありがとう。」

むう…これはお礼を受け取るまで言い続けそうだな…仕方ないから受け取るか…。

「…どういたしまして。」

俺がそう答えると、なのはは満足した様な笑顔を浮かべて右手を俺の左手とつないできた。

「キヨウ君、一緒に帰ろ！」

そして笑顔のまま、俺にそんな事を言ってきた。

フェレットになってるのはの肩に乗っていたユーノに睨まれている気がするが…気のせいだろ？そもそも睨まれる理由がないんだし…。

「…そうだな。それじゃ、一緒に帰ろうぜ。」

こうして俺達はやっと家へと帰る事になった。

第19話 僕の勝ちだ…L!!（後書き）

「…というわけで第19話でした。ほとんど交渉で終わってしまいましたね…。」

「…俺、あまり交渉とか好きじゃないんだが…。」

「まあ、キヨウ君が実はバトルマニアなのは知ってるけど、我慢しなさい。」

「…とはいえ、今回は感想も来なかったし、新技も出なかったからぶっちゃけ後書き要らないんじゃないかねえ…?」

「そうだよねえ…っていうか、前回のフルボッコに対して賛否はともかく何かしら感想がくると思ってただけど…何も来ないとは…逆に怖いです（涙）」

「あと、今回の交渉の様子も他の作者様とかぶらないか怖いよな…。よくある展開だし…違うと言ったら剣掌・発剋が魔力による技じゃないことがバレたくらいじゃね?」

「その事も含めて第18・19話は反応が怖い話です…もし、どなたかの小説とかぶってしまいましたら申し訳ございませんm」

「m」

「…まあ、とにかくこれで俺は管理局側になっちまったわけだが…正直面倒なだけ…」

「とはいっても、そこまで管理局に肩入れさせるつもりもないよ?」

「…じゃあ、なんで管理局に協力することにしたんだよ？」

「あえて言うなら…場所の確保のため…？」

「…は？」

「…まあ、いずれわかるよ。それじゃ、今回はこのあたりで・・・」

「それでは皆様、また次回お会いしましょう。」

「また、最後のセリフ言われた…orz」

「…あの流れだったら俺が言っのが自然だろ…。」

「でもお…最後のセリフは言いたんだよお！！…自分、ここ位しか出るところないし…。」

「…ま、まあ…次回は頑張れよ…。」

第20話 竜巻のち落雷……天気悪過ぎだろ！！（前書き）

どうも、和風好きです。

最近、スランプ気味なのか、いい表現が思いつきません。

そのせいで、正しくない文法や表現を使っているかもしれません。

どこか気付いた点があればアドバイスを下さると有り難いです。

それでは第20話、始まります。

第20話 竜巻のち落雷……天気悪過ぎだろ！！

俺となのは、ユーノが管理局に協力してから10日が経った。

俺達はアースラで泊りがけで待機し、局員の連中が捕捉したジュエルシードを現場に出向いて封印、回収するという形で動いていた。

…正直、労働法って知ってますか？…と聞きたい。

だが、良く考えてみれば管理局は地球とは別の世界にある組織だ。ならば働く事が出来る年齢は地球よりも低いのもかもしれない。

現に、アースラでも偉そうにしているクロノは、俺に初級技でボコされる程度とはいえ執務官という役職を名乗っているのだ。

俺達と同じ位の年齢に見える奴がそんな感じなら、10歳くらいから働けるようになる世界である事は十分推測できる。

…まあ、そこまで働いているおかげなのか、この10日間で俺達は3つのジュエルシードを回収することが出来た。

とはいっても、実は俺はほとんど働いていないに等しいんだが…。

…いや、別にずっとアースラに引きこもっているわけではないよ？ただ、俺も一緒に出向いたとしてもほとんどなのは1人でどうにかなる程度なので、結局現地で特に何もしていないのだ。

…その代わりとは言っては何だが…。

「アクセルシューター シュート！」

「…どうした、この程度じゃ簡単に避けられるぞ？」

「まだまだなの！…撃ち抜いて デイバインバスター！！」

「うおっ！…そんな物騒なものいきなり撃ってくるなよ…」

「にゃっ！物騒なんてひどいの！」

…なのはに攻撃されている。
何故こうなっているかというと…。

「魔法を教えて欲しい？」

「うん…キヨウ君、クロノ君やフェイトちゃんに勝っちゃうほど強いし、ジュエルシードの暴走だつて1人で止められるから…教えてもらうならキヨウ君が良いかなって思つて…。」

「…ちなみに理由を聞いていい？」

「…私、ジュエルシードが暴走した時、見ているだけで何も出来なかった。あの時はキヨウ君が止めてくれたから無事に終わったけど…でもそれじゃ駄目だと思うの！…それに、フェイトちゃんときちんとお話するためにも同じ位強くなりたい！！」

「そうか…残念だけど俺も魔法について詳しいわけじゃないから、正直俺よりもユーノやクロノに教えてもらった方が良いと思う。…でも、なのはが望むのなら「戦い方」を教えてあげるよ。」

「本当！ありがとう、キヨウ君！！」

「それじゃ…まずは俺と戦ってみようか。」

「にゃ！キヨウ君と戦っても勝てるわけないの…。」

「いや、勝ち負けじゃなくてなのはがどんな戦い方が得意で、どんな戦い方が下手か知るためだよ。…だから俺に勝ちにいくつもりで本気でやってくれ。」

「…でも、そんなことしたらキヨウ君がケガしちゃうかも…」

「大丈夫、伊達にフェイトやクロノに勝っているわけじゃないさ。」

「…わかった、本気で行くからね！」

…とまあ、こんな感じで始まったわけですよ。

そこでなのはは近距離戦闘が苦手な遠距離戦闘が得意だという事がわかったので、現在、アースラの訓練室を借りて、接近してくる俺を近づけさせないという訓練をやっているのだ。

…それにしてもなのはの奴、アルフが言う程決して弱くはないな…。
むしろ、たまになのはが放ってくるディバインバスターは寒気がしてつい本気で避けてしまう程なんだが…。

あいつ、本当に「魔法少女」か？

…まあ、いいや。今はその遠距離魔法を鍛えてやるのが先決だな。
俺はなのはの攻撃を避けきって接近し、なのはの肩に手を置く事で今回の訓練を終わらせた。

「うゝ…またキヨウ君が近づいてくるのを阻止できなかったの…。」

「まあ、そう悔しがるなよ。なのはだって最初よりも上手く阻止できようになってるし…。」

「…でも、弱点を克服するなら近くでの戦い方を鍛えた方が良いんじゃないの？」

「もし、なのはが長い時間　それこそ何ヶ月も鍛える時間があるのならそれもいいけど、そんなに長い時間も修行するわけにはいかないだろ？ 短期間で効率よく強くなりたいたいなら弱点を克服するんじゃないくて、得意な事を鍛えた方が良いんだよ。…それに、戦いに勝つために最も大切なのは「相手が勝てる状況を避ける」事と「自分が勝てる状況を作る」事なんだ。さっきの近づいてくる俺の邪魔をするっていう訓練は正にこれさ。「相手が勝てる状況」、つまり俺がなのはの近くに居るのを阻止して、「自分が勝てる状況」、つまり俺がなのはと離れている状況を作り出す練習をしていたんだよ。」

「…そうなんだ。そこまで考えているなんて…やっぱりキョウ君はすごいんだね！！」

「…まあ、俺は教えてあげる立場にあるんだから、それぐらいはやらないとな。」

そんな事を話していると、突然警報が鳴り始めた。

『エマージェンシー！ 搜索域の海上にて大型の魔力反応を感知！』

「なのは！ キョウ！」

突然ユーノが訓練室に入ってきた。…なんかタイミングがやけにいいな…もしかして外で待機していたのか？

「キョウ君、これって…。」

「十中八九、ジュエルシールドだろうな…とりあえずブリッジに行くぞ、なのは、ユーノ！」

「うん！」

「わかった！」

というわけでブリッジに来たわけだが…。

モニターに映っていたのはフェイトとアルフが竜巻に向かって魔法を使っているところだった。どうやらその竜巻はジュエルシールドによって発生したものらしい。しかも6つもあるとか。

「あの、私急いで現場に！」

「その必要はないよ。放っておけばあの子は自滅する。」

「え！？」

「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たしたところで叩けばいい。」

「でも…！」

「私達は常に最善の選択をしないといけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実…。」

…確かにそれこそが最善の選択だろうさ。どっちに転ぼうと、ジュエルシールドを回収し、フェイトを拘束する可能性は高いしな。だが

…。

「…気に入らないな。」

「…何だと!？」

俺の言葉にクロノがかみついてくる…だが、そんな程度で言葉を止めはしない。

「気に入らないって言ったんだよ、その考え方が。…第一、目の前で苦しんでいる女の子を簡単に見捨てような奴が、全ての次元世界の平和なんか守るだなんてよく言えるよな…行くぞ、なのは。…ユーノはどうする?」

「勿論、一緒に行くよ!」

その答えを聞いて俺はなのはとユーノの足元に魔法陣を展開させて転移魔法を発動させた。

「ごめんなさい…高町なのは、指示を無視して勝手な行動をとります!」

そう言っただけなのはとユーノをフェイトの結界内へと転移させた。

「待ちなさい。どこに行くつもりですか?」

「フェイトを助けに行きます。…それに俺達は貴女達に協力しているだけだ。貴女の指示に従う義理なんかないはずですけど。」

「ですが…。」

「それじゃ、こっちは急いでいるんでこれで失礼します。」

そう言つて俺自身もなのは達の元へ転移した。

転移した後すぐにシリウスをセツトアップして周りを確認してみると、いきなりアルフがなのは達に攻撃しようとしていた。

「フェイトの邪魔をするなあぁ！」

おいおい、なんでいきなり攻撃されてるんだよ、あの2人は！
アルフがなのはに飛びかかって来たので俺はシリウスでそれを受け止めた。

「落ちつけ、なのはは別に戦いに来たわけじゃない。フェイトを助けに来たんだ。」

「フェイトちゃん！」

そう呼びかけてなのははフェイトの隣に移動する。

「一緒にジュエルシードを止めよう！」

すると、レイジングハートの赤い玉から桜色の魔力が出て、バルデイッシュの黄色い玉の中に入っていく。…っておい、何後先考えずに魔力分けてるんだよ…なのはだつてついさっきまでの訓練のせいで魔力が減っているというのに…仕方ない。

「なのは、フェイト、俺があゝの竜巻を何とかするから2人はその後、ジュエルシールドを封印してくれ。」

「でも…キョウ君だけで大丈夫なの？」

「フェイトなのはなのはに魔力を分けてもらったとはいえ十分とは言えないし、なのははさっきまで訓練していたのにその上フェイトに魔力を分けてしまったんだから、魔力が十分な俺がやるしかないだろ…大丈夫、手はあるから…」

「じゃあ、キョウ君に任せるね。」

「キョウ、無理しないでね…」

「少なくともフェイトは人の事言えないだろ…ユーノとアルフは少しの間だけ時間を稼いでくれないか？詠唱が少し必要なんだ。」

「わかった！」

「…仕方ないね。頼んだよ、キョウ！」

そう答えたユーノとアルフはバインドで竜巻の動きを止めてくれた…これならいけるな…

俺は左手を前に出して、詠唱を始めた。

「天光満る処に我は在り」

詠唱が始まると、海上に巨大な魔法陣が浮かび上がる。

「黄泉の門開く処に汝在り」

その後、海上の魔法陣の上にさらに複数の魔法陣が展開される。

「いでよ、神の雷」

その様子は、まるで複数の魔法陣が竜巻を囲んだまま天に昇っている様である。

「これで終わりだ！ インディグネーション」

そして、竜巻に向かって巨大な雷が落ちてきた。

その威力は甚大で、たったの1撃で竜巻が掻き消されてしまった。あとはなのはとフェイトがジュエルシールドを封印するだけだが：

「……」

ここにいる4人全員が消えた竜巻の方を見ながら唖然としていた。
…おい、いくら何でも驚き過ぎだぞ？

「なのは、フェイト、封印は任せた。」

その言葉で2人は我に返り、6つのジュエルシールドを封印した。

「今回は2人で半分こでいい？」

なのはの問いに、フェイトは黙ってうなずく。

そして、2人はジュエルシールドを3つずつ互いのデバイスに取り込んだ。

ジュエルシードは全て封印したし…今回はこれで解決かな？

「それでね、フェイトちゃん…友達になりたいんだ。」

…いきなり何を言い出すかと思っただら…。

…まあ、今回は初めて2人が協力したからな…。

俺は2人を見守ろうかと思っていたが、突然、ジュエルシードとは異なる大きな魔力を感知した。

…この魔力、どこかで…。

「…母さん？」

…つて、これプレシアさんの魔力じゃねえか！

狙いは…フェイトってどういう事だよ？

とはいえ、今は理由とか考えている時じゃないな！

ロー・アイアス熾天覆う七つの円環は…投擲による攻撃じゃないから破られるかも

…空中じゃ影に触れてないから遮影は無理だし…あれでいくか…。

そして、フェイトの頭上に紫色の雷が降って来たが、それがフェイトに当たる前に素早く移動した。

「…キョウ！」

「シリウス、二刀変化！」

「Yes, master.」

シリウスを2振の刀に変えて、雷を受け止めるかのように十字に交差させて構えた。

「天剣　　草壁」

そして、シリウスに雷が直撃するが、まるでシリウスに吸いこまれたかの様に消えてしまった。
が、その後すぐに消えたはずの雷がそのままシリウスから上空に放たれた。

「フェイト、大丈夫か？」

「私は大丈夫…キヨウの方こそ大丈夫？」

「ああ、問題ない。」

「キヨウ君、フェイトちゃん、大丈夫なの？」

俺達を心配したなのは近づいてくる。

「ああ、傷一つないぜ。」

とはいえ、プレシアさんが何故フェイトに攻撃したのかわからない以上、ここにずっといるのはあまり良い判断ではないな…。

「フェイト、今日はもう帰った方が良い。」

「でも…」

「ここにいたら、いつまた攻撃されるかわからないし、もしかしたら管理局の連中がやって来るかもしれないしな…。」

「…アンタ達、管理局に協力してるのにあたし達の事、逃がしちゃ
つていいのかい？」

「構わないよ。…そもそもここに来てフェイトとアルフの事助けた
のだからあいつ等の命令に逆らって来たんだから、今更お前達の事
逃がしたって何も変わらないさ。」

そう言うのと、2人は納得したらしく、転移魔法を展開し始めた。

「…助けてくれてありがとう。」

「悪かったね、助けに来てくれたっていうのにいきなり攻撃して…。
」

「それ位、構わないよ。」

「それよりフェイトちゃんが無事でよかった。」

俺となのはがそう言うのと、フェイトは少し微笑んでくれた。

「じゃあね…キョウ…あと、君も…。」

そうしてフェイトとアルフはこの場を去っていった。

あの後、アースラに帰ってきたらまた例の如く、

「お前、またあの魔導師達を逃がすとはどういう事だ！」

とか言って突っかって来た奴がいたので、黙らせるべく

「無限空破斬」

たくさんの空破斬くはくせんをくれてやった。

「ま、またこれか！今度こそは避けて…なっ、連続で放ってくるだ
と！？…う、うわああああ！！」

すると、こんな感じで喜んでくれたので100発くらいお見舞いし
てあげた。…俺って、なんて優しいんだろう！！

なのはside

ジュエルシードを封印してアースラに帰ってきたら、キョウ君は文
句を言ってきたクロノ君と『おはなし』してしまいました。…心な
しかキョウ君がとってもすっきりした笑顔を浮かべているの…。

「あちゃ…クロノ君、ボロボロだねー。」

声がしたので振り向くと、そこにはエイミィさんとリンディさんが
いました。

「あの…指示を無視して勝手な行動をしてすみませんでした。」

「あやまらなくても大丈夫よ。キョウ君の言う通り、貴女達は私達
の指示に従わなければならぬわけじゃないんだし…それに、人と
して正しい事をしたのは貴女達なんだから…。」

…リンディさんも、好きであんな事を言ってたわけじゃないんだね。
…キヨウ君も、それを考えてもう少し優しく言ってあげればいいの
に…。

そう思つてキヨウ君の方を見ると、まだクロノ君に衝撃波を当
てて『おはなし』していました。
…流石にやり過ぎだと思ふの…。

結局、キヨウ君は100回以上クロノ君に攻撃した後、

「偉い奴が強いんじゃない、強い奴が偉いんだ。」

と言つて攻撃は終わりました。

s i d e o u t

第20話 竜巻のち落雷……天気悪過ぎだろ！！（後書き）

「というわけで第20話でした！…それにしても、今回は秘奥義レベルの技のオンパレードですね。」

「…だってあの竜巻は中途半端な技で止められるような代物じゃなかったし、プレシアさんの攻撃だって思わず熾天覆う七つの円環使ロー・アイアスうのやめちゃうくらいだったし…。」

「言い訳はいいから本音は？」

「…最近初級技ばつか使ってたからそろそろ上級技でぶちかましてみたくなったから…。」

「…正直でよろしい。それじゃ、新技の解説コーナーに移ります！」

新技解説コーナー

・インディグネーション

言わずと知れたテイルズシリーズ恒例の秘奥義。神の雷を落とす雷系最上級呪文。ちなみにインディグネーションの描写はTOAのジエイドのものを参考にしました。…わかりました？

・天剣 草壁

「11eyes」に出てくる技。四代陰陽家の一つ、草壁家の歴代最強の女剣士である草壁操が全ての忌剣を習得した後に、同じく歴代最強と謳われた草壁遼一の外法（禁術とかの悪い技という意味で

はなく、草壁流以外の理論も取り入れた、いわば邪流という意味……まあ、草壁流にとつては悪い技だろうけど……)の理論を基に編み出した奥義。刀を固有結界の入り口とすることで、相手の技をその固有結界の中に送り、結界の中を廻らせ、循環させることで、その一撃を相手にそのまま返すというもの。多分、相手の技を刀という入り口からドーナツのような空間へ送り込み、そのまま進んでいくとまた同じ入り口から技が出てくるという解釈でいいはず(これもまた分かりにくいか……)。原作では、妖刀「真打 童子切安綱」の奥義であり、そこそ有名な技であるフルパワーの「鬼牙絶刀」を返しており、かなりの防御力である。

・無限空破斬

第18話で少し解説した、空破斬を放ちまくる技。強くないかと思いきや、意外と使える、そして、多分攻撃される相手はかわいそうな目に合うと思われる技。

因みに、最後にキョウが言った「偉い奴が強いんじゃないか、強い奴が偉いんだ。」というセリフはこの技を使うアルベル・ノックスの名言の一つ。

「今回はセリフについても解説したのかよ……それにしても、「天剣草壁」の解説が分かりにくいんじゃないか？」

「……これ以上簡単に解説するのは無理です……。どなたかもっと分かりやすい解説があればコメントで送って欲しいです……！」

「ここで人頼みかよ！……そんなに『おはなし』して欲しいのか？」

「うげっ！……最近なかったからもうないものだと思ってたのに……！」

「…天光満る処に我は在り」

「えっ！？流石にそれは勘弁し」

「黄泉の門開く…以下略 インディグネーション！」

「 って！『以下略』はないだろおおおおおおお！！！」

「ああ、すつきりした。…それでは今回はこの辺で。また次回、お会いしましょう！！！」

第21話 拾っちゃいました！（前書き）

どうも和風好きです。

今回は、更新が遅れてしまい、申し訳ございませんでしたm（
ー）m

その上、今回もプチスランプ気味で文法が少しおかしいような感じ
になってしまいました…文才が欲しいです…。

気を取り直して…。

それでは第21話、始まります。

第21話 拾っちゃいました！

クロノで遊んだ後、俺達はリンディさんから今回の事件に関係がありそうな人がいる事を教えてもらった…って、プレシアさんかよ。事件に関係しているどころか、れっきとした黒幕なんだがな…。

それにしてもプレシアさんって有名人だったんだな…確かに俺が今まで会った魔導師の中では段違いの実力だけどさ…。

…ふん、『違法な研究とその実験の事故によって追放された大魔導師』ねえ…。

おそらくその『事故』によってアリシアの事を死なせてしまったんだろうけど…あそこまで娘の事を大切に思っている母親が違法な実験に娘を巻き込むものだろうか…それとも何か事情があったのだろうか…。

これは調べてみる必要があるかもしれないな。
機を見てアースラの端末から調べさせてもらおう。
ハッキング

シオリside

キョウが管理局に協力してもう10日以上が経過しました。

私がそう指示したとはいえ、キョウがこの家を離れてから何となく家の中がさびしい感じがしていました…。

起動した頃はただの管理人格だった私も変わったものですね…。

とはいえ、ずっと1人でいたわけではなく、はやてと一緒に図書館

に行ったり、翠屋に行つてスイーツを堪能しながら高町家の人たちと話したりしていました。

キヨウとなのはは順調にジュエルシードを封印、回収出来ているようですね。

…何故その経過を知っているのか、ですって？

私は次元世界中のあらゆる魔導書を記録し、再現することが出来る「禁録の書」の管理人格です。離れた場所にいるキヨウやなのはの様子を見る事くらい容易く出来ますよ。

とまあ、この家で待機している私ですが、つい先程、この家の周囲よりも少し広範囲に展開していたモノの出入りを感じする結界に反応がありました。…反応の仕方からしてどこからか転移してきたものでしょう。

一瞬敵かとも思ったのですが、同時に展開されている悪意を感知する結界に反応がなかったことから考えると、この家に攻撃しに来たわけではないようです。

とはいえ、そこで油断してしまえば攻撃されてしまうかもしれません。

私は遠くの場所の光景を見る魔法を発動し、家の塀の外側の反応があった場所の光景を見ってみました。

すると、そこには全身傷だらけで、口からも少し血を流している橙色の大型犬…いえ、これは狼ですね…が横たわっていました。

あれは…確かフェイトという少女の使い魔のアルフと言いましたか？意識はないようですが、まだ生きていますそうですね。

誰かがアルフに変身しているようでもありませんし、これは助けた方が良さそうですね…。

私はアルフのいる場所の転移し、回復魔法にて全身の傷を一通り癒した後、家の中で寝かしておきました。

さて、これでアルフが死んでしまう事はなくなりました。
とりあえず、アルフが家の外にいた事をキヨウに報告する事にしましょう。

side out

しばらくアースラを強化するとかで俺達3人に自由時間が与えられた。

リンディさんが保護者に泊りがけの言い訳をするとのことだったが、俺はそれを断らせてもらった。

何故って、そりゃあ家の保護者^{シオリ}は事情を全てご存じですから…言い訳なんて必要無いし…。

まあ、実際にそんな事をリンディさん達に言ったら問題になるに決まっているので

「家の保護者は基本、放任主義なんで…例え1ヶ月位黙って家を空けても、無事で帰ってくるなら良いといつも言っています。」

と言わせてもらった。…言ったらすごい目で見られたけどね…。

なのはの方はリンディさんに言い訳をしてもらうらしいのだが、俺にその言い訳の証人として一緒に来て欲しいとリンディさんに言われた。

まあ、家に帰っても修練するぐらいしかやることないだろうし、それを受けようと思ったが、その瞬間、シオリが念話で話してきた。

「（…キヨウ、すごいものを拾った。）」

「（…すごいものって何だよ？）」

「（あまり念話では言わない方が良いもの。）」

…何だか変だな。シオリがそう言うなら今ここで話さない方が良いのかもしれないけど…。

「（…もうすぐ帰るからその時に話してくれ。）」

「（わかった。）」

さて、これで俺も早めに家に帰らなくちゃなくなったわけだ。

証人については他をあたってもらうか…。

「すみません、何も言われなかったとはいえ早めに帰ってシオリ姉さんを安心させてあげたいから今日はすぐに帰っていいですか？」

「それならそれで仕方ないわ。」

「キヨウ君も、早く帰ってシオリさんの事を安心させる方がいいよ。」

2人ともその理由で納得してくれたようだ。
とりあえず今は早く家に帰るのが先決かな…。

という事で、家に帰ってきました。
さて、シオリは何を拾ったのやら…。

出迎えてくれたシオリに連れられた先には、額に宝石がついたオレンジ色のオオカミが寝ていました。

…これ、アルフだよね…？

なんでこんなところにいるの？
っていうか…。

「…拾ったものって…」

「うん、これ。」

話を聞いてみると、今日の昼前に家よりも少し広い範囲に展開していた出入りを察知する結果に反応があったので行ってみると、家の塀の外側のある場所で傷だらけのアルフを発見したらしい。シオリはアルフを家に入れ、回復魔法で傷を一通り癒して目覚めるのを待っている、とのことだ。

「経緯はわかったけど…なんでシオリは会ったこともないアルフの事を知っているんだ？」

「…確かに私は直接ジュエルシードの封印に立ち会った事はないけれど、魔法でその様子を見て確認している。だから、誰がフェイトで誰がアルフかは勿論わかるし、ユーノが実は人間だったという事も知っている。」

前からちゃんと思っていたけど、シオリってやっぱりハイスペックだな。優秀な人が魔法の師匠で良かったよ…。

「うつ…ここは…？」

そうしているうちに、アルフの意識が戻ったようだ。

「大丈夫か、アルフ？」

「…キヨウ！なんでアンタがここにいるんだい？」

「なんで、って言われても…ここが俺の家だからだよ。」

「そうかい…転移した先はキヨウの家だったのか。」

その言い方から判断すると、この家に意図的に来たわけではないようだ…。

「そういえば、いつの間にかケガが治っているってことはキヨウが治してくれたのかい？」

「俺じゃないよ、シオリ姉さんがアルフの事を見つけて、回復魔法を使って治療してくれたんだ。」

そう言うと、今まで俺の1歩後ろにいたシオリが少し前に出てきて挨拶した。

「はじめまして、キヨウの従姉兼保護者のシオリです。魔法の事や、貴女達の事情等は既に知っているのでそのところを気にしなくても大丈夫です。」

「あたしはアルフ。もう知ってるらしいけどフェイトの使い魔だよ。」

…シオリのおかげで助かったよ。」

あの後、何故あんなところで傷だらけでいたのか事情を聞いた。

何でも、ついにプレシアさんの虐待が度を超えてしまい、フェイトが気絶してしまったのでアルフがキレて襲いかかったが、返り討ちにされたのでとりあえず逃げるために離れた場所に転移したところで気絶してしまったとか。で、その転移した場所が偶然にも家のすぐ側だったという事らしい。

…すごい偶然だなおい。

ま、どこか辺境の地にでも転移して野垂れ死にされるよりは良いけれどね…。

「…で、これからどうするんだ？」

「そうだねえ…傷は癒えたとはいえまだ本調子じゃないからしばらくは休みたいんだけど、ここにいてもいいかい？」

「別にいいよ。見ての通り、2人で住むには必要以上に広い家だからな。好きに使っていいよ。」

「じゃあ、お邪魔させてもらうよ。」

こうしてしばらく家にアルフが滞在することになった。
だからと言って困ることはほばないけどね。

…あえて言うなら夕食に何を食べたいか聞いてみたら、例の如く、

「肉がいい!!」

と騒ぐ位かな…。

でも、家にはあまり肉がないと言おうと思ったたらシオリが

「それはちょうどよかった。」

と言ってどこからかなりの量のすごく高価そうな肉を取り出した。シオリはそんなに肉が好きではないのに何故こんなにあるのか聞いてみたところ、株主優待で送られてきたものらしい。

…シオリが投資家である事がこんなところで役に立つとは…株主優待、侮り難し。

おかげで今夜の夕食は肉料理のフルコース　ローストビーフを入れたサラダ、牛刺、サーロインステーキ、ビーフシチューと最後には俺特製のチーズケーキ（ちなみにデザート以外はシオリが作った）

を堪能することになり、シオリはアルフにとても懐かれた。

これで懐くなんて単純だとは思うけど…まあ、仲がいい事は良い事だ。

この日は今後の為の準備や修練をした後、久々の我が家で眠った。

次の日、久しぶりに学校に行ったら、アリサとすずかがやけに俺に絡んできて、拳句の果てにはくつついてきた。

その後ろでなのはが黒いオーラを漂わせながらレイジングハートをセトアップしようとしていたのを見た時はマジで焦った。

アリサやすずかの前で魔法を使われたら困る、ということもあったが、何よりもなのはが自力で編み出したアレが使われたら俺でもた

だでは済まないからなあ…。

まあ、何とか念話で説得して阻止することが出来たから良かったけどね…。

そしてその帰り道、3人娘と一緒に帰っていたが、俺はある事を考えていた。

それはアルフが家にいる事をなのはに言うか否か、という事だ。

今の状況のアルフならなのは色々話してくれそうだったのでなのは事を考えると言った方が良かったが、そうすると十中八九アルフが家にいる事が管理局にバレてしまうだろう。

そのせいでアルフが拘束されたり、それを助けようとしたフェイトまで捕まるという事になるのは、個人的には防ぎたい。

俺は主にその2つの理由を比較し、どうするべきか考えていた……のだが……。

「へえー、オレンジ色の犬なんて珍しいわね。」

「でも、シオリさんや私達の言う事をよく聞いているよ。いい子なんだね。」

「…シ、シオリさん、アル…その犬さんはどうしたんですか？」

「昨日、家の前でケガしてたから家に入れて手当てしてあげた。その後、キヨウと話し合って飼い主が見つかるまで世話することにした。」

「（…キヨウ君、あの犬さん、どう見てもアルフさんだよな？）」

「（…ああ、俺も昨日、家に帰ったらシオリ姉さんからアルフを拾ったって聞いた時はビックリしたんだ…。）」

学校帰りの俺達4人は、散歩中のシオリとアルフに遭遇してしまいました。

…少しの間とはいえ、俺の苦悩は一体…（涙）

その後、アルフはなのはとユーノ、そして途中から聞くことになった管理局の連中に念話で色々と事情を話した。

それを聞いたなのはは、ある意味予想通りにフェイトの事を助けたと言っていた。

まあ……なのはだからな。

そしてさらに色々と話し合った結果、明日なのはとフェイトがジュエルシードを賭けて決闘するという事に決まった。

ジュエルシードを賭けるって言うならフェイトは拒否しないだろうからある意味良い手ではあるかもな…。

リンディさんはともかく、クロノもそれを了承したのは少し意外だったかもしれない。

ちなみにアルフの傷を治したのは俺と言う事にしておいてもらった。シオリが魔法を使える事を今知られるのはあまりよろしくないからな。

そうと決まれば明日の為に早く準備して寝てしまおう…と思ったのだけ…。

「キョウ君！明日の決闘の為に特訓するの！！」

というなのはに引きずられて特訓に付き合わされることになった。内容は、大体はアースラでやっていた特訓の総復習みたいな事と、

なのは奥の手にして新技であるアレの練習をする事にした。

そこで色々アドバイスをしてあげた結果、元のままでもおっかなかつたのに、さらに上げつない魔法へと進化してしまった。

…今のうちに謝っておこう…フエイト、ゴメン…。

ある程度修練したところで俺は特訓を終わらせた。

もつとなのはが成長しているならもう少しやってもよかったが、まだ10歳にも満たない少女が決闘の前日に寝るのを惜しんで特訓するのは逆効果だと判断した。

なので、まだ特訓したがっていたなのはを説得して今日は早めに寝て明日に備えるように言い聞かせた後、家まで送っていった。

その後、俺達も家に帰り、その時にはもう夜もだいぶ更けてきていたが、俺は念の為に準備しておくことがあったので、修練場にこもって色々作業をしていた。

本当は俺もさつさと寝たかったが、明日は色々な事が起こる気がしたので、万全の態勢で臨む為にも作業する事を選んだ。

…まあ、俺はなのはと違って決闘はしないから、多少寝不足でも大丈夫だろう…。

なので、最終的に俺が寝ることになったのは作業が終わってからということでもう12時を過ぎてしまった頃となった…あゝ眠い…。

第21話 拾っちゃいました！（後書き）

「というわけで第21話でした。」

「なんでまた遅れたんだよ…？」

「最近、またバイトが立って続けに入っててね…それに前書きでも言っただけどプスランプに入っちゃって…時間があまりない上に書くペースが遅くなっちゃいました…すみませんm(_____)m」

「まあ、ただサボってたわけじゃないからいいけどね…。」

「…キョウ君が優しくなった…！」

「いや、そうでもないときりがないからな…もう諦めたんだよ…。」

「orz」

「…で、今回は新技も出てないし、感想も来てないからまたやることないのか？」

「…実は皆様に2つ発表があります。まず、自分は今日から29日までの6日間、サークルの合宿に行くので、その間は更新できなくなります。申し訳ございませんm(_____)m 30日には更新しますので、そこまで待って下さると有り難いです。」

「…ケータイで更新出来るんじゃないのか？」

「話によると、合宿は電波の届かない場所でやるそうです。なので、

ケータイでの更新も無理です。…っていうか、そもそも自分はケータイでの更新のやり方を知らないので、電波が届いたとしても多分更新できないです。」

「…後半はともかく、前半は仕方ないか…。」

「そして、2つ目の発表ですが、この更新できない6日間を利用して、皆様にアンケートをとろうと思います。この小説がA'sに入るときに、禁録の書の守護騎士を登場させようと思うのですが、実は今、2つの案のどちらにするかでかなり迷っているのです。そこで、いつそ皆様に協力していただいてアンケートで決めようと思います。今のところ考えているのは

1、管理人格がシオリだからそれに合わせて「11eyes」のキャラを登場させる。（多少、使える技とか設定とかを改造します）

2、いつそ、ここは時事ネタ（もう遅い？）で「Fate/EXTRA」のキャラにしてみよう。

と、以上の2つの案です。皆様にはこの2つの選択肢と

3、そんな作品からじゃなくて、「」のキャラを使えよ。

の合計3つの選択肢から1つを選んで下さい。そして出来れば、誰を禁録の書の守護騎士として登場させるのか、も書いて送ってくれると有り難いです。」

「…随分長い時間悩んでいたと思っていたら…読者の方々に頼るのかよ…。」

「因みに、2以外の選択肢に決まっても、「F a t e / E X T R A」からは違う形で何人が登場させようと思っています。プレイして気に入っちゃったキャラが何人かいるんで…。」

「結局登場するんじゃないか…なら、この際に2以外の選択肢を選んだ人にも「F a t e / E X T R A」から誰を登場させたいか選んでもらったらどうだ？」

「おお、それはいいかも…というわけで、別口で登場してほしい「F a t e」のキャラを選んでくれるとさらに嬉しいです！」

「締切はおそらく守護騎士が登場する辺りまでということなので、気軽にどしどし送って下さい。」

「…今回の後書きは発表のせいで少し長くなってしまいました、この辺で失礼させていただきます。」

「それでは皆様」

「また次回、お会いしましょう！」

第22話 2人の決闘、そして…（前書き）

どうも、和風好きです。

合宿が終わり、何故か終わったばかりだというのにやるのがたくさんできてしまっていたのですが、何とか復活しました！！

予定よりも4日も遅れてしまい、申し訳ありませんでしたm（
—）m

とはいえ、復活した以上、次からはちゃんと更新するよう頑張っていきます！！

それでは第22話、始まります！

第22話 2人の決闘、そして…

現在、早朝のだいたい6時の10分…いや、5分前位か…。

俺となのは、ユーノ、そしてアルフは決闘の舞台である海鳴臨海公園の入り口にいる。

なのははどうやら俺の助言を聞いたらしく、早朝だというのに眠たそうな様子は一切ない。

俺は……マジで眠い。

小学生が12時過ぎ就寝、5時前に起床とかしてたら俺じゃなくても寝不足になるって…。

実際今朝は自力では起きられなかったしね…まあ、流石にシオリの魔力弾100連発を叩きこまれれば目覚めざるを得なかったけど…。

それはともかく、管理局の連中はこの後行われる決闘に介入しないことになっているらしい。

…実際は直接的に介入する気がないか、決闘の後に何かしらする気なんだろうがな…。

まあ、下らない事をしてきたら俺が止めてしまえばいいか…。

未だ眠気が覚めない頭でそんな事を考えていたら、もう1人の魔力を感知した。

この何度も感知した事のある魔力は

「ここなら…いいよ。出てきて、フェイトちゃん!」

なのはもちやんと感知出来ていたみたいだ。

俺達が後ろに振り向くと、フェイトがバルディッシュを持って立っていた。

「フェイト…もうやめよう。あんな女の言う事、もう聞いちゃだめだよ。…このままじゃ不幸になるばかりじゃないか。だから…フェイト！」

アルフの呼び掛けに対し、フェイトは悲しそうな顔をしながら首を横に振った。

「だけど…それでも私はあの人の娘だから…。」

それを聞いていたなのはレイジングハートをセツアップさせてフェイトに話しかけた。

「ただ捨てればいいってわけじゃないね。逃げればいいってわけじゃない。きっかけはジュエルシード…だから賭けよう。お互いが持つて全部のジュエルシードを！」

「Put out」

レイジングハートがジュエルシードを出す。

「Put out」

それに答えるかの様に、バルディッシュからもジュエルシードが出てくる。

「それからだよ。全部、それから。私達の全てはまだ始まってもない…。だから、本当の自分を始める為に…始めよう。最初で最後の本気の勝負！」

そして、2人は海上へと飛び上がり、決闘が始まった。

…いつぞやの期待通りの、かなり高レベルの戦いだな。
2人は互いに無数の魔力弾を放ちあっている。

それは普通の魔導師では避けきれないであろう早さであり、また威力も簡単には防ぐ事が出来ない程のものであったが、2人はそれを避けたり、障壁で防いだり、時にはデバイスで斬り捨てたりしている。

まだ2週間も経ってはいないとはいえ俺が色々と助言し、指導したなのは勿論、例のプレシアさんの虐待のせいで本来の実力を発揮しきれてるとは言えないフェイトでさえ、尋常ではない実力を感じさせる戦いをしていた。

しばらく2人は魔力弾を放ち合っていたが、フェイトに動きがあった。

彼女の足元に巨大な金色の魔法陣が浮かび上がった。

「あれはフェイトの最強魔法…フェイトは本気である子潰す気だ！」

フェイトの周囲に無数の魔力弾が浮かび上がる。

…どうやらここで大技を放ち、勝負を決めるつもりのようなのだ。

なのはもそう判断したらしく、レイジングハートを構えようとしたが、四肢をフェイトのバインドに捕らえられてしまった。

「なのは、今サポートを」

「俺のすぐ側で1対1の決闘に横槍入れようとするなんていい度胸だな…ユーノ。」

隣にいるフェレットが余計な事をしようとしていたので、殺気とまではないが少し威圧させてそれを止めた。

「うっ…」

「でも…あれは本当にマズいんだよ、キョウ…」

「関係ねえよ。ここであいつらの決闘に介入するという事は2人の誇りを踏みにじる事でしかない。それでなのはが勝ったとしても、あいつの心を傷つけるだけでしかねえよ。」

そう言っているうちにフェイトは呪文の詠唱を終える。

「フォトンランサー・フランクシフト 撃ち砕け、ファイア！」

そしてフェイトはなのはの方へ手を振り下ろし、無数の魔力弾がなのはに襲いかかった。

なのはのいる場所で魔力弾は爆発し、煙が立ち込めた。

「なのは！…キョウ、君が止めたから…！」

「だからそれがどんなに許されざる行為か優しく解説してやっただろうが…それに」

やがて、その煙が晴れてくる。

「まだ短期間しか教えていないとはいえ、俺の教え子はあの程度じや終わらなねえよ。」

煙が完全に晴れると、そこには多少傷ついているものの、ほぼ無傷のなのはの姿があった。

そりゃあ、前に「障壁を強くする方法」の特訓として、あれ以上の攻撃を防がせた事があったんだから、俺は今の攻撃を耐えきるのを予想出来ていた。

ただユーノとアルフにとっては意外でしかなかったらしく、なのはを見ながら啞然としていた。

「撃ち終わると、バインドっていうのも解けちゃうんだね。」

そう言つて、なのははレイジングハートを構える。

「今度はこっちの 番だよ！」

「Divine Buster」

レイジングハートの先端に集まっていた魔力が桜色の閃光となってフェイトに向かって放たれた。

フェイトは1発の魔力弾で迎撃しようとしたが、その砲撃を止められるどころか、威力を落とすことさえも出来ずにかき消された。

それを見たフェイトは障壁を張ってなんとかそれに耐えたが、なのはと違って満身創痍となってしまった。

…流石なのはの十八番^{おはじ}。これならアレを使うことなく終わりそうだな…。

そう思っていたのだが……どうやら俺は甘かったらしい。

「受けてみて、デイバインバスターのバリエーション！」

なのはは巨大な魔法陣を展開させ、そこに尋常じゃない位膨大な量の魔力を収束させている。

…あれ？これ、どう見てもアレだよな？いくら何でもオーバーキル過ぎるんじゃないか…。

「くっ…」

フェイトは満身創痍の体でそれを回避するために動こうとしたが、先程のなのはの様にその四肢にバインドがかけられて動けなくなってしまった。

…なのはさん、フェイトの息の根を確実に止めるつもりですか？

「これが私の全力全開！」

そしてなのはは天に掲げていたレイジングハートをフェイトの方に振り下ろす。

「スターライト　ブレイカー！！」

放たれたのはデイバインバスターとは比べ物にならない程の極太の

砲撃。

バインドをかけられ体を動かす事が出来ないフェイトがそれに抵抗することなど出来るはずがなく、その桜色の砲撃に飲み込まれてしまった。

確か俺がなのはに特訓することになって5日経った時、新しい魔法を思いついたと言われ、見せてもらったのがこのスターライトブレイカ だった。

その時はまだ未完成だったが、未完成ながら尋常じゃない威力を見せたその魔法を見て、俺は冷や汗を流し、苦笑せざるを得なかった。そしてなのはから、俺のバースト・エミッションを見て思いついたと言われた時、恐らく人として初めての被害者になるであろうフェイトに心の中で何度も数時間も土下座していた。

…見事、予想通りにフェイトが最初の被害者となってしまうたな…。スターライトブレイカーを受けたフェイトは気絶して、海へと落ちていく。

まあ、それをそのまま見ているだけな筈は無く、俺はすぐにシリウスをセットアップさせた後、「座標移動^{ムーブポイント}」でフェイトのすぐ真下に一瞬で移動し、落ちてきたフェイトを受け止めた。

「フェイトちゃん！」

「大丈夫。フェイトは無事だ。」

そう言っただけ俺はある程度フェイトを回復させる為に、回復魔法^{ヒール}を使った。

すると、すぐにフェイトは意識を取り戻した。

「ん…………キョウ？」

「おっ、起きたな…一応回復魔法使っておいたけど、大丈夫か？」

「うん……………そっか、私…負けたんだね…。」

そう言っつてフェイトの表情が暗くなる。

「フェイト、お前は正々堂々と全力で戦ったんだ。例えその結果負けてしまったとしても、それを恥じる必要なんかないさ。」

そう言っつて俺はフェイトに微笑みかけた。

「キョウ…ありがとう／＼／」

どうやらそれで少しは元気が出たようで、表情も少し明るくなった。すると、何処からか視線を感じたのでその方向に向いてみると、なのはがむくれていた。

「…どうしたんだよ、なのは？」

「フェイトちゃん、ずるい！キョウ君にお、お姫様抱っこしてもらうなんて…！」

一瞬、なのはの言っている意味がわからなかったが、よく考えてみると俺はフェイトの膝裏と肩の辺りに腕を回して持っており、それはまさしく『お姫様抱っこ』と呼ばれるやつだった。

「……………／＼／」

フェイトもなのはに言われて気付いたらしく、トマトも顔負けな位、顔が真っ赤に染まった。

「わ、悪い、フェイト！…嫌だったか？」

「そ、そんなことないよ！……むしろ、してもらってうれしいかも／＼／」

…？フェイトの答えの後半、声が小さくて何を言っていたかよく聞こえなかったが、そこまで嫌がられていないようだ。

「む…」

そんな俺達を見て、なのははまだむくれてるし…どうすればいいんだ？

と、そんな事をしているうちに空が突然曇りだした。

これは…また懲りずに攻撃してきたな、プレシアさん。

まあ、流石に2回目となればだいたいどのタイミングでどこら辺を狙ってくるかはある程度予想できるわけで…。

俺とフェイトに向かって紫色の雷が迫って来た瞬間に、俺は「座標^{ハイブ}移動」で安全な場所へと移動することでその雷を避けた。

だが、雷はジュエルシードに命中し、ジュエルシードは転送されてしまった。

で、避けたはいいが、これからどうするかな…。

俺となのはアースラに戻って色々やるってことで大丈夫なんだろうけど、フェイトとアルフはどうしたものか…。

アースラに来てもらったらまたクロノがうるさい事言ってくるから遠慮したいところだが、かといってこのまま放っておけばまた狙われかねないよな…。

…仕方ない、ストレス溜まるだろうけど我慢するか…。

「このままここにいたらまた攻撃されかねないから一度アースラに行こう。フェイトとアルフも一緒に来てくれ。」

そうして俺達はアースラへと移動した。

予想通り、アースラに行くとクロノが色々言ってきてうるさかった。本音を言えば今すぐに無限空破斬を使って『おはなし』したかったが、一応こちらが連れてきたという事でそれは我慢し、アースラ滞在中のフェイトとアルフについては俺が全責任を負うという条件を出すことで、拘束等はしないという事になった。

「第2小隊、転送完了」

「第1小隊、進入開始」

で、現在俺達はブリッジにいるんだが、先程の魔法からプレシアさ

んの居場所を特定したらしく局員達がプレシアさん拘束の為に時の庭園に突入しているらしい。

モニターにはその様子が映し出されていた。

「お疲れ様。それから…フェイトさん、はじめまして。」

リンディさんとフェイト達が色々と話している間に、突入した局員達は王座の間にたどり着いていた。

「総員、玉座の間に進入。目標を発見。」

王座の間には玉座に座るプレシアさんの姿があった。

『プレシア・テストロッサ、時空管理法違反の容疑で逮捕します！』

『速やかに武装を解除して投降しなさい！』

管理局員達が周りを囲むが、プレシアさんは一切動じていない。

『おい、こっちに何かあるぞ！』

と、その時ある局員が隠し通路がある事を発見した。

その先には、どこかで見た事のある部屋があった。

「（…って、これ例の研究室じゃねえか！）」

「（まずいですね…ここが発見されるという事は、アリシアさんの事も…）」

念話でシリウスと会話しているうちに、ついにアリシアの入ってい

る生体ポットが発見されてしまった。

『こ、これは…!!』

「えっ!？」

声をあげたのはだけでなく、フェイトも生体ポットに入っているアリシアを見て驚いていた…やっぱり、知らなかったか…まあ、普通は知らされないだろうけど…。

局員がその生体ポットに近づこうとした時、

『私のアリシアに近寄らないで!!』

プレシアさんが生体ポットの近くにいた局員を弾き飛ばした。

『う、撃てー!!』

局員達もプレシアさんに反撃してみるものの、障壁で容易く防がれてしまう。

『うるさいわ…』

プレシアさんが手を前に突き出した。

「危ない、防いで!!」

プレシアさんが何をするつもりなのかを察したリンディさんが現場の局員達に注意するが、

『ぐあああああ!!』

プレシアさんの放つ雷がそこにいた局員全員に命中し、全滅させてしまった。

「いけない！局員達を送還して！！」

リンディさんの指示で局員達はアースラに收容され、研究室にはプレシアさん1人だけが残された。

『もうだめね、時間が無いわ。たった9個のロストログアではアルハザードにたどり着けるかはわからないけど……。でも、もういいわ。終わりにする。この子を亡くしてから暗鬱な時間を……。この子の身代わりの人形を娘扱いするのも……。聞いていて？貴女のことよフェイト？せっかくアリシアの記憶をあげたのに、そっくりなのは見た目だけ。役立たずでちっとも使えない、私のお人形。』

「最初の事故の時にね、プレシアは実の娘、アリシア・テストロツサを亡くしているの。彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは異なる、使い魔を超える人造生命の生成、そして死者蘇生の秘術。『^{フェイト}Fate』って名前は、当時彼女の研究に付けられた開発コードなの」

そこに、エイミイさんが言いづらそうに説明してくれた。

『よく調べたわね。そうよ、その通り。……。だけどダメね、ちっとも上手く行かなかった。作り物の命は、所詮作り物。失ったものの代わりにはならないわ。アリシアはもっと優しく笑ってくれたわ。アリシアは時々わがままもいったけど、私の言うことをとてもよく聞いてくれた。』

「やめて…。」

なのはがっらそうにそう言った。…無理もないだろう。こんな話、本来ならフェイトは勿論、なのはのような10歳にも満たない子供に聞かせる内容じゃない…。

『アリシアは…いつも私に優しくかった。フェイト、やっぱり貴女はアリシアの偽物よ。折角あげたアリシアの記憶も貴女じゃダメだった。』

「やめて…やめてよ！」

『アリシアを蘇らせるまでの間に、私が慰みに使っただけのお人形。だから貴女はもういらないわ。どこへなりと消えなさい！』

「お願い！もうやめて…！」

『ふふふ、いい事を教えてあげるわフェイト。貴方を作り出してからずっとね、私は貴方が　大嫌いだったのよ…！』

その言葉を聞いたフェイトは意識を失い、音を立てて倒れてしまった。

「フェイトちゃん！」

だが、そんなフェイトの様子を気にもかけず、プレシアさんは喋り続ける。

『私達の旅を、邪魔されたくないの…私達は旅立つの！忘れられた都　アルハザードへ…！』

その後、プレシアさんはさっきの9つのジュエルシードを使って次元震を起こし始めたとかでブリッジが騒がしくなっていたが、正直そんな事はどうでもよかった。

「プレシア…あの時俺はあんたのやることにそこまで反対はしていないと言った。…そして、正直に言えばそれは今も大体は同じさ。アリシアを蘇らす？アルハザードに行く？…そんな事、勝手にやってればいい。」

「キョウ！」

「お前、自分が言っている事がどういう事かわかってるのか！！」

ユーノとクロノが色々言ってくるが…俺だっけわかってるさ、自分が何を言っているのか。だが、それがれっきとした本心さ。

それに、俺はプレシアさん　いや、プレシアの本心を知っている。

…でも…いや、だからこそ

「…！！ユーノ君、クロノ君、それ以上言う必要はないみたい…。」

…どうやらなのは俺が何を思っていて、何を言っつもりなのかわかってくれたらしい。…正直、とても有難かった。

「だがな　　テメエは色々やり過ぎた。色々とな…！！」

フェイトにあんな事を言ったプレシアが許せなかった。その言葉に宿った感情と、俺の表情を見てクロノ達は言葉を失っていた。

「デメエに教えてやるよ。デメエが一体何をやらかしてしまったのかを　　！！」

そう言いきった俺はフェイトを抱え、医務室へと向かう為にブリッジから出ていった。

第22話 2人の決闘、そして…（後書き）

「というわけで第22話でした。で、色々と言いたことがあるのですが…兎に角、こんなに更新が遅れてしまい、申し訳ございませんでした！！m（――）m」

「…ついに俺が何か言う前に土下座し始めたか…」

「そして、カボチャ頭様、感想ありがとうございます！！」

「…感想の返答に『頑張つて更新します！！』みたいな事を言ったくせに、結局このありさまだな…。」

「…あ、あと、この小説のお気に入り登録数が200件を超えました！！お気に入り登録して下さった皆様、ありがとうございます！」

「ユニークもいつの間にか2万を超えていました。本当にありがとうございますm（――）m」

「…おお、キヨウ君が顔文字を使うとは…」

「…どんな感動だよ、それ…」

「さて、次回は時の庭園に突入するわけですが…ま、例のテンプレ中のテンプレだと思っていいわけですね？」

「…まあ、実際そうなるかもな…あえて言うなら「スーパー大技使

「いまくりタイム!!」になるくらいじゃね?」

「えっ、また大技使うのかよ…フェイトと戦った時の反省はどうしたんだー!!」

「…相手はプレシアさんだぞ?手は抜けないって…それに、今の俺は手加減できるかわからないし…」

「…笑顔でそんなこと言われても困るんだけど…(汗)」

「まあ、次回予告はこれくらいでいいだろ。」

「そ、そうだね…アンケートはまだ募集中です!どんどん送って下さい!…というか、どうか回答して下さい!!お願いしますm」

「」m」

「テメエ…更新遅れた分際でそんなことぬかすんじゃないやねえ!!」

「このやりとり…久しぶりだな…って!そんなこと言ってる場合じゃ…ぎゃああああああ!!」

第23話 決意と思い（前書き）

どうも、和風好きです。

いよいよ無印の終盤が近づいてきました。

そして、今回は物語の山場と言っても過言ではないでしょう。

…だというのに…。

文法とか表現とかがいつも以上に自信がありません。

どうにか皆様に満足いただければいいのですが…

それでは第23話、始まります！

第23話 決意と思い

なのはside

『ふふふ、いい事を教えてあげるわフェイト。貴方を作り出してからずっとね、私は貴方が　大嫌いだったのよ!!』

ひどい…どうしてこんな事が言えるの？

それを聞いていたユーノ君もクロノ君も、今の言葉を聞いて怒っているみたいでした。

キョウ君は…少しうつむいてて表情が良く見えません。

その後、プレシアさんがジュエルシードを使って次元震が起きそうだと言う事でブリッジが騒がしくなったけど、キョウ君はうつむいたまま何もしません。

キョウ君ならプレシアさんのことを起こりそうだと思ったんだけど…。

そう思っていたら、キョウ君が突然話し始めました。

「プレシア…あの時俺はあんたのやることにそこまで反対はしていないと言った。…そして、正直に言えばそれは今も大体は同じさ。アリシアを蘇らす？アルハザードに行く？…そんな事、勝手にやってればいい。」

「キョウ！」

「お前、自分が言っている事がどういう事かわかってるのか!!」

ユーノ君とクロノ君はそれを聞いて怒りだしたけど、私は気付いてしまいました。

キヨウ君の纏っている雰囲気は怒った時のキヨウ君の雰囲気にそっくりである事を…。

…キヨウ君、ものすごく怒ってる。

「ユーノ君、クロノ君、それ以上言う必要はないみたい…」

だから、ユーノ君とクロノ君の事を止めました。そして

「だがな テメエは色々やり過ぎた。色々とな…!!」

そう言うキヨウ君の顔を見て、私だけじゃない、みんながびっくりしてしまいました。

こんなに怒るキヨウ君、今まで見た事がないの…。

「テメエに教えてやるよ。テメエが一体何をやらかしてしまったのかを …!!」

そう言つてキヨウ君はフェイトちゃんと一緒に医務室へ行っていました。

「僕はこれから時の庭園に行く。…君達はどうする?」

フェイトちゃんを医務室に連れていった後、クロノ君がそう言ってきました。

私は…あんな事を言うプレシアさんが許せないし、止めたいと思う。だから…。

「クロノ君！私も行く！！」

「僕も！」

私も一緒に行く事にしました。ユーノ君も一緒に行ってくれるみたいです。

「…俺はちよつと用事を片付けてから行くよ。」

キヨウ君はそう言いました。

「キヨウ君…どうして？」

あんなに怒っていたのに…？

「悪いな…俺も今すぐ突入したいんだけど…やっぱり放っておけないし…。」

その言葉を聞いて、キヨウ君がフェイトちゃんを励ましてから行くんだとわかりました。

「…わかった。キヨウはその用事が終わってから来てくれ。…なのはとユーノは行くぞ！」

…いつもはそういうのをわかってくれないクロノ君も、今回は気付いてくれたみたいです。

キヨウ君、フェイトちゃんの事は任せたの…！！

s i d e o u t

…なのは達は行ったか…。

それを見送った俺は医務室に入り、ベットに寝ているフェイトと、その側でフェイトの手を握っているアルフに近づいた。

「キョウ！…あいつ等は？」

「先に時の庭園に行った。」

「…そうかい…アンタは行かなくていいのかい？さっきはあんなに怒っていたのに…」

「今の状態のフェイトを放っておく事は出来ないだろ…。」

…本音を言えば、俺だって今すぐに時の庭園に突入してプレシアと『おはなし』してやりたいと思うが、そんなことしたって何の解決にもならない。

この事件を本当の意味で解決できるのは…そして、プレシアの事を救えるのは俺じゃない、フェイトだけなんだ。

…故に俺は今回の件ではフェイトを助ける役に回る事を選んだ。
この世界にとって俺は最たるイレギュラー、その上、解決するのにふさわしくないのならば必要以上に介入するのはやめた方がいいだろう。

だから

「早く戻ってこいよ、フェイト。お前の帰りを待ってる人は何人も
いるんだぜ…。」

今、俺が出来るのは、フェイトが目覚めるのを待つ事だけだ。

フェイトside

私は…人間じゃない。母さんの本当の娘であるアリシアのクローン
で…誰にも必要とされない人形。
だから…この体は偽物。

なら…私のこの心も偽物なのかな？

母さんに喜んで欲しいという心も…いつも一緒にいてくれるアルフ
に感謝する心も…あの白い子には負けたくないという心も…そして
この思いも…。

人間じゃない私の心は…全てが偽物なのかな…？

…そんなのって、何だか悔しいな…。

そう思っていると、突然私の意識が浮かぶような感覚がして

「…キョウ…？」

「…！フェイト…！」

「よお、やっと目が覚めたか…。」

目を開けると、そこにはキョウとアルフがいました。

「とりあえず、体に異常は無いようだけど…大丈夫か？」

キヨウはいつもみたいに私の心配をしてくれるけど…その質問に答える事は出来なかった。
それよりも

「ねえ…キヨウ。」

「…何だ、フエイト？」

「私って…何なのかな？」

私は、キヨウにそんな事を聞いていた。

「…そうだな…」

キヨウは少し悩んだ後、

「…俺は『人間で在りたい』と思う心があれば、人形であろうがクローンであろうがそいつは人間だと考えているから、お前は立派な人間だと思う。」

そう言ってくれた。

でも、そう言われた後も私は自分が人間だという自信が持てなかった。

そんな私の気持ちを察したのか、

「…でも、結局はその本人が『自分は人間だ』という自信を持てな

いと、どうしても人間であるという実感は掴めないよな……」

と言ってきた。

…やっぱり、私は人間じゃなくて、この体も、心も偽物なのかな…

「だから、もしフェイトがそれでも人間で在りたいと思うなら

」

「……」

「世界中の人間に否定され、敵に回すことになるうとも、俺が『フェイト・テストロッサは人間だ』と認め、叫び続けてやる。」

その言葉は、今まで聞いた事のあるどんなことよりも私の心に響いた。

「あたしだって、誰が何と言おうとフェイトが人間だって叫び続けるよ！…それで声が噎れたって構うもんか！！」

…キヨウ、アルフ…

「だから…いつまでもそんなところで立ち止まるなよ。例えお前の体がアリシアの偽物であろうと、お前の心は その気持ちはアリシアのものじゃない、お前だけのものなんだから…！」

そう言ってキヨウは私に手を差し伸べてくれた。
キヨウ、ありがとう…。

「私の 私達の全てはまだ始まってもない。」

そう言つて私はボロボロになったバルディッシュを見た。

「…お前もこのまま終わるなんて嫌だよね…。」

「Yes, sir.」

「上手くできるか分からないけど…一緒に来てくれる?」

「勿論だよ、フェイト!」

「望むところだな。」

その瞬間、バルディッシュは光りに包まれた後、

「Recovery」

完全に修復され、私はバリアジャケットを展開した。

「…よし。準備が出来た事だし、俺達も時の庭園に行くとするか!」

「そうだね…今度こそあの鬼ババ、とつちめてやる…!」

これから私達も時の庭園へ 母さんの元へ行く…でも、その前に…。

「…キョウ。」

「…ん、どうした?」

「…ありがとう。」

そう言うと、キョウは少し驚いていたけど、すぐにいつもみたいに微笑んでくれた。

「…どういたしまして。」

その微笑みは、いつも私の心を暖かくしてくれる
私の大好きな微笑みだった。

…そうだった。

「…バカだね、私って…。」

『私の心が偽物か』なんて、意味のない疑問でしかなかった。

「…何か言ったか？」

…だって

「うつん…何でもない…。」

こんなにも私をかき乱して、励ましてくれる思いが
偽物であるはずがないんだから。

side out

なのはside

キヨウ君がアースラに残ったのは、きっとフェイトちゃんの事を励ますためだと思う。

なら、私は後から来るキヨウ君とフェイトちゃんの為になるべく先に進まなきゃいけないのに…。

目の前にはたくさんの傀儡兵がいて、先に進めません。もっと…早く倒さないと…。

「なのは!!」

ユーノ君の聲がした方に振り返ってみると、傀儡兵が襲いかかって来ていました。

障壁を出して防ごうとしたけど、ここに来るまでにたくさんの傀儡兵と戦って疲れちゃったせいか、うまく出せません。

これじゃ、攻撃を防げない

「サンダーレイジ!」

その時、襲いかかって来た傀儡兵に雷が降って来て吹き飛ばされました。

さらに

「忌剣　　斬月」

後ろから光る何かが飛んで来て、近くにいた傀儡兵何体かが上下に真つ二つになりました。

今の技…来てくれた!!

「フェイトちゃん!キヨウ君!」

「あたしもいるよ。」

フェイトちゃんとアルフさん、そしてキョウ君が来てくれました。

「なんとか間に合ったな…とはいえ、まだうじゃうじゃ居やがるか…。」

キョウ君の言う通り、まだ傀儡兵はたくさんいます。

「ちまちまと1体ずつ倒していくのも面倒だ…一気に潰すか…」

そう言うと、キョウ君の足元が紅く光りだしました。

「焼き尽くせ　　吼竜破」

そしてキョウ君が左手を前に突き出すと、紅く光る地面から6匹の竜が出て来て、前にいた傀儡兵をほとんど壊してしまいました。
す、すごい…。

「キョウ…すごい…」

「な、なんて攻撃なんだ…」

「…相変わらず出鱈目だね…」

今のキョウ君の攻撃にみんなが驚いています。

「…時間がないんだろ?…行くぞ。」

そう言って走り出したキョウ君に続いて、私達も先に行く事にしま

した。

s i d e o u t

… っ たく… 吼竜破くらいで驚き過ぎなんだよ…。

ただでさえ時間が無いというのに…これで間に合わなかったらどうするつもりなんだ？

… まあ、今はそんな事言っている暇は無いからな、愚痴はこの辺にしておくか…。

先に進んでいると、ある部屋にたどり着いた。

その部屋には今、次元震を起こしている動力炉のある場所に続く階段があり、またその先の通路からプレシアがいる最下層にたどり着けるらしいのだが…。

「… たくさんいるね…。」

これまた例の如く、機械兵つばいのがうじゃうじゃ居やがるんだよな… 前来た時にはこんなのがあった覚えがないんだが…。

あゝ面倒くせえ…。

「… もういい、1撃で終わらせる。」

後ろでなのはやフェイトと一緒にやるだと言っているが、もう我慢できねえ…。

大技で全滅させてこの溜まりに溜まったストレスを発散してやる…！

「浄化してやるよ…！」

俺はシリウスを腰に差した後、上空へ飛び上がった。

そして両手を構えて前方に魔力を凝縮させてエネルギー球を作り出す。

「神技 エーテルストライク」

作りだしたエネルギー球を機械兵共に向けて放つと、エネルギー球は命中と共にものすごい爆発を起こした。

爆発が収まると、そこには部屋の大部分がクレーターとなり、機械兵の欠片も残っていなかった。

「………」

それを見ていた4人は驚きで言葉も出ないようだ。

驚き過ぎだ「……いや、今回ばかりはしょうがないか…元はある世界の第二位の女神の奥義だし…」。

…4人が我に帰った後に少し話し合った結果、なのはとユーノが階段を上って動力炉を止め、俺とフェイト、アルフが最下層に行つてプレシアを止めることにした。

さて、今はなのは達と別れ、最下層に向けて進んでいる最中だが…。相変わらず機械兵がうじゃうじゃ居やがる…本当に面倒だな、オイ。

ダンジョンで、ラスボスにたどり着くまで雑魚キャラがわんさか出てくるゲームの主人公の気持ちがわかる気がする。

「レールガン」

俺は日頃から作っておいた特製コインを左手の親指で弾き、「超電^レ磁砲^{ルガン}」の力で飛ばして前方にいた機械兵共を粉々にした。
この調子なら足を止めずに進んで行けそうだな…。

「行くぞ！フェイト、アルフ！」

「うん！」

「ああ！」

だいぶ奥へと進んできたな…フェイト曰く、もうすぐプレシアの元に着くらしい…。

その時、どこからか爆発音がした。

「一体何が…？」

「この魔力…クロノか？」

さらに先へ進んでいくと、その先には頭から血を流したクロノがいた。

「世界はいつだって

こんなはずじゃない事ばかりだ！ずっと

と昔から　　いつだって誰だってそうなんだ!!」

クロノがそう言っているうちに、俺達はクロノに追いついた。

そして　　その部屋の奥に、プレシアが立っていた。

「こんな筈じゃない現実から逃げるか、それとも立ち向かうかは個人の自由だ！　けど…自分の勝手な悲しみに、無関係な人間まで巻き込んでいい権利はこの誰にもありはしない!!」

たまには良い事言っじゃないかクロノ…今言った事をちゃんと実行して空気を読めば、とてもいい奴になると思うんだけどな…。

その時、プレシアが咳き込み、血を吐きだした。

「母さん…!」

それを見たフェイトがプレシアの元へ近寄ろうとした。

「何しに来たの…消えなさい。もう貴女に用は無いわ。」

「あなたに言いたいことがあつて来ました。」

そう言つてフェイトはゆっくりと歩みを進める。

「私は…私は、アリシア・テストロッサじゃありません。あなたが作ったただの人形なのかもしれません。けど私は　フェイト・テストロッサは…アナタに生み出してもらつて、育ててもらつた…アナタの娘です!」

「フフフ…アハハハ!!……だから何?　今更貴女を娘と思えと言っ

の？」

「あなたがそれを望むなら。…それを望むなら私は世界中の誰からも…どんな出来事からもあなたを護る。…私があなただからじゃない　あなたが私の母さんだから！」

そう言っただけでフェイトはプレシアに手を差し伸べる。

彼女の目に宿る光は、ここにいる誰よりも強く　そして美しかった。

…お前の信念、見せてもらったよ。フェイト…

「……………くだらないわ。」

そう拒絶すると、プレシアは持っていた杖で床を叩き、魔法陣を展開させた。

すると、そこにあつた9つのジュエルシールドが暴走し始め、それと連動しているかのように時の庭園が崩壊し始めた。

「私は向かう、アルハザードへ！…そして全てを取り戻す！過去も、未来も、たった1つの幸福も…！」

崩壊は広がり、ついにプレシアが立っている場所が崩壊し始めた。

「母さん…！」

足場が完全に崩壊し、プレシアとその側にあつたアリシアの入った生体ポットが虚数空間へと落ちていく。

「…悪いけど、ここで終わりにはしない　いや、終わらせてた

まるか。」

俺はそう言つて「異能の力」の1つ、「サイコネシス念動力」を発動させた。

…意外としょぼい能力だつて？

侮ることなかれ、俺の「サイコネシス念動力」は某不要者の世界において最強のフラグメント能力として恐れられ、民衆を脅す為に高層ビルを持ち上げて落とそうとしたり、ビックバン級の爆発から爆心地であるビルを守りきる事が出来る力である。

だから　　虚数空間に落ちた人1人と生体ポット1つをこの場で持ち上げる事くらい容易い。

「サイコネシス念動力」が発動してすぐに、虚数空間に落ちていったプレシアとアリシアの生体ポットが俺達の元へ飛ばされてきた。
さて…一刻も早くここから離脱しないと…。

「母さん！」

「フェ、フェイト…」

「バカな、虚数空間で魔法は使えないはず…!!」

…さつさと離脱しないといけないのに、フェイトはプレシアに抱きついて泣きじやくってるし、クロノは俺を見て啞然としてるし…お前等今の状況がわかってる？

「フェイト、プレシアに甘えるのは後にしろ！…クロノ、今の事については後で説明してやる！…だからさつさとアースラに戻るぞ！」

俺の一言でこの場にいる全員が我に返り、時の庭園の崩壊に巻き込まれないうちにアースラへと転移した。

第23話 決意と思い（後書き）

「というわけで、第23話でした。いやあ……うまく読者の皆様に満足いただければいいんですがね……。」

「まあ、なるようにしかならないだろ……。」

「それもそうだね。……しかし、無印最終戦とはいえ、キョウ君、大技使いすぎじゃない？特にエーテルストライクとか……。」

「あそこで機械兵を1撃で全滅させる威力の技ってかなりのものになるだろうが……それに、エクスカリバー 約束された勝利の剣とかエクスカリバー・ガラディーン 転輪する勝利の剣とかだと建物が耐えられないだろうし……そう考えると、エーテルストライクを力を抜いて使うのが一番だと思ったんだよ……。」

「……え？あれ、力抜いてたの……？」

「当たり前だ、本来なら魔力じゃなくてエーテルを使うんだからな……。」

「……こ、ここで、新技解説に行きます！」

「……逃げた……？」

新技解説コーナー

・忌剣 斬月

あけがらす 暁鴉と同じく、草壁家の剣術の奥義、忌剣の1つ。閃光を伴う衝撃

波を出して、それが対象を斬り裂くという技。

・吼竜破

技としてはスターオーシャンシリーズ恒例の技だが、今回はSO3の吼竜破を使いました。闘気を具現化させた竜を地面から6匹発生させ、相手に襲いかからせる技。破壊力はプレイヤーキャラ中トップクラスと言っても過言じゃないでしょう！自分は好きな技です！（by和風好き）

・エーテルストライク

ヴァルキリープロファイルシリーズで、天界第二位の女神フレイが使う神技。自らに掛けたリミッターを解除し、体内に秘められたエーテルを解放した後、両の手を構えてエーテルを凝縮し、エネルギー球を生成、それを敵に向かって発射する技。ゲーム中最強の技と言っても過言ではなく、この小説で今まで出てきた技の中では最高の破壊力を誇るでしょう。

サイコネシス

・念動力

「N E D L E S」に出てくる能力の1つ。最強の欠片と称される能力で、自分より何十倍もの大きさのビルを容易く持ち上げることが

フラグメント

フラグメント

とができる。

「さて、この小説のPVがついに20万を超えました！皆様、本当にありがとうございます！！」

「お気に入り件数も順調（？）に増えてるしな…読者の皆様には感謝してもしきれません。」

「この調子で…感想やアンケートも来てくれればいいんだけどな…」

「…それは、いつもの醜い催促だと思っていいんだよな。」

「…ま、まだ言っていないじゃないか…ちよっ！何、エネルギーの球を作ってるんだよ…！」

「…浄化してやるよ…！」

「ひっ！…そ、それは勘弁…」

「神技 エーテルストライク」

「いぎやあああああああ…！」

第24話 治療と青い炎と……マジ？（前書き）

どうも和風好きです。

また更新が遅れてしまいました。

楽しみにしていた皆様、（いや、こんな駄文にそのような人がいるかどうかわかりませんが）申し訳ございませんm（　　）m

もうすぐ無印が終わるというのに……

いつまでもこんな作者ですみませんm（　　）m

…それでは第24話、始まります！！

第24話 治療と青い炎と……マジ？

時の庭園の崩壊に巻き込まれる前に、俺達はなんとかアースラに帰還する事が出来たが、その直後、それまでの負担が一気にきたせいか、プレシアさんが意識を失ってしまった。

次元犯罪者とはいえ、プレシアを医務室へ運ぼうとした事に関して、今回ばかりはクロノも何も言ってくる事は無かった。

現在、医務室にはベットで横たわるプレシアの近くにフェイト、アルフ、なのは、ユーノが控えており、そこから少し離れたところにリンディさんとエイミィさん、クロノ、そして俺が立っていて、プレシアが意識を取り戻すのを待っている状況だ。

その間、言葉が交わされる事は無く、あのクロノでさえプレシアを見守っていた。

そんな中、突然プレシアの瞼が動き、意識が戻ったようだ。

「……んん……ここは……？」

「母さん！」

「ここは時空管理局巡航し級8番艦アースラの医務室です。時の庭園はもう、完全に崩壊し、虚数空間へ堕ちて行きましたよ。」

プレシアはそれを聞いて少し考えた後、俺を見つめてきた……って、

俺かよ…。

「しばらく彼と2人にしてもらえないかしら…。」

そう言われたリンディさんは少し考えた後、

「…わかりました。ただし、私達はこの部屋のすぐ近くで待機し、お2人の様子を常に映像で確認させてもらいます。」

そう言つて許可をくれた。…まあ、妥当な処置だな。むしろ許可した事の方が意外だったし…。

こうして医務室には俺とプレシアの2人だけが残された。皆が出ていった後、プレシアが俺に話しかけてきた。

「また余計な事をしてくれたわね。あのまま虚数空間に落ちていればアルハザードへ行けたのに…。」

俺はそんな事を言うプレシアをしばらく見つめた後、口を開いた。

「…もう、やめろよ。それがあんたの本心ではない事くらい、とっくにわかってるさ。」

そう言つと、プレシアは目を見開いたかと思うと、すぐに表情を戻した。

「な、何を言っているのかしら…私が嘘を言っているはずがないでしょ?。」

もうその態度でバレバレだったが、一応色々と根拠を挙げておくか

…。

「…俺には魔法とは異なる力をいくつか使う事が出来るんだが、そのうちの1つに「心理掌握^{メンタルアウツ}」と言う能力がある。それは人の精神に干渉する能力であり、それを使えば 触れた相手の主観や記憶を簡単に知ることが出来るんだよ。」

ここまで言えば、プレシアもわかったようだ。

「初めてあんたと会った時、あんたが咳き込んだのを支えると同時にその能力であんたの本心を見せてもらったよ。あんたが本当はフェイトの事をちゃんと1人の娘として見ている事も、だが不治の病で後先短い自分に依存しきっているフェイトの将来の為に自ら憎まれることを選んだ事も…とづくに知っていたさ。」

「…だから何？あんなにひどい事を言っておいて、今更『実は愛していました』なんて言っただって信じてもらえるはずがないでしょ？…それに、病でもう長く生きられない私がフェイトを幸せにするどころか、その笑顔を守ることなんて出来るはずがないわ…。」

やっぱり、そんな事を思っていやがったか…

「…何であんたがフェイトを幸せに出来ないなんて決めつけるんだよ？。」

「決めつけてなんかいいわ。でも、私はもうそんな長い時間あの子と一緒にいる事が出来ないから」

「一緒に居さえすればフェイトが幸せになれるのか？」

「……………」

「いつまでも一緒に居てあげられないならその時まで一緒に居て大切な思い出の1つや2つでも作ってやればいい、死ぬ時まで一緒に居たいなら嫌がられてでも一緒に居てやればいい、あいつに笑顔でいて欲しいならまずはあんたが笑顔になればいい　それを幸せと思うかどうかはあんたが決めることじゃない…フェイトが決める事じゃないのか…？」

プレシアははつとした表情を浮かべ、俺の言葉を聞いていた。

「それに、あんたはもう手遅れみたいなことを言うが…今からだって決して遅くは無いんじゃないか？」

そう言うと同時に、医務室のドアが開いた。

「母さん！」

そして、そこからフェイトが入って来て、プレシアに抱きついた。まあ、俺達の様子が映像で確認されているというのなら、その会話だって聞かれているはずだし…その様子をフェイトが知ろうとしなはずは無いからな…こうなること位、簡単に予想出来たけど…。

「母さん、母さん…！」

「フェイト…ごめんなさい、今まで…本当にごめんなさい！」

「フェイドオ…ほんとうによがったね…」

入口付近ではアルフが号泣している…って言うか、その後ろに居る

人達のほとんどが感動して泣いてるし…ま、母娘の和解なんて感動シーンの王道だしな…。

「…キョウ。」

突然呼ばれたから振り返ってみると、泣きつくフェイトを抱きしめながらプレシアが　　いや、プレシアさんがこっちを見ていた。

「ありがとう。あなたのおかげで大切なものを取り戻せたわ。…あとどれくらい生きる事が出来るか分からないけど、その時まで大切なものを　　フェイトと決して手放さないわ。」

「そうですか………よかったな、フェイト…。」

フェイトはこちらを向いて突然呼ばれた事に少し驚いていたが、すぐに嬉しそうな顔をして頷いてくれた

「うん！」

医務室に居る一同の感動が落ちついた頃、なのはがリンディさんに話しかけていた。

「プレシアさんは治らないって言ってたけど…本当に何とかならないんですか？」

その問いに対して、リンディさんは済まなそうに答えた。

「ごめんなさい…管理局の技術をもってしても、プレシア女史の病気を治すことはできないわ…。」

「そんな…」

それでも引き下がらなそうなのはに、プレシアさんが声をかけた。

「なのはちゃん…だったかしら？…ありがとう、でも…いいの。もう長く生きれない事はずっと前から知っていたから…。それに…」

そこまで言うと、プレシアさんは自分に抱きつきながら悲しそうに見上げてくるフェイトの頭を撫でながら言葉を続けた。

「大切なのはいつまでも生きることじゃない、例え短くても命が尽きるその時まで一緒に居てあげる事だって気付いたから…。」

それを聞いてフェイトの表情は少し明るくなったが、なのはの方はまだ納得しきれていないようだ。そして、突然俺の方を向いてきた。

「キョウ君。キョウ君なら　　プレシアさんの病気を治せたりしないの？」

…お前、俺なら何でも出来るとか思ってるんじゃないだろうな…俺にだって出来ない事はあるんだぜ？

…まあ、今回に限って言えば…。

「…治せるかどうかはわからないけど、もしかしたら治せるかもしれない手段ならあるよ。」

そう答えると、なのはだけじゃなく、ここに居る全員が俺に注目してきた。

「キョウ、お願い。母さんの病気を治してあげて…！」

だから治せるかどうかはわからないって言ってるだろ…。

だが、フェイトは勿論、フェイト以外の人も、まるで俺に懇願してるかのような表情で見てる。

「はあ…やっぱやるしかないか…。」

これはなるべくなら使いたくなかったんだが…使えば色々面倒なことが起きそうだし、何より　自分が人間じゃないって自覚させられるからな…。

「それじゃ、プレシアさんはそこに居てください。…ついだからケガしてるやつもその周りで並びな。」

俺がそう言つと、プレシアさんの周りにフェイト、アルフ、なのは、ユーノ、クロノの5人が俺の指示通りに並んだ。

「それじゃ、やるぞ…お前等、動くなよ……………トレース・オン投影・開始」

そして俺が投影したのは1本の小太刀。

それを使つて俺は　自分の左腕の手首から少し離れた場所を斬った。

「　…キョウ君、何やってるの!？」

そして、左腕を皆の方に振る事で、傷口から流れた血を6人皆に飛ばし、付ける。

「う、うわっ…！」

「何するんだい、アンタ！」

だが、血が付いてからすぐに皆の体が光り始める。そして

「き、傷が…！」

「治ってるの…！」

皆の体にあつた外傷は全て治癒された。さらに

「体が軽い…痛みも息苦しさも全くないわ…！」

プレシアさんの病も治してしまったようだ。

せめて病の進行を止められればと思つてやつたんだが………流石「真の壬生一族」の血…半端じゃないな…。

「一応病気が完治したか検査をして確認して欲しいのですが…とりあえず、これで大体は治つたはずです。」

「わかつたわ…すごいね、あなたって…。」

どちらかと言えば、俺よりも俺の体の方がすごいんだけどな…。

さて、プレシアさんの病気を治すことには成功したが、俺にはもう1つやるべきことがある。
それは…。

「…リンディさん、今からこの医務室一帯を出入り禁止にして、医務室の中については映像も音声も記録しなくてももらえませんか？」

「…何故ですか？」

「今からすることは秘術中の秘術　万人に見せるようなものはありませんから…」

「…お前は一体何をするつもりなんだ？」

「それは…今はまだ秘密だ。　その代わり、今医務室に居るリンディさん、エイミィさん、クロノの3人はここで俺のする事を見ていてくれて構いません。」

「…わかりました。今から医務室一帯を立ち入り禁止にして、記録は一切残さないと約束しましょう。」

まあ、一応映像などの記録に残るのを防ぐ結界を張っておくけどね…。

よし、これで　準備はほぼ完了した。
後は…彼女に許可をもらっただけだ。

クロノ side

キヨウは管理局の技術をして治す事の出来ないプレシア女史の病をいとも容易く治してしまった。

それも自分の血を数滴かけるといふ行為だけで………一体あいつは何者なんだ？

そして今度は何かしらの秘術とやらを使うから、医務室一帯を封鎖して欲しいと言いだした。…今度は何をするつもりだ？

母さ…艦長からその許可を得たキヨウはふと、左腕を肩の高さにまで上げた。

「サタン・ブレイズ
青色の煉獄業火」

そう呟くと、キヨウの左腕が突然青い炎となった。

「キ、キヨウ君！左腕が…！」

「俺が意図的にやったんだから大丈夫だよ、なのは。」

何なんだ、あれは…！？

…自分の腕を炎に　しかも見たこともない青い炎に変えるだなんて…聞いたこともないぞ…！！

目の前で起きた異常な出来事を目撃した僕達が驚いていると、突然キヨウの左腕の炎が大きくなった。

そして、その炎が退いたかと思うと、キヨウの前に人の形をした炎が残された。

もう何が起きているのかさっぱりわからないが…あの炎が象っている人　いや、少女はどこかで見た覚えがある気がするのだが…。

「初めまして、俺の名前は紅崎キヨウだよ。」

キヨウがその少女の形をした炎に話しかけ始めた。：あの炎に話を通じるといふのか！？

「：見てたからわかるって？：そつか。ちなみに今回の事はどれくらい知ってるの？」

キヨウがまるで炎から返答をもらったかのように話していたが、僕にはその返答は聞こえなかった。だが：確かに少女の炎がキヨウの問いに答えるかのように口を動かしていたような気がする。

「：ほとんど知っているんだ：じゃあ、いきなり本題に入らせてもらうよ……………君はもう一度生きてみたいかい？」

その言葉に、僕達は驚きを隠せなかった。

このジュエルシードをめぐる事件の経緯を考えれば、キヨウが今話しているあの炎の少女が誰なのか：そして、キヨウが一体何をするつもりなのか予想出来るが：本当にそんな事が出来るのか？

「ある手段を使えば、十中八九君を蘇らせる事が出来る。だが、君を蘇らせるということは即ち、君の生前の人生を否定する事だ。：だから俺は嫌がる君の事を無理矢理蘇らせるなんてことはしたくは無い……………」

それを聞いた少女は少し悩んだ後、キヨウに何かを伝えていた……………様な気がする。

「：そつか……………わかった。必ず成功させる！そして：ありがとう。」

「貴方……………一体何を……………」

ついにプレシア女史がキョウに尋ねた…とはいえ、あの様子だと僕と同じで何をするつもりなのか察してはいるみたいだが…。

「…彼女自身からも許可をもらえたので…アリシアを蘇生させます。」

彼の発言に皆が驚く。…やはり、そうだったか…。

「死者を蘇らせるだって…！そんなの無理だ…！」

そう叫んだのはユーノだが、それは僕も思っていた。…あいつは一体、どうするつもりなんだ？

「それにアリシア自身から許可をもらったって言ったけど、どうやってもらったんだい？」

さらにアルフがキョウに尋ねた。

「今、俺の左腕は青色の煉獄業火サタン・ブレイズという青い炎になっっているんだが、この炎は生と死を司る青い炎であり、この炎を使えば死者の魂を現世に呼び戻すことが出来るんだ。」

『生と死を司る』だって…！どれだけ規格外なんだ、あいつは…？

「じゃあ、今ここに居るのは…」

「そうです。ここにいるのはアリシアの魂です。」

そう答えると、キョウは一息おいてから言葉を続けた。

「…それじゃ、そろそろ始めさせてもらいます……………アリシアはあの生体ポットの近くに行ってくれないか？」

それを聞いて、青い炎の少女　アリシアの魂は自分の遺体が入っている生体ポットの近くに移動した。

「シリウス…例のものを出してくれ。」

「了解しました。」

一方で、キヨウはあいつのデバイス　シリウスから何かを取り出していた。

……あれは…鏡か…？あいつ、一体あの鏡で何をするつもりだ…？

キヨウは取り出した鏡を持ってアリシアの遺体の近くに寄り、鏡を向けた。

たまものしずいし
「玉藻鎮石」

キヨウがそう呟くと、突然鏡が輝き始め、目を開けていられなくなつた。

「くっ…！…！」

「これは…」

「きゃっ…！…」

「眩しい…！…！」

まさか…あの鏡はロストロギアか!!

次第に光が収まったので目を開けてみると、生体ポットの近くに居たはずのアリシアの魂が消えていた。
そして

「…う、うん…」

「……………え!!」「……………」

「……………!!」

死んだはずのアリシアの目が開き、まるで今までただ眠っていただけだったかのように伸びをし始めた。

そんな様子に僕達はいい声をあげて驚くしかなかった。プレシア女史に至っては驚愕の言葉さえ出てこないようだ。

「…あ、本当に戻れたんだ…。」

「アリシア…」

プレシア女史のつぶやきに気付いたアリシアが彼女の方に振り向くと、

「えへへ…ただいま、ママ!」

「アリシア!!」

プレシア女史がアリシアの方に駆け寄って抱きついた。
フェイトとアルフも近くに行き、なのはとユーノ、そしてキョウは

1歩離れたところでその様子を見守っていた。

ついに死者の蘇生まで成功させるとは…。

本当に…あいつは 紅崎キヨウは何者なんだ？

side out

いやあ…死者の蘇生なんて初めてだったから少し緊張したけど、上手くいつてよかった。

それにしても…たまものしずいしやっぱり玉藻鎮石すごいな…流石八咫鏡の原型だよな。一応力を弱めない為にも「モノづくりの才」で創造したオリジナルの方を使っただけで、蘇生が終わった後、突然ひびが入って崩れてしまった…まあ、必要になったらまた創造すればいいだけの話なんだがね…。

とはいえ、ちゃんと蘇生出来ているか確かめないと。

そろそろテストタロツサ家の人々も落ち着いてきたみたいだし…。

「アリシア、どこかおかしいところは無いか…？」

すると、アリシアは少し困ったような顔をした。

「うーん…おかしいところと言えばおかしいんだけど…。」

…何！？どこかミスったか…？

俺はすぐにアリシアの状態を確かめるべく、彼女の体を診た。

「トレース・オン解析・開始」

肉体年齢、約5歳

体の外面・内面共、損傷なし

身体能力、異常なし

リンカーコア、異常なし

魔力変換資質「電気」、異常なし

サタン・ブレイズ
異能の力「青色の煉獄業火」、異常なし

なんだ…特に体のどこかに損傷があるわけでもなく、身体能力が衰えてたりするわけじゃないじゃないか…。その上、リンカーコアにも異常は無いし…。

…へえアリシアって電気の変換資質があるのか…でも、フェイトもプレシアさんも電気の魔法使いまくってたからおかしくは無いよな…それにしても珍しいな…アリシアって異能の力を持つてるのか…しかも「青色の煉獄業火」だし……………えっ!?

「ええええええええええ!!」

突然、俺がそんな声を上げた事で、皆の肩が跳ね上がった。

「ひゃっ!!」

「な、何だい?」

「どうしたの、キョウ君!!」

そんな中、自分の体に起きた異変に気付いているのか、アリシアただ1人は俺の驚く様を見て面白そうに笑っていた。

「別に体のどこかが苦しかったり動かなかったりはしないんだけど

サタンIIプレイズ
青色の煉獄

L
L
L
L
L

て驚く番だつた。

第24話 治療と青い炎と……マジ？（後書き）

「というわけで第24話でした。いやあ……ちゃんと蘇生できてよかったですねえー、キヨウ君？」

「……余計なもの付いちまったがな……。」

「それは……まあ……しょうがないよ……。そのせいで何か障害があるわけじゃないんだし……」

「でも……レールガン「超電磁砲」とかならまだしも、サタン＝ブレイズ「青色の煉獄業火」だぜ……」

「それは……まあ……確かに……あ、こちら辺で新技・能力・宝具解説に入ります……！」

新技・能力・宝具解説コーナー

メンタルアウト
・心理掌握

「とある魔術の禁書目録」シリーズに出てくる能力。学園都市第5位のレベル5で、最強の精神系能力であり、記憶の読心・人格の洗脳・離れた相手と念話・想いの消去・意思の増幅・思考の再現・感情の移植など多種の能力を一手に引き受けて使いこなすため某電撃姫に十徳ナイフにたとえられる。

サタン＝ブレイズ
・青色の煉獄業火

「C D E : B L A K R」に出てくる異能の力。左手から発する青い炎によって、水や不燃気体物あらゆる物質に作用し、燃やし

尽くすというもの。また、生と死をつかさどる炎として、死者の魂を現世に呼び戻すといったこともできる。他の異能でも消し去ることはできないため、すべてのものに恐れ敬われ異能者の頂点に立つエンペラー
「皇帝」と謳われている力でもある。

・玉藻鎮石
たまものしずいし

「Fate/EXTRA」に出てくる「キャス孤」ことキャスターの宝具の…いわば完全体。日本神話の主神である天照大神の御神体であり、魂と生命力を活性化させる力を持ち、死者さえ蘇らせることができる神宝中の神宝。ちなみに、キヨウは「真の壬生一族」という存在である上、「モノづくりの才」で創造した際、自分を担い手に設定したため、この力を使いこなすことができた。

「…今回は色々設定を捏造しまくったので反響が少し怖いですが…楽しんでいただけたでしょうか？次回で無印は最後となります。…まあ、戦闘とかはありませんが楽しみにしてくれたら幸いです。」

「…戦闘ないのか？…折角戦闘でストレス解消したかったのに…。」
「フフフ…大丈夫、戦闘は無いけど多分ストレス解消することはできと思うよ…。」

「…何、その笑い…」

「…まあ、お楽しみってやつさ…それでは皆様、また次回お会いしましょうー!!」

「…あ！忘れてた！！…まだまだアンケート募集してますんで、初めて感想書く人も遠慮なくどしどし送っちゃってください！！」

「…忘れるなよ、そんな大事なこと…。」

第25話 これにて一件落着……………？（前書き）

どうも和風好きです。

今回で無印編が終了です。

…とはいえ、気がつけばもう25話ですよ…。

少し…いや、かなり長くなってしまいましたね。

とはいえ、泣いても笑ってもこれが無印編のラスト、気合い入れていきます！

それでは第25話、始まります！！

第25話 これにて一件落着……………？

いやあ、もう…いろいろ大変だった…。

まさかアリシアが「青色の煉獄業火」サタン＝ブレイズを使えるようになるとは…。だが、ものがものだったので、さらに詳しく診断していたのだが、そこでアリシアが服着ていない事を思い出して…。

いや、アリシア本人はいいんだよ。顔が赤くなった俺を見た後、自分が服着ていない事に気付いて

「いいよ、私を蘇らせてくれたキョウなら…むしろそのお礼？」

とか言いながら心底楽しそうに近寄って来たから…。

むしろ、その後にデバイスを起動させて『おはなし』してきたのはとフェイトの方がヤバかった…もう少しで河を渡る事になりそうだったし…。

そこで気絶してしまったからわからなかったが、俺以外の男性陣であるクロノとユーノはその隙に医務室から脱出していたらしい。俺を餌にして逃れるとは…後で殺す！！

結局、アリシアの体に「青色の煉獄業火」サタン＝ブレイズによる影響は特になかったからいいけどね…。

むしろ一番ヤバかったのはその後で…。

『おはなし』による傷を治している最中、突然魔法が使えなくなっ
たかと思うと…

ヴォン

突然、俺の体の中で、大きな鼓動のようなものが響いた。

や、やばい…！！

「悪い！俺は先に部屋に戻る！！」

そう言っ返事を待たずに部屋へ急ぐ。

早くしないと…アレが始まってしまう…！！

だが…今回は運が無かった。

「キョウ君、どうしたの！？」

「…どこかケガしているの？」

俺より部屋の出口に近かったなのはとフェイトに捕まってしまった。
今、俺の右腕をなのはが、左腕をフェイトが掴んでいる状況だ…。

「いや、そう言うわけじゃないんだ…！別にケガとかしているわけ
じゃないから離してくれないか…！！」

そう言つて俺は両腕を離してもらおうとしたのだが…。

「…その反応、ちょっと怪しいんじゃないかなあ…キョウ…。」

黒い笑みを浮かべながらアリシアが放った言葉に反応したなのはとフェイトが一層強く掴んできた…っていうか、これはもはや腕に抱きつかれてると言つても過言じゃないんだけど…。謀ったなー、アリシア！！

「キョウ君…何を隠しているの？」

「私が出来る事なら何でもするから…だから…ね？」

「…それなら今すぐ両腕を離して欲しいんだけど…」

「…それはダメ（なの）！！」

俺の頼みを無下に断る2人　何でもするって言つたのに…ってそんな事考えてる暇は…あ、ヤバい…。

ヴォン

もう1度俺の体内で大きな鼓動のようなものが響いた時、俺の体に変化が起き始めていた。
そして

「えっ………？」

俺は少年から少女へと変わってしまった。

「キョウ君が…女の子になっちゃった…？」

…やっちゃった…。

まさか人前で しかもよりにもよってこいつらの前でロストしてしまうとは…。

…確かに今日は時の庭園での戦闘から始まり、プレシアさんの救出に、アリシアの魂を呼び戻したりして「異能の力」を使いまくってたけどさ…。

だからってこんな時にしなくてもいいのに…。
ここでロストした時の姿を見せれば

「か、かわいい／＼／＼」

こうなる事は簡単に予想出来るんだよ…。

「キョウ君、これを隠したかったの？…べ、別にそんなことしないでいいのに／＼」

「そ、そうだよ…今のキョウはとっても…その…かわいいよ？／＼」

…いや、こうなるから嫌だったんだよ…。

「そろそろキョウ君を離してあげたらどうですか？」

そんな俺達の様子を見かねてか、リンディさんが話しかけてきた。
リンディさん…今回はかりは感謝します！！

「女の子になったのならちゃんと女の子の服を着せてあげないと…。」

俺のさっきの感謝を返せ！！

「そうですね、リンディさん。」

…えっ？

「折角だからいろんな服着てみようよ、キョウ…／＼／」

…何故そのやけにフリフリしたのがついた服を持って近づいてくるんですか？フェイトさん…っていうか、どこから取り出したんだよそんな服…！

「あ、私も参加する」

そんな楽しそうに参加表明するな、アリシア！！

…って！？いつの間に近づいてきて…あっ…ちよっ、やめ…あ、ア

ッ…

…現在、なのは達はプレシアさん達テストタロットサ家の人々の今後について話し合っているらしい。

…何故伝聞形かって？

俺はフリフリの付きまくったメイド服を着て部屋の隅で座ってたからな…もうお嬢に行けない（涙）

「今のマスターですと、『お婿』ではなく『お嫁』では？」

「うるせー！！」

…話をテストロッサ家の今後に戻すが…死んでいたアリシアは勿論無罪で、フェイトもそこまで重い罪にはならないらしいが、どうしてもプレシアさんの罪は重いものになってしまうそうだ。

…そりゃそうか…

元々違法な実験をして失敗し、追放されていたと言うのに、あれだけの騒ぎを起こしていればいくら管理外世界での行動とはいえ普通は重い罪に問われるよな…。

それを聞いていたなのはやフェイト、アリシア、そしてユーノの表情が暗くなる。

…だからといって何もしなかったわけではないが…。

「シリウス、例のデータを…」

「こちらです、マスター」

シリウスの格納領域から紙の束が出てくる。

「…それは？」

「プレシアさんを弁護してくれる証拠です。…エイミイさんからプレシアさんの経歴を聞いた後、気になった事があったのでアースラの端末を使って調べてみたんですが…色々と出てきましたのでレポ

ートにまとめておきました。」

リンディさんの質問に答えると、そこに居た皆が驚いた。…そこま
で驚く事か？

「まず、プレシアさんが管理局から追放されるきっかけでもあり、
アリシアが死んでしまった事故が起きた違法実験についてですが…
プレシアさんは上司の命令でほとんど強制的にこの実験をさせられ
ていたみたいですよ。しかも普通じゃ考えられない程のハードス
ケジュールで不眠不休な状態にさせていた上で実験をせざるを得な
かったせいで事故の原因であるミスをしたようですし…って言うか、
この上司、相当腐ってますよ。調べてみたら他にも色々やっつい
る証拠がたくさん出てきましたし…逮捕するならこのデータを使っ
てください。」

そうやって俺は別のレポートを取り出してリンディさんの前に差し
出した。

「…そうですか…」

そうやってリンディさんは俺のレポートに軽く目を通した。

「…確かに、これなら違法実験の事故については弁明が出来そうで
す。ですが…今回の事件についてはどうしようもありませんよ…。」

目を通し終えたリンディさんが残念そうにそう言ってきた。

…俺がそんな詰めの良い事をすると思うか？

「リンディさん、俺が管理局に協力する際に出した慰謝料代わりの
条件を覚えていますか？」

「確か…『自分が使う魔法だとかを他言、報告しない』ですよね？」

「…あれを少し変えます。」

「お前…それでプレシア女史を無罪にしろとか言つつもりじゃないだろうな…？」

「流石にそんなふてぶてしい事は言わないって…むしろ譲歩するつてところだな。」

「…譲歩？」

「他言、報告しない内容は俺の血についてとアリシアを蘇生させた事だけに限定します。魔法やその他の事については他言しても報告しても構いません。…その上で提案します。プレシアさんの罪を不問にしてくれるなら、代わりに何かあつたら民間協力者として俺を色々と使ってくれて構いません。」

「…成程、司法取引ですか…。」

そう、証拠などで無罪に出来ないなら他の方法で無罪にしてしまえばいい。特に、万年人員不足らしい管理局にとって最も有効なのは魔導師としての素質のある者との司法取引だ。過去の事件を色々調べてみれば、実際そのような取引で罪が不問にされている事例が結構あつたしな…。

だが、そこで問題になるのが俺が出した条件だ。実際に俺の実力を目にしたリンディさんやクロノならいいが、他の連中にとって報告書等に特にめばしい実力が記されていない者から司法取引を持ちこまれても、その価値がないと言つて一蹴されてしまっただけだ。だから

ら魔法や「異能力」といったものを報告してもらう必要があるのだ。

…とはいえ流石に俺の血の事はマズいけどな…それが知られれば協力者としてではなく研究材料としての価値を見出されてしまうだろうし…。

「…わかりました。キョウ君ほどの実力者ならこの取引は有効になるでしょう…。」

よし、これなら無罪になるだろう…。

「では、管理局に報告する為にキョウ君の使った魔法などについて色々と教えてくれませんか。」

…え、マジ？面倒なんだけど…。

まあ、俺から言いだした手前、断れるはずもないけどな…。

「わかりました…まずは何から話しましょうか？」

「そうですね…では、時の庭園で虚数空間に落ちたプレシアさんを助けた魔法について話してもらえますか？」

「わかりました…まず、誤解があるようなのでそれを直しておきたいのですが あれは魔法ではありません。」

「『魔法じゃない』だって！？ならあれは一体何なんだ！！」

「クロノ、うつさい！…あれは「サイコキネシス念動力」と言う 簡単に言う
と超能力です。」

俺の発言にその場が騒然となる。

「えっ！…キヨウ君、超能力が使えるの！？」

「俺は「異能の力」って呼んでるけど…」

「超能力だと！…そんなものがあるはずがない！！」

「…だったら何で虚数空間で作用させたにもかかわらず無効化されなかったんだよ？…虚数空間でも使えた事こそが、それが魔法で無いという証拠だろ…？」

「そ、それは…」

「…わかりました。あの時使ったのは「異能の力」というものだという事を認めましょう。」

「艦長！」

「…それで、その「異能の力」とはどのような力なのですか？」

「この力は基本的に自然界にあるエネルギーや状態を発生、操るというものです。その種類も色々あって…本来なら1人が使えるのは1つの能力というのがほとんどですが、稀に複数の能力を使える人もいます。」

「ちなみにキヨウ君はどんな能力を使えるのですか？」

「俺の能力ですか…例えばなのはとフェイトの決闘の後に来たプレシアさんの攻撃は座標移動ムーブポイントという能力で瞬間移動して避けましたし、

時の庭園では機械兵を壊す為に超電磁砲レールガンという電気を操る能力を利用して攻撃してました。あと、先程使った青色サタン・ブレイズの煉獄業火も能力の1つですよ。」

「随分と便利そうですね…」

「そうですね…「異能の力」を使うのに魔力もデバイスも呪文の詠唱も必要ありませんから基本的には便利ですよ…まあ、デメリットもあるんですけどね…」

「デメリット…ですか？」

「今の俺の状態こそがそのデメリットです。俺は「ロスト」って呼んでいますが、能力を使い過ぎると、24時間能力を使えなくなるだけでなく、肉体に何らかのリスクを負う事になるんです。それで…俺の場合は…まあ…こうなるわけで…」

「『俺の場合は』という事は、人によってそのリスクは変わると言う事ですか？」

「そうです。俺が知っている限りだと…体が小さくなったり、体温が急激に下がったり…中にはネコになるなんてものもあります。あと…これはおそらく俺だけですが、「ロスト」している最中は魔法も使えなくなってしまうんです。」

「という事は…」

突然クロノが俺に何か言ってきた。

「…何だ？」

「今のお前は魔法も「異能の力」も使えないと言う事が…それではその「異能の力」とやらをろくに使う事が出来ないじゃないか。」

…それは俺の力が使えないと言っているのか？

「…確かにロストするといつもよりは弱くなってしまうが…それでもお前に負ける程弱くはならないぜ。」

「何だと…！？いくら普段は僕より強くても、魔法の使えないお前に負ける程僕は弱くは無い…！」

「…ほう…粹がるのは良いが、そんなに魔法を過信していると痛い目見るぞ…？まあ、そのお前の魔法も俺にとってはたいしたことは無いがな…。」

「お前…！その言葉後悔させてやる…！」

そう言つてクロノはデバイスをセットアップさせた…上等だ…！

「それはこっちのセリフだ…！まあちょうどいい、ここでロストしたおかげでストレスが溜まつてるんだ…お前で発散させてもらうぜ…！」

そう言つて俺達は訓練室へと向かった。

なのはside

『行くぞ！ステインガー・スナイプ・マルチプルシフト！』

『…遅い！』

『な、何だと！？』

『確かに魔法や「異能の力」は使えないが…俺が最も得意な体術は使えるんだよ！……無限に行くぜ　フラッシュチャリオット！』

『う、うわああああ…！！』

私達は2人が部屋を出ていった後、キョウ君とクロノ君の戦いをモニターで観戦しました。

…キョウ君が魔法や超能力？を使えなくなっても、相変わらずクロノ君がかわいそうな事になっています。でも、今回はキョウ君が女の子になっているから、いつもと違ってクロノ君がかっこ悪い感じもするの…。

「あの…止めなくていいんですか？」

「元と言えばクロノが売った喧嘩ですから…それにクロノにとってもいい経験になるでしょうし…。」

『これで6回目…だがまだまだ続くぜ　フラッシュチャリオット…！！』

『もうやめてくれえええええ…！！』

クロノ君…頑張っ…。

数日後、俺となのはしばらく管理局に行かなきゃならないフェイトとアルフ、プレシアさん、ユーノを見送る為に海鳴臨海公園に来ていた。

俺の司法取引によって罪が不問になりそうとはいえ、書類の都合とかで1度管理局の本局に行かなくてはならないそうだ。

ユーノは事件の関係者として証言する為に本局へと行くらしい。

一方で、アリシアはしばらく俺の家に住む事になった。…その理由は、青色の煉獄業火にある。

アリシア自身には問題が無かったとはいえ、青色の煉獄業火は扱いを間違えればその被害は尋常ではない代物である。だから、ちゃんと思い通りに能力を使えるようになるまで同じ能力を持つ者として俺が色々指導する事になったのだ。

「キヨウ…アリシアの事、頼んだわよ。」

「よろしくね、師匠？」

「…別に師匠なんて呼ばなくてもいいぞ。」

「でも、キヨウが色々教えてくれるんでしょ？…ならキヨウは私の師匠だよ。」

…まあ、別にいいか。

するとクロノが近づいてきて、

「あまり時間は無いが、しばらく話すといい。僕達は向こうにいるから…」

と言ってユーノとアルフ、プレシアさんを連れて向こうへいったので、俺となのは、フェイト、そしてアリシアの4人が残された。

「…なんだかいっぱい話したいことあったのに、変だね。フェイトちゃんの顔見たら、忘れちゃった。」

「私は そうだね。私も上手く言葉にできない。…だけど嬉しかった。まっすぐ向き合ってくれて…」

「うん、友達になれたらいいなって思ったの。…でも、今日はもうこれから出かけちゃうんだよね…」

「…そうだね、少し長い旅になる。」

「また、会えるよね？」

「うん…少し悲しいけど、やっと本当の自分を始められるから…」

そこまで言った後、フェイトは何故か顔を赤らめながら言葉を続けた。

「今日来てもらったのは返事をするため。」

「え？」

「君が言ってくれた言葉、『友達になりたい』って…」

「あ…うん！うん！」

「私に出来るなら…私でいいならって…ただどうしていいかわからない　だから教えて欲しいんだ。どうやったら友達になれるのか…。」

「…簡単だよ。友達になるの、すごく簡単…！名前を呼んで…始めはそれだけでいいの。君とかあなたとかそういうのじゃなくて、ちゃんと相手の目を見てはつきり相手の名前を呼ぶの。…私、高町なのは、なのはだよ。」

「…なのは」

「うん！」

「なのは」

「うん！！」

その後もフェイトは何度もなのはの名前を呼び、なのははそれに答えながら感極まったらしく、泣きだしてしまった。

「…少しわかった事がある。友達が泣いていると、同じように自分も悲しいんだ。」

「フェイトちゃん！」

それを聞いたなのはがフェイトに抱きつく。

「ありがとう、なのは。…今は離れてしまっけど、きっとまた会える。そうしたら、また君の名前を呼んでもいい？」

「うん！うん！！」

ついにフェイトも泣きだしてしまった。

向こうの方を見てみれば、アルフはそれはもう泣きまくっており、プレシアさんとユーノは涙目になっていた。

俺は……正直もらい泣きしそうだった。
そんな中、フェイトが俺の方を向いた。

「キョウ…君とも友達になりたいんだけど…いいかな？」

「…今更何言ってるんだよ。」

「…え？」

「もう、フェイトは俺の事を名前で呼んでるだろ？…だから、俺達
はとっくに友達になってるんだよ。」

「…うん！」

そう言っつてフェイトは笑顔になってくれた。

…ああ、そう言えば俺が最も守りたかったのはこの笑顔だったんだ
よな…

「…キョウ」

突然呼ばれたかと思うと、俺の顔にフェイトの両手が添えられ

「……………!!」

「ああー!!」

「お……」

「やるじゃないか、フェイト」

「あらあら。」

「「なっ!!」」

フェイトの唇と俺の唇が重なった。
……ここ、これって……／／／

「キョウ……大好き!／／／」

そう言つてフェイトは顔を真っ赤にしながら笑った。
俺は茫然としてしまつてそこから動く事が出来なかった。

「フェイトがするなら私もしよつかなく?」

「……………いや、ちょっと待てー!!」

「いいでしょ、キスの1つや2つくらい……それに
私を蘇らせ
た責任、取ってもらうんだから」

「責任って何だ、責任……って……」

俺がアリシアの発言に反応している中、背後からものすごい殺氣を感じた。

…ふ、振り向きたくない…（汗）

「…キョウ君。」

よ、呼ばれた!?

…振り向きたくないけど…振り向かなきゃ殺られる!!

「は、はい…何でしょうか…?」

必死の思いで振り向いてみると、今まで見た中で最も巨大な黒いオリウを出しているのは…いえ、なのは様がいらっしやいました。

「…るい…」

「はい?」

「…フェイトちゃん、ずるい!私もキスするのー!!」

そう言っただけなのは俺に襲いかかって来た。

この後なのはと面白半分で参戦したアリシアのおかげで大変なことになったが…まあ、これが一件落着というものなんだろう。

そんな事を思いながら、俺はもみくちゃにされていった。

「…これが今回の事件におけるキヨウの活躍。」

「へえ…キヨウってこんなことしてたんだ。」

「いや、その前に何で俺の行動の記録がこんなに映像として残ってるんだよ？…シオリは万が一の為にこの家で控えていたはずなのに…」

現在、我が家では監督：シオリ、撮影：シオリ、編集：シオリな「紅崎キヨウの活躍」ジュエルシード事件編」という映像作品をシオリとアリシアが鑑賞していた。…いや、会ってすぐにここまで仲良くなるのは良いと思うけど…何でそんな映像があるんだよ…？

「…前にも言っただけど、私の手にかかれば遠くで起きている事を見ることも、それを映像として残す事も容易い。それに…見せ場がありそうな時は転移魔法で現場に赴いて撮影した。」

「…お前、何やってんだよ…それじゃ家で控えてた意味がないだろ…！」

だが、そんな俺の言葉は無視され、シオリはまたアリシアと話し始めた。

「それより、私の部屋にキヨウの秘蔵の写真集があるのだけれど…見る？」

「本当？…うん、見たい！！」

そう言って2人はシオリの部屋に行った。

…俺、シオリの主にしてアリシアの師匠だよな？…扱い酷くない？

その日、俺は再び枕を涙で濡らしながら寝ることになった。

とストレートを省略して正拳のラッシュだけを6回、つまり100発以上の正拳を繰り出しました。

・ロスト

「C D E : B R A K R」において、能力を過剰に使うと起きる現象で、正確には「コード：ロスト」と言う。ロストすると24時間能力が使えなくなるだけでなく、肉体的に何らかのリスクを負う事になる。その代わり、筋肉の超回復の様に、ロストする度に能力は強化されていく。だが、本来は異能の力を使い続ける、つまり何度もロストすると、能力者の肉体を蝕んでいき、最後は「コード：エンド」を起こし、死を迎える事になってしまうが、キヨウの場合は神が後付けでロストすることを「異能の力」のデメリットとしたため「コード：エンド」を起こすことは無い。キヨウの青色の煉獄^{サタン・ブレイズ}業火が使えるようになったアリシアも、同じくロストのしすぎで死ぬことは無いのでご安心ください。

「…おいこら、今後の宣伝するためにさっさと起きろや、このダメ作者が…！」

「…クロノの2倍もやっておいてそんな無理言っなよ……えっと…まずは報告から……総合評価が600を超えました！お気に入り登録してくれた皆様、この小説を評価して下さった皆様、本当にありがとうございます…！」

「これからも頑張っていきますので、皆様よろしくお願いしますm (_ _) m」

「あと、無印編は終わってしまいました、まだまだアンケートは

受け付けておりますので、回答してくれると和風好きが狂喜乱舞します！よろしく願いします！！m（＿）m」

「…何だよその宣伝…それで、次回からはどうするんだ？」

「A・s編に入る前にしばらくは日常編？をやるつもり。あと…少し短めのシリーズものを…やろうかな、と…」

「…そんなことをやって大丈夫なのか…？」

「大丈夫さ！………多分。」

「…あつそ………とりあえず、今回はこの辺で…」

「それでは皆様、また次回お会いしましょう！！！」

第26話 修行と遭遇（前書き）

どうも和風好きです。

無印編が終わったという事で、少し今までの部分を見直していました。

それにしても、今見直してみると細かいとはいえ間違いがかなりあって結構冷や汗ものでした。

自分でわかる範囲のものは何とか訂正したんで、よかったらもう1度読んでみてください。

それでは第26話、始まります。

第26話 修行と遭遇

「それじゃ始めるぞ。」

「よろしく願います、師匠！」

アリシアが俺の家に住み始めてから数日後、俺達2人は修練場にて修行を始めようとしていた。

「さて、これから青色の煉獄業火サタン・ブレイズの使い方を教えていくわけだけど……何か注文とかはあるか？」

すると、アリシアはそれまで楽しそうだった表情を潜め、真剣なまなざしで俺を見つめてきた。

「キョウ……私は強くなりたい。」

そして、アリシアは今まで聞いた事がないような真剣な声でそう答えた。

「今までの私は、いつもママに守られてばかりだった。それに、私のせいでママだけじゃなくてフェイトやアルフ、なのは、ユーノ、クロノ達が傷ついてしまったんだ。……だから今度は私の番。守られるだけの存在じゃなくて、私もみんなを守り、支えたい。その為に私は強くなりたい！」

そう言うアリシアの目には強い光が宿っていた。

アリシアの為を思えば、そんなことさせずに平和な日常に生きても

らうのが正しいんだろうけど…残念だけど俺はこの頼みを断る事は出来なさそうだ。

「強くなる　力を手に入れるという事は、同時に人を殺す事が出来るようになるという事でもある。強くなりたいと願うのなら、それにふさわしい覚悟を　人を殺し、人に殺される覚悟を持つてもらふ事になるけど…それでもいいのか？」

「私は　いや、私だからこそ人の命の重さはわかってるつもり…。それでも、私のこの思いは変わらないよ、キョウ。」

目の前の彼女は迷うことなくそう答えた。
覚悟は…それなりに出来ているみたいだね。

「そうか…なら、俺に出来る限りで教えるよ。」

俺のその言葉を聞いて、アリシアがほっとしたような表情になる。

「それで…どんな感じで強くなりたい？」

「そうだね…折角キョウが師匠になってくれるんだから剣術を教えてよ。」

剣術か…これは予想外な要望だな…。

魔法中心の世界出身のアリシアが剣術って大丈夫なのだろうか？

…いや、よく思い返してみれば同じ出身であるフェイトはかなりの近接戦闘の技術を有していたよな…。

そう考えれば、アリシアもちゃんと鍛えればそれなりの剣士になれるのか…？

…いつまでも考えていても仕方がない。とりあえず、ものは試しと
いう事で青色の煉獄業火サタン・ブレイズの使い方と共に、剣術を中心とした戦い方
を教え、その成長次第で色々の方針を変えていけばいいか…。

「わかった。…とはいえ、今は剣術の修行の準備が出来ていないか
ら、今日は基本的な事と、青色の煉獄業火サタン・ブレイズについて教えておくぞ。」

「わかった。それじゃ………よろしくお願いします、師匠！」

「まずは…現状でどれくらい青色の煉獄業火サタン・ブレイズを使う事が出来るかを
確かめよう。…とりあえず発動する事は出来る？」

「それはもちろん…ほらっ！」

そう言つてアリシアは左手を青い炎へと変えた。

「…あれ？キョウミみたいに左腕全体が炎にならないんだけど…。」

「最初から上手く使えたら苦労しないさ…とにかく、能力を使う事
が出来るなら…」

そう言つて俺は目盛りが40まで書かれた棒状のものをアリシアに
渡す。

「…なにこれ？」

「これは俺が作った「異能の力」の力の強さを測る為の計測器みた

いなものだ。これを持って能力を発動させると、その人の能力の強さがどれくらいかが数値としてわかるというものさ。」

「へえ……」

「それじゃ、これを左手に持って青色の煉獄業火サタン・ブレイズを発動させてみな。一応言っておくけど、全力でやった方が数値は伸びるぞ。」

「わかった……いくよ！」

異能メーター（仮）を持ったアリシアの左手が再び青い炎となる。そして、手にする計測器が0の目盛りのところからどんどん赤くなっていく。

そして、10の目盛りの辺りまで赤くなったところで目盛りの上昇はとまり、程なくして青い炎は消えた。

「これは……11、いや12というところかな……。」

「最大40のところを12って……私の力は弱いのかな……？」

「まあ、今のところはね。でも、使えるようになって間もないのにこの数値なのはすごい方だと思うよ。「異能の力」は使えば使う程、ロストすればする程、強くなっていくんだ。だからこれから修行すればどんどん強くなっていくから大丈夫だよ。」

俺がそう言つと、アリシアは少し嬉しそうな顔をしてくれた。

「ちなみにキョウウってどれくらいなの？」

……俺？俺は最近計測した事ないからなあ……。まあ、結果はある程度

予想出来るけど。

「そうだな…俺も久しぶりにやってみるか。」

そう言つて俺も新しい異能メーターを左手に持つ。

サタン・ブレイズ
「青色の煉獄業火」

そして、左腕全体が青い炎となり、メーターがどんどん赤くなっていく。

結果は

「…40オーバー…なんだ…」

メーターは最大値の40どころか、全体が赤くなり、本来「異能の力」が通じにくい素材で出来ているはずのメーター自体が少し燃え始めていた。

「しばらくはこの異能値を上げるための修行をしていくから…」

「…でも、異能値を上げるって言っても簡単には上げられないんですよ?」

「いや、結構簡単に上げられるよ。今からやる修行もとても簡単だし…」

「へえ…そうなんだ。じゃあ、私は何をすればいいの?」

「それはな…」

そう言つてアリシアに修行内容を告げる。
…どんな反応をするか楽しみだ。

シオリside

どうも、シオリです。

現在私は図書館に居ます。

キョウとアリシアは修行をするとのことでしたが、その中に私がいてもヒマなだけでしょから図書館にやって来たというわけです。さて、今日はどんな本を読みましょうか…。

「あ、シオリさんや！」

ふと誰かに呼ばれたので、その声のした方を向いてみると、そこには車椅子に座ったはやてがいました。

はやては図書館の本を膝にのせて、両手で車輪を回してこちらに近づいてきます。

「今日はどんな本を探しとるんや？」

「…今それを考えていた。」

「それなら…この本なんてどうや？」

そう言つてはやては近くの本棚から1冊の本を抜き出し、私に渡してくれました。

…これはなかなか面白そうですね。

「…あれ、シオリさんですか？」

少しだけ中を見て、読むかどうか決めていたところ、今度は背後から声をかけられました。

この声は…

「…すずか。」

「こんにちは、シオリさんも本を読みに来たんですか？」

私はその問いに頷く事で答えました。

「すずかも？」

「はい。ちょっと本を読もうかと思って…」

「…なあ、シオリさん。その子は誰なん？」

ああ、はやてはすずかに会った事がないんですね…。

「この子は月村すずか。キヨウのクラスメートで、私の友達。」

「初めまして、月村すずかです。」

「この子は八神はやて。私とキヨウの友達。」

「初めまして、すずかちゃん。八神はやてです。」

「よろしくね、はやてちゃん！」

2人とも本が好きないい子ですからね。いい友達になれるでしょう。

あの後、3人で一緒に本を探したり、色々と話していると、稽古の時間になったという事です。さすがが帰らなくてはなくなり、ついでに私達も帰る事にしたのではやてを家まで送りました。その後、私も家に帰って来たわけですが…

「おかえり、シオリ。」

「お…おかえり…なさい…」

「……何、これ…？」

そこではネコのような着ぐるみが腕や足を震わせながら洗濯物を取り込み、それを縁側に座ったキョウが眺めているという何とも奇妙な光景が広がっていました。

「…アリシアは？」

そう尋ねると、キョウは例の着ぐるみを指差し、着ぐるみも腕を震わせながら手を挙げました。……まさか……

「アリシア…なの？」

そう着ぐるみに聞くと、着ぐるみ いや、アリシアは領きました。

…それにしても、何故このような事に…？

私が黙って考えていると、私の思っている事を察したのか、キヨウが

「これは「異能の力」を強くするための修行だよ。」

と言いました。…着ぐるみを着る事が修行なのですか…？

「あれは一見ただの着ぐるみに見えるけど、実は俺特製の基礎力アップ用パワースーツなんだ。内側は着ている者の能力や魔法を完全に封じるよう作られた上、かなりの重量があるから動くのも大変なんだよね。」

…そうなのですか…ですが…？

「そんな筋力を上げるだけの修行では「異能の力」は強くないのでは？」

私がそう聞くと、キヨウは少し嬉しそうに答えました。

「それがそうではないんだな。」「異能の力」は生命力の強さによって左右される。だから、このスーツを着て、その重さに耐え続ける事で、気力・体力が向上して能力が強化されるんだ。…それに、この修行で基礎体力が上がればアリシアのリクエストである剣術の修行にもつながるし、魔力量増加の為の機能もあるから将来魔法を身につける時にも役に立ってくれるはずさ。」

…最初見た時はただアリシアで遊んでいるだけかと思いましたが、色々と考えているのですね…。

ですが、1つ間違いがあるようなので訂正しなくては…。

「…キヨウ、アリシアに魔法資質は無いから魔法云々の件に意味は無い。」

そう忠告すると、キヨウは不思議そうな顔をしました。

「…え？…いや、そんなことはないって。アリシアを蘇生させた後、彼女に異常がないか診てみた時にリンカーコアも魔力変換資質もちやんと確認したぜ？」

…そんなはずは…「紅崎キヨウの活躍（ジュエルシード事件編）」の撮影の為にアースラに潜入して、アリシアの蘇生シーンを撮影した際、アースラの端末をハッキングしてアリシアの情報を調べてみたところ、『アリシアにはプレシア女史の魔法の素質を一切受け継いでいない』というデータがあったはずなのですが…。

私は「禁録の書」の中の魔導書から、解析の為に魔法を起動し、アリシアの体の情報を解析しました。

リンカーコア、正常

魔力変換資質「電気」、正常

…確かにリンカーコアも魔力変換資質もあるようですね…。
…とすると、その情報が誤りだったのでしょうか？

「アリシア、ちょっと聞きたい事あるから頭部だけ外してくれない？」

「…どうせなら全部脱がしてくれればいいのに…」

そう文句を言いながらアリシアは着ぐるみの頭部を外しました。
…随分疲れているようで、ものすごい表情をしていますね…。

「…で、聞きたい事って何？」

「アリシアって魔法資質ないのか？」

そうキョウが尋ねると、アリシアは少し言いづらそうな表情をしました。

「あゝ、実はそうなんだ。…ママもフェイトもあんなにすごい資質を持っているのに、私はその欠片も無い…だから私は魔法が使えないんだ。」

成程、私が調べた情報は誤りではなかったようですね。

「そうすると、今あるこの資質は一体…？」

「魔法資質って生まれもつてのものだろ？ だったらある日突然出来ているだなんてことが起きるはず無いのに…。」

「そう。だから少なくとも生前の間に魔法資質が出来るはずがない。」

「だとしたら…考えられるのは蘇生の影響か…。蘇生した事で出来たか、煉獄の業火が玉藻鎮石サタン・ブレイズによる副作用か…？」

「…さつきから何の話をしているの？」

私達の会話に対し、アリシアがそう言ってきました。…そういえば、彼女の事だというのに事情を説明していなかったのでしたね…。

「…あ、えゝつと…何と云えばいいか…実は蘇生による副作用がもう1つ見つかったんだ。」

「え…どこか体が悪いの？」

そう言うアリシアの表情は不安そうです…全く…。

「キヨウ、言い方が悪い。…改めてアリシアの体を診てみたら、本来無かったはずの魔法素質があなたにも出来ていた事が分かった。」

「…え？それって…」

「あなたも魔法が使えるようになったという事。」

そう説明すると、アリシアは一瞬唖然としていましたが、すぐに嬉しそうな表情になりました。

「本当？本当に私も魔法が使えるようになったの！？」

「多分使えるよ。リンカーコアもちやんと正常だったし…。」

キヨウの言葉を聞いたアリシアは本当にうれしそうです。…やはり、フレシア母親と妹が魔法を使える一方で自分だけが使えないという事が少し気にかかっていたようですね…。

「とはいえ、何故無かったはずの魔法資質が出来たのか、理由がはっきりしないので一応体の状態をちゃんと診察、解析したいから、

少しいい？」

「わかった！」

そして、私と着ぐるみを脱いだアリシアは家の中に作った儀礼魔法用の部屋　　わかりやすく言えば「工房」へと移動しました。

side out

結論から言うと、アリシアに魔法資質が備わったのは玉藻鎮石たまものしずいしによる魂と生命力の活性化によるものだと考えられるみたいだ。

シオリの話によると、「禁録の書」の中に記録されているある魔導書に、人間の生命力が異常に活性化するとそのはずみでリンカーコアが形成されることがあるという理論が書いてあるらしい。
そしてアリシアの場合、玉藻鎮石たまものしずいしによって魂と生命力を活性化させて蘇生したため、そのはずみにリンカーコアが形成されたのではないかとのことだ。

実際のところ、前例が一切なく、あまりに予想外過ぎる事態なので真実はわからないが、この変化による悪影響は無いらしいから大丈夫だろ…。

それで、魔法が使えるのなら使えるようになりたいという事で魔法の修行をシオリにしてもらった事になった。

これでアリシアの修行は異能の力、剣術、魔法の3種類になった…
随分と勉強熱心な事で…。

俺としても、異能の力と剣術の修行で指導しなきゃならないだけでなく、アリシアが使う為のデバイスを用意してあげなければならな
いわけで…これから忙しくなるな…。

アリシア専用のデバイスを用意するかしないかは別として、とりあ
えず練習用のデバイスを早急に用意しないと…ああ、面倒くさい…。
まあ、しばらくは退屈しないで済みそうだけどね…。

さて、もう遅い時間だし、これからの忙しさに備える為にもさっさ
と寝るか…。

第26話 修行と遭遇（後書き）

「というわけで第26話でした。」

「…時間かけたにしてはそんなに面白くない気がするんだが…。」

「…まあ、どちらかと言うと今回は設定説明が中心だからね…。」

「拳句の果てには捏造設定を作りやがって…。」

「そ、それは…ごめんなさいm(――)m」

「…まあ、いいや。…それより今回は新しい技とかもないし、特に言う事もないから後書きのネタがないんじゃないかねえの？」

「そ、そんなこと言うな！自分が頑張ってネタを考えれば…考えれば…」

「…どうした？」

「……ネタが思いつかない（涙）」

「…だったら最初から言えよ…。」

「うつ…皆様すみません。」

「…じゃあ、次回は何をするんだよ？」

「次回？次回はキョウ君が少し大変な目に合うだけだよ？」

「…おい、今さらつと気になること言ってたよな？」

「次は頑張ってギャグ要素をとりいれるんで、よろしくお願いしますm(_____)m」

「おいコラ、無視してんじゃねえ！」

「それでは皆様、また次回お会いしましょう。」

「勝手に終わらせるな　　！！！」

第27話 突撃、紅崎邸！――三人娘Ver.――（前書き）

…どうも、和風好きです…

…まさかの10日ぶりの投稿になってしまい、本当に申し訳ありません…m（――）m

…ちょっとゼミの合宿と身内の不幸が続き、さらに教習所と大学の授業再開までのコンボのおかげで疲労が溜まってしまいました…

…今もまだ疲労が抜けてはいないんですけど、何とか書きあげました…オチが微妙なんですけど…

…とにかく、次はさっさと疲れを癒して元のペースに戻しますので、今回はお許しただければ幸いです…

…それでは第27話、始まります。

第27話 突撃、紅崎邸！――三人娘Ver――

「おはようなの、キヨウ君！」

「アンタの家、結構いい家じゃない。」

「お邪魔します、キヨウ君。」

こんにちは、私、高町なのはです！

今日はキヨウ君の家に遊びに来ました。

キヨウ君と友達になってもう3年近く経ちますが、キヨウ君の家に来るのは初めてで少しドキドキです。

思えば遊びに行きたいと言った事は何度かあったけど、どれも『用事があるから』とか、『今、家が散らかっているから』という理由でキヨウ君に断られていました。

でも、今回、やっとの事で念願のキヨウ君の家に遊びに行く事が出来ました！

しかも、連休を利用してのお泊まり会です！！

…なんで今回は断られなかったのかって？

それは、昨日のお昼休みにキヨウ君から誘われたからです。

（約1日前）

「…そう言えばキヨウ君、アリシアちゃんは元気？」

「ん？…ああ、元気にしてるよ。…むしろ、少し元気過ぎる気もする位だな。」

「…ねえ、キヨウ？」

「何だ？」

「そのアリシアって誰なの？」

「ああ、この前言った俺となのはの友達のアリシアのお姉さんだよ。今、俺の家で暮らしてるんだ………うおっ！？」

「へえ…キヨウ君って今、女の子と一緒に暮らしてるんだ…」

「随分といい御身分じゃない…」

「…何故俺は2人から箸を向けられてるんだ…？なんか箸がナイフか何かに見えてきたんだけど…」

「よく考えてみたら、やっぱりアリシアちゃんだけずるいの！」

「…ってなのは！お前は事情を知っているだろうが！！」

「私達なんかキヨウ君の家に遊びに行ったことも無いのに…」

「そうよ！アンタいつも用事があるとか散らかってるって言って断ってばっかじゃない！！」

「ちょっと…おはなししたくなってきたの…」

「…じゃ、じゃあ、今度俺の家に来るか？…別に面白いものとか特
にないけど…」

「えっ、いいの？」

「楽しみなの…！」

「もうその発言は取り消せないわよ！ それじゃ、明日からキ
ヨウの家でお泊まり会やるわよ…！」

「「おー！」」

「…って、明日から？…しかもお泊まり会だと…？」

「何よ、今更になって取り消すとか言い出すんじゃないでしょうね
？」

「キヨウ君…そんなことしたらO H A N A S H Iなの…」

「バ、バージョンアップしたと！？…はあ、わかったよ。泊まっ
てもいいけどさ…ちゃんと親に許可もらってこいよな…」

「「「わかった（の）…！」」」

そういうことがあってキョウ君が私達を招待してくれました。

勿論、お父さんとお母さんの許可をもらってきましたよ。

途中、お兄ちゃんが何か言ってたけど、『O H A N A S H I』
したらちゃんと許してくれました。

「おはよう、3人とも。」

家の前に来た私達を和服のキョウ君が迎えてくれました。

そう言えば、アースラでもよく和服を着ていたけど、キョウ君って和服が好きなのかな？

「ほら、いつまでも外に居ないで家の中に入ろっぜ。」

そう言われた私達はキョウ君に続いてキョウ君の家にお邪魔しました。

「…いらっしやい。」

「おひさしぶりー、なのは。」

家に入っただけに、シオリさんとアリシアちゃんが私達を迎えてくれました。

「…あ、2人は会っの初めてだよな？…初めまして、私はアリシア・テスタロッサです。よろしくね。」

「アリサ・バニングスよ、よろしく。」

「月村すずかです。よろしくね、アリシアちゃん。」

アリサちゃんとすずかちゃんがアリシアちゃんと自己紹介をした後、私達は客間に案内されました。

そして、荷物を置いたところでアリサちゃんが突然立ち上がりました。

「それじゃ、この家を探検するわよ!!」

「…へ?探検?」

「そうよ。こんな広い家に来て、しかも今まで誰も来た事がないのならまずは探検するしかないでしょ!」

確かにキヨウ君の家はとても広くて、何があるのかとても気になるけど…勝手に探し回ったらキヨウ君やシオリさんに迷惑がかかったやうんじゃない?…

「それに、なのはとすずかはキヨウの部屋がどうなってるか気にならないの?」

「「アリサちゃん、行こう!」!」

「なんでだよ…」

こうしてキヨウ君の家を探検する事になりました。

それにしてもキヨウ君の家はとても広いです。

客間や、キヨウ君やシオリさん、アリシアちゃんの部屋がある母屋だけでも十分広いのに、その他にも道場や土蔵があるからかなりの広さになっています。

まずはキヨウ君の部屋からです。

キヨウ君の部屋は母屋の少し奥の方になりました。
そしてその中は…

「…あんまり物が置いてないのね…」

キヨウ君の部屋には机とタンス、そして何だか少し難しそうな本がたくさん入っている本棚くらいしかありませんでした。

「他にも何か置かないの？…ぬいぐるみとか。」

「…俺みたいな男がそんなもの置いてたら不気味だろう…」

「そんなことないよ、キヨウ君。」

「それにしたって他にゲームとか持ってないの？」

「ゲームとかはテレビのある居間に置いてあるよ。」

「ふーん…思ったよりも楽しくなかったわね…」

「面白いものとかは無いって昨日言っただろうが…」

一通り見た後、みんなで別の部屋に行く事にしました。

キョウ君の部屋から少し離れたところにシオリさんの部屋とアリシアちゃんの部屋があるみたいなので、シオリさんの許可をもらってからシオリさんの部屋を見せてもらう事にしました。

「…俺の時は許可なんかとらなかったのにな…」

「ここが私の部屋。」

「予想してたけどこれは…」

「すごいですね!!」

「本がたくさんあるの…!」

シオリさんの部屋は…とにかく本がたくさん入っている本棚がいくつも並んでいます。

ここにある本は全部、何回も読みなおしたってシオリさんは言っているけど…本当にすごい数の本なの…!

本が大好きなすずちゃんはそのたくさんの本を見て楽しそうにしています。

「それにしても意外ね。シオリさんの職業からしてパソコンがいくつもあるのかと思っていただけ…机の上にある1台だけなのね。」

「それは隣の部屋にある。」

そう言うシオリさんの後に続いて隣の部屋に行ってみると、今度は

いくつものパソコンが並んでいました。

「流石投資家ってところかしら。」

「このパソコンを同時に使うんですね？」

「え、こんなにたくさんパソコンを一度に使うの!？」

その時、並んでいるパソコンの1つから音が鳴りました。

「これは…少し待ってて。」

「ほれ、なのは。あんな感じで使うんだよ。」

シオリさんはいくつものパソコンの前に座って、ものすごい速さで手を動かしていくつものキーボードを同時に使っていました。それと同時にパソコンの画面が動いているけど、あんなに早く動かしてわかるのかな？

「…今日もなかなかの収入だった。」

「いつもよりは少し多めだな。」

「えっ、いつもこんなに稼いでいるんですか!？」

「1日でこんなに稼げるなんて…一流のトレーダーなのね、シオリさんって…」

みんなはパソコンの画面を見て色々言っていますが、私は何が映っているのかさえ分かりません。

とりあえず、シオリさんはすごい人だと考えればいいのか？

次はアリシアちゃんの部屋です。

「ここが私の部屋だよ。」

アリシアちゃんの部屋はぬいぐるみとかお人形さんとか、かわいいものが色々と置いてありました。

「あ、このネコのぬいぐるみ、かわいいね。」

「本当なの。」

他にも遊ぶものとかがたくさん置いてあってとてもいいお部屋なの。

「部屋自体は和風なのに、そこに上手くぬいぐるみとかを配置してあっていい具合になってていい部屋じゃない。…キョウモアリシアを見習いなさいよ。」

「…いや、俺の部屋がこんな風にかわいいモノだらけになったら、可愛いを通り越して気持ち悪いだろうが…」

キョウ君はそう言うけど、私はあのキョウ君ならとっても似合うと思うの…。

その他にも母屋にはたくさんの部屋があるけど、今は空き部屋で使われていないみたいなので別の場所を探検する事にしました。

母屋の近くに私の家にある道場のような建物があったので、見せてもらいました。

「へえー、立派な道場ね。」

中に入ってみたところ、キヨウ君の家の道場は私の家の道場より少し広がったです。

「ここでよくキヨウが剣術とかの練習してるんだよね。」

「キヨウ君、剣術の練習もしてるんだ。」

だからあんなに強いんだね…。

私ももつと魔法の練習しなきゃ…！！

「折角道場に来たんだから少しその剣術をやって見せてよ。」

私が決意を新たにしていると、アリサちゃんがキヨウ君にそう言いました。

「私も見てみたいな…。」

「…俺の剣術は人に見せる為のものではないんだがな…。まあ、いいか…つまらなくても文句を言うなよ。」

そう言うと、キヨウ君は私達を道場の端に座らせると、わらを束ね

て出来た丸太のようなものを奥から持つてきて道場の中央に立たせました。

そして、道場の壁にかけてあった刀を持つて、そのわらの丸太の前に立ちました………って、あれは……！！

「キヨウ君…それ、もしかして真剣…？」

「真剣って…アンタなんでそんな物騒なもの持つてるのよ!？」

「キヨウ君、危ないの!!」

「安心しろ、あくまで競技用の真剣だから。」

私達の質問にキヨウ君は答えてくれたけど…でも、それじゃ答えになって無い気がするの…。

キヨウ君は腰の辺りの高さにて左手で鞘を、右手で刀の柄を持つて構えました。

それと同時にキヨウ君の目が戦っている時の目になって、道場の空気が張り詰めました。

そして

チン

キヨウ君の右手が動きたしたかと思うと、あっという間にいろんな方向に動いて、すぐにキヨウ君の刀が鞘に納まりました。

そして、キヨウ君が肩から力を抜いて、私達の方を向いたところでわらの丸太がバラバラになって落ちました。

「…お見事。」

「相変わらず速いよねー。どうやったらそんな感じに出来るんだろ…？」

シオリさんとアリシアちゃんはいつも見ているみたいで、特に感動とかしていませんでした。

「…ほら、別に何も面白くなかっただろ？」

…そんなことないの。

キヨウ君の剣は速すぎて見えない程すごかったし、それに…

「そ、そんな事無かったわよ…その…ちょっとだけだけど良かったし…／／／」

「キ、キヨウ君…すごいね／／／」

「キヨウ君、かっこいいの／／／」

何より、刀を構えている時のキヨウ君の横顔がとてもかっこよくて思わずドキツとしちゃったの…／／／

「…？…とりあえず、これ以上ここに居てもつまらないだろ？場所を移そうぜ。」

キヨウ君の言葉を聞いて我に返った私達は、道場から出ていくキヨウ君に続いて道場を出ました。

この後、本当はもう1つの建物である土蔵を見たかったんだけど、人の家の倉庫を見るのは流石に失礼だから、アリサちゃんは残念そうにしていたけど土蔵に行くのはやめました。

そして、キヨウ君の家を一通り見た私達は母屋の居間に戻って、そこに置いてあるゲームで遊びました。

みんなで遊んだ後、シオリさんが作ってくれた夜ご飯とキヨウ君が作ってくれたデザートをみんなで食べました。

シオリさんのご飯もおいしかったけど、キヨウ君のデザートはとてもおいしかったです！

キヨウ君ってお料理が上手なんだね。

シオリさんやアリシアちゃんは「おいしいのはデザートだけ」って言うってたけど、こんなおいしいデザートが作れるなら十分すごいと思うの！！

ご飯が終わった後はお風呂の時間です。

キヨウ君は先に入っていていいと言っていました、ここは

「「「キヨウ（君）、一緒に入りなさい（ろう（なの））！！」「」」

「なんでこんな時は必ず一致団結するんだよ！……そもそも、温泉とかならともかく、誰かの家の風呂で4人一緒に入れるような広さが

あるわけないだろ…」

むう…それは考えてなかったの…

「あれ？この家のお風呂って5人位なら一緒に入れるくらいの広さじゃなかったっけ？」

「キヨウ君…そういう嘘つくのは良くないと思うな…」

「温泉の時は逃げられたけど、今回は逃がさないわよ！」

「それとも…私達と一緒にお風呂に入りたくないの？」

私はキヨウ君を見上げてそう聞きました。

「くっ…入りたいだの入りたくないだのの前に、俺は男なんだから一緒に入るのはマズいだろうが!!」

そう言つてキヨウ君は逃げてしまいました。

…逃がさないの!!

結局、私達は逃げたキヨウ君を見つけることができなくて、私達がお風呂に入り終わった後にキヨウ君が現れてお風呂に入っていきました。

…一緒にお風呂に入つてあんな事やこんな事をしたかったのに!!
周りを見ると、アリサちゃんとすずかちゃんも残念がついていま

した。

そんな中、アリシアちゃんだけが何かを企んでいるかのような笑顔をしています。

「ふっふっふっ…甘いよ、みんな。」

「…何が甘いつて言うのよ？」

「キョウが私達のいるお風呂に入ってくれないのなら、私達がキョウのいるお風呂に入ればいいんだよ！」

キョウ君の脱走によってほとんど諦めかけていた私達にアリシアちゃんが提案してくれました。

「で、でも…私達、今お風呂に入っただばかりで…」

「…１度お風呂に入ったらしばらくは入れないなんてルールは存在しないんだよ！…それに思い浮かべてみてよ。一緒のお風呂に入っている自分とキョウの姿を…！！」

アリシアちゃんにそう言われて、私と…あと多分アリサちゃん、すずかちゃんも思い浮かべてみました。

「…にやはは／／／」

「…べ、別に、一緒のお風呂に入りたかったわけじゃないんだからね！／／／」

「……………（じゅるり）」

「…さあ、みんなはどうする？」

「「「やります！やらせて下さい！」「」「」

反対する人は誰もいませんでした。

ここからはキョウ君がどうしてもと言うので声だけで楽しみください。

「「「お邪魔します！」「」「」

「なっ！…お前等勝手に入ってくるなよ！！」

「別に『入るな』なんて言っていなかったでしょ？」

「キョウ君、背中流してあげるの／＼／」

「べ、別にアンタと一緒に入りたいわけじゃないのよ、3人が入って言うてたから一緒に入ってるだけなんだから！／＼／」

「キョウ君の裸…（じゅるり）」

「くっ、ここは一時撤退を…」

「そうはいかないよ、キョウ君。」

「うおっ！…すずか、いつの間に…って、お前等、どこ触って…」

「もう観念しなさい、キヨウー！」

「私とキヨウの仲じゃない」

「優しく洗ってあげるから…ね？」

「ちゃんと気持ちよくしてあげるから…ね？」

「アリシア、俺達はそんな仲になった覚えなんかねえよ！そして、
なのははともかくすずかは何しようとしてるんだ…！…ちよつ、や
め…っ、誰だよ、変なところ触ってるの…あつ、そこは…あ、ア

ッ……………！！！」

「うつうつ…もうお婿に行けない…（涙）」

「しよ、しょうがないわね…私がアンタの事、もらってあげるわよ
！！／／／」

「キヨウ君は私がもらってあげるの　！！／／／」

「わ、私も…／／／」

「…シオリ、例のものは…？」

「…勿論撮影済み。映像の方はまだ編集作業があるけど…とりあえ
ず写真ならここに　」

「…「私にもお願いします…！！」「」「」

「…シオリ、てめえー！！！」

キヨウ君と一緒に入ったお風呂はとても楽しかったです。

前からしたかったあんな事やこんな事もできたし／＼

…それにシオリさんが撮ってくれた写真はとても上手に撮れていました／＼

さて、後は寝るだけです。

「……キヨウ（君）、一緒に寝なさい（よう）なの（）！！」「」

「

「なんでこの部屋に6つの布団が敷いてあるんだ？…いや、それ以前になんで俺の布団がここに敷かれているんだ？こいつらは俺の布団がどれかなんか知っているはずもないのに……っ、まさか！！」

「…キヨウの隣で寝る権利の代わりに私が持つて来た。」

「またか！最近こっぴうの多過ぎだろ！！」

シオリさんのおかげで、またキヨウ君と一緒に寝れるの！！

「…わかったら大人しく私と一緒に寝なさい！」

「アリサちゃん、1人占めは駄目だよ！」

「キヨウ君と一緒に寝るのは私なのー！」

「私もキヨウの隣で寝たいなー」

温泉の時は負けちゃったけど、今度こそキヨウ君の隣で寝るのー！

「…皆静かに。」

すぐにでも「第三回！キヨウ君の隣争奪戦！」を始めようとしていた私達を、シオリさんが静かに止めました。

「…今回はあらかじめ私が用意していたこのクジで決めてもらう。」

そう言つて、シオリさんはいつの間にか持っていた4本のクジを私達に差し出しました。

「あらかじめ私の分は1本引いておいたから、残りのクジを引いてどこで寝るか決めて。」

…これなら平等にキヨウ君の隣を争えそうだね…『O H A N A S H I』で奪い取ることは出来なさそうだけど…。

「…異論は？」

「……ないです（よ）！！」「」「」

私達4人はシオリさんが持っている4本のクジのどれを引くか決めて、そのクジを握りました。

「『『『せ　　のっ！！』『』『』」

そして、みんなで合わせて自分のクジを引きました。
結果は

「…俺の意向は無視ですか…まあ、もう期待してませんけど…」

その日、私達はとても気持ちよく眠れました。
…クジの結果がどうなったかって？

それについてなんだけど、実はシオリさんが、みんながキヨウ君の隣になるように考えてくれたんです！

クジの結果、私はキヨウ君の右上　つまり右肩の辺りで、アリサちゃんは右下　ちょうどキヨウ君の右手の辺りで、すずかちゃんは左下で、シオリさんはあらかじめ引いてあった左上で、そしてアリシアちゃんはキヨウ君のおなかの上で寝る事になりました！！
…みんなは納得したのに、キヨウ君だけはその結果を知って

「ちよっ、お前等！なんてことを考えてるんだよ！流石にそれはマズいだろ！！」

と言って逃げ出そうとしましたが、みんなで『O H A N A S H I』して寝かせてあげました。

それで次の日、私達は起きた後シオリさんが作ってくれた朝ご飯を食べて少し休んだ後、アリサちゃんとすずかちゃんは習い事があるという事で、私達3人は帰る事にしました。

「キヨウ君、シオリさん、アリシアちゃん、ありがとうございました。」

「まあ…それなりに楽しかったわ。」

「また遊びに来ていい？」

私がキヨウ君を見上げながらそう聞きました。

「…わかったよ…また遊びに来てもいいぞ。…どうせ俺の意見は全て黙殺されるんだからな…」

「そういう事言ってるけど、キヨウだって楽しかったでしょ？」

「…残念ながら、俺はあんな状況になって楽しいと思えるような性格の持ち主じゃないんだがな…」

「…それは嘘。皆に振り回されている中でも、キヨウが笑顔になっている時はあった。…ここに証拠もある…」

そう言っつてシオリさんが取り出した写真には、私達と一緒に、微笑みを浮かべているキヨウ君が映っていました。

「…お前、その写真いつ撮ったんだよ？…まあ、いいや…もうツッコミをする元気も残ってないし…」

そう言った後、キヨウ君は私達の方を向きました。

「…実際、この家でも外せない用事がある日とかはあるから、そういう日には招待できないかもしれないけど……都合がいい日があればまた来てもいいぞ。」

そう言つてキヨウ君は私達に微笑んでくれました。

「…うん！絶対また行くの！！」

「…その言葉、忘れるんじゃないわよ！後で忘れたとか言っても聞いてあげないからね！！」

「今度は1人でも遊びに行くね。」

そうして私達は自分の家に帰りました。

…キヨウ君にまた来ていいって言われちゃった／＼／
必ず、また遊びに行くの！！

第27話 突撃、紅崎邸！――三人娘Ver.――（後書き）

「…はい、第27話でした！ここにきて、まさかの主人公宅の紹介となりましたが、いかがだったでしょうか？」

「まあ、少しばかり今更な気もするけどな…それに、今回はなのは視点で固定されてたし…」

「ああ…それは自分としては結構な冒険なんだよね…感想で『おかしい』とか『変』とか言われないか少し不安なだけだね…」

「…まあ、なるようになるんじゃない？…それより、今更な自宅紹介だったけど、まだ紹介しきれてない場所があるだろ…」

「それはまだあの人たちに教えるわけにはいかない場所だからさ…実際あの人たちにあそこを見せるわけにはいかないだろ？」

「…まあ、それは…確かに…」

「それに、題名でわかるかもしれないけど第2弾があるから、その時に多分紹介すると思うよ。」

「…結局、後回しにしたってことだろ？」

「まあ、そうとも言っね…。……………ここで報告に移りたいと思います。まずは八人目の武器屋様、本当にありがとうございます！！感想だけじゃなくてお土産まで頂けるなんて…」

「…え？お土産？」

「そうだよ。八人目の武器屋様からはなんとムラマサソード、名剣ヴェインスレイ、指し棒全種、レーザーサイズ、オーラブレードを頂きました！！」

「…本当にありがとうございますm（　　）m」

「…キョウ君、意外と刀剣が好きだから早速気に入ったみたいです…あの人はいつか登場させますので、その時を楽しみにしてください！！」

「無理にでも登場させます！！」

「いや、無理に登場させるのはマズいでしょ……あと、この小説を読んで下さっている皆様、ありがとうございます。おかげでこの小説のPVが300,000を、ユニークが30,000を超えました。」

「本当にありがとうございます。」

「…さて、今回は色々大変だったキョウ君ですが、次回はちょっと遠出してもらおうかと思っています。」

「…は？遠出って、どこに遠出するんだよ…？」

「それは次回のお楽しみってやつだよ。…それでは今回はこの辺で失礼させていただきます。」

「…また次回、お会いしましょう。」

「いい物もらった」

「…すごい気に入り様だね…」

「」

第28話 キヨウ・アカサキの冒険〜謎の魔法陣の遺跡・前編〜（前書き）

どうも、和風好きです。

更新が遅れてしまい、申し訳ありませんm（――）m

我家の引越しの日程が近づくにつれてやらなきゃいけないことが増えてしまい、小説を書く時間を確保することがなかなかとれなくて…

しかも、書いてる途中でこの28話の内容が気に入らなくなって全面書き直しをしたことでまた遅れる…という負の連鎖を続けてしまいました。

…その割にはいつもより話短いし、クオリティーが高いわけでもないのですが…

…と、とにかく気を取り直して…

それでは第28話、始めます。

第28話 キヨウ・アカサキの冒険〜謎の魔法陣の遺跡・前編〜

「未知の魔法の調査？」

『ああ。数日前、無人であるはずのある次元世界でかなりの大きさの魔力反応が観測されたんだが、その地点を調査してみると、そこには衰弱死した男1人と魔法陣だけが残されていた。：衰弱死していた男は魔導師であつたことから何らかの魔法を発動させた結果死んでしまったと推測しているんだが、その魔法陣はミッド式のものではなく、管理局のデータベースには無い未知の術式のものだから下手に手が出せない状況だ。そこで、未知の術式を使う君にその魔法陣の調査と出来るなら対処をして欲しい。』

「：随分とやかいかいそうな仕事だな、それ…」

『最初の任務がいきなりこんなものになってしまった事は少し心苦しいが、こういう任務こそ君の出番だろ？』

「：俺、こういう魔法の分析とかは得意ではないんだがな…」

『とはいえ、このままでは一切手が出せない状況なんだ。君がいれば最低でも魔法陣の無力化は可能だろう。それに司法取引をするのなら、実際に何かをした実績がある方が評価されるぞ？』

「：わかったよ。それで、どこに行けばいい？」

『とりあえず、アースラに来てくれ。』

「了解。それじゃ、また後でな。」

というわけで、俺はクロノに連れられてその魔法陣のある場所に向かっている。魔法の事故と言う事で最初はてっきり何処かの屋敷での出来事なのかと思っていたが…

「…遺跡？」

「ああ。この世界はかなり昔に文明が滅び、無人の世界なんだ。そんな世界で突然かなりの大きさの魔力反応が観測されたので僕達が調査に乗り出したんだが、現地に行ってみるとそこはこんな遺跡が建っていた、というわけだ。」

ふーん…管理局の人間でさえよくわからない世界　しかもあるのはこの遺跡と辺り一面に広がる砂漠だけの世界か…

「なんでその死んでしまった魔導師はこんな砂漠くらいしかない世界に来てたんだよ？」

「その魔導師は広域次元指名手配されていたから、管理局の目から逃れるためにこの世界に来たと考えられているんだ。…最も、そのせいで衰弱死してしまったようだがな。」

「指名手配犯ね…一体何をやった奴なんだ？」

「数々の違法実験　中には非人道的なものもやっていたんだ。」

…一応言っておくが、プレシア女史とは違って自ら率先して実験していることは間違いないぞ。確固たる証拠も多くあるからな！」

…誰も『また管理局が裏でやらせたんじゃないの?』とか言ってないだろうが…

「…そんな奴なら今までやっていた実験関係に関する魔法とかで死んだんじゃないのか?」

「ああ、そこは僕も疑ったんだが…彼が行っていた実験は使い魔に関するものから始まり、人体改造や人造魔導師、そして召喚術に関するものが中心だったらしい。だが、これらの実験や魔法の際に展開される魔法陣なら管理局のデータベースに有る筈なんだ。それに、それらの魔法を使った結果、魔導師が衰弱死してしまう可能性は皆無に等しいはず。だから、これらの実験による事故が何かで死んだのではないと思う。」

「ふーん…とりあえず、その現場に行つて色々調べてみないとわからないな…。」

「そうだな。現場はこの遺跡の最深部だ。」

「わかった。」

そうして、俺とクロノは最深部を目指し、その遺跡の中へと入っていった。

遺跡自体は装飾や色彩とかは特になく、石を積み上げて出来た地味な遺跡だった。

だが、俺は遺跡に入った時からある事に気づき、少し感心していた。

…この遺跡、周囲に漂う魔力の量が結構多いな…

おかげで、ここは儀式魔法とかを行うには絶好の場所になっている。その死んでしまった魔導師がここに来たのはもしかしたら何かしらの魔法をやる為かもしれないな…

俺達は遺跡の入り口から奥へと伸びていた通路をしばらく歩き、途中にあった部屋をいくつか通り過ぎていった後にかんりの広さの空間にたどり着いた。

「ここが遺跡の最深部だ。そして」

そう言いながらクロノはその部屋の奥を指差す。

「あそこが例の魔法陣が描かれている場所だ。」

俺はクロノが指差す方を向いた。

そこには十数人の管理局員が機械をいじったりして作業をしていた。

…ん？あの見た事ある茶髪の少年は…。

「クロノ、お疲れ様。そして久しぶりだね、キョウ。」

茶髪の少年が振り向いて俺達の方を向いた……………ああ、ヒューン…じゃなくてユーノか。

「久しぶり…で、これが例の魔法陣か…」

そう言つて俺は前方の地面に描かれた魔法陣を見る。

それは血の様な紅で描かれており、神殿の雰囲気もあつてか見ていると気持ち悪くなつてくるような代物だった。

描かれている模様は勿論ミッド式の魔法陣とは異なり、まさに得体のしれないものとなっている。

そして…

「残念だけど、この魔法陣は俺も知らないな。」

俺が知る魔法や魔術の体系にこのような魔法陣は存在しなかった。

「…そうか。」

「…これで手掛かりは無くなつたね…」

俺の言葉を受けてクロノとユーノは少し落ち込んだ声でそう言つた。
…俺は手掛かり扱いか…まあ、いいけど。

「落ち込むのはまだ早いぜ、2人とも。」

「…でも、キョウでもわからないんでしょ？」

本当はこういうのをやるのはシオリの方が得意なんだがね…

「わからないんじゃないかって知らないだけだ。…そして、知らなくてもその魔法陣を調べる方法はある シリウス、セットアップ」

そう言つて俺はシリウスをセットアップさせた後、大太刀となつたシリウスの柄を右手で持ち、切っ先の方に左手を添えて刃が上向きになるように構えた。

「Analysis start」

そしてシリウスは解析魔法を発動させた。

この解析魔法は今回の任務に行く際にシオリから教えてもらった魔法で、禁録の書に記録された魔導書全てを用いた解析してくれるものである。

異なる平行世界の魔法ならともかく、この世界の魔法ならばどんなにマイナーなものであるかと解析できるはず。

「Complete」

解析が終わつたようだ。
その内容を見てみるか…

目的：使い魔の召喚

へえー、使い魔召喚の為の魔法陣か…「ゼ　　の　　い魔」みたいな魔法なのか？

でも、使い魔を召喚して衰弱死つてどういう事だよ？
それに召喚した使い魔はどこに行つたんだ？

…魔法陣の内容に関する詳しい解析結果を見てみるか…

召喚対象：英霊

……何だと？

『魔法って言うっているけど実際は科学じゃないの？』と突っ込みを入れたくなるようなこの世界の魔法に英霊召喚の魔法が存在していたのか？

だが、英霊召喚の魔法なら衰弱死の理由は推測できる。

多分、英霊召喚をした結果、その魔導師は魔力が枯渇してしまったんだろう。

召喚した英霊も魔導師^{マスター}が死んでしまったせいで魔力が無くなり、そのまま消滅したと考えれば辻褄があるな…。

だが、英霊召喚の為の魔法陣にしては、嫌な予感がするんだが…

服従対象：悪霊

…こいつ、何を考えてるんだ？

折角召喚した英霊を悪霊に変えてからサーヴァントとして従えろとか、非効率的な上、危険過ぎるだろ。

…いや、これは魔法陣を書き間違えたのか…？

真意はわからないが、これで死因が魔力の枯渇であるという説が有力になってきたな。

ただでさえ英霊の召喚にはかなりの魔力が必要だというのに、その英霊を悪霊に変えればさらなる魔力が消費されるだろうし、悪霊なら魔導師^{マスター}の為に魔力の消費を抑えるとかそういった考えには至らないだろうから遠慮なく魔力を消費し続けるだろうから、魔導師^{マスター}の魔力が枯渇してしまうのは目に見えている。

…ん？解析結果がまだあるんだけど、一体何なんだろう？

魔力充填：現在 98%

…は？

もう必要な魔力の 98% を回収してるってどういう事？

…まさか周囲の魔力を補充してるのか！？

魔力充填：99% に到達

ヤバい、今すぐ止めないと…！！

「クロノ、ここに居る全員に魔法を使うのを今すぐやめさせる！」

「何？」

クロノは突然言われた事に疑問を抱いているようだ…って、そんな暇はないんだよ…！！

「この魔法陣、周りの魔力を集めていて、このままだと発動してしまっただよ！」

そう言うと、クロノにもこの状況が伝わったようで、周りの管理局員全員に魔法使用をやめさせてくれた。

魔法陣は……発動していない。間に合ったか……？

魔力補充：100%に到達

1秒後、発動

その解析結果が出た直後、魔法陣が紅く光り出し、目を開けていられなくなった。

「うわっ！」

「間に合わなかったか……！」

「一体何が起きているんだ……！」

俺が何かしらの情報を掴んだと判断したのか、クロノが俺にそんな質問をしてくる。

「あの魔法陣は召喚魔法　しかもとてもやつ……かいなものを召喚する為のものだったんだ。本来なら召喚されたものは術者^{マスター}に従うものだけど、今回は周りの魔力を集めて発動したから術者^{マスター}はおらず、暴走してしまうと思う。ここは戦場になるから局員はアースラに戻してくれると助かる。」

それを聞いたクロノは、非常時だとわかっているせいか、いつもとは違って俺に突っかかりたりせず、戦力にならない局員に撤退を迅速に指示した。

残ったのは俺とクロノ、ユーノ、その他に局員が数人だけだった。

……正直俺以外全員撤退して欲しかったが、マスターのいないサーヴァントなら数分で消えてくれるだろうから、防御に徹してくれればいいかな……？

魔法陣から発されていた光が収まり始め、そこに黒い巨大な何かがいるのが見えてきた。

…この姿って…まさか…！！

そして、光が完全に収まってきた時に俺が見たのは

「
！！！！」

「…嘘だろ、オイ…」

とある世界の第五次聖杯戦争で、黒い聖杯に飲み込まれて黒くなった状態のバーサーカーが立っていた。

第28話 キョウ・アカサキの冒険〜謎の魔法陣の遺跡・前編〜（後書き）

「というわけで、第28話でしたー。そして、キョウ君は現在進行形でバーサーカーと戦っているので、今回は禁録の書の管理人格にしてキョウ君の相談役（？）であるシオリさんに来てもらいました！」

「…どうも。」

「シオリさん、何か感想とがありますか？」

「更新が遅い。」

「ぐっ…いきなりそこに来ますか…」

「前回の前書きで、貴方は『次はさつさと疲れを癒して元のペースに戻しますので』と言っていた。」

「うっ…」

「にもかかわらず、元のペースに戻るところか前回以上に更新が遅れている。」

「そ、それは…」

「一度言ったことはちゃんと守るべき。それが出来ないのは、男として最低。」

「……っ」

「…何か反論は？」

「……無いです……」

「…次回は？」

「え？……ああ、次回はですね、引越し当日が近いので更新は多分11日以降になると思います。いつになるかはわかりませんが、なるべく早く更新できるよう頑張りますのでよろしくお願いしますm(――)m」

「…お願いします。」

「それじゃ、ここで報告です。佐山様と悠様、感想&アンケートありがとうございます！お二方の意見、必ずや採り入れてみます！」

「…『どうやって活躍させるか思いつかない』とか言ってたけど大丈夫？」

「大丈夫！無理矢理でも活躍させるから！！」

「…それはよくない。」

「今もアンケートの受付を行っていますので、回答して下さる方はどしどし送って下さい！」

「…お願いします。」

「さて、次回はキヨウ（+クロノ&ユーノ）足手まと vs 黒バーサーカーで
す！この危機をキヨウ君は乗り越えられるのでしょうか？」

「…次回も読んでくれると嬉しい…です。」

「それでは皆様、また次回お会いしましょう！！」

第29話 キヨウ・アカサキの冒険〜謎の魔法陣の遺跡・後編〜（前書き）

…どうも、和風好きです。

この度の4か月にも及ぶ更新の遅れ、本当に申し訳ございませんでした。

この小説の更新を楽しみにしてくださっていた読者の方々には謝罪してもしきれません。

本日から更新を再開し頑張って続けようと思うので、見捨てないで下さると幸いです。

あの魔法陣が発動した時点でかなりのものが出てくるとは思ってはいたが……

まさかあのバーサーカーか……しかも黒化しているし……

……まあ、久しぶりにいい勝負できそうだからいいけど。

「な、何なんだこいつは……！」

「ク、クロノ落ち着いて……」

……あゝそういえばこいつ等いたんだっとな……折角、バーサーカー相手に楽しめそうなのに……

そんな感じで俺が落ち込んでいると、黒い巨人が動き出した。

「……………！！！！」

黒化バーサーカーが見た目からは想像できない様な速さで俺達に接近し、襲いかかってきた。

クロノやユーノ、それに他の局員の連中は全くと言っていいほど反応せず、呆然としている……お前等何のために残ったんだよ。

「ちっ、やるしかないか シリウス、一応身体強化してくれ！」

魔法により身体能力が向上した状態で俺は黒化バーザカーの前に立ちふさがり、振り下ろされた巨大な斧剣をシリウスで受け流した。

「 ツー！」

お、重ッ！！こちらら身体強化しているのに受け流しただけでこれかよ……！！

その後すぐにバーサーカーは斧剣を横に薙いできたのでしゃがんで避け、追撃される前に後退する。

ふと自分の様子を確認してみるとバリアジャケットの左肩部分が破けていた。

これが噂の『完全に回避したのに ！！』というやつか……仮にも聖骸布並 いや、下手したらそれ以上に頑丈だったはずなんだけどな……

この感じじゃ、足手まとい共クロノとユーノ+ が受けたら一撃でおしまいだな。さっさと帰すか。

「ここは俺が何とかする！クロノは局員を率いて退け……！」

そう叫ぶと同時にバーサーカーが接近し、斧剣を振り上げてくる。それを振り下ろされる前に素早く右に動く事で斧剣を回避する事は出来たが、その剣圧でバリアジャケットが切り裂かれる。

「くそっ……！！！」

つい毒づいてしまいが、そんなことはお構いなしにバーサーカーは俺に向かって斧剣を振るってくるので、俺はそれを避けたり、シリウスで受け流す。

そんな中、ふとクロノ達の方に目を向けると、クロノとユーノは俺の言い付けを守って局員達の避難を進めていた。

…よし、足手まといが居なくなるならまだやりようがある！

俺は反撃への第一歩の為に、後方に跳んでバーサーカーから距離をとった。

「Analysis start」

そして俺はシリウスに黒化バーサーカーに解析魔法を発動させて情報を収集していた。

いくらヘラクレスなバーサーカーとはいえ、間違った魔法陣によって召喚され、しかも黒化しているのだから、何かしらの異変がある筈…

そこをうまく利用すれば、この状況を打開する事も出来るだろう。

そんな事を思いながら、俺は解析作業に入ったシリウスを腰に差し、代わりに名剣ヴェインスレイを投影し構えた。

それと同時に俺とバーサーカーの間の距離が詰められる。

上から迫るバーサーカーの斧剣をヴェインスレイで受け流し、その後すぐに振るわれた剣撃を受けずに回避する。

そんな感じでしばらくバーサーカーの猛攻を凌いでいたが、名剣とはいえあの巨大な斧剣の衝撃に耐えられなかったようでとある剣撃

を受け流した瞬間、ヴェインスレイにヒビが入る。

「なっ…!?!」

俺はついヒビの入った刀身に目を向けてしまった。

「……………!!!」

その際にバーサーカーが接近し、その両手で持った斧剣を振り下ろしてくる。

余所見をしていた俺は反応するのが遅れ、回避する事も受け流す事も出来ずヴェインスレイで受け止めた。

ピシッ…

当然、受け止めている俺にかかってくる重さは尋常ではなく、既にヒビが入り始めていたヴェインスレイは更にそのヒビを広げる。

…これは…腹をくくった方がいいかもしれないな…

そう覚悟を決めようとした時だった。

「ステインガースナイプ・マルチプルシフト!」

突然前方から複数の青い魔力弾が飛んできてバーサーカーに命中する。

どうやらまだここに残っていたクロノが放ったらしい。

生憎バーサーカー自身に傷をつけることは出来なかったが、着弾した瞬間ヴェインスレイにかかっていた圧力が緩んだので、その隙に[↑]座標移動でクロノとユーノの前に移動する。

そしてバーサーカーが動き出す前に、持っていたヴェインスレイを投擲し、バーサーカーに命中した瞬間

ブローケン・ファンタズム
「壊れた幻想」

内包する魔力を解放させた。

不意打ちは成功したみたいだけど、ダメージは与えられたか？
まあ、期待はしてないけど…

それよりも

「お前等、さつさと退けつて言っただろうが！！」

俺の忠告に逆らいやがったクロノとユーノを問い詰めなくては…
折角、俺が珍しく親切心で言っただけなのに…

「僕は今回の任務の責任者だ！いくら僕より強いとはいえお前を残して退くわけにはいかない！！」

バーサーカーが出てきた時に騒ぎ出したくせによく言っぜ、執務官殿よお…

「そ、それに、3人で力を合わせれば倒せるかもしれないから…！」

ユーノ、そんなに震えながら言っても信憑性がないぞ…

…まあ、それでも

「…ふっ、どうなっても知らねえぞ!!」

そう言われて少し嬉しくなっている俺も俺だがな……

と、少年漫画的ベターな事をしているうちに爆煙が晴れ、バーサーカーの姿が見え始める。

…っ、もう斧剣持って接近しようとしてやがるし！
せめて作戦を練る時間が欲しいんだがな…

バーサーカーの動きを封じるとかして時間を稼ぐ手段はないだろうか……あ、あれはいいかも！

「天の鎖よ !!」

俺は某金ピカ英雄王が使っている鎖を投影し、それでバーサーカーを拘束する。

これで、解析が完了するまでの時間を稼げればいいんだけど…

と、そんな事を思っているうちに、バーサーカーが暴れ始め、鎖にヒビが入り始めている。

通常のバーサーカーならあの鎖で完全に動きを封じられたはずだけど…あれか？黒化しているから神性が下がる、もしくは無くなって天の鎖による束縛が弱くなっているからか…？

とにかく、何かしらの作戦を考えないと…

その時、俺にある考えが浮かんだ。

この方法なら、間違いなく時間稼ぎにはなるし、上手くいけばバーサーカーを倒せるかもしれない…

俺は、クロノとユーノの協力を得るために2人に話しかけた。

「試したい事がある。俺が合図したらユーノとクロノはあいつの動きをバインドで封じてくれ。」

「了解した！」

「わ、わかった…！」

その会話が終わると同時に、鎖が砕けバーサーカーが自由になる。

「
！！！」

咆哮をあげながら接近してくる黒い巨人に対し

「
ロールアウト バレットクリア
工程完了、全投影待機」

名剣、魔剣と呼ばれた剣を15本ほど投影し

「
フリーズアウト ソードバレルフルオープン
停止解凍、全投影連続層写」

その剣群を放つ。
そして

ブロックン・ファンタズム
「壊れた幻想」

投影した剣全てを爆破させる事でバーサーカーを僅かに後退させる。

「今だ、やってくれ!!」

俺が合図を送った次の瞬間、ユーノとクロノがバインドでバーサーカーの動きを封じた。

「
!!!!」

「何!？」

「そ、そんな!!」

しかし、バーサーカーが叫ぶとバインドはあっという間に弾け飛び、動きを封じられたのはほんの一瞬だった。

ユーノとクロノはこれで作戦が失敗してしまったかのような顔をしていた。

だが、俺が待っていたのは正にこの一瞬。

「トレス・オン
投影・開始」

俺は真紅の槍を投影し、バーサーカーに向かって駆けると同時に両目に白い文様を浮かび上がらせる。

「鵲鳩眼」

そして、俺の周りのものの動きが止まり、その間にバーサーカーの懐に辿りつく。

俺は槍に魔力を込め

「刺^{ゲイ}し穿つ」

その真名を解放した。

「
死^{ボルク}棘の槍」

槍はバーサーカーの胸へと刺さり、その心臓を破壊した。

「やった……！！」

それを見たユーノの歓声が聞こえる。

これで終わってくれれば嬉しいんだけどな…

だが、嫌な予感がしたので座標移動で後方に移動する。
^{ムーブポイント}

「
！！！！」

視線を上げてみれば、そこには心臓を再生させながら吠える黒化バーサーカーの姿が見えた。

やはり
十二の試練は使えるのか……
^{ゴットハント}

黒化しているからもしかしたら十二の試練は発動しなくて、刺^ゲし
穿^{イ・ボルク}つ死棘の槍の一撃で倒せるんじゃないかと期待したんだけどな…

「Complete」

そう残念がっていると、シリウスから待ちに待った解析結果が伝えられた。

……どうやら、倒す事は出来なくてももう1つの目的である時間稼ぎは出来たようだ。

対象の魔力状況：マスター不在により、魔力供給が不可。
約5分後に枯渇すると推測される。

あの時、魔法陣がひとりでに発動したからマスター不在……って事なのか？

まあ、そのおかげで5分後に魔力が無くなるって事だからこちらとしては有難いけどね……

以上を踏まえると、バーサーカーを倒すには後11回 あれ、10回だっけ？……まあ、多めに考えておくか 殺せる位の攻撃を叩きこむか、魔力が維持できなくなる5分経過するまで何とか耐えきるかのどちらかということになるのか？

俺としては5分以内にバーサーカーを11回殺すという方をやってみたいんだけど……ユーノとクロノが足手まといいる現状では5分経過を目指す方が妥当かな……はあ……楽しめると思っただけだな……

念の為シリウスには引き続き解析を続けてもらうことにして、俺は再生したバーサーカーを見て絶望したような表情を浮かべる2人に、今後の方針を伝えるべく話しかけた。

「2人とも、そう落ち込むな。」

「だがあの再生がある限り、僕達に勝利はあり得ないんじゃないか……？」

「そんな事は無い。あの巨人の再生は確かに脅威だけど、解析してみたところ、あいつにはあの巨体を維持する為の魔力が十分じゃない、あと5分程で魔力が枯渇してしまうみたいなんだ。」

「じゃあ、それまで耐えければ…」

「あいつを倒す事が出来るのか!!」

「そういうことだ。2人はとにかく防御と回避に集中してくれ。俺はあいつの注意を引きつける　　!!」

そう言うと同時に、俺は再びヴェインスレイを投影し、構える。

そして、心臓の再生を終えた黒い巨人が動き出したのをきっかけに、陽動という役を全うするために駆ける。

接近し、間合いに入ってきた俺に向けて斧剣が振り下ろされる。

それを後方に飛び退く事で回避し、続いてきた切り返しもしゃがむ事で避ける。

俺は先程の失敗から、なるべくバーサーカーの剣撃を受けないように回避するようにして、どうしても回避できないものを剣で受け流すようにしていた。

とはいえ、そのような事をしているでも尋常ではない力が込められた剣撃を何度か受け流しているだけでヴェインスレイにヒビが入る。だが、今回はいずれ砕けるものと思いながら剣を振るっていたこと、ヒビが入ると、クロノやユーノがそこそ上手いタイミングでバインドを使って動きを止めてくれるので確実に次の剣を投影する事ができた。

とにかく、バーサーカーの魔力が枯渇する5分が経過するまでこれ

を続けるしかない
え、駆けだした。

そう気合を入れて俺はヴェインスレイを構

碎けた剣の数は既に2ケタに到達し、回避した後の剣圧でバリアジヤケットはボロボロになった。
ここまでバーサーカーの猛攻を防ぎ続けたわけだが…そろそろ5分が経過する頃だと思っただが…

対象の魔力枯渇、確認

その報告が俺に伝えられると同時に、バーサーカーにも異変が起き始めた。
見ると動きを止めており、その輪郭が揺らいでいるような感じがする。

解析結果によると、その体を維持することすら難しい状況のようだ。

この感じなら、何らかの衝撃を与えれば消滅しそうだな……

トレース・オン
「投影・開始」

そう判断した俺は天狼（仮）を鞘ごと投影する。
そして、バーサーカーが動きを止めているうちに俺は天狼（仮）を抜きながらバーサーカーの懷に潜り込む。

「これで終わりだ……！」

そう叫ぶと同時に天狼（仮）と『会話』し、その刀身が輝きだす。

「無明神風流 みずち」

バーサーカーとの距離を一気に詰め、そのまま通り過ぎる。

「やつ……たのか……？」

クロノの呆然とした声が聞こえる。

そして、それをきっかけに俺を中心に穏やかな風が吹き始める。

「バーサーカー、お前も聞いただろう」

そう言いながら俺は天狼（仮）を鞘に収め始め

「
神風かぜの清響こえを」

その刀身が全て鞘に収まり、鏑がなると同時に黒化バーサーカーの体が無数の光の粒となって消えていった。

さて、苦勞して黒化バーサーカーを倒したわけだが………何かを忘れてる気がする。

そんな事を思っていると、解析魔法による新たな解析結果が出てきた。

………そう言えば、常に黒化バーサーカーと周りの状況について新しいデータが欲しいから発動しっぱなしにしてたな。

えつと…何々…

魔力充填：90%

……魔力充填？いったい何のこと……

「……………あ！」

黒化バーサーカーばかりにかまけて例の魔法陣のこと忘れてた！！
先程の戦いで俺&ユーノ&クロノが魔法を使いまくった時にそこ
らくすねていたのか、魔力がもう随分と溜まっていた。

「どうした、キョウ？」

「例の魔法陣にまた魔力が充填してる…このままだとまた発動するぞ！！」

「何だつて！？」

「次はもう耐えきれないよ！！」

クロノとユーノが嘆いているが…俺だつて流石に勘弁してほしいさ！！

「こうなったら…発動する前にどうにかするしかない…！！」

だが、魔法陣を無理矢理壊したら充填してた魔力が暴走して辺り一帯吹き飛ばされるだろうし、だからって解呪しようにも今からじゃ間に合わないし……………こうなったら！！

「ユーノ！クロノ！　　今からこの魔法陣を書き換える！…少し危険だから離れてろ！！」

そう言つて俺は魔法陣に手をかざす。

魔法陣は、そこに書いてある文様や文字によつて発動する術の効果が決まる　　だから、魔法陣の一部を書き換える事で、発動する術の効果が変わる筈　　！！

まずは、英霊が黒化してしまう最大の原因と思われる『服従対象：悪霊』についての部分を書き直して…

魔力充填：95%に到達

魔力充填するの早っ！

もつと時間があると思つていたのに…！！

…とにかく、あと書き換えられるのは恐らく1ヶ所だから…

どんな奴が召喚されても対応できるように、新たに『マスター：紅崎キヨウ』と書き加えて…

魔力充填：99%に到達

マジで1ヶ所しか書き換えられなかったよ、オイ…！！

まあ、これでさっきの黒化バーサーカーよりはマシになる筈……

「発動するぞ！準備はいいか？」

「キヨウ！今度は大丈夫なんだろうな？」

「わからない　　だから、一応構えておけ！！」

魔力充填：100%に到達

1秒後、発動

そうして再び、魔法陣が光り出した。

これでまた黒化バーサーカーみたいな奴が出てくるのは勘弁してほしいな！

俺の思いをよそに、光がだんだんと収まっていく。
そして、魔法陣の上に居たのは

第29話 キヨウ・アカサキの冒険〜謎の魔法陣の遺跡・後編〜（後書き）

「というわけで第29話でした。……読者の皆様、更新が遅れてしまい本当に申し訳ありませんでしたm（＿）m」

「……………」

「今後のことですが、そろそろ自分も将来のために色々動かなくてはならない時期が近づいてきてしまっている為、以前のような1〜2日に1話のペースでの更新は出来ませんが、1週間に1話のペースで更新できるように頑張りますので、どうか見捨てないでもらえると幸いです。」

「……………」

「とにかく、皆様、本当に申し訳ありませんでした。そして、この更新もない『無駄死にから始まる転生者生活』をお気に入り登録し続けてくださった方々、本当にありがとうございます!!」

「……………」

「それでは気を取り直して後書きのコーナーを始めようと思うのですが……」

「……………」

「今回も前回同様、キヨウ君が出張中なので代理としてシオリさん

に来てもらっただんですが…」

「……………」

「…あの、シオリさん…さっきから何故黙ったままなのでしょう？そして何故俺は大量のバインドで簞巻きにされているのでしょうか…？」

「……わからない？」

「あ…更新遅れてしまったことはすみませんでした。物語が終わるまでは更新し続けようとは思いますが…」

「…反省の色なし。」

「そんな…！確かにこんなに遅れやがった自分に弁解の余地は無いかもしれないけど、この物語を書き始めた責任として物語が終わるまでは続けますので見捨てないで欲しいんですけど…」

「…貴方が小説を途中で更新できなくなってもそんなものは知ったことじゃない。ただ貴方の評価が下がるだけだから。」

「ひ、ひどい…」

「でも、私の見せ場が1つもない今の時点で打ち切りするのは許さない。」

「それ完全にシオリさんの事情じゃないですか…！」

「問答無用。」

禁録の書に記されし数多の魔書よ

ッ、書

架のシオリの名においてその禁を限定的に解除する。」

「ちよっ、それ微妙にネタバレだから　　！！！」

「次の一撃で、滅べえええええッ！！！！！！！」

「それ、冗談じゃ済まな……………ぎゃあああああ！！！！！」

「……………^{重罪人}作者が居なくなったので私が代わりに……………まずは佐山様、ライト様、感想ありがとうございます。……………特にライト様、返信が大いに遅れてしまい申し訳ありません。……………作者が復活したらもう一度死刑執行するのでお許しください。それと……………ライト様の質問についてですが、作者としては

- 1、魔法陣の『召喚対象：英霊』という部分にて^{バーサーカー}ヘラクレスが召喚
- 2、魔法陣の『服従対象：悪霊』という部分に合わせるために^{黒化}バーサーカーを悪霊化させる
- 3、魔力が自然に充填して発動したために^{マスター}術者が居ない状態に

というつもりだったみたいです。突っ込みどころ満載な設定かもしれませんが、これで御容赦して下さいと幸いです。

…読者の皆様、少なくとも私の見せ場があるまでは殴り倒してでも作者に更新させますので、この小説を見捨てないで下さると幸いです。…それでは皆様、また次回お会いしましょう……です。」

第30話 冒険の後日譚…という程時間は経っていないんだけど…（前書き）

どうも、和風好きです。

とりあえず、期限までに間に合いましたので更新しました。

この調子で頑張っていこうと思います！

それでは第30話、始まります！！

第30話 冒険の後日譚…という程時間は経っていないんだけど…

「3人とも、今回は本当にお疲れさまでした。」

現在、俺達はアースラへと帰還し、リンディさんへ今回の調査について報告していた。

「今回は冗談抜きで大変だったな……ちょっと楽しかったけど。」

「楽しかっただど！？僕がいままで経験してきた任務の中でも最も危険な任務と言っているものだったぞ！！」

「僕なんかあの怪物が出てきた瞬間に生きる事を諦めたよ！！」

俺の『楽しかった』と言う発言に、クロノとユーノが抗議してくる……うるせえなあ……

「2人とも、こうして皆で生きて帰ってこられたのだからいいじゃないですか。」

リンディさんが2人をなだめてくれる事で、2人はやっと黙ってくれた。

「……で、そちらが例の…」

そして、リンディさんが俺の方に向かって
いや、正確には俺
の後ろに居た少女に向かって尋ねた。

「いつもご主人様^{マスター}がお世話になってます。私、ご主人様のサーヴァ
ントのキャスターです。」

露出度の高い紺色の着物を見に纏い、狐を連想させる特徴的な耳と
尾を持つ少女がそう答える。

…そう、キャスターもといキャス狐である。

あの2度目の魔法陣発動による光が収まった後、俺達の前に現れた
のは

「謂われはなくとも即参上、軒轅陵墓から良妻狐のデリバリーにや
つてきました！」

と言いながらポーズをとっているキャス狐だった。
それに対し、俺はまさかキャス狐が出てくるとは思っていなかった
ことから、クロノとユーノはおそらく先程の黒化バーサーカーとの

違いが激し過ぎた事に対して、啞然としていた。

「…あ、なんかドン引きしてません？えーと…」

俺達の様子を見て、キャス狐は表情を少し強張らせながらそう尋ねてきた。

そして、俺達3人の顔を一通り見た後、俺の方に向いて

「貴方が私のご主人様………でいいんですよね？」

と聞いてきた。

まあ、魔法陣の方にも『マスター：紅崎キヨウ』と書き加えたし、いわば俺が魔法陣を発動させたようなものだから俺がマスターなんだろう。

「あ、ああ…そうだよ………多分………」

俺はそう答えた。

「やったあ、契約成立！よろしくお願いしますねご主人様。^{マスター}何を隠そうこのタ　いえ、このワタクシ、ご主人様みたいな人のサーヴァントになりたいってずっと思っていたのです！………まあ、ちょっと性能はピーキーなんで、ご主人様^{マスター}的には不満かもしれませんが………精一杯、頑張りますから！」

そうしてキャス狐がハイテンションではしゃいでいると、我を取り戻したクロノが俺に詰め寄ってきた。

「どういう事だ？どうして今回は僕達に襲いかかってこないんだ？…いや、それ以上にお前が彼女のご主人様^{マスター}ってどういう事なんだ！

「？」

「ご主人様、誰なんですかこのKYっぽいガキンチョは？」
マスター

クロノが俺に詰め寄った事が気に入らないらしく、キャス狐がそんな事を言ってくる。

「なっ…！僕はKYなんかじゃない！！」

「あら、自覚無しですか…これはやっかいですねえ…」

「ぼ、僕のどこがKYだと言った！！」

「どこって…見た目と雰囲気、そして言動からしてKYっぽいじゃないですか。」

……前世でゲームやってた時から毒舌だとは思っていたけど、ここまでとは……これはクロノ如きが勝てる相手じゃないよな……

「さ、さつきから言わせておけば……！！」

「貴方みたいなチビ黒KYは周りからディスられて落ち込んで不貞寝していてくださいまし。」

「ふざけるな！！僕は他人から批判されてなどいないし……何より僕は14歳だ！チビなんかじゃない！！」

「え！？」

クロノの衝撃発言にキャス狐だけでなく俺も驚きの声をあげてしま

った。

クロノの身長とかから考えて俺と同じ年くらいかと思ってたんだが……まさか14歳だったとは……

「ちょっと待て！何故キョウまで驚くんだ！？」

「いや、だって……お前の実年齢教えてもらってなかったし……てつきり俺と同じ年だと思っていたから……」

「なっ！？」

「あはは……まあ、しょうがないよ。僕だって初めて知った時は驚いたし……」

驚く俺をユーノが庇ってくる。……っていうか、存在感薄いな……話しかけてくるまでお前の存在忘れていたぞ。

「しょうがないって言うのはどういう事だ！！」

「えっ、そこで僕に来るの！？」

そうしたら俺とキャス狐に詰め寄っていたクロノの矛先がユーノに向けられた。

俺としては助かったが……まあ、頑張れユーノ。

クロノとユーノのじゃれ合いを眺めていたら、左手がわずかに発熱し、何かを刻まれたような鈍い痛みを感じた。

そこには、3つの模様が組み合わさった紋章にも見える奇妙な印

令呪があつた。

「ご主人様、大丈夫ですか？」

令呪を刻まれる痛みに耐えていたことが顔に出ていたらしく、キヤス狐が心配そうな表情で寄ってきた。
が、左手の甲に刻まれた令呪を見ると

「あ、令呪を刻まれていたんですね。」

と言つて安心し、表情を崩した。

「令呪は私とご主人様の契約の証……いわば、私達の愛の象徴ですね。
きやつ、言つちやつたあゝ！」

……そんな事を言つた後、キヤス狐はクネクネしながら意識を何処かの彼方へとリップさせてしまった。
ユーノはクロノに問い詰められているし、キヤス狐は両手を頬に当てて体をくねらしているし……どんな力オスだよ……

俺はそんな周囲の状況にため息をついた後、魔力が空になった魔法陣を解除し、まだ力オスだった3人を連れて、アースラに戻った。

「成程、あの魔法陣はキヤスターさんみたいな英霊を召喚する為のものだったんですね？」

で、あの遺跡で何が起きたのかをクロノが一通りリンディさんに報告した後、俺は例の魔法陣について解説していた。

「はい。…もつとも、英霊を召喚する術式としては決定的なミスをしていましたが、もし独学であれ程の魔法陣を描いたのであれば、その人は中々優秀な魔導師だったと言えますね。」

「お前はあの犯罪者の事を褒めるといのか!？」

……お前は相変わらずうるせえなあ……少し黙ってろよ。

「『あの犯罪者』って言ったって、俺はそいつの名前はおるか、どんな奴だったかさえ知らないんだぞ？それに、俺が『優秀だ』と言ったのは『魔導師としては』という意味だしな……っていうか、魔法陣を見ただけでその人の人格性が完全に把握できるわけないだろうが。」

「ぐッ……!」

「そうよクロノ。別にキヨウ君は彼を許容したわけじゃないのだから……ごめんなさいね。報告の続きをしてもらえないかしら、キヨウ君。」

俺の言葉で詰まったクロノをさらにリンディさんが止めてくれたので、報告を再開する事にする。

「わかりました。……先程も言った通り、あの魔法陣は英霊を召喚し、それを使い魔^{サイヴァント}として従わせる為のものです。ですが、召喚するのには勿論、従えた後サーヴァントを維持するためには膨大な魔力

が必要なんです。…それこそ、ユーノやクロノなら他に魔法を使うのを控えなくてはならない程の魔力が。」

「成程…では、キヨウ君もキャスターさんの為に…」

「はい、現在進行形で魔力が消費されています。……おそらく、その広域次元指名手配犯が魔法陣のそばで衰弱死していたのは、英霊召喚、およびその後のサーヴァント維持に必要な魔力がその人の許容量を超えてしまったからではないかと思います。しかも、先程も言った通りあの魔法陣は決定的なミスをしていたせいで召喚した英霊を悪霊に変えてから従える事になっていたので、そこで余計に魔力が消費されただけでなく、理性を失くしたサーヴァントが主の魔力消費を抑えようと考えることはないかと推測されることから、これがあの神殿で起きていた事だと思われます。」

そこまで言いきったところで、俺は報告を止める。

クロノとユーノは俺の報告　特に召喚される英霊が悪霊に変わってしまうという箇所を聞いて随分と納得したような表情を浮かべていた。

一方キャス狐は後ろの方で俺が報告する様子を見て、

「流石はご主人様です！^{マスター}輝いてます！！」

と言いながら、その輝いている目で俺を見つめている…ような気がする。

…まあ、振り返って確かめなくてもそれが正しいんだろうと思うけど…

そんな中、リンディさんは少し考え始めたかと思うと、再び俺の方を向いて、

「わかりました。確かにそれが正解みたいですね。今回の調査の報告はこれで十分です。」

と言った後、すまなそうな表情でお願いしてきた。

「ただ、実際その英霊の召喚にどれほどの魔力が必要なのかわかると管理局に報告し易くなるのよ。だから申し訳ないんだけど、今からその召喚を実演してもらえないかしら。」

…報告書の為に実演する、ね…まあ、本来の召喚魔術なら魔術回路が無ければ使えないから管理局が悪用する事も無いし、確か召喚できるサーヴァントはマスター1人につき1人だけというのが原則だったから俺が術式を発動させても他にサーヴァントが召喚されるわけでもないだろうから大丈夫だろう…
ま、ぶっちゃけこの世界の『魔法？科学の間違いじゃないの？』って感じの魔法で理解できるかどうかは知らないけどね。

「ダメです！ご主人様のサーヴァントは私だけで十分なんです！！」
リンディさんの要請に反応したキャス狐が物凄い剣幕で俺に詰め寄ってきた。

「大丈夫だよ、キャスター。サーヴァントは原則マスター1人につき1人だけなんだから、多分何も出てこないよ。」

そう言っただけでキャス狐をなだめ、リンディさんに向き直る。

「…いいですよ。ただ、俺が知る術式は魔術回路という先天的な要素が無ければ使えないので、これを利用しようとしても無理ですよ。」

？…それにサーバントは魔術師^{マスター}1人につき1人だけという原則があるので、キャスターを召喚してしまった俺はもう英霊を召喚する事ができないと思いますけどいいんですか？」

「ええ、それならそれでしょうがないわ。」

召喚出来なくてもいいという許可ももらえたし、さっさと済ませるか。

「それじゃ、少し開けた場所でやりたいので訓練室でやらせてください。」

場所を移して、ここはアースラの訓練室。

ここに居るのは俺とキャス狐、クロノ、ユーノ、リンディさんの5人だ。

今はデータ収集のための準備の完了を待っている時間だが、これを利用して既に魔法陣は投影した剣で描いてしまった。勿論、その魔法陣はあの遺跡にあったものじゃなくて「F t e / s t a y n i g h t」の本編に出てきた正しい魔法陣である。

『こちらは準備出来ました。それじゃキヨウ君、準備ができたら始めてねー。』

データ収集をする役のエイミィさんからの指示があったところで俺は魔法陣の中央に立つ。

「ご主人様、フアイト〜！」

キャス狐の応援に片手を挙げて答えた後、集中するために目を瞑り、詠唱を始める。

「 告げる。」

その一節を唱えると、訓練室の空気が一変する。

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ。」

訓練室には俺の詠唱以外に音はなく、そこにいる者はこれから起るであろうことをしかと見ようと静かに見守っている。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ ！！」

すると俺の詠唱に答えるかのように魔法陣が光り出す。どうやら召喚は成功した様だ…………… って、え！？

「ご、ご主人様！召喚、成功しちゃってますよ！！」

キャスターのそんな声が聞こえた後すぐに、俺の前方に魔法陣が展開され、そこに紅い服を纏った1人の少女が顕現した。

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。 問おう。
答えよ。そなたが余の奏者^{マスター}か？」

今度は赤セイバーさんですか。俺にはEXTRAのサーヴァントへの適正でもあるのだろうか？……って、そういうことじゃなくて！なんで召喚されんの？サーヴァントは原則マスター1人につき1人だけじゃないの？

…もしかしてキャス狐が召喚された術式&魔法陣が本来のものじゃないからカウントされてないのか？

うーん……ダメだ、いくら考えても分からない。
こういう時、シオリが居ないのは不便だよな…。

とりあえず、俺がマスターであることは確実なのだからちゃんと返事しないと…

「ああ、そうだ。」

「ふ。言葉は少ないが美しい返答だ。気に入った。我が身を喚びつけた慢心も、今は問うまい。」

どうやら紅い暴君に気に入られたようだ。

まあ、嫌われてまったく言う事を聞いてくれなくなるよりははるかにマシだけど。

「よし、特別に許す！そなたに余の^{マスター}奏者たる栄誉を与えよう！」

赤セイバーがそう言った後、今度は右手の甲に令呪が刻まれ、鈍い痛みを感じた。

その痛みが引いた後、俺は右手に令呪があるのを確認していた。

その時

「　　ッ！！！！」

背後からどす黒いオーラが放たれているを感じる　　それはもう、
このまま振り向かず全速力で逃走したい位。
でも、そうしてしまえば後で大いなる仕打ちが待っているのを知っ
ているので俺は逃げない。

…なんで知っているのか、だって？

…俺だって伊達になのは幼馴染をやつてないさ。

その上、何度も一なのは代名詞《O H A N A S H I》をさ
れているのだから、少しは立ち向かう勇氣も生まれるも

「ご主人様？」

ゴメンナサイ、マジスイマセン、調子ノリマシタ！！！！

……はッ！

相手はなのはじゃないのに、いつもの癖ですぐに土下座してしまっ
た。

つて、キャス狐？

「…この私と言う者がありながら、その上こんな赤女を召喚される
なんて…タマ　　いえ、私はご主人様^{マスター}の事を信じておりましたの
に…」

キャス狐がそんな事を言いながら俺と赤セイバーの間に入ってくる。

すると、赤セイバーもキャス狐の事を睨みつけながら、

「…奏者よ、この初対面で失礼な女狐はそなたの何なのだ？」

「私は貴方より先にご主人様と契約したサーヴァント、キャスターです。貴女が何故召喚されたのか知りませんが、この人は私だけのご主人様なので貴女は　　ほら、そのチビ黒KYとても契約し直してくださいまし！」

「何を言うか！余は正当な手段にて召喚され、奏者と契約したのだ！奏者の真のサーヴァントはこの余だけだ！！貴様こそ、あその存在感の力ケラも無い少年と契約し直すがい！！！」

…キャス狐の矛先が俺からずれたことは喜ばしいことだけど、この2人の雰囲気、想像以上にヤバいんだけど…

「そもそも貴女のような露出狂はご主人様にはふさわしくありません。まずはその下半身前開きな衣装をどうにかしてから出直してきてください。」

「このドレスの芸術性が理解できないとは、つくづく見下げた駄狐よ。……それに露出狂なのは貴様の方ではないか。貴様こそ出直してくるがいい。奏者のサーヴァントに相応しいのは貴様の様なIN-RAN狐ではなく、この余だけだ！！！」

「残念ながら私のは露出狂ではなく露出強なんです！…それにそんな露出狂衣装に『芸術性』だなんて頭おかしいんじゃないんですか？やっぱりセイバーさんはそのクラス名に相応しいネジの外れた脳筋女なんですな。」

……うん、ヤバい。なのはでもこうはならないんじゃないかと思うほどヤバい。

心の中で嘆いている俺をよそに、2人のケンカはエスカレートし、ついに赤セイバーがキヤス狐から距離をとり、特徴的な形状をした剣を構える。

「よかるう。そこまで言うならどちらが奏者のサーヴァントに相応しいか、己が実力ではつきりさせようではないか！」

「それはこちらのセリフです！……せめてもの情け、自分の死に様くらは選ばせてあげます。さあ、焼死、凍死、斬死、毒死、お好きなものをお選びくださいませ！……」

キヤス狐の方も、鏡を自分の周りに漂わせながら、呪符を手に持つて構えている。

クロノやユーノ、リンディさんの3人はまだ何もしてこないが、どちらかというと2人の気迫のせいで張り詰めた空気のせいでうまく動けないみたいだし……

この2人が争えば周りの被害とか尋常じゃないだろうな……
アハハ、いくら弁償する事になるんだろ（涙）

「いざ」

「尋常に」

「勝負！！」

俺が現実逃避している中、2人のサーヴァントは掛け声とともに地

面を蹴り、互いの得物を振るい、戦い始めた。

俺は2人の戦場のかなり近くにおり、その上実に充実過ぎる今日に疲れていた為、その戦闘の余波により吹きとばされ、宙を舞ってた。

「あらあら、キョウ君、人気者ね。」

…リンディさん、こんな目に会ったのなら俺は人気者じゃなくていいです。

「こんなの、キョウが節操なしなだけだろ…」

「その上、なのはやフェイトもいるのに…」

『…2人とも、キョウ君の事、うらやましいと思ってるでしょ?』

「なっ!?!」

「そ、そんな訳ないだろ、エイミィ!」

『あはは、2人とも顔真っ赤だね!しょうがないよ、2人とも男の子だもんね!』

「エイミィ!」

…うらやましいならいつでも代わってやるぞ、お前等。
そして特にクロノ、これが終わったら覚悟しとけよ…!

宙を舞いながらそんな事を思っていた俺だったが、すぐに頭から地面に激突し、俺は意識を失った。

第30話 冒険の後日譚…という程時間は経っていないんだけど…（後書き）

「というわけで、『キヨウ・アカサキの冒険』第1弾はこれで終了です！…それにしても、まさかのキャス狐と赤セイバーの参戦ですか…」

「…質問。」

「…？いいですよ、シオリさん。」

「…第1弾という事は第2弾もあるということ？」

「そうですね…この無印とA・Sの間の空白期ならまだしも、その後のSTS期までの空白期が長いですからね…もう1回くらいはやってみたいと思ってます。」

「…そう…」

「…っていうか、何故シオリさんがここに？」

「…作中ではキヨウがまだ家に帰ってきてないから…私が代理に…」

「そういつて…実はこの後書きコーナーでの出演に味をしめたんじゃないんですか？」

「……………そんなこと、ない。」

「…返答がいつもより遅いつてことは図星つてことッすか…じゃ、じゃあ、今後もシオリさんが出演できるように考えておきますよ。」

「…そんなこと言つてない。」

「いや、いいじゃないですか。これで今後も出演できるんだから」

「言つてない。」

「わ、分かりましたよ…あ、そうだ。前回、宝具とか新技とか解説するのわすれちゃったから、今回解説したいと思います!」

「…間抜け」

「ちよつ!元と言えば、シオリさんが半ネタバレ技で攻撃してくるからでしょ…!」

「新(?) 技&新(?) 宝具解説コーナー」

・名剣ヴェインスレイ

S シリーズお馴染の武器。他のS シリーズはあまりやっていないのでもしかしたら違うかもしれないが、S 3ではストーリー攻略までにおいては最強の剣。クリア後のダンジョンに行ったらこれより強い武器なんて腐るほどあるけど…。八人目な武器屋様に頂きました。本当にありがとうございます! m (_ _) m

・天の鎖

某金ピカ英雄王オリジナルの宝具。神性が高い相手ほど頑丈になる敵を拘束する鎖。逆に、神性が一切ないものにとってはただの鎖で

しかないそうです。

・刺し穿つ死棘の槍
ゲイ・ボルク

某青い槍兵が持つ突けば必ず相手の心臓を貫く、と恐れられた呪いの朱槍。

その能力は槍が『心臓に命中した』結果の後に槍を放つという因果の逆転というとんでもないもの。

つまりは槍を放つ前に、前提として槍は既に心臓に命中しているということになり、回避するには敏捷値の高さではなく、幸運を上げなくてはいけないというチートな宝具

・無明神風流 みずち

「S M U R I D E E R K Y」に出てくる剣技。

無明神風流の基本技で、凄まじい剣速で相手を斬り刻み、暖かい風が吹いた後ばらばらになる技。斬られた者は痛みも感じず、絶命の瞬間には心地よささえ覚えるらしいです…どんなゾ?

「さて、次回は後のことを考え、2回目の設定回にしたいと思います。ここでは主にキヨウのサーヴァントについての設定を載せていきます。勿論、以後出てくるサーヴァントがいればそこに更新していきますので、その都度、見てくれると幸いです!」

「…という事は、今後もキヨウのサーヴァントが増えていくという事…キヨウの節操無し…」

「あの…キヨウ君がいないのにそんな怖いオーラ出しながら魔力を高められてもどうしようもないんですけど…」

「……帰ってきたら、お仕置き…」

「…ダメだ、全然聞こえてない…な、なんかこんなにグダグダにな
つてしまいました。今回はこれで終了させていただきます！Ra
iN様、リョウタ様、感想ありがとうございます！！前書きでも書
きましたが、この調子で頑張っていきたいと思います！！
それでは皆様、また次回お会いしましょう！！」

いろいろ設定 サーヴァント編（前書き）

どうも、和風好きです。

次話から始まるA・s編では、多数のサーヴァントを登場させる予定です。

なので、「Fate/stay night」や「Fate/EXTRA」などを知らない、若しくは未プレイだという方のために、今回はそのサーヴァント達の設定回とさせていただきます。

色々突っ込み所が満載だとは思いますが、どうかお付き合いくださいm(ー)ーm

いろいろ設定 サークヴァント編

キョウのサーヴァント

キャスター（キャス狐）

真名

???

ステータス

筋力 D

耐久 D

敏捷 B

魔力 A+

幸運 B+

宝具 ?

スキル

・陣地作成 C

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げる。

が、どうも性格的に向いていないらしく、工房を作ることさえ難しい。

…行動派って事？

・呪術 EX

ダキニ天法。

地位や財産を得る法（男性用）、権力者の寵愛を得る法（女性用）

といった、権力を得る秘術や死期を悟る法がある。
しかし過去さんざん懲りたのか、あまり使いたがらない。

・変化 A

借体成形とも。

玉藻の前と同一視される中国の千年狐狸精の使用した法。

殷周革命（『封神演義』）期の妲己に憑依・変身した術だが、過去のトラウマからか、あまり使いたがらない。

宝具

・ ???

セイバー（赤セイバー）

真名

???

ステータス

筋力 B

耐久 B

敏捷 B

魔力 C

幸運 B

宝具 ?

スキル

・対魔力 C

二工程以下の詠唱による魔術を無効化する。

大魔術、儀礼呪法等、大がかりな魔術は防げない。

彼女自身に対魔力が皆無なため、セイバーのクラスにあるまじき低さを誇る。

・皇帝特権 EX

本来持ちえないスキルも、本人が主張する事で短期間だけ獲得できる。

該当するスキルは騎乗、剣術、芸術、カリスマ、軍略、など。

ランクがA以上の場合、肉体面での負荷（神性など）すら獲得する。なんというチートスキル。

頭痛持ち B

生前の出自から受け継いだ呪い。

慢性的な頭痛持ちのため、精神スキルの成功率を著しく低下させてしまう。

せっかくの芸術の才能も、このスキルがあるため十全には発揮されにくい。

…勿体無い事この上なし

宝具

・?????

以下、登場次第、随時更新します。

いろいろ設定 サークヴァント編（後書き）

というわけで、2回目の設定回でした。

…今のところはこれしか紹介できませんが、すぐに登場させますので、その時を楽しみ（？）にして待つて下さると有り難いです！

キヤス狐と赤セイバーのステータスについては両者の成長値を参考にこの位かな？と思ったランクにしています。

「そんなはずないだろ！！」とか「これじゃ弱すぎる！！」等の意見があれば、感想の方で言つて下さると有り難いです。

あと、真名と宝具については、本編で明かすまでは控えた方がいいかと思つて？？にさせてもらっています。

こんな個人的事情がありますが、納得してもらえると幸いです。

話題は変わりますが、読者様への感謝を…

R a i N様、ゆや様、感想ありがとうございますm（――）m

それと、ユニークが50,000人を、お気に入り件数が300件を突破しました！

この小説を御覧になった読者の皆様、ありがとうございます！！
そして、長期間の放置の間もお気に入り登録し続けてくださった方

々、本当にありがとうございます!!!(´▽｀) m

次話の更新は、1週間後を予定しています。

なるべく遅れぬよう頑張りますので、これからもよろしく願います。

それでは、これにて失礼します。

第31話 ついに起動！そして驚愕の真実！！（前書き）

どうも、和風好きです。

今週も何とか間に合ったので、投稿させていただきます。

この31話からついにA・S編が始まります！

31話でやっとって…どんだけ遅いんだよ…

って気もしますが、そこはなにとぞご容赦してくれると嬉しいです。

それでは第31話、始まります！！

第31話 ついに起動！そして驚愕の真実！！

あの魔法陣調査の任務からしばらく経ち
クロノ達から何かしらの任務が来る事も無く、俺は再び日常に戻っていた。

……と言つても、平和な日常かと言うとそうでもない気もするが……

なんせ、家にあの赤セイバーとキャス狐がやってきたのだ。

事あるごとに2人はすぐ口喧嘩、時々実力行使もついてくるから以前に比べ、かなり騒がしい日常になった。

しかも、同じ同居人であるシオリとアリシアは上手く避難しているが、何故か俺は毎回それに巻き込まれるんだよね……

まさかこれが噂のギャグ補正！？

まあ見ている感じ、そこまで仲が悪いわけじゃなさそうだからいいんだけどね……

因みに、家の住人であるシオリとアリシア、そして魔法関係者のなのはには2人を紹介しておいた。

家に住む2人は勿論、なのはに関しては、秘密にしてもクロノやユーノ経由でバレそうな気がするからな…その後、秘密にしていた事に関して『O H A N A S H I』される位なら今のうちに自分から言った方がいいだろうと考えたが故の行動だった。このおかげでなのはやアリシアが赤セイバーとキャス狐に剣術やら戦い方やらを教えてもらえるようになったから、話して正解だったと言えるだろう。

さて、今日は6月3日。
はやての誕生日前日である。

…前日ならどうでもいいじゃん、と思った人もいるだろうが、実は毎年、俺とシオリは6月3日から泊り、2日間かけてはやての誕生日を祝うのが風習になっているのだ。
なので、今年もそうするところなのだが、今年に限っては問題があった。

それは家の同居人であるアリシアと赤セイバー、そしてキャス狐の事である。

3人を家に残してはやての家に遊びに行くという案は、残していくメンバーがちゃんと留守番できるか心配だから却下。
アリシアも一緒に連れていくという案については、アリシアならはやてとも仲良くなれると思われる事については構わないのだが、も

し、アリシアがはやての家の闇の書に気付いてしまい、それがフェイト、若しくはプレシアさんに伝われば間違いない管理局に知らされてしまうだろう。だから、なるべくなら避けたい案である。

さて、一体どうすればいいのか…と考えていたら、都合のいい事にその日はアリサの家に3人娘と一緒に泊まり会をするらしく、家を留守にするらしい。

…ちなみに、俺はハブられたわけではない。何でも、『女の子だけの話し合い＆作戦会議をしに行く！』と言う理由で誘われなかっただけだ。

…話し合いなら分かるが、女の子だけで作戦会議って何を会議するんだよ…？まあ、都合がいいからいいけど…。

これで、後は赤セイバーとキャス狐がどうするかだが、2人に聞いたところ、霊体化してついていくとのことだ。まあ、元々2人についてはその方法が使えるから気にしてはいなかったけど…。

そんなこんなで、俺とシオリ（+赤セイバーとキャス狐）は、当初の予定通りはやての家に遊びに行った。

「「お邪魔します。」」

「いらつしゃい、キョウ君、シオリさん。」

家にやってきた俺とシオリを、はやてが笑顔で迎えてくれた。
今から明日の誕生日が待ちきれないらしく、さっきからそわそわし

て落ち着きがない。

『むっ、美少女の原石……』

『このご主人様に向ける眼差し……要チェックですね。』

……頼むから今回だけは騒ぎを起こさないでくれよ……

あの後、はやての家でゲームをして遊んだ後、はやてが作り、シオリが手伝いをした料理を食べ、はやての頼みを聞いて……い、一緒に風呂に入ったりして、平和な1日を過ごす事ができた。

途中、特にはやてのお願いから風呂に入るまでの間で赤セイバーとキャス狐が暴走しそうになっていたが、令呪を使うと脅したら、しぶしながら落ち着いてくれた。

後日、2人の機嫌をとらないと思うと、ついため息をついてしまったが……

まあ、今日と明日ははやてが優先だからな。2人も分かってくれらるだろう……

そして、現在午後11時55分……ってところか。

俺ははやてと一緒にベットの上で時計を見つめ、その時を待っていた。

「今年こそは4日になる瞬間を見届けるんや！」

はやてはそんな事を言って、気合を入れていた。

「でも、そう言いながら去年も一昨年も12時になる前に寝ちゃったじゃん。無理はしない方が良いぜ。」

「うつ……で、でも私ももう9歳になるんや！今年こそは絶対に寝ないでみせるでー！」

まったく……それも同じような事を去年言ってたぞ……。

まあ、後5分……いや、後4分だから、今年は寝そうになったら俺が起こしてやればいいか。

「この12時まで起きる！ってやつ、毎回やってるけど何時もそんなことしているのか？」

俺がそう尋ねると、はやては少しうつむく。

「そんな事……ない。」

しまった、地雷を踏んじまったか……？

「お父さんとお母さんが死んでからは、誕生日なんて全然嬉しくなかったで。1人でする誕生日なんてさびしいだけやったからな。でも」

そこで言葉を止めたかと思うと、顔を上げて俺の目を見つめてくる。

「キョウ君とシオリさんと出会って、2人が一緒にお祝いしてくれるようになってから、誕生日がほんまに楽しくなってん。次の誕生日がはよ来てくれへんかって思えるようになってたんや。」

これも2人のおかげやね。」

そう言うはやての笑顔を見て、俺は少しドキッとしてしまった。

「そ、そうか／＼」

『……奏者よ、何故顔を赤くしておるのだ？』

『ご主人様を誑かすなんて…はやてさん、いい人なんですけど……
…残念です。』

赤セイバーはともかく、キヤス狐、お前がそう言つと本当に「冗談じや済まされない気がするんだが…」

「キヨウ君、どうしたん？」

少し表情に出ていたらしく、はやてがそう尋ねてくる。

「あ、いや……それなら今日こそはちゃんと起きてなきゃな。」

「そやね。でも時計見てみ。あと少しや。」

そう言われ、時計を見ると、あと30秒もしないうちに日付が変わる時間を示していた。

俺達はいつの間にかつないでいた手を握り、その時を待つ。

そして、時計の長針と短針が共に「12」を指し、日付が変わったその時

本棚に置いてあった1冊の本

闇の書が光り出した。

「な、何や!？」

そして、本に巻きついてた鎖がちぎれ、独りでにページが開かれていく。

「封印を解除します」

封印を解除って…まさか闇の書が起動するのか!？

一通りページを開いた後、闇の書は閉じられ、俺とはやての前に降りてきた。

「起動」

そんな声が聞こえたすぐ後、闇の書は光り出す。

すると、はやての胸から小さな光の玉 おそらくリンカーコア
と思わしきものが出てきた。

そして、闇の書と共鳴するように輝き出し目の前が真っ白になる。
光が収まり、目を開けると、そこにははやてに向かって頭を下げ、
片膝を地面につけている4人の男女がいた。

「闇の書の起動、確認しました。」

まず、ピンク色の髪をポニーテールにしている女性が告げる。

「我ら闇の書の蒐集を行い、主を護る守護騎士でございます。」

次に、金髪の女性がそう自己紹介をし

「夜天の主の下に集いし雲。」

白髪で……あれは犬耳かな？ と尻尾を付けた男がその後を続け

「ヴォルケンリッター、何なりとご命令を。」

最後に 赤い髪を三つ編みにした少女がそう言ってしめた。

これが、闇の書の起動ってやつか……なんか、禁録の書の起動よりも演出とかが派手な気がするんだが……禁録の書の方が上位のはずなのに…

それに…前にシオリが闇の書にも管理人格が存在すると言っていたから、人が出てくるのは予想していたけど……まさか4人も出てくるとは思わなかったぞ。

誰が管理人格なんだろう…？

とにかく、まずは闇の書の主であるはやてに色々と説明しなくては…
そう思い、俺ははやての方を向いてみると

「……………きゅ」

見事に気絶していらっしやった……………って、おい！！

闇の書が起動したのに、主が気絶してると色々と困る気がするんだけど…！

「おい、起きろ。はやて。」

声をかけながら体を揺さぶるが、はやてはまだ起きてくれない。

と、はやてを起こそうとしている俺の存在に気付いたらしく、4人の視線が俺の方に向いた。

「ッ、貴様！何者だ！！」

突然、ポニーテールの女性が叫んできた。

すると、金髪の女性が魔法を発動させ、バインドで俺の動きを封じてきた…俺何かした？

「あの…なんでこんな事されるのか理由を教えてくださいませんか？」

とりあえず、ここは下手に出ておいた方がいいだろう…向こうの方が年上っぽいし…

「とぼけても無駄だ！貴様から感じられる魔力は誤魔化されんぞ！！」

折角俺が下手に出てみても、全く効果がなかった。

…そう言えば、今回ははやての家に居るから魔力遮断を怠ってたな…

そんな感じで現実逃避していたら、ポニーテールの人がデバイスらしき剣を突きつけてきた。

見れば、他の3人も戦闘体勢に入っている様だった。

ちよっとこれはヤバいかもな…

ここは主のはやてに止めてもらって　　って、今は気絶してるんだった…

「答える！貴様、主に近づいて何をするつもりだ！！」

…マジで面倒な事になったな。これからどうしようか…

『おのれ！奏者にこのような仕打ちをするとは…！！』

『ご主人様に手を出そうとする輩は、例え誰であろうと殺します』

ちよつ、お前等も参戦するのかよ！！

俺がこの窮地（？）をどう脱するか悩んだ瞬間

「…貴女達こそ私の主^{キヨウ}に何をするつもり？」

という声が聞いたと同時に、^{ヴォルケンリッター}闇の書の守護騎士達の足元に魔法陣が展開し、全員が地面に叩きつけられた。

「ぐッ…！！」

「…ッ、何だよ、これ…！？」

「体が…」

「動かん…！」

倒れ伏したまま動く事が出来ない守護騎士達の後ろには、禁録の書を右手に持ち、左手を前にかざしているシオリが立っていた。

『流石だな。この無礼者共を拘束した手腕、見事だシオリ。』

『^{キャスター}魔術師の視点から見てもなかなか見事な拘束術式です。この世界の魔導師…でしたっけ？…にしては優秀ですね。』

霊体化している赤セイバーとキャス狐がそんな事を言っている。
…こいつらが動き出す前に止めてくれて本当にありがとう、シオリ
！！

さて、シオリが守護騎士達を抑えてくれたおかげで危機っぽいものは何とか凌いだが、本題はここからなんだよな。

闇の書の主であるはやてと管理人格に闇の書の実情を説明して、シオリ指導の下、夜天の魔導書に戻す協力を得なきゃいけないんだが…

地面に縫いつけられたかのように動けない4人は、完全にこちらを敵視している。

これじゃ、間違いなくこちらの話なんか聞いてくれないよな…

「……ん、んん……キョウ君にシオリさん…何しとるん？……って、この人たち誰や！？」

どうしたものかと悩んでいたら、ようやくはやてが目覚めてくれた。
ナイスタイミングだ、はやて…！！

「その…主の友人とは知らず……すまなかつたな、紅崎。」

あの後、目覚めたはやてが守護騎士達に俺とシオリの事を説明してくれたおかげで、とりあえず俺達が敵ではないと認めてくれたようだ。

そして、先程剣を突きつけてきたポニーテールの女性 シグナムが代表して謝罪してくれた。

「こっちこそ、シグナム達を地面に縛りつけてるんだから、おあいこさ。」

別に、俺にケガはなかったから謝ってもらわなくてもよかったんだけどな。

シグナム達の立場からしてみれば、気絶している主の側に魔力を持った見知らぬ男がいた事になるんだから、俺だって似たような事をしているかもしれないんだから…

因みに、明らかに年上なシグナム相手に敬語じゃないのは彼女から「主の友人なのだから我らに敬語を使う必要はない。」と言われたからで、俺もそうさせてもらっている。

「そう言ってもらえると助かる。」

「それにしても…キヨウ君が魔法使いだったなんて、知らなかったわ。」

あと魔法の存在を知ってしまったたはやてに、俺が魔導師である事とシオリが禁録の書の管理人格である事等を説明した。

…3年以上も秘密にしていたから少し罪悪感っぽいものがあつたけど、これからやらなきゃいけない事の為にめちゃんと説明しておいた。

「魔法使いじゃなくて魔導師な……この世界で魔法が認知されていない以上、魔法の事は秘匿しなきゃいけないからな。……でも、秘密にしている悪かったな。」

「ええよ。秘密にせなあかん事やったら、しゃあないやん。」

はやてに魔法の事等を秘密にしていた事を謝り会話が落ちついたところで、闇の書の現状と夜天の魔導書化計画を説明し、協力を要請しようとした時だった。

「ふむ。はやてに知られてしまった以上、余が姿を隠す必要はなくなつたな。」

そんな声が聞こえたかと思うと、俺とはやての目の前に赤セイバーが姿を現した。

「だ、誰だお前!？」

突然はやての前に現れた赤セイバーに、守護騎士の4人は身構える。……まったく、この暴君様は……

「なんでこのタイミングで出てくるんだよ……」

俺がついそう言ってしまった時、今度は

「全く……周りの空気を一切読まずに行動してしまうなんて……これだからセイバーさんは困りますねえ」

と言いながらキャス狐が現れた。

「紅崎、これはどういう事だ？」

本人曰く狼の耳と尻尾を付けた男性 ザフィーラがそう聞いている。

他の守護騎士達も、2人への警戒を続けながらも俺に説明を求めているような視線を送ってきている。

……勘弁してくれ。

「すみません、この2人 セイバーとキャスターは俺のサーヴァントなんだ……」

とにかく、説明しないと始まらないだろうから俺から説明する事にする。

「サーヴァントって何や？…シグナム達は知つとる？」

「いえ、聞いた事ありませんが…シャルはどうだ？」

「私もわからないわ……サーヴァントって何かしら？」

はやてがシグナム達に解説を求めたが、シグナムや金髪の女性シャルも分からないようだ。

…まあ、サーヴァントなんて本来違う世界の魔術の言葉だから…知らなくても当然か…

そんなはやて達の態度を見て、赤セイバーが得意そうに解説し始めた。

「サーヴァントとは過去の英霊だ。余のように、生前に名を馳せた英雄は後の世にまで信仰される、神仏的な存在　英霊となる。その存在を、世界に再現した姿がサーヴァントである。」

「って事は、セイバーさんとキャスターさんは過去に存在した英雄って事なん？」

赤セイバーの説明を聞いたはやてが目を輝かせながらそう尋ねている。

「そうか、はやてって英雄譚とか好きだもんな。」

「そつだ。真名は教えられぬが、余はかつてとある帝国の皇帝であった。」

はやての質問に、赤セイバーはそれはもう自慢げに答える。

「真名を教えられないってどういう事だよ？」

すると、今度は赤い三つ編みの少女　ヴィーダが赤セイバーに尋ねた。

「それにはちゃんとした理由わけがあるんですよ。サーヴァントにとって真名を知られるという事は、同時に自分のほぼすべての情報を知られることになります　その中には自分の奥の手や弱点というものが含まれるわけです。」

「成程：それ故に真名が知られることを避けねばならぬのか。」

ヴィーダの問いにキャス狐が答え、ザフィーラがそれに理解を示してくれた。

「えー、そんな言わんで教えてくれればええやん！」

さつきから赤セイバーとキャス狐の正体を知りたくてたまらないような態度をしていたはやてが

「主、そんな我が儘を言っではいけません。」

それをシグナムが諫めている。

「…それじゃ、シグナムは気にならへんの？セイバーさんとキャスターさんの正体が。」

「確かに私も彼女達の 特に1人の剣士としてセイバーさんの正体を知りたいとは思いますが、主はやてに仕える身として彼女達が仕える主の為に万全を期しておきたいという気持ちはよくわかりますから…」

……さすが烈火の将…だっけ？……その名にふさわしい心意気だな。すると、どうやら同じ事を思ったらしく赤セイバーが少し考え、

「ふむ…そうだな。真名を教えるわけにはいかぬが、そんなシグナムの心意気に免じ、はやてには余の真名が何か回答する権利を与えよう。余はその回答に対し、必ず正誤を答えよう。勿論、嘘は言わぬ。……はやては英雄譚を好むと聞いた。ならばこのような余興もまた一興かと思うのだが…どうだ？」

そう提案してきた。

それをきいたはやては、満足そうな表情を浮かべ、

「うん、それでええ。いつか正解してみせるから、セイバーさんもキヤスターさんも誤魔化さずにちゃんと答えてな！」

「おや、私の真名ですか？……まあ、面白そうですし構いませんよ。」

キヤス狐も提案を受け入れてくれた事で、会話が落ち着いた。

今度こそ、今後の計画について話そうと思ったら、今度はヴィーダが話し始めた。

「それにしても、闇の書には守護騎士私達がいるけど、キヨウの持つてゐる禁録の書には守護騎士はいないんだな。」

…あ、それは俺も思った。

それに、禁録の書に守護騎士がいてくれたらどんなに良かったか…。この3年間、まだ1ヶタな年齢の体であの大きな家に住むのはなかなか大変なんだぜ…。家事をするのは俺かシオリの2人だけだし…。しかも株取引とかの仕事ならまだいいけど、読みたい本があるという理由で部屋に閉じこもって全然手伝ってくれない時とかあるし…。あ、別に守護騎士が家事分担に便利そうだなー…とか思ったわけじゃないんだけど

と、そんなことを思っていたら、シオリが俺の方を向いた。

…ヤバ、変な事考えていたなんてバレたら説教されるかも…（汗）

「…いる。」

シオリの説教に対して身構えていた俺にかけられた言葉は、予想もしていない言葉だった。

……… っ て、 え！？

「 な、 何だっ て！？」

「 …… だから… 禁録の書にも守護騎士はいる。 」

少し拗ねたような表情をしたシオリから言われた一言に、 俺は啞然としてしまう。

「 …… え、 でも、 俺が禁録の書の主になった時、 お前が説明してくれた機能の中に『 守護騎士 』 なんて言葉は一度も出てなかったはずじゃ… 」

「 …… 聞かれなかったから、 答えなかった。 」

……… この世界に来たばかりの原作知識皆無な俺が、 守護騎士について知っているはずないじゃないですか、 シオリさん………
そんな無茶な要求しないで下さい。

「 …… ってことは、 その禁録の書の守護騎士さんはまだ魔導書の中にあるっっちゃうことかいな？ 」

「 …… そうなる。 」

「 …… だったら早く出してあげなあかで、 キョウ君。 ちょうどシグナム達も今日出てきたんやからええタイミングやん？ 」

シオリの説明を聞いたはやてがそんな事を言ってくる。

「奏者よ。余も禁録の書の守護騎士が如何様な奴らか、興味がある。召喚してやったらどうだ？」

「そうですねえ。ご主人様にも守護騎士を得れば雑事は全部任せ、ついでにセイバーさんにも何か雑事を押しつけて、その間、時間のできたご主人様と私は2人つきりで……っきゃあご主人様、そんな事までするなんて大胆ですう」

赤セイバーとキャス狐も守護騎士召喚に賛成のようだ……キャス狐はトリップの上、クネクネしているけど……

「ア、アイツの意見はともかく……私もその守護騎士を見てみたい。」

「そうだな……私も我ら以外の魔導書の守護騎士がどのようなものか、興味がある。」

「どんな子がいるのかしら。」

「我もそれで構わん。」

ヴォルケンリッターの面々も賛成派らしい。

まさかの全会一致か……まあ、俺もいるのならどんな奴なのか興味があるからな。

「……わかった。それじゃ、今から召喚する。」

第31話 ついに起動！そして驚愕の真実！！（後書き）

「というわけで、第31話でした。いやあ、ついにA・S編ですか。何か、感慨深いものがありますね。」

「ついにつて、こんなに遅くなったのは途中でお前が更新停止しやがったからだろうが。」

「ぐつ。そ、それはそうだけど。」

「それに、A・S編に行くまでに話数を31話も使っただなんて、長過ぎなのでは？」

「クッ、後書きにシオリさんまで加わったから、俺に来る攻撃が2倍になるとは。！あなどれん！！」

「何カッコつけてるんだよ。それに、題名の『驚愕の真実』って禁録の書にも守護騎士がいたってだけじゃねえか！」

「…誇張表現による読者の獲得を狙ったものだと推測。…あさましい。」

「ひどつ。！そこまで言わなくてもいいじゃないか！これくらい、この小説でも、現実でも誰もがやってることだろ！！」

「人様に失礼なこと言ってるんじゃないか！！」

「ちよつ！少しは落ち着いてく」ぎゃあああああ！！」

「…キヨウと作者が席を外したので私が代理に…。…この小説のPVがもうすぐ500、000を超えそうです。この小説を読んで下さる読者の皆様、本当にありがとうございます。…これを記念して、作者は『PV500、000突破記念』を何かしようとしているみたいです。…何か希望があれば感想にて送ってくれると嬉しい…。…勿論、感想だけのものも受け付けておりますので遠慮なくどうぞ。…次話はまた1週間後に投稿の予定です。更新を楽しみにしてくれると嬉しい…。…それでは、また次話にお会いしましょう。」

「ぎゃああああああああああ！！」

「…いい加減、うるさい。」

お知らせ&緊急アンケート

読者の皆様、お久しぶりです。

和風好きです。

この度、また3月初旬から更新しなくなってしまったわけですが……

一応理由があります。

それは今も多くの人に影響を及ぼしたあの大地震です。

……といっても、自分は関東圏に住んでいるので人的被害は無かったのですが……

なんとあの地震の時にマイノートPCが机の上から落下し、そのままいかれてしまうという緊急事態が発生してしまったのです……

お陰で修理に出して戻ってくるまでの1カ月近くはネットを使う事

が出来ず、ネットサーフィンドころか執筆活動も出来ない次第でした。

しかもあんなに金かかるし……………本当に地震ウゼエエエ

!!!!!!!!!!

とはいえ、4月の中旬あたりには戻ってきました、修理期間中に溜まってしまった他の作者様方の作品をチェックしつつ、このプランクを取り戻そうと今までの自分の小説を読み直してみたのですが…

……………はい、随分とひどい出来でしたね…（汗）

文章表現がいまいちとか、日本語がおかしい箇所がかなりあったりしたのですが、何よりも問題なのは今後の展開として考えていたストーリーにある程度必要なフラグとか伏線とかが微妙過ぎて、今後の展開が強引になってしまいかもしれないという懸念が出てきました。

そして、次回に出てくるはずの守護騎士さんたちですが……………

正直に言います。

過去のアンケートの結果から、自分は腹ペコ王とか、錬鉄の英雄とか、青い槍兵とかのサーヴァントさん達を登場させるつもりでした。

しかし、他の作品を見えますと……………君達出演しすぎでしょ。

こういう二次小説でちょっと大切なポイントであるオリジナリティなんかのことを考えると、守護騎士変えた方がいいのかなあ……なんて思っていました。

なので、読者の皆さま方にアンケートです。

1・禁録の書の守護騎士は次の選択肢のうちのどれがよろしいですか？

？他の作品とかぶっていいからサーヴァント達がいい！！

？…もうサーヴァントは飽きたから他の作品（例えば、かつてのアンケートの候補にあった11eyesとか）からの登場がいい！

？いつそ読者の考えたオリキャラを登場させる！！！

2・それ以前に、これまでの部分を書きなおした方がいいでしょうか？

？新しく最初から書き直して出直してくるがいい！！

？…書き直すとかマジで面倒だからもうこのままでいいよ…

？今あるやつを修正させたら？

一応5月の中旬くらいまで受け付けようと思っております。

まあ、1.の方で？や？の意見になったとしても、「どうしてもあのサーヴァントは登場させてほしい！」といった意見があれば、守護騎士としてではない別の機会で登場させるなどの都合をつけることもできますので、その点も含め、感想に書いてくれると嬉しいです！！

ただ今、自分はこの2点について結構本気で悩んでいます！

なるべく多くの意見を聞きたいので、感想の方でガンガン送って下さい！

お願いしますm(_____)m

A・S 編 予告 〈11eyes ver〉（前書き）

どうも、和風好きです。

皆様から頂いた意見を参考に色々と考えてみた結果、何とか2つまで絞ることが出来ました。

…自分としては正直両方とも甲乙つけがたいので、いつそ皆様がどちらがいいか、あるいは両方をごっちゃにするかを聞いてしまおうと思い、予告という名のお試しを掲載することにしました。

なので、どちらの方が良かったか、感想の方に送ってくれると助かります！！

それでは、予告第1弾は11eyesバージョンです。

A・S編 予告（11eyes ver）

海鳴の地に現れた災厄の種が封印され、平穏な日常に戻っていたのは達。

だが、そこに新たな危機が現れる。

「Caution・Emergency」

「えっ、結界!？」

「あの魔導書は まさか!？」

それは1冊の魔導書 闇の書。

他者のリンカーコアを募集する、ヴォルケンリッター世界を滅ぼす力を秘めた魔導書。
海鳴に再び集う仲間達の前に、闇の書の守護騎士が立ち上がる。

「ぶち抜けえ!!」

「魔導師にしては悪くないセンスだ。だがベルカの騎士に一对一を挑むには まだ足りない!」

「導いて、クラールヴィント。」

「この程度でどうにかなる程

柔^{やわ}じやない！」

そして、彼女達に手を貸すのは正体不明の魔女と伝説の魔導書の名を冠する騎士達

「美しき暗黒の深淵によって、この穢れた世界を浄化するときに、ついに訪れるのよ……！」

「君の相手は、この私だ。」

「あは 次はわたしが相手になりますよ。KYちゃん。」

「うるせーな。オレだって好きでやってるわけじゃねーよ。フリードリヒ・ヴィルヘルム・ニーチエ。」

「こう見えて、私は悪女ですから。」

今、闇の書を巡る新たな戦いが始まる

！！

「そんな、この結界をいとも簡単に解除するなんて

！！！」

「あんたも使い魔 守護獣ならさ、ご主人様の間違いを正そうとしなくてもいいのかよ？」

「止めます

私とバルディッシュが……！」

「お姉ちゃんとして、妹が傷つけられるのを黙って見過ごすわけにはいかないんだよねー。」

「また終わってしまった……一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい？」

「悪いけど……俺は負けるわけにはいかねんだよ!!」

「もう闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん
私が呼ばせへん!!」

『無駄死にから始まる転生者生活 Ⅰ A' S 編Ⅰ』、乞うご期待ください!!

「…解析完了。原因が判明しました。この異変の原因は

キヨウ、貴方です。」

A・S編 予告 ｝11eyes ver｝（後書き）

いかがだったでしょうか？

…そもそも予告としては、あまりにも出来がひどすぎる様な気がしますけどね…予告って難しい！！

第2弾は1週間以内には投稿しようと思います。

皆様には、今回と次回の予告を見て、どちらの方がよさそうか、感想を送ってみてください！！

それでは、今回はこの辺で失礼します。

A・S編 予告〈Fate ver〉（前書き）

どうも和風好きです。

予定より投稿が遅れてしまいました。

本当は昨日投稿する予定でしたが、色々と予定があって忙しかったせいでつい寝落ちしてしまいました…

申し訳ありませんn（――）m

前回も言いましたが、今回の予告と前回の予告を比べてどちらの方がよかったか、若しくは両方を色々と融合した方がいいかを感じて送ってくれると嬉しいです。

それでは予告編第2弾はFate編です。

A・S編 予告 〈Fate ver〉

海海鳴の地に現れた災厄の種が封印され、平穏な日常に戻っていた
なのは達。

そこに新たな危機が現れる。

「Caution・Emergency」

「えっ、結界!？」

「あの魔導書は まさか!？」

それは1冊の魔導書 闇の書。

他者のリンカーコアを募集する、ヴォルケンリッター世界を滅ぼす力を秘めた魔導書。
海鳴に再び集う仲間達の前に、闇の書の守護騎士が立ち上がる。

「ぶち抜けえ!!」

「魔導師にしては悪くないセンスだ。だがベルカの騎士に一对一を
挑むには まだ足りん!」

「導いて、クラールヴィント。」

「この程度でどうにかなる程

柔^{やわ}じやない！」

そして、彼女達に手を貸すのは正体不明の魔女と伝説（？）に名を冠する英霊達

「美しき暗黒の深淵によって、この穢れた世界を浄化するときが、ついに訪れるのよ……！」

「ハヤテ、おかわりを。」

「私が、私たちがサントムだ……！」

「我が主の命により、この俺が貴公らの相手を致す。」

「では、お覚悟を。」

「けっこうな言われようだな。オレは単に、おまえらの魔力が欲しいだけだ。」

「な…なんとエロい……！」

「なにその感想……！」

「……弱い奴は、死ね。」

今、闇の書を巡る新たな戦いが始まる

！！

「そんな、この結界をいとも簡単に解除するなんて　　！！」

「あんたも使い魔　　守護獣ならさ、ご主人様の間違いを正そう
としなくてもいいのかよ？」

「止めます　　私とバルディッシュが！！」

「世界を覆すとはどういうことか、手本を見せてやる！」

「私が言えた事じゃないですけどー、随分とえげつない事を考えますねえ……」

「お姉ちゃんとして、妹が傷つけられるのを黙って見過ごすわけにはいかないんだよねー。」

「また終わってしまった……一体幾度こんな悲しみを繰り返せばいい？」

「悪いけど……俺は負けるわけにはいかねんだよ！！」

「もう闇の書とか呪いの魔導書とか言わせへん　　私が呼ばせへん！！」

『無駄死にから始まる転生者生活　　（A，S編）』、乞うご期待ください！！

「
：解析完了。原因が判明しました。この異変の原因は
キヨウ、貴方です。」

A・S編 予告（Fate ver）（後書き）

いかがだったでしょうか？

……と言っても、前回と違うのは禁録の書の守護騎士の部分と前回では忘r じゃなかった、意図的に抜いていた赤セイバーとキヤス狐のセリフを加えたところだけなんですけどね。

因みに言っておきますと、Fate verと銘打ってはありますが、1人だけFateはおろか、型月系のキャラクターでさえないサーヴァントがいます。

とはいっても、名前だけならFateにちゃんとサーヴァントとして登場していますけどね。

皆様は、前回の予告と今回のを比べて、どちらの方が良かったか感想を送って下さい！！

その結果が出次第、本編の投稿を再開しようと思います。

それでは今回はこの辺で失礼します。

第32話 もう一つの守護騎士召喚（前書き）

……皆様、お久しぶりです。

実に3ヶ月以上間があいてしまいましたが…。

今までずっと院に行くための勉強をしていました。

それはもう、人生で最も勉強したといえるくらいに……。

なので、申し訳ないとは思ったのですが、更新を停止していました。

とりあえず一息つけたので第32話を更新します。

試験の結果が良ければ以後は定期的に更新できるようになると思いますが…

ダメだったら勉強しなきゃならないんでまた更新できなくなると思っています。

…と、とりあえず、今は頑張って更新しますのでよろしくお願いします
ますm(ー ー)m

それでは、第32話、始まります。

第32話 もう一つの守護騎士召喚

そんなこんなで、禁録の書の守護騎士を召喚する事になったわけだが…。

とりあえず何人が召喚されるのかわからないが、あと何人が加わっても大丈夫なように、俺達は八神家のリビングに移動した。

そして、まずは召喚する前の準備として魔力遮断、認識阻害、防音、盗聴・盗撮妨害 e c t な効果を加えた封時結界を展開する。

…何故こんなに色々と付加したのか、って？

今から儀式系の魔法に類似した事をするのだから、これ位の備えは必要だろう。

魔力遮断の効果は、召喚の際に膨大な魔力を生じさせたせいで管理局がこれを観測、調査の結果闇の書の居場所を特定され強引に封印を施される、なんて事にならないように付与しておいた。

先程の闇の書の起動の時に魔力が生じた事からも、これは必要だろう。

因みに、闇の書の起動の時、魔力を感知したシオリがすぐに結界を展開してくれたおかげで、もし管理局がそれを観測していたとしても観測機器のミスだと判断される程度に抑えられた、なんていう活躍があつたらしい。

流石はシオリ、実は結構ハイスpekだよな。

認識阻害は……言つまでも無いだろう。

この世界では、魔法は隠匿しなきゃいけないんだから。
防音に関しても同様の理由だ。

盗聴・盗撮妨害は……念の為に……な。

さつきからちよつと気になる事があつてな……。

まあ、備えあれば憂いなし、という言葉に従つて準備をしたわけだ。
そして、俺は禁録の書を片手に持つてリビングのだいたい真ん中な
位置に立っている。

その側にはシオリが控えており、万が一の時は色々と対処してくれ
る予定だ。

その他の皆様は少し離れたところで観客となつて俺達を見ている。
特にはやては魔法の存在を知った後1番最初に見る魔法に興味津津
な様で、キラキラした目で俺達を見つめてくる。

……うん、気持ちはわかるけどそんなに見つめられると流石に緊張
しちゃうんだけど……

と、俺は心の中でそんな弱音を吐いていたが、実は主^そにはやての期
待の目以外の理由でも緊張していた。

シオリが言うには、禁録の書は闇の書等とは異なり、守護騎士がど
のような人数、人物なのかが決まっておらず、主となった人物に相
応しい者達が召喚されるらしいのだ。

つまり、俺次第で守護騎士がとんでもなく強い者達が召喚されたり、
それこそ魔導師ランクがCならばいい方な者になったりするわけだ。
……そういう設定にされると本当に緊張しちゃうから勘弁してほし
いよ。

とはいえ、そんな事を言ってもこの状況が変わる筈もないよな……

俺は目を閉じて気を落ち着かせた後、先程シオリに教えられた言葉を唱え始めた。

「禁録の主、紅崎キヨウの名を以って命ず！
我に従いし騎士よ！我が呼びかけに答え、我が前に姿を現せ！！」

その瞬間、手に持っていた禁録の書のページが光り出し、闇の書の起動に負けない位の魔力が溢れ、光で辺り一面が真っ白になる。

さて、禁録の書の守護騎士はどんな奴なのだろうか……？

しばらくして光が収まってきたので目を開けてみると、俺の前に7人の男女がいた。

……… って7人！？

随分多いな、禁録の書の守護騎士は……… って、確か主次第で誰が出てくるか変わるんだっけ？

……… なら、この人数も、俺故のもののかな？

そんな事を思っていると、1人の少女が俺の前に出て来てきた。

……… って、あれ？

「サーヴァントセイバー、召喚に応じ参上した。」

この人、どこかで見た事あるんだけど……
だって、金髪碧眼の　　っていうか、俺のサーヴァントである赤セイバーにそっくりな青い騎士なんだぜ？

……この人、どう見てもあのセイバーさんだろ！！　　　あ、騎士王、若しくは腹ペコ王の方ね。

心の中でそんな感じに驚愕している俺を置いて、セイバーさんが話しかけてくる。

「問おう、貴方が私のマスターか？」

……おお……

セリフを聴いているだけだったけど、この世界に転生したばかりの事にエクスカリバーを創造&投影した時並の感動を今、味わっている。

そんな風に感動していると、今度は若草色の鎧を纏った黒髪の騎士が声をかけてきた。

「そのような事を問う必要はないだろう、セイバー。どのような方であろうと、禁録の書の守護騎士である我らはただ主に忠義を尽くすのみだ。」

セイバーのセリフに対し、そのように発言したのはゼロの方のランサー。

「魔獣」や「美丈夫」なんて言われてたけど、実際に見てみるとす

すごいイケメンだな……。

「しかし、まさか君の様な者がマスターになるとはな……」

そう感慨深くつぶやいたのは白い髪と褐色の肌を持つ赤い装束の男
鎌鉄の英雄、もしくは紅茶ことアーチャーだ。

っていうか、まるで俺の事を知っているかのような発言なんだけど
……どういうこと？

「……禁録の書の守護騎士は召喚される際、マスターの情報が書から
ある程度伝えられている。だから、初対面故に勘違いされて斬りつ
けられるなんて事はない。」

俺の心の中での疑問に、禁録の書の管理人格であるシオリがシグナ
ムの方を見ながらそう解説してくれたんだが……

……え、何その機能？俺から色々と説明しなきゃならない手間が
省けるのはいいんだが、どの程度の情報が流れているのか不安なん
だけど……

現在の俺の情報ならまだしも、転生の事とかまで知られてたらマズ
いんじゃないの？

しかし もうこの段階でこの世界では十分オーバーキルじゃな
いか？

だって、一セイバーとアーチャーとランサー《この3人》のうちの
1人だけでアースラ制圧ぐらい出来るでしょ？

……うん、個人が持てる武力じゃないって理由で敵対されそうな

気がする。

「サーヴァントライダーです。よろしくお願いします、マスター。」

そして、紫と黒を基調とした服と、両目を隠す眼帯が特徴的な妖艶な女性 ライダーが自己紹介をしてくれる。

……って守護騎士7人って、まさかサーヴァント全クラスが召喚されたってことか！？
すっげえ、流石は禁録の書だぜ！！

俺はハイテンションになりながら目の前に居るサーヴァント達を見た。

そこに居たのは、セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、…

……あれ？

俺は残りの3人を見た瞬間、ものすごい違和感を覚えた。

そんな中、5人目のサーヴァント……と思われる少女が話しかけてきた。

「は、初めまして、マスター。私、キャスターのサーヴァントです…。」

少しオドオドしながらそう言ってきたのは銀髪と紅い目が特徴的な雪の精を思わせるような少女 はい、どう見てもイリヤさんですね。

……イリヤってサーヴァントになれる程強かったか？
っていうか、イリヤってこんなにオドオドしていたっけ？

すると、彼女の後ろから赤い杖みたいなものが飛び出てきた。

「いやー、それにしても他の面々に比べて浮いちゃってますねーイ
リ キャスターさん」

「ちょっと、変なコト言わないでよルビー！！」

……ああ、ステイナイトじゃなくてプリズマの方のイリヤさんですか。
まあ、この世界も魔法少女の世界だからある意味この世界にふさわ
しいキャスターなのかな？

そんな事を考えていたら、今度はまた新たな声が聞こえてきた。

「よくわからないけど、オレはアサシンのサーヴァントらしい。……
まあ、アサシンはアサシンらしく殺^やるからそれなりに頼ってくれ
てもいいぜ。」

そうやってきたのは青い和服の上に赤いジャンパーを着た、「空の
境界」で有名な両儀式さん いや、ヤバくね？

だって、式がサーヴァントとか……全ての能力、技を使いこなせる
ようになった俺ならともかく、今の俺じゃ勝てないでしょ。

直視の魔眼ならまだしも 『 』には勝てる気がしないんだけ
ど……

しかもアサシんだろ？気配遮断までついたらもう手に負えないって
……

っていうか、式さん言う事がかなり物騒なんだけど……こんなに殺
しが好き？ 　　な人だっけ？

そして最後に残ったのは……バーサーカー？

……いや、正直、イリヤと式と違って、さっきの2人クラス名は想像できたよ。
多分真名は呂布だし……でも

「……バーサーカーのサーヴァント……よろしく……」

その姿は古代中国を思わせる赤い鎧を身に纏った中華版ウル
トラマン……ではなく、褐色の肌に刺青をいれた短めの赤髪の少女
簡単に言うところドキッ　乙女だらけの三国志演義「な呂布さ
んなんですよ……」

……いや、こっちの呂布さんが来てくれる方が男としては嬉しいけ
ど、他のサーヴァントは皆、型月系の人物だから戸惑ってしまった
っていうか……

「……ご主人様、大丈夫？」

その声で我に返ると、バーサーカーが俺の表情を見ながら首をかし
げている。

「…うん、大丈夫だよ。ありがとう、バーサーカー。」

「……………（コクッ）」

心配してくれたお礼を言うと、バーサーカーは静かにうなずいてくれた。

「……………って」

すると、今まで静かだった外野の方から声が聞こえてくる。

「どうしてこうなるんですかぁ……………!!!」

そう叫びながらキヤス狐が俺の方に急接近し、詰め寄ってきた。

「なんでこんなにサーヴァントが増えちゃうんですか!?!? 9体同時使役とか聞いたことないですよ!」

そう怒鳴られながら俺はキヤス狐に襟首を掴まれ、シェイクされている……………あ、やばっ、気持ち悪くなってきた。

「奏者よ、そなたが才気あふれる魔術師である事は良くわかった。余もそれが誇らしい。だが、これはないのではないか?」

キヤス狐に続き赤セイバーが俺の前に近づいてきた。身長の関係から見上げてくる事はなかったけど、少し涙目になっていてちよつとかわいかったりする。

「まさか前々から鍛えてきたこの一夫多妻去勢拳を使う日が来ようとは思いませんでしたけど……………これもご主人様の目を覚ます為です。」

そう言いながら、キヤス狐は拳を握る。……………って、おい! 一夫多妻去勢拳ってヤバ過ぎだろ!」

「キャスターよ、流石に奏者を去勢してしまうのは困るぞ。せめて半分ほど潰すところまでに抑えなくては…」

実行する事は決定済かよ！？

「ええ勿論。私とご主人様とのラブラブ新婚生活 計画のためには是非とも私を孕ませていただかなくてはいけませんから…」

おい、何だその計画は！？計画名はともかく使われている言葉が不吉過ぎるだろう！！

「さあ、ご主人様。覚悟してくださいまし」 大丈夫です。
一歩間違えば死んでしまいそうになる程の痛みでしょうが、一瞬で済みますから。」

……それ一瞬で止め刺されてない？っていうか、一瞬で済むとはいえそんな痛みなんか味わいたくないんだけど！？

そんな感じでパニックっていたら、キャス狐が俺の目の前にやってくる。

ヤバいと思い、とっさに逃げようとしたが……いつの間にか赤セイバーが俺の後ろに回り込んでいて羽交い絞めにされてしまった。

「奏者よ、これも我らの愛のため 大人しく喰らう方がいい。」

やめてマジで！？俺、第2の人生もDTで終わるだなんて嫌過ぎるから！！お願いだから勘弁してくれ ……！！

そんな願いも空しく、キャス狐の右手が俺に迫り

「 どういうつもりですか？ 」

後もう少しで直撃、といったところでその手は止まっていた。

「 貴女達こそ、マスターに仕えるサーヴァントがマスターに危害を加えるとはどういうつもりですか？ 」

そう答えたのは見えない剣でキャス狐の手を止めたアルトリアの方のセイバー。

「 そうですか……元はといえば貴女達が召喚されたのが元凶ですし消しますか。 」

ちよっ……！！なんで他人ひとの家で緊迫な雰囲気ひんぎになっているんだ、お前等！

……ここは忠義の騎士っぽいランサーに止めてもら

「 助太刀するぞ、セイバー。 」

って、さらに煽ほってるし！！

「 感謝します、ランサー。 」

「 何、主君の危機を救うのは騎士の役目だからな。 」

いや、主君俺のためを思うならかつこつけてないで止めるよ！！

「 ならば余はキャス狐に味方するでしょう。これで2対2でちょうどいいだろう。 」

そう言つて虚空から剣を取り出し、構える赤セイバー。

見れば、既に聖剣を構えていたセイバーだけでなく、キヤス狐とランサーも自分の得物を構えていた。

……ここで戦つたらはやての家が滅茶苦茶になるだろうが！少しは考えるー！

そんな俺の思いは届かず、4人は間の距離を縮めると互いの武器をぶつけて戦い始めてしまった。

……後始末どうするんだよ、もう……。

「……一応、この部屋に強度を高めた結界を張つておいた。宝具を使われない限り、大丈夫……だと思う。」

……うん、その気遣いは嬉しいけど、止めてはくれないんだね……

「……いくら何でもサーヴァント4体を止めるのは私でも無理。他の守護騎士達もやる気はないようだし……」

そう言われてバトつていないサーヴァントを見てみると、止めることを諦めているような表情だったり、4人に呆れていたり、そもそも興味を抱いていなかったり、止める気はあるがオドオドしていたりとその様子は様々だったが、この争いを止められる者はいないみたいだ……

「……もういいや。」

ついに俺もあきらめてしまつと、今までの（精神的な）疲れが溜まつていたのか、いきなり眠くなった。

「ふむ、いくら君が優れた魔術師　いや、魔導師だつたか…？
とはいえ、10歳に満たない子供であることに変わりはないんだ。この後する予定だった話し合いは明日にすることにして、今日は早く寝たまえ。」

……何か、本来皮肉屋なアーチャーが随分優しい気がする……でも、その話には乗ろうかな。マジで眠いし……。

「主も今夜はもうお眠りください。無理して起きるのは体に障りますよ。」

ふとはやての方を見ると、彼女の目が半分ほど閉じそうになっている。

……少し悪いことしたかな？

「……そうやね。キョウ君も、もう寝るつもりみたいやし。でもな」

そう言うとはやては俺の方を向く。

「　私はある程度ならハーレムでもええで、キョウ君。だからお嫁さんにしてな。」

いきなり何を言い出すんだお前は……
……って、赤セイバーとキャス狐がこっち向いた！？

「戦いの最中に余所見をするとは余裕だな……！」

しかし、それを好機とみてセイバーとランサーが攻撃してきたため、2人は再び戦いに専念し始めた。

危ない……2人のおかげで更なる戦いが始まらずに済んだ。

……これ以上余計なことされる前に避難するか。

俺ははやてを車椅子にのせて、一緒にリビングを後にした。

……で、はやてをベットに寝かせた後、俺は自分のベットに行こうとしたが、はやてにせがまれた結果、2人一緒に寝ることになった

……最近の俺って女性に対して弱過ぎないか？

少しは強めに出た方がいいのか？

……まあ、いいや。今はとにかく眠いからさっさと寝ることにするか……

それじゃ、お休み

。

第32話 もう一つの守護騎士召喚（後書き）

「お久しぶりです、やっと第32話を更新できた和風好きです！もう基本書なんて二度と見たくありません！！」

「まあ、とにかくお疲れ様だな……で、更新にもかかわるから聞くけど……結果はどうなんだ？」

「……………」

「……おい、なんだその沈黙は？」

「……………てへっ」

「……………拷問してから死刑！！」

「ちよっ、ただの冗談じゃないか……いや、だからやめっ……ギャアアアア！！！！」

「…阿呆がログアウトしたのでここからは私達が…守護騎士に関するアンケートの集計結果は

？ 6票

？ 5票（そのうち11eyesは2票）

？ 1票

となりましたので、守護騎士はサーヴァントが務めることになりま

した。」

「ちなみに、？で最大勢力だったFate+11eyesでやるという案は、魅力的でしたが、クソ作者が『俺の技量では……無理だ』とか厨二なこと言ったため、採用できませんでした。……いずれ11eyesキャラや提案されたオリキャラは何らかの形で登場させたいと思っています。」

「……あと、予告編のセリフを言っている守護騎士は、一番上を除くとセイバー（アルトリア）

アーチャー（エミヤ）

ランサー（ディルムッド）

ライダー（メドゥーサ）

アサシン（式）

ルビィ、

キャスター（プリズマなイリヤ）

バーサーカー（恋）

という順番になっています。どれくらい正解していたでしょうか？」

「……いや、クイズじゃないから……？」

「……次の更新は1週間後位になると思います。」

「無視かよー!!」

「……和風好きは長いブランクのせいであまり感が取り戻せていないようですが、さっき『今度こそ定期更新を再開させて見せる』と言っていましたので……期待しないで待っていてください。」

「……はあ、もういいや……最後に、アンケートに回答して下さい」

った方々、そして読んで下さった皆様、本当にありがとうございます。」

「…今ではもう遅いと思いますが、放置していた感想にはこれから返答したいと思います。」

「それでは皆様、また次回お会いしましょう。」

「……試験落ちたらどうしよう……」

「……今更何を言っているんだお前は……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3443m/>

無駄死にから始まる転生者生活

2011年9月7日00時41分発行